

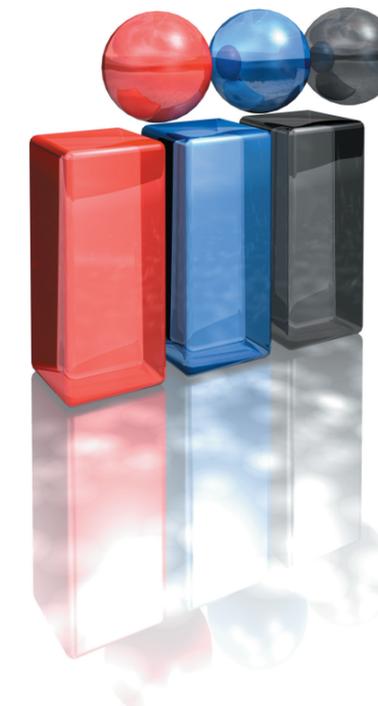
# 東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

## Annual Report

第12号

(通巻44号)

Interfaculty Initiative in Information Studies  
Graduate School of Interdisciplinary Information Studies  
The University of Tokyo



2016



東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

二〇一六年度 第十号(通巻四十四号)

東京大学大学院情報学環・学際情報学府

東京大学大学院情報学環・学際情報学府年報

Annual Report

Interfaculty Initiative in Information Studies

Graduate School of Interdisciplinary Information Studies

The University of Tokyo

第 12 号 (通卷 44 号)

2016 年度

東京大学大学院情報学環・学際情報学府



I. 現状と課題.....	1
1 組織説明.....	1
1.1 概要.....	1
1.2 理念と沿革.....	3
1.3 教職員組織.....	6
1.3.1 教職員数.....	6
1.3.2 昇任・採用（教授昇任人事）.....	8
1.4 財務.....	9
1.5 運営.....	13
1.5.1 情報学環教授会.....	13
1.5.2 学府委員会.....	14
1.5.3 教務委員会.....	17
1.5.4 予算委員会.....	18
1.5.5 将来計画委員会.....	18
1.5.6 入試・カリキュラム制度検討委員会.....	18
1.5.7 施設整備委員会.....	20
1.5.8 福武ホール運営委員会.....	21
1.5.9 ダイワユビキタス学術研究館運営委員会.....	22
1.5.10 コンプライアンス委員会.....	22
1.5.11 情報セキュリティ委員会.....	22
1.5.12 情報ネットワーク委員会.....	23
1.5.13 情報倫理審査会.....	23
1.5.14 業績評価委員会.....	24
1.5.15 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会.....	24
1.5.16 企画広報委員会.....	24
1.5.17 図書・出版委員会.....	25
1.5.18 国際活動委員会.....	25
1.5.19 産学連携委員会.....	26
1.5.20 知的財産室.....	26

1.5.21	利益相反アドバイザー .....	26
1.5.22	ハラスメント予防担当者 .....	26
1.5.23	研究倫理担当者 .....	27
1.5.24	バリアフリー検討委員会 .....	27
1.5.25	社会情報研究資料センター .....	27
1.5.26	総合防災情報研究センター運営委員会 .....	28
1.5.27	ユビキタス情報社会基盤研究センター .....	29
1.5.28	現代韓国研究センター .....	29
1.5.29	駒場カリキュラム連携運営委員会 .....	30
1.5.30	学生 学生・留学生委員会 .....	30
1.5.31	教育部委員会 .....	30
1.6	事務組織 .....	31
<b>2</b>	<b>教育活動 .....</b>	<b>32</b>
2.1	概況 .....	32
2.2	教育カリキュラム .....	32
2.3	カリキュラム支援体制 .....	33
2.3.1	主指導教員・副指導教員の配置 .....	33
2.3.2	修士・博士 研究計画書の作成 .....	33
2.3.3	修士課程研究構想発表会 .....	34
2.3.4	修士論文中間発表会 .....	34
2.3.5	博士課程コロキウム .....	34
2.3.6	E-learning 授業 (iii online) .....	34
2.4	学際情報学府への進学 .....	37
2.5	修士論文及び博士論文の執筆 .....	38
2.6	学際情報学府からの就職・進学動向 .....	42
2.7	教育部 .....	42
2.8	学際情報学府以外の教育活動 .....	43

2.8.1	学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」	44
2.8.2	大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」	44
2.8.3	大学院共通授業科目「エグゼクティブ・プログラム」	45
2.8.4	角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座	45
2.8.5	「総合癌研究国際戦略推進」寄付講座	46
2.8.6	「セキュア情報化社会研究」寄付講座	46
2.8.7	「DNP 学術電子コンテンツ研究」寄付講座	47
2.8.8	「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座	47
2.8.9	反転学習社会連携講座	48
2.9	博士課程教育リーディングプログラム	49
2.9.1	ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム (GCL)	49
2.9.2	社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム (GSDM)	50
2.9.3	多文化共生・統合人間学プログラム (IHS)	50
<b>3.研究活動</b>		<b>52</b>
3.1	概況	52
3.1.1	文理の相互作用と連携	52
3.1.2	流動教員制度	52
3.2	大型研究プロジェクト (1,000 万円以上規模)	53
3.3	附属センターの役割	55
3.3.1	社会情報研究資料センター	55
3.3.2	総合防災情報研究センター	57
3.3.3	ユビキタス情報社会基盤研究センター	57
3.3.4	現代韓国研究センター	58
<b>4 社会との交流</b>		<b>59</b>
4.1	国際的委員会	59
4.2	政府・自治体委員会	60
4.3	学協会活動	62

4.4	他組織役職.....	63
4.5	セミナー・研究会・公開講座 .....	64
4.6	出版活動 .....	70
4.6.1	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 .....	71
4.6.2	『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』 .....	72
4.6.3	『英文紀要』 .....	72
4.7	定期刊行物・ホームページ .....	73
4.7.1	定期刊行物.....	73
4.7.2	ホームページ .....	73
4.8	国際交流 .....	73
<b>II.</b>	<b>資料.....</b>	<b>75</b>
1	沿革.....	75
2	学環の教員（定員） .....	75
3	学府の学生数.....	78
4	教育部 .....	79
5	予算.....	80
6	土地・建物面積 .....	81
7	入試定数と受入数.....	81
8	年度別入試データ詳細 .....	81
9	修了者数の推移 .....	86

10	学生支援機構（旧育英会）奨学生数 .....	87
11	日本学術振興会特別研究員数.....	88
12	リサーチアシスタント数.....	88
13	就職状況.....	89
14	研究員（客員）等.....	92
15	学会賞など受賞者リスト.....	92
16	論文数.....	92
17	特許出願・公開数.....	93
18	国際団体役員・委員数.....	94
19	政府関係委員会委員数.....	94
20	地方公共団体関係委員会委員数.....	94
21	ジャーナル編集・会議運営.....	95
22	定期刊行物一覧.....	95
23	留学生数の推移.....	95
24	留学生国籍別一覧（2015年5月1日現在）.....	96
Ⅲ.	個人業績編.....	98
Ⅳ.	外部資金獲得状況.....	226



# I. 現状と課題

---

## 1 組織説明

### 1.1 概要

東京大学大学院情報学環・学際情報学府は、従来の研究科とは異なる形態の大学院組織として、2000年4月に設置された。この大学院組織は、教員が所属する研究組織である情報学環と、学生が所属する教育組織である学際情報学府という、対をなす2つの機構により構成されている。従来型の研究科は研究と教育の統合モデルであり、学術領域の専門深化と恒常性を基本的な特質とするのに対して、学環・学府は研究と教育の分離モデルを具現化している。これは同時に、東大全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織としても設計されており、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するのに適した組織形態として考案されたものである。

その基本的特徴は、第1に組織構成員の流動性と全学的連携、第2に研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の分離両立という点にある。第1の流動性については、研究組織である「情報学環」は、固有の基幹教員と、学内既存の研究科・研究所等から3～7年程度の期間をもって情報学環に教員枠及び身分を異動する多数の流動教員によって構成されている。ここでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合に基づいた研究を推進している。第2の研究と教育の分離については、教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、主に情報学環の基幹教員と流動教員が行うが、他研究科・研究所等に所属する兼任教員も高い自由度をもって参画できる設計となっている。また、授業科目の担当は、これらの教員以外にも他研究科・研究所等に所属する教員や学外の研究者等にも非常勤講師を委嘱している。また、副指導教員制の積極的な運用を図ることによって、情報関連の広範な学問分野を覆う幅広い学際的教育を目指している。

研究組織である大学院情報学環は、学際情報学圏と社会情報学圏という2つの学圏から構成されている。それぞれの学圏は、次のようにいずれも5つの学域からなっている。

#### 大学院 情報学環

##### ■学際情報学圏

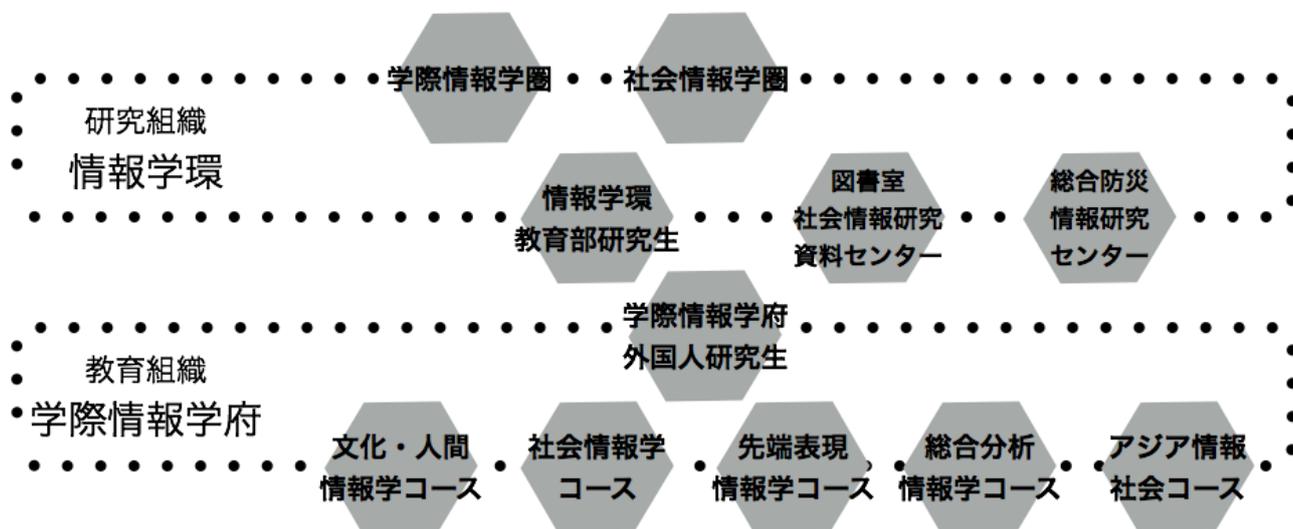
- (1) 情報生命・思想学域
- (2) 情報システム・言語学域
- (3) 情報表現・造形学域
- (4) 情報環境・認知学域
- (5) 情報社会・制度学域

##### ■社会情報学圏

- (1) ジャーナリズム・メディア学域
- (2) 情報行動・機能学域
- (3) 情報法・政策学域
- (4) 情報経済・産業学域
- (5) 情報文化・歴史学域

# 東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

Interfaculty Initiative in Information Studies & Graduate School of Interdisciplinary Information Studies



教育組織である大学院学際情報学府では、一方では情報現象についての文理を越境する幅広い視野を、他方では社会情報学からコンピュータ科学までの高度な専門的能力を、同時に身につけた分野越境の人材を持続的に社会に提供していくために、それぞれの自律性と相互の連携をあわせもったカリキュラムを編成し、それを運営する以下のような5つのコースを設置している。このコース制は、教育効果を上げるために学生をコースに振り分けるものであって、教員がコースに所属するものではなく、教員は学環に所属している。

また、学際情報学府は学際情報学専攻の1専攻という形式をとってはいるが、この「専攻」は従来の研究科における専攻とは異なるものであり、そこに教員が所属しているわけではない。

## 社会情報学コース

このコースでは、メディア、コミュニケーション、社会情報に関わる社会現象・文化現象を分析するための学識を養い、専攻分野における研究および応用の能力を培うことを目的とし、社会情報学の発展に貢献できる研究者を養成するとともに、社会人を受け入れて研究手法を身につけさせ、知識の高度化をはかる教育を行っている。

## 文化・人間情報学コース

このコースでは、情報学の視座から文化・人間科学の諸領域を体系的に再編し、生命現象や進化、身体知覚から現代文化、メディア、映像、テキスト、アーカイブ、リテラシー、学習環境までの21世紀的な諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいくことのできる深い学識と精緻な方法的能力を

そなえた研究者や実践者を養成する教育を行っている。

### 先端表現情報学コース

このコースでは、21 世紀の社会・産業・個人の情報環境の基盤となる専門的な理数情報学の知を深めるとともに、あわせて他分野と協調して学際的に情報学のフロンティアを切り拓いていくための幅広い学識を身につけた研究者及び表現者を養成している。

### 総合分析情報学コース

このコースでは、コンピュータ・サイエンス、コンピュータ・ネットワークをベースとして、IoT、ユビキタス・コンピューティング、組込みコンピュータ、ユーザーエクスペリエンス、次世代インターネット、これらの技術によって取得された実世界や仮想世界の様々な情報をデジタルデータとして流通させて状況認識を行い、トレーサビリティ、医薬品情報学、空間情報認識、防災、災害対応、社会資本管理などの実世界の様々な分野で有効に活用するための高度な情報技術及び応用を教育する。

### アジア情報社会コース

このコースでは、情報通信技術の影響をますます受けつつある現代アジアの諸社会や国際関係に対する分析力や洞察力を養成する為の大学院教育を行っている。講義や指導はすべて英語で行われ、学年は10月から始まる。

これらの5つのコースそれぞれで、一般の入試と並び、実践的な経験や目的を重視し、社会人を主要な対象とした特別選抜を実施している。

### 情報学環教育部

また、主に学部生を対象とした特別教育プログラムとして、情報学環教育部がある。教育部では、東京大学以外の大学も含む大学2年次以上の学部生及び大学卒業業者の中から、将来、新聞、放送、出版などジャーナリズムの諸分野で活動することを志す者、あるいはメディア・情報・コミュニケーションについての学際的な研究に関心を持っている者を毎年30名程度研究生として受け入れ、一定のカリキュラムのもとに、修業年限2年で基礎的な専門教育を実施し、修了に必要な単位を修得した者には修了証書を授与している。

## 1.2 理念と沿革

### \* 情報学環・学際情報学府設立の経緯

2000年の情報学環・学際情報学府設立の背景には、次のような認識があった。すなわち、近年にみられる情報技術の急速な発展と利用の拡大によって、「情報」が現代社会において果たす意味は、決定的に重要なものとなってきた；技術的体系だけでなく、人間の行動や意識、社会のさまざまなシステム、文化や芸術、産業や政治・国際関係など、人間社会のあらゆる側面が、「情報」の様式変化のインパクト

トによって、根本的な変革を促されつつある；21世紀には、この情報様式のあり方が、地球上の生命や人間、社会の動向を大きく規定する基盤となることは確実だ——という認識である。こうした状況を背景に、「情報」に関する、より総合的でより高度な教育研究の社会的意義が高まり、それに応えうるような教育研究体制の整備が、喫緊に求められていた。

情報にかかわる教育研究は、多様な学問領域で行われており、しかも、各個別領域に固有な対象や方法とも結びつきながら発展してきている。こうした実態を有効に生かしながら、相互間の有機的連携を促し、学際的な教育研究をすすめることが、情報学の総合的な発展のためには不可欠だと考えられていた。また、情報学は、急速に発展し、変容しつつある学問分野であることから、一方では研究面で、先端的な学融合に就中に取り組みうる緊密な共同体制を設ける必要があると同時に、他方では教育面で、カリキュラム編成や研究指導体制の幅広さと研究内容の進展や時代の要請の変化に即応できる組織的柔軟性を確保する必要があった。こうした特性をもっている情報学の教育研究上の目的を効率的かつ実効的に達成するために、2000年（平成12年）4月、学校教育法第66条に定める「研究科以外の教育研究上の基本となる組織」として、東京大学大学院に、「情報学環」及び「学際情報学府」が設置されたのである。

「情報学環」と「学際情報学府」が両者一体となって構成されるこの大学院組織は、専門深化と恒常性を基本的な特質とする従来の研究科とは違って、全学にわたる情報関連の諸領域をネットワーク的に連携させる横型の組織として設置され、情報学分野の総合的な教育研究を先端的かつダイナミックに推進するにふさわしい形態をとった。

前述の通り、その基本的特徴は、組織構成員の流動性と全学的連携、及び研究組織である情報学環と教育組織である学際情報学府の両立という点にあり、その組織構造は次のように作られた。研究組織である「情報学環」は、基幹教員と流動教員によって構成された。基幹教員とは情報学環が固有にもつ教育枠で採用される教員である。流動教員とは、他研究科・研究所等から情報学環に移されたポスト（第一種流動）または情報学環が固有にもつ流動教員ポスト（第二種流動）に対して、他研究科・研究所等から3～7年の期間をもって情報学環に異動した教員である。そこでは、多数の分野横断的なプロジェクト研究を柱に据え、文系理系の区別を越えた情報分野の学融合が目指された。

教育組織である「学際情報学府」における大学院学生に対する研究指導は、情報学環の基幹教員及び教育にも従事する流動教員、兼任教員が行なう。学際情報学府における授業科目の担当は、これらの教員が行うほか、他研究科・研究所等に所属する兼担当教員や学外の研究者等を非常勤講師として委嘱する。

## \* 社会情報研究所の合流、新組織設立に至る経緯

このようにして設立された情報学環・学際情報学府は、2004年4月1日、東京大学社会情報研究所と組織統合し、新たな一步を踏み出した。社会情報研究所は国立大学附置研究所であり、その歴史をたどれば約75年間にわたる伝統をもつ研究機関であった。

1929年10月1日、東京帝国大学文学部に新聞に関する学術研究施設として新聞研究室が設置された。新聞研究室は、帝国大学の法学部、文学部、経済学部からそれぞれ1名の指導教授が横断的に参加し、

1名の指導補助、および3名の研究員が置かれるという、規模は小さいが、今日の情報学環のさきがけをなすような仕方で東京帝国大学を横断的につなぐ学際的な研究組織であった。またその運営は、渋沢栄一や阪谷芳郎、本山彦一、徳富蘇峰、杉村廣太郎といった、当時の財界、新聞界の名士たちが協力して募られた寄附金によってまかなわれ、今日の産学連携のさきがけをなす形態をとっていた。設立時の新聞研究室の指導教授としては、法学部から南原繁教授が、文学部から戸田貞三教授が、経済学部から河合栄治郎教授がというように、戦前期日本の法学、社会学、経済学を代表する教授3名が参画し、指導補助として実質的な研究組織の中核を担った小野秀雄（初代新聞研究所長）を支えていた。

このような前史を経て、戦後の1949年に新聞研究所が正式に東京大学附置研究所として発足した。その根拠をなす国立学校設置法（49年5月31日公布）には、「新聞及び時事についての出版、放送又は映画に関する研究、並びにこれらの事業に従事し、又は従事しようとする者の指導及び養成」と規定されていた。すなわち、新聞研究所は設立の当初から、狭義の新聞に限らず、雑誌、放送、映画などを含むマス・メディア全般を研究対象とする学際的な研究組織として出発していたわけである。また、「新聞」という言葉そのものも、今日のように狭義の新聞紙だけを指していたわけではなく、ニュースや報道媒体全般をも含みこんだ概念であるという理解がその当時にはあった。

やがて、新聞研究所は20世紀後半の放送をはじめとするマス・コミュニケーションの発展を受けて組織の拡充と研究部門の再編を重ねていった。1957年度からは、基礎部門：マス・コミュニケーション理論、歴史部門：マス・コミュニケーション史、特殊部門1：コミュニケーション過程、特殊部門2：マス・コミュニケーション・メディア、特殊部門3：世論及び宣伝という5研究部門の構成となり、63年度からはこれに放送部門が、さらに74年度からは情報社会部門が、80年度からは社会情報システム部門が加わった。このような部門構成から明らかなように、東京大学新聞研究所は、マス・コミュニケーション研究を基本に据えながら、トータルな社会的コミュニケーション研究をも視野に収めつつ、日本の国立大学では唯一の現代社会の最も中枢的な研究課題たる情報の社会的側面に関する学際的、総合的な研究として発展し、高い評価を得た。

そして、このような実績を基盤にして、1992年4月1日、「社会情報の総合的研究」を目指して新聞研究所から社会情報研究所への改組が行われた。改組後の社会情報研究所は、情報メディア、情報行動、情報・社会という3大部門を置き、旧新聞資料センターを改称した情報メディア研究資料センターを附置するという体制をとって、1992年から95年まで続いた文部省科学研究費重点領域研究「情報化社会と人間」をはじめ、情報化社会に対する学際的な取り組みを本格的かつ先端的に進めた。1996年には外部評価を実施し、高い評価を得た。そのときの産業界パネルの委員は小池唯夫（毎日新聞社長）、川口幹夫（NHK会長）、関本忠夫（日本電気会長）、大塚信一（岩波書店社長）、福川伸次（電通総研所長）の方々であった。

高度情報社会の深まりのなかで、東京大学における情報をめぐる教育研究体制の再編が議論になるたびに社会情報研究所は、文系の研究所として、その流れに身を置いてきた。そして、情報学環・学際情報学府の設立構想の際には積極的に関わり、人的リソースの提供において文系部局としては最大の貢献を果たした。社会情報研究所は情報学環・学際情報学府の設立後も密接な関係を持ち、学環・学府を支援してきた。そして、国立大学法人化を前にした、国立大学附置研究所の見直し方針のなかで、社会情

報研究所は情報学環・学際情報学府との合併を選択し、大学附置研究所から大学院組織へと全面的に移行したのである。それは、文系のなかでの学際的研究から、文理相互浸透のなかでの学際的教育研究へのシフトであり、情報現象を研究対象として組織としてはある意味で必然的な流れであり、新たなスプリングボードであったといえよう。

## \* 新たな学際に向かって

2015年度から、情報学環は設立から15年を経過して16年目に入った。組織としては設立時の理念と状況を再確認しつつ、原点を振り返って、次のステップに踏み出す時期に来ていると言えよう。

この間、情報技術そのものも、その社会への浸透も大きな変化を遂げている。学環が設立された2000年といえば、スマートフォンはまだ草創期であり、iモードが前年に開始されたばかりの頃である。国立情報学研究所が運営する学術情報データベースのCiNiiの運用開始は2004年を待たねばならない。隔世の感がある。

当然、情報学環に必要とされる学際的研究のあり方もおのずから変化している。設立当初には「情報をキーワードとする学際的研究・教育」という性格付けが必要活十分であった目標も、2015年現在、学術的にはより焦点をしばったものが、社会的にはより実装性を考慮したものが求められている。

東京大学をはじめとする、日本の国立大学をめぐる環境も大きく変わった。文部科学省に設置された施設等機関であった国立大学が法人化したのが2004年。大学ごとの活動目標と計画を明確に定め、法人ごとにより自律した運営が求められるようになった。同時に、高等教育のグローバル化、国際化を求める社会的要請も高まり、QS世界大学ランキングやTimes Higher Education世界大学ランキングなどの世界統一基準で大学の能力が測定される傾向も強まっている。

東京大学の動向を見ると、複数部局相乗りによるリーディング大学院制度を積極的に推進し、国際的教育プログラムも展開するなど、学際性や国際性・多様性・流動性を強調し、これらを制度化した組織や活動が多数進行するようになってきている。これらの特徴は、情報学環・学際情報学府が設立時から基本理念として謳っていたものでもあり、その組織設計の特徴でもある。すなわち、学環・学府は、東京大学の学際性や国際性・多様性を先導する役割を果たしてきたといえるであろう。

しかし一方で、これは学環・学府の独自性や卓越性が埋没してしまう可能性を示唆している。次の新たな活動理念を具体化することは、学環・学府の喫緊の課題といえる。学外の社会状況だけでなく、東京大学の学内状況においても、学環・学府が次の段階へと脱皮成長することが必要となっているのである。

これらの学術的・社会的潮流、ならびに学内状況に対応すべく、情報学環・学際情報学府は、新しい学際的研究教育のあり方を模索し、挑戦を続けている。

## 1.3 教職員組織

### 1.3.1 教職員数

給与の財源が運営費交付金となっている教職員（常勤教職員）の採用枠は70人となっている。内訳

は図 1-3-1-1 のとおり、教授等の常勤教員 57 人、常勤職員 13 人となっている。このほか、大学院情報学環は、外部資金に基づく特任教員や研究補助等の非常勤職員から構成される。

また、大学院情報学環の組織の一つとなっている基幹教員と流動教員の内訳について見ると、図 1-3-1-2 のとおりとなっている。基幹教員の定員数は 33 名、流動教員の定員数は 24 名とおおむね同数であり、両方の教員で情報学環の研究教育組織が等しく支えられていることがわかる。

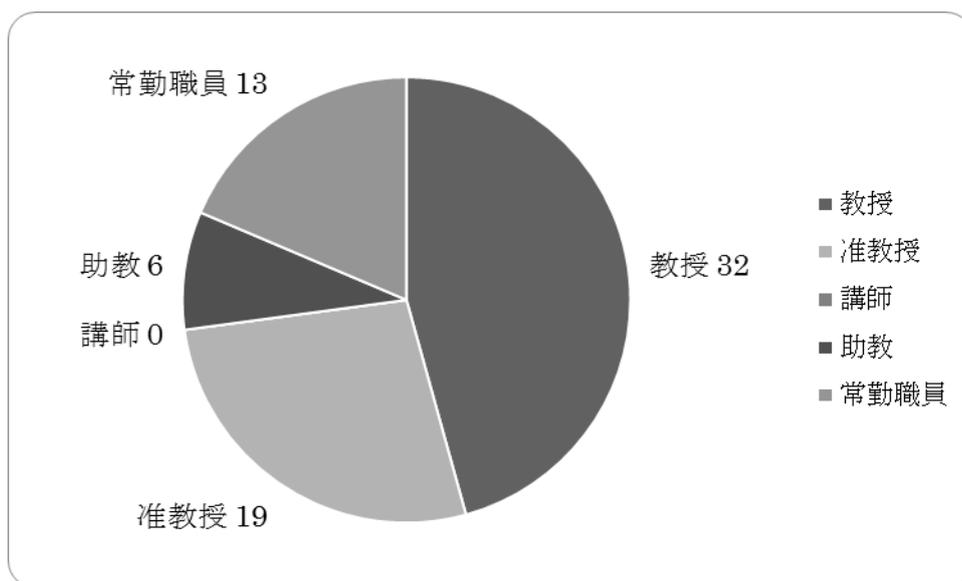
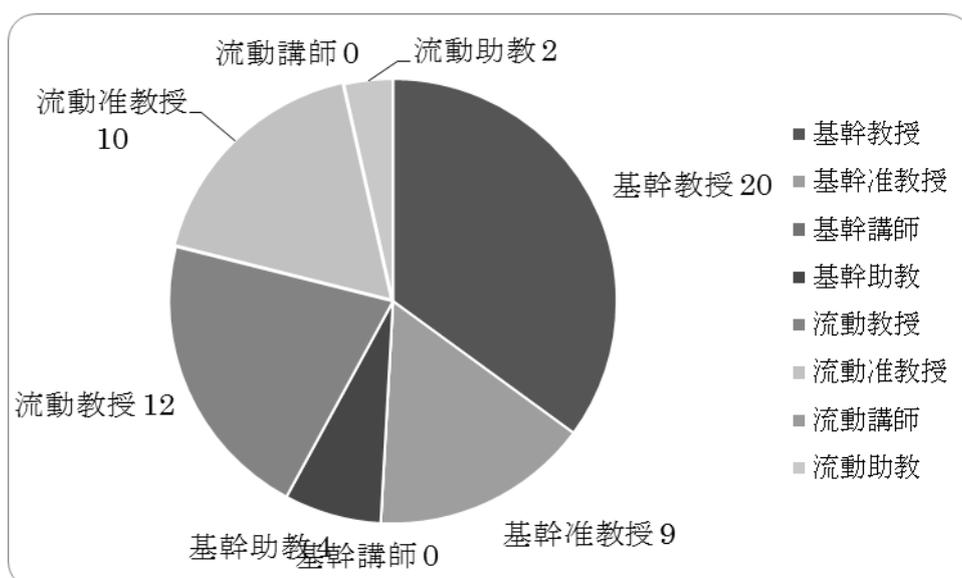


図 1-3-1-1 教職員採用枠（全 70 人）の内訳

（平成 27(2015)年 4 月 1 日現在）



## 図 1-3-1-2 教員採用枠（全 57 人）の内訳

（平成 27(2015)年 4 月 1 日現在）

### 1.3.2 昇任・採用（教授昇任人事）

北田暁大教授 昇進報告

2015 年 2 月 13 日

人事選考委員会

石崎 雅人 教授（委員長）

須藤 修 教授

橋元 良明 教授

吉見 俊哉 教授

林 香里 教授

北田暁大准教授の教授昇進に関する審査報告を行う。本件は 2 月 13 日の人事教授会において昇進人事案および上記の選考委員案が承認されたことに基づくものである。12 月 22 日に予備選考委員会、1 月 30 日に選考委員会を開催し、本人からの提出書類（履歴書、業績一覧、主要論文）に基づいて審議を行った。

北田暁大氏は、平成 7 年 3 月東京大学文学部卒業、同年 4 月東京大学大学院人文社会系研究科修士課程入学、平成 9 年 3 月修了、同年 4 月同大学院博士課程進学、平成 11 年 3 月同課程を退学し、同年 4 月東京大学社会情報研究所助手、平成 12 年 4 月筑波大学社会学系講師を経て、平成 15 年 4 月東京大学社会情報研究所助教授に採用された。平成 16 年 4 月東京大学大学院情報学環に異動し、北京日本学センター教授（平成 18 年 2 月～7 月）、ライプツィヒ大学客員教授（平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月）を経て、現在に至る。平成 16 年 11 月に東京大学・博士号（社会情報学）を取得している。

北田暁大氏の研究内容について、提出された主要業績に沿って説明する。北田暁大（2003）『責任と正義:リベラリズムの居場所』（勁草書房）では、社会における対話の継続を可能にする条件とその限界について、社会学、哲学、倫理学における多様な議論をふまえて精緻な考察を加えている。第 1 部では、多くの社会学的行為論が前提としてきた行為者中心主義の問題点を明らかにし、構成主義的行為観の可能性について議論を行っている。さらに後者にもとづく責任概念について検討し、

その利得と問題点を指摘する。第2部では、第1部で議論した責任概念が可能になる条件について、関係論的・社会的な規範理論、歴史神学、系譜学を検討し、制度の他者に関する考察の必要性を明らかにする。それを受けて、制度の他者について議論をすすめ、構成主義的行為観のもと、対話の継続を可能にする社会において主体が備えるべき性質（長期的合理性、共感能力・道理性）について議論するとともに、そのような性質をもたない主体との対話不可能性を限界（規範的局所性）として認識する。第3部では、対話の継続を可能にする主体が「自由主義」に接続できる要件について考察するとともに、対話の継続が可能でない主体に対してどのような関係を構築することができるかについて構想する。第4部では、社会システム理論にもとづき、公的ルールを私的ルールより優先するメタルールとしての正義の位置づけについて考察がなされる。

北田暁大（2004）『〈意味〉への抗い—メディアエーションの文化政治学』（せりか書房）は、専門誌・学術誌・書籍に発表された論文9本に基づきまとめられたものである。本書では、社会システム理論におけるコミュニケーション概念にもとづき、「メディア論」の基底である媒介の意味を問い直す。さらに、映画、書物、テレビ、音楽からインターネットまで実際のメディアを対象に実証的に議論をすすめ、媒介への問い直しが開く「メディア論」の可能性を示唆している。

北田暁大（2010）「国家は自己の人権侵害能力を凌ぐ人権保障能力を持ち得るか」井上達夫（編）『人権論の再構築』, pp. 181-202.（法律文化社）では、社会システム理論における「包摂と排除」の概念を批判的に検討し、人権侵害能力／保障能力が、事実水準の排除／前提・要請と対応することが示唆される。その上で、本論文の課題が、人権侵害の明白性、否定的な同意調達可能性、人権保障の内容確定の困難さという非対称な関係に関する問いであることを指摘し、社会システム理論が取り組むべき課題を明らかにしている。

提出された主要業績は、社会システム理論を核としながら、コミュニケーション論、メディア論から、リベラリズム、責任、正義、自由、人権に至る問題を通して、社会情報学、学際情報学の基盤をより豊かなものとするための知見を与えるとともに、これら多様な問題について、さらに学術的対話を促進する契機を提供している。現代理論社会学の第一人者として、その学術的基盤の上に新たな展開を拓く議論を多数の学術論文・書籍で展開しており、それを基礎とした広範な文献の解読にもとづく緻密な議論は、社会情報学、学際情報学を深化させるものとして高く評価でき、大学院情報学環において多大な貢献をすることが大いに期待できる。また、教育においても、学際情報学府等において献身的に教育に従事し、多数の修了生を輩出してきた実績がある。さらに、社会情報学コース長を務めるなど情報学環への多大な組織的貢献を行ってきた。

以上の審議結果により、人事選考委員会は北田暁大准教授の教授昇進について全員一致で合意したことをここに報告する。

## 1.4 財務

平成27年度予算および決算に基づき、情報学環の財務構造を説明する。対象は、部局の研究教育に直接関係する運営費交付金と外部資金（科学研究費補助金等）とし、常勤教職員の人件費及び部局の管

理が直接及ばない授業料及び入学検定料については特に言及しない。

具体的な数字を見る前に、情報学環財務の特徴である流動教員に関する資金の取り扱いについて説明しておく。

運営費交付金の配賦にあたっては、流動教員分も情報学環の予算として計上されるが、執行は原則として流動元の部局で行うこととなっている（支出委任）。

流動教員に係る外部資金についても、受け入れは情報学環で行っているが、執行は同じく流動元部局で行っている。また、間接経費については受入額全額を流動元部局に振り替えている。

すなわち、運営費交付金の配賦額、あるいは外部資金の受入額のうち、ある程度の割合については流動元部局において執行されている。この仕組みを前提とした上で、以下では具体的な数字を見ていくこととする。

平成 27 年度の収入総額は 972 百万円<sup>1</sup>であった。これは前年度と比べ微増しているが、内訳を見ると運営費交付金は前年度比約マイナス 2%であったが、外部資金のうち共同研究費および大学改革推進補助金等の補助金が増加したことが収入総額の微増につながった要因として挙げられる。一方で間接経費は外部資金の種別によっても収入額が左右されるため、共同研究費等の確実な間接経費収入が今後さらに重要になる。競争的資金である外部資金は不安定な要素を持つ点に留意する必要があるが、近年、外部資金の獲得は部局の運営にとっても大きな影響を及ぼすと同時に必要不可欠な収入となっている。

運営費交付金の使途内訳を見ると表 1-4-1 のとおりとなる。前述した流動教員分の研究費 54,661 千円が全体の約三分の一を占めている。したがって、運営費交付金のうち情報学環の裁量が及ぶのは残りおよそ三分の二の 142,336 千円となる。

その 1 億 4 千万円強には、施設修繕準備金も含まれているが、およそ三分の二となる 103,402 千円が、消耗品等一般経費や非常勤職員人件費といった事務管理経費で、残りの 3 割弱（約 38,934 千円）が直接の教育研究活動に充てられることになった。平成 27 年度は教育研究経費および一般管理費において前年度実績をふまえつつ前年度比マイナス 2%をベースとした予算配分額とし、実際の執行においても引き続き費用の削減に努めた。

表 1-4-1 平成 27 年度実績（運営費交付金）

経費区分	執行額 (単位:千円)	備考
光熱水料	10,351	*執行実績(24,539 千円)のうち 14,188 千円は間接経費より支出
通信運搬費	1,807	

<sup>1</sup> 「運営費交付金総額+外部資金受入総額」とする。

なお、運営費交付金のうち特別経費（大学防災情報システム及び知識コンテンツ）については外数として扱っており収入総額等に含んでいない。また、部局長裁量経費についても外数として扱い、割合の算出の際には含んでいない。

施設修繕準備金	22,572	*建物保守料、その他修繕を含む
業務委託料	1,058	*執行実績(10,115 千円)のうち 9,057 千円は間接経費より支出
非常勤職員人件費（事務）	23,560	
非常勤職員人件費（教育研究）	17,259	
旅費交通費	342	
事務／教育研究一般用経費	14,753	
図書館全学共通経費	11,700	
教員研究費	14,210	
各種委員会等経費	24,724	*内訳は別表（表 1-5-2）に掲載
小計	142,336	
流動教員分	54,661	
総計	196,997	
部局長裁量経費	15,267	

表 1-4-2 平成 27 年度各種委員会等経費執行実績内訳

委員会名	執行額 (単位：千円)	備考
施設整備委員会	0	*施設修繕準備金に含む
情報ネットワーク委員会	373	
情報セキュリティ委員会		

業績評価委員会	30	
企画広報委員会	2,860	
図書・出版委員会	4,625	
国際活動委員会	799	
社会情報研究資料センター運営委員会	5,879	
教務委員会	3,079	
学生・留学生委員会	673	
入試実施委員会	1,347	
教育部委員会	1,350	
総合防災情報センター	2,400	
福武ホール管理運営委員会	1,309	
合計	24,724	

外部資金の収入内訳は表 1-4-3 のとおりである。ここに計上しているのは外部資金関係間接経費（情報学環分）を除いて直接教育研究に充当される資金である。外部資金のうち大学本部及び流動元部局の間接経費となる金額については計上していない。

表 1-4-3 平成 27 年度外部資金の収入内訳 (単位：千円)

区分	総額	うち流動元 執行分	学環収入分
寄附講座	151,000	0	151,000

寄附金	53,462	4,000	49,462
科学研究費補助金	152,139	56,700	95,439
厚生労働科学研究費補助金	0	0	0
その他補助金（大学改革推進補助金等）	56,408	0	56,408
受託研究費	101,838	39,500	62,338
共同研究費	206,913	15,670	191,243
間接経費（部局分）	32,194	-	32,194
外部資金合計	753,954	115,870	638,084

大学運営費交付金は毎年度削減されており、学内の予算配分の方法も変化している。情報学環としての事業だけでなく、大学全体として部局間の連携も視野に入れた事業展開の必要性が高まることが想定される。

また、外部資金については、表 1-4-1 にあるように、光熱水料等にも外部資金の間接経費が充てられているのが現状である。このような状況においては、外部資金獲得の重要性はますます高まるが、現在の社会情勢を鑑みると、その実現は一層難しくなっている。外部資金収入は毎年度増減があり、先行きは依然不透明である。

情報学環では平成 27 年度においても収支の均衡を達成した。これは、既存事業や業務の抜本的な見直しなどを通じて実現できたものである。今後も運営費交付金の削減が続く中で、予算のあり方についての不断の検討と取組を進めることが必要である。

## 1.5 運営

### 1.5.1 情報学環教授会

大学院情報学環教授会は、研究組織としての情報学環の意思決定機関である。教員が帰属するのは情報学環であり、情報学環教授会は基幹教員と流動教員によって構成され、両者の間に権利と義務において相違はない。教授会は月に 1 度開催され、重要事項を審議し決定する。人事に関しては人事教授会が開催される。

部局長たる情報学環長は教授会における選挙によって選任され、総長によって任命される。被選挙権

は教授にあり、選挙権は講師以上にあるが、基幹教員と流動教員は同等の権利を持つ。学環長の任期は旧情報学環と旧社会情報研究所の統合後の最初の学環長は2年、その後の、つまり2006年4月からの学環長は3年（再任不可）となっていた。2012年4月からの学環長に関しては、学環長の任期は3年とし、再任されることができる（ただし、引き続き5年を超えて在任することはできない）となった。副学環長は学環長が指名する。学環長が主宰する総務委員会が、通常、教授会の1週間前に諸案件や方針について協議し、教授会にかけるとの準備をする。また、総務委員会が決定し、教授会に報告すると定められた事項もある。総務委員会は学環長、副学環長、専攻長、両学圏長、重要委員会の委員長、5コース長、学環長補佐などによって構成され、ほぼ月に1度開催される。

## 1.5.2 学府委員会

教育組織としての大学院学際情報学府の決定機関は、学際情報学府委員会である。そこで教務関係、入試関係、学生の身分の異動などの教育に関する重要事項が審議され決定される。学府委員会の構成メンバーは学府の教育に関わる教員であり、情報学環の教員のほか、兼任教員がこれに加わる。学府のもとに学際情報学専攻の専攻長が置かれており、学環長が指名する。専攻長は教務委員会と入試実施委員会を組織する。

学府の入試は社会情報学コース、文化・人間情報学コース、先端表現情報学コース、総合分析情報学コース、アジア情報社会コースに分かれて行う。合格した学生はそれぞれのコースの所属となる。それぞれのコースには、コース会議を設置し、コースの運営に責任を持つ。各コース長が責任者を務め、コース会議をほぼ月一度開催する。

### 1.5.2.1 社会情報学コース

社会情報学コース運営委員会は、学生がより深く社会情報学を学習し、質の高い論文を執筆できる環境を整備することを目的とする。具体的には、教務委員会、入試実施委員会、他のコースと協力をしながら、主に以下の(1)～(12)の業務を担当した。2015年度は、特に、(a) 学際情報学府の必修講義の改定について、(b)、学事暦変更に関する教育上の課題と解決策の検討 (c) 社会情報学コースに所属する大学院生の研究生生活を支援するための様々な対応の検討、等に取り組んだ。

(1)ガイダンス、研究構想発表会、社会情報学コース新入生歓迎会（4月）／(2)外国人研究生審査（6・12月）／(3)入試説明会（5月）／(4)修士中間発表会（7月）／(5)修士入学試験（8月）／(6)博士コロキウム（11月）／(7)次年度の開講科目、非常勤講師、RA・TA、共通入門科目（学際情報学概論）の計画・決定（2月）／(8)修士論文審査（1月）／(9)博士入学試験（2月）／(10)優秀学生論文の決定（3月）／(11)博士論文に関する審査委員会、審査結果の審議（随時）／(12)学生の休学、退学、復学の審議（随時）

### 1.5.2.2 文化・人間情報学コース

文化・人間情報学コースは、社会科学系の社会情報学コースと自然科学系の先端表現情報学コース、総合分析情報学コースとをつなぐ中間の位置にあり、文理の融合・越境を進めながら、新しい学際的な

情報学の創造に取り組んでいる。このコースを担当している教員には、科学技術社会論、科学技術コミュニケーション、生命倫理学、認知科学、アフォーダンス論、メディア・アート、カルチュラル・スタディーズ、記号論、アジア文化研究、歴史情報論、アーカイブ論、メディア論、メディア・リテラシー、学習環境デザイン、ワークショップ・デザイン、図書館情報学、言語分析、政治コミュニケーション論、世論研究などの専門家が揃い、新しい融合的な知の地平を拓きながら授業や学生の指導、教育上のプロジェクトに取り組んでいる。このコースの教育は、①生命・身体・環境、②文化・表象・映像、③メディア表現・学習・リテラシー、④アーカイブ・歴史情報という、4つの大きな柱を軸にしつつ、幅広い21世紀的諸課題に理論的かつ実践的に取り組んでいる。教員の専門分野、また学生の研究テーマも多岐に渡るため、基礎的な研究方法や学術リテラシーを涵養するために、コースの選択必修科目である文化・人間情報学基礎（4単位）と文化・人間情報学研究法（2単位）にはさまざまな工夫を凝らしている。たとえば上記の4つの柱に応じた基礎力増強のトレーニングとフィールドワーク型のグループ実習、量的・質的研究法の訓練、社会情報学コースとの合同科目などが用意されている。

### 1.5.2.3 先端表現情報学コース

先端表現情報学コースは、教員27名（学環基幹2名、流動7名、兼任・課程担当18名）が担当しており、毎年修士（定員19名）と博士（定員8名）の学生を受け入れて教育している。

コースは、先端表現情報学コース運営委員会（コース会議）のもとに、コース長、教務担当、入試担当が置かれ、他のコースと協力しながら運営されている。

このコースの特徴は、学環の基幹教員のみならず、関連部局（生産技術研究所、情報理工学系研究科、総合文化研究科、地震研究所、情報基盤センター、新領域創成科学研究科、工学系研究科など）からの多くの流動教員、兼任教員、さらには併任・客員教員の協力によって運営されていることである。これによって、多様な背景と目的を持つ学生の教育が可能になっている。一方で関係教員の負担が課題となっている。なお、2012年度から、コース運営に関しては、情報理工学系研究科の兼任教員から学府委員を選出し、教務委員として教務委員会へ参画できるようになった。

また、多様な背景をもつ学生をより受け入れやすくするための、入試内容の改善にも取り組み、2011年に大きく入試を変更した。また、博士課程の入試についても、夏と冬に行っていた入試を夏に一元化し、筆記試験を課すなどの取り組みも進めた。

今後の課題としては、(1)幅広い部局からの教員の協力により成り立っているコース運営方法の改善、(2)学際性を維持しながら、専門を深めることのできる教育カリキュラムのさらなる検討、などが挙げられる。

### 1.5.2.4 総合分析情報学コース

総合分析情報学コースは、平成18年4月に設立されたコースである。本コースでは、主にコンピュータサイエンスやコンピュータネットワークの基礎知識を基に、IoT (Internet of things) や M2M (Machine-to-Machine) 技術を活用して大量のセンサー情報の取得、観測衛星からマクロなデジタル情報の取得、新世代型のコンピュータネットワークを利用した必要な場所や機器への通信、ビッグデータ技術による大量データの保存・解析、それらの解析結果を人間に伝えるための高度な

Human-Computer Interaction、更に実社会においてそれらのデータを有効に活用する分析情報学の学際的な専門教育を実施している。

分析情報学が有効に適用できる分野は多岐にわたり、医学、薬学、農学、水産学、環境学、資源学、社会学、考古学といった学問分野をはじめ、災害支援や遭難救助、社会安全保障、国土や社会基盤の管理保全といった国レベルの施策、更には情報セキュリティポリシーの策定やインターネット等のサイバー空間の管理といった分野へも及ぶ。こうした現実社会に深く関わる技術課題とともにそれを支える社会制度までにも興味を持ち、膨大な情報を活用して確固たる決断を下すことが可能な人材並びに、分析情報学及び計算機科学の研究者を育成することを目標としている。

### 1.5.2.5 アジア情報社会コース

アジア情報社会コース International Master's/Doctoral Degree Program: Information, Technology, and Society in Asia (ITASIA) は、大学院情報学環と東洋文化研究所の協力に基づき、2008年4月に発足した、大学院学際情報学府5番目の、そしてもっとも新しいコースである。留学生、日本人を問わず、アジアや世界の舞台で専門的職業人として活躍することを志す学生を対象に、情報通信技術の発達に大きな影響を受けている現代アジアの社会と国際関係に対する分析力と洞察力を養う大学院教育を目指し、2007年度から準備が進められてきた。

本コースの最大の特徴は、すべての教育を英語で行い、学生に日本語能力を求めない点にある。入学時期は秋季に一本化し、入学者の選抜も他コースのような筆記試験ではなく、TOEFL・GREのスコア、推薦書、研究計画書やサンプルワーク、これまでの業績などを含む書類選考に基づいて行い、さらに学内外の支援により上位合格者に与える奨学金枠を用意することで、これまで英語圏に進学していたアジア等の優秀な学生に対して、日本の東大で学ぶことを現実的な選択肢として提示した。

修士課程は、グローバル化するアジアにおける変容する政治的、経済的、社会的現実を把握できるよう、アジアの歴史と国際関係、メディア研究、社会調査方法論、情報技術という文理にまたがる4分野の必修基礎科目を軸に関連科目を提供するとともに、修士論文完成に向けた段階的の行事と個別指導を通じて学生を訓練し、それぞれの専門分野で適切な判断や提言を行える修了生を送り出すことを目指している。

博士課程は、アジア研究および情報学の研究における高水準の研究者・専門家の養成を目的としており、文理にわたる広範な知識とともに、政治学、経済学、メディア研究その他の社会科学における先端的な研究に必要な調査研究法と理論的分析能力を修得する機会を提供している。

発足して8年目に当たる2015年度は、修士課程3名(第6期生)が9月25日(金)に、3名(再入学者1名と第6期生)が2016年3月24日(金)に学位記を授与された。尖閣諸島問題の影響で特に中国からの入学者が激減した期が中心であり、博士課程への進学者はいなかった。また修士課程退学者が1名生じた。

2015年10月1日(木)には修士課程15名(再入学者1名を含む)、博士課程5名が入学し、同日にコースガイダンスを実施した。これで修士課程には30名、博士課程には19名の学生が、それぞれ在籍したことになる。今年度も韓国系学生の応募がなく、コース設立当初とは学生の出身国の構成に変化が

見られている。

2015年10月1日時点での49名の国籍別構成は、図1-5-2-5-1の通りである（台湾は独立してカウント）。出身国・地域は16ときわめて多様である。

2015年10月2日（金）には修士2年生がMaster's Preliminary Presentation (MQP)において修士論文の構想を発表し、さらに2016年2月8日（月）のMaster's Qualifying Presentation (MQP)により具体的な計画を発表した。博士課程学生が博士論文研究について発表するDoctoral Qualifying Presentationは、2015年度も学際情報学府の他の4コースの博士課程コロキウムに合わせて、11月11日（水）、12日（木）の両日に実施された。

学生による自治組織（Student Body Government）は、2015年度には他コースとの交流を増やすという目標を掲げ、一定の成果を挙げた。

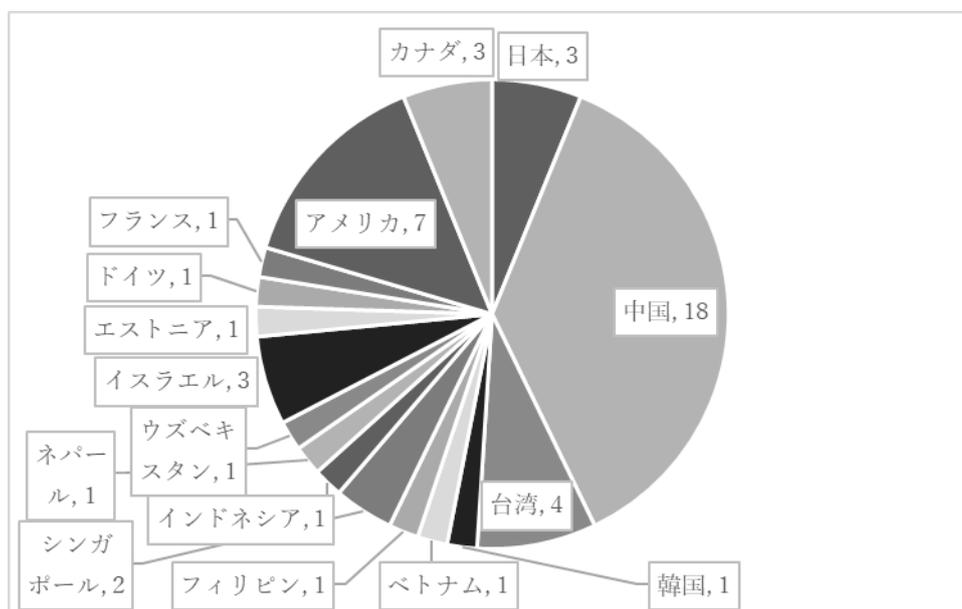


図 1-5-2-5-1 在籍学生の国籍別構成：2015年10月現在（修士課程・博士後期課程）

なお、本年度、本コースから3番目の博士号取得者（Amanda Weiss）が生まれた。また、博士論文第一次予備審査を通過した者が3名、博士論文第二次予備審査会が設置された者が1名生まれた。これらの中から、早いうちに更なる博士号取得者が現れることを期待したい。

### 1.5.3 教務委員会

教務委員会は、大学院学際情報学府の教育運営の中核をなしている。大学院学際情報学府では、研究組織である大学院情報学環に属している基幹と流動の教員に加え、学内兼任教員（課程担当教員）、授業担当教員、客員及び非常勤講師などから成る教員スタッフが学生指導に当たっている。その数は、2015年度現在で、基幹教員29（教授20、准教授9）、流動教員23（教授12、准教授11）、兼任・課程担当教員32（教授26、准教授6）、兼任・授業担当教員12（教授10、准教授2）、客員教員4（教授1、准

教授 3)、非常勤講師 19、総計 119 名となっており、修士課程 200 名、博士課程 180 名、学際情報学府全体で約 380 人の大学院生を教育するために十分な教師陣を備えている。教務委員会では、これらの多数の教員に協力を得ながら、カリキュラムの運営と改善、授業時間割の編成と講師の手配などの基本的な業務の他に、新学事暦への対応の検討、コース横断型必修科目の評価・運営、早期修了の申し合わせの策定、学際情報学府の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー）と教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）の策定、大学院情報学環・学際情報学府新任教員へのガイダンス資料の作成、修士論文の提出媒体に関する検討など広く教育に関する制度設計業務も行っている。2015 年度は、特に修士課程の学際情報学概論の再編成、及び修士課程の単位数配分をめぐって議論を重ね、2016 年度における新学事暦への移行に伴う準備作業に時間をかけた。

#### 1.5.4 予算委員会

予算委員会は、情報学環の事業計画及び決算に関して、原案を総務委員会に提出するのが任務である。情報学環の財務状況については、別の項で説明する。

#### 1.5.5 将来計画委員会

2012 年度に「情報学環戦略企画室」が廃止され、「将来計画委員会」を発展させて新たに設置した。2015 年度は、前年度より引き続き、主に概算要求案の作成、教授昇任をはじめとする人事の透明化、秋入学制や 4 ターム制移行に向けた学事暦の問題を、他の委員会と共同で議論を行なった。

#### 1.5.6 入試・カリキュラム制度検討委員会

入試制度、カリキュラム制度にかかわる問題を、学環・学府の組織運営体制の根幹にまで立ち戻って再点検し、必要があれば改善・見直しを提案する検討委員会として 2008 年度に設置された。教務委員会や入試業務と関連する各委員会との協議やヒアリングをおこない、(1)組織運営上の一般的問題点、(2)教育体制上の一般的問題点、(3)研究体制上の一般的問題点について議論を重ねている。

##### 「入試・カリキュラム制度検討委員会」

委員長 越塚登

副委員長 石崎雅人

委員 田中秀幸 水越伸 前田幸男 上條俊介 中野公彦 園田茂人 カーリンジェイソン 佐倉統

事務 学務係

2015 年度は、2016 年度から予定されている 4 ターム制及び 9 月入学制への移行を含む新学事暦導入に伴い、教育カリキュラムを更新することが主要な課題であった。具体的な内容検討は、教務委員会や入試業務に関連する委員会との共同協議によって実施した。

具体的には、以下の更新を実施した。

(1) コース共通必修科目の改訂

(旧課程)

学際情報学概論 1 (1 単位、集中講義形式)

学際情報学概論 2 (2 単位、ワークショップ形式)

研究倫理 (1 単位、集中講義形式)

(新課程)

学際情報学概論 1 (1 単位、通常講義形式)

学際情報学概論 2 (1 単位、ワークショップ形式)

学際情報学概論 3 (1 単位、発表聴講形式)

研究倫理 (1 単位、通常講義形式)

(2) 修士論文重点化に向けた単位数改訂

(旧課程)

学際情報学個別指導 (4 単位)

(新課程)

学際情報学個別指導 (6 単位)

※ 修士論文執筆を指導する授業単位数を 2 単位増加させることによって、修士課程のカリキュラムにおける修士論文執筆を重点化した。

(3) コース別選択必修科目数の改訂

(旧課程)

	選択必修単位数	単位構成
文化人間情報学コース	6	基礎 4 単位、研究法 2 単位
社会情報学コース	6	基礎 4 単位、研究法 2 単位
先端表現情報学コース	6	基礎 4 単位、研究法 2 単位
総合分析情報学コース	8	基礎 4 単位、研究法 4 単位

(新課程)

	選択必修単位数	単位構成
文化人間情報学コース	4	基礎 2 単位、研究法 2 単位
社会情報学コース	4	基礎 2 単位、研究法 2 単位
先端表現情報学コース	4	基礎 2 単位、研究法 2 単位
総合分析情報学コース	6	基礎 4 単位、研究法 2 単位

※ 選択必修科目単位数を少なくすることによって、授業選択の自由度を向上させた。

(4) 4T 制の採用案の策定

学際情報学府の性質を考慮した上での議論を通して、複数ある学事暦のなかで、4T 制の採用を答申した。

ターム	開始日	修了日	期間
S1	4/5	6/3	8 週
S2	6/6	8/1	8 週
A1	9/26	11/18	8 週
A2	11/21	1/26	8 週

※ なお、各タームの最終週は、試験期間とする。

#### (5) 4T 制への移行に伴う、主要学事スケジュール案の作成

4T 制へ移行した場合の主要学事スケジュール案を作成し、答申した

イベント名称	日付
新入生ガイダンス (4 月)	4 月 1 日
研究構想発表会 (4 月)	4 月 4 日
修論中間発表会 (7 月)	7 月 27 日～28 日 (S2 最終週の試験期間中)
夏季入学試験 (8 月)	8 月 22 日～8 月 31 日 (情報理工、工学系と同一)
新入生ガイダンス (9 月)	9 月 21 日
博士コロキウム (11 月)	11 月 16 日～11 月 17 日
修士論文最終発表＋ 冬季入学試験 (1～2 月)	1 月 10 日 (火)～13 日 (金) 筆記試験 (概ねの期間) 2 月 2 日 (木)～3 日 (金) 修論発表＋入試 2 月 11 日 (土) 外部 口述試験

※ 夏季入試は、修士課程 (文人・社情・表現・分析)、博士課程 (表現・分析 (既卒者のみ)) の入試を実施する。

※ 冬季入試は、修士課程 (文人・分析)、博士課程 (文人・社情・分析) の入試を実施する。

入試カリキュラム制度検討委員会では、上記の (1)～(5) の方針を策定した上で、教務委員会や入試業務を実施する各委員会に答申し、それらの委員会により具体化し、概ね本委員会の答申案の通りに 2016 年度から実施された。

### 1.5.7 施設整備委員会

施設整備委員会の最大のミッションは現在の情報学環がおかれている最低必要面積が確保されていないという認識のもと、教育研究に必要な施設を確保することにある。これまで、護国寺にある東大病院分院跡地に学環プロジェクト共同ルーム、第二本部棟の 3 階のフロアの一部を確保した上に、更に、2008 年 3 月には福武ホールが竣工し、これらのスペースを有効に使う研究教育が実施できるようになった。そして 2010 年には、大和ハウス工業様からの寄附による暫定アネックスの建て替えが決まった。2011 年度には施設整備委員会内に新棟建設に関する WG を構築し、学内調整や移設作業等を行なった。

新棟は、2014 年 5 月、ダイワユビキタス学術研究館という名称で竣工し、設立記念祝賀会も実施した。中には、ダイワハウス石橋信夫記念ホール、ユビキタス情報社会基盤センター附属のユビキタス空間物アーカイブ等の施設が設置された。寄附者の意向に基づき、総合分析情報学コースの教員研究室が

設置されている。また、2014年度は、目白台キャンパスの利用計画に基づき、入居研究室の退去を実施した。2015年度は、主に本館におけるスタジオ設置に関する審議を実施した。施設整備委員会としては、今後も教育・研究に必要な施設を確保できるように引き続き尽力する。

### 1.5.8 福武ホール運営委員会

福武ホール運営委員会の最大のミッションは、2008年3月に竣工した情報学環・福武ホールを有効活用し、教育研究活動を支援することである。2015年度、当該ホール地下2Fのラーニングシアターとラーニングスタジオを利用して開催されたシンポジウムやワークショップは計130件であり、情報学環内部のみならず外部に対しても、開かれた学びの施設となっている。特にラーニングスタジオ、1F会議室、1F学環コモンズは、情報学環教員・学生に対して、授業、ミーティング、授業外学習の場として活用されている。また、当該ホール1Fに併設されているUT Cafeにおいては、様々な領域で活躍している本学の教員をゲストとして招き、毎月開催するイベントである「UTalk (ユートーク)」を継続的に実施してきた。毎回の定員は15名であるが、情報学環の教員・学生のみならず、他大学の教員や学生、企業人など多様な参加者が多数集まり、定刻を過ぎても議論が続く盛況ぶりを見せている。情報学環・福武ホールが今後も学内外に開かれた学習空間となるよう、引き続き努力する。

表 1-5-8-1 2015年度 UTalk 実施テーマ一覧

実施月	タイトル	ゲスト所属	ゲスト氏名
2015・4	植物の多様性を知る	理学系研究科附属植物園 助教	東馬哲雄
5	地域の庭をつくる	新領域創成科学研究科自然環境学専攻 助教	寺田徹
6	地域のニーズを可視化する	医学系研究科 助教	成瀬昂
7	イスラーム・タイルの世界	東洋文化研究所 教授	榎屋友子
8	遠くの森をみる・きく	空間情報科学研究センター 特任研究員	中村和彦
9	落語家のうまさを科学する	教育学研究科 特任助教	野村亮太
10	ニューヨークのみち空間の広場化	工学系研究科都市工学専攻 准教授	中島直人
11	若者の居場所と社会参加	社会科学研究所 助教	御旅屋達
12	異なる宗教が人をつなぐ	先端科学技術研究センター 特任研究員	立田由紀恵
2016・1	土器のかけらから最古の農耕社会を解く	総合研究博物館 特任助教	小高敬寛
2	昭和三陸津波にみるアソシエーション	生産技術研究所 助教	岡村健太郎

	ヨン		
3	イスラーム教の聖なる血統	東洋文化研究所 准教授	森本一夫

### 1.5.9 ダイワユビキタス学術研究館運営委員会

ダイワユビキタス学術研究館運営委員会では、2014年に竣工した情報学環・ダイワユビキタス学術研究館を有効活用し、教育研究活動を支援することである。現在、ダイワハウス石橋信夫記念ホール、2階実験室、1階教室、地下会議室に関しては、学内外で共同利用できる施設として運営している。本委員会としては、ダイワユビキタス学術研究館が今後も学内外に開かれた学術研究施設となるよう、引き続き努力する。

### 1.5.10 コンプライアンス委員会

学環・学府では、コンプライアンス推進体制、コンプライアンス事案の防止活動およびコンプライアンス事案への対応等を、従来よりもさらに拡充するために、2014年7月の教授会・学府委員会において「東京大学大学院情報学環・学際情報学府コンプライアンス委員会規則」を制定し、東京大学コンプライアンス基本規則に定めるコンプライアンスに関する事項を審議するための常設委員会として、本委員会を設置した。

本委員会は、特に個別事案への対応においては、本学本部および学環・学府の関連の委員会等と緊密に連携しながら、また、関係者の権利や利益に十分に配慮しつつ、対応措置を講じることとしている。さらに、事案に応じて、適宜、本委員会の下に調査部会やワーキンググループ等をアドホックに設置して、調査、対応措置および再発防止措置の検討等を行ってきている。

本委員会は、本年度に3回の委員会（2016/1/15, 2016/1/28, 2016/3/11）を開催して、主に研究倫理教育及び不正防止に関する取組（研究資料等の保存に関する指針）に関する事項について審議を行った。

### 1.5.11 情報セキュリティ委員会

全学的な情報セキュリティ・ポリシー整備に伴う要請により2006年に設置された。情報セキュリティは必ずしもコンピュータに関わるものに限られないが、全学的にも部局でも情報システムをセキュリティ面から検討することがますます重要になる中で、2010年度の情報関係委員会整理に向けた見直し以後は、情報ネットワーク基幹実務担当者・UTnet部局担当者・部局CERT担当者的上部に位置づけられ、活動を行ってきた。2011年度には全学CERTも全学CISOの下に正式に再編され、2012年度からは各部局でもCISO（部局では情報学環長）直下にCERTが明確に位置づけられた。2014年度は全学的な情報セキュリティ・ポリシーの見直しへの対応を検討した。2015年度には、制度面で情報ネットワーク委員会との同一化措置（委員会の合同開催）が講じられるとともに、実務面では学際情報学府学生用メールシステムを情報基盤センター教育用計算機システム（ECCS）に完全移行し、教職員用メールシステムも情報基盤センターのサービス活用に移行することで、システム運用の持続可能性を高める施策が実施された。

### 1.5.12 情報ネットワーク委員会

2000年の情報学環発足以来、所属教職員ならびに学際情報学府学生に対して、部局内 LAN、学内 LAN である UTnet、さらにはインターネットへの接続環境を提供し、また部局としての電子メール・サーバ、WWW サーバ等を運営することなどを中心とする、情報ネットワークに関わるサービス提供と管理が要請されてきた。しかし、これを専門に担当する委員会は当初は存在せず、部局ウェブページのコンテンツ管理等も含め、「HP・ネットワーク担当」の数名の助教授および助手が任に当たっていた。2002年6月になって、情報学環の広報及び情報システム等に関する事項の審議のため、「広報・情報委員会」が設置された。さらに、2004年4月の社会情報研究所との組織合併に際して機能分化が図られ、部局ウェブページのコンテンツ管理に当たる「企画広報委員会ホームページ担当」とともに本委員会が設置された。本委員会は、2002年11月に設置された情報倫理審査会が行う調査・審査等や、学生・留学生委員会その他が管理する個別端末、さらに2006年に設置された情報セキュリティ委員会の担当範囲等をも除き、インフラ等、部局の情報ネットワークに関して残る部分を、関係委員会等と協力しつつ、全般的に担当してきた。

具体的には、2005年度以降、情報ネットワーク基盤の維持やセキュリティ事案への対応などの日常的管理実務を着実にを行うとともに、情報ネットワーク運営管理体制の明確化・強化、基幹ネットワークの更新・整備、サーバ室の環境改善、基幹サーバの更新、諸規則の整備、iii-PKI (Public Key Infrastructure) に基づく安全な通信・情報共有のための基盤形成およびVPN・会議資料オンライン閲覧システムの構築・運用などを順次進めてきた。

内規に従い、基幹的情報ネットワーク管理の実務（セキュリティ事案対応にあたるCERT業務を含む）は、情報ネットワーク基幹実務担当者が担ってきたが、2008年度末に情報セキュリティ委員会主導で全学の情報セキュリティ・ポリシーの実施手順に相当する諸内規等が成立したことなどを受け、日常業務の諸局面で情報セキュリティをより一層考慮した運用を進める必要が生じた。これを受け、2010年度から、情報関係諸委員会の整理・再編も視野に入れた当委員会についての見直しが始まった。2011年度末には、CERT等の関係体制を（規則上部局情報セキュリティ委員長である）部局CISO（最高情報セキュリティ責任者）の下に再編することを求める正式な要請が全学CISOからなされた。以後、2014年度まで、当委員会は非活動状態にあったが、2015年度に情報セキュリティ委員会との同一化措置（委員会の合同開催）が講じられた。

### 1.5.13 情報倫理審査会

情報倫理審査会は、東京大学情報倫理規則第4条に基づき各部局に設置されているもので、全学の情報倫理委員会と連携しながら、違反行為について、調査及び審査手続を行うことを任務としている。情報学環情報倫理審査会では、従来からこれに加えて、違反行為を未然に防ぐための啓蒙活動にも力を入れている。2015年度は、学際情報学府学生には（従来の部局ドメインではなく）情報基盤センター教育用計算機システム（ECCS）のメールアドレスを割り当てることとなり、情報倫理的側面も含む同センターの講習会の受講が必須となったが、部局としてはこれに留めず、通例に従い審査会関係者が4月と10月の大学院学際情報学府や情報学環教育部の新入生ガイダンスで必要に応じて英語も用いながら

啓蒙と注意喚起を行うとともに、メーリングリストや掲示などによって在籍者に対するリマインドも行った。これらが効を奏している近年の傾向通り、学際情報学府も含めて、2015 年度に違反行為に対する審査会としての事後対応の必要は生じなかった。

#### 1.5.14 業績評価委員会

業績評価委員会は、情報学環・学府の研究・教育活動に対して行われる、学内外の様々な評価に関連する業務を遂行することが任務である。定常的な業務として、『東京大学大学院情報学環・学際情報学府 年報』No.43 を発行した。また、大学機関別認証評価の自己評価書作成及び、2016 年度に実施される、東京大学の法人評価のための調書作成作業を実施した。

#### 1.5.15 ヒトを対象とした実験研究および調査研究に関する倫理審査委員会

ヒトを対象とした実験および調査研究に関する倫理審査委員会では、情報学環の教員や学生がこれらの実験・調査をおこなう際に、事前に倫理審査をおこなうものであり、平成 21 年度に設置された。情報学環は教員・学生とも研究領域が多様であるため、どのような倫理審査が適しているのかについてまだ議論が続いているが、学際組織での研究倫理のあり方を確立することを目標に活動している。平成 27 年度の審査件数は 5 件であった。これまでの歴代の委員会活動の結果、研究の倫理に関する研究者の理解が進んだおかげで、倫理的にとくに大きな問題を含む申請はなかった。今後も、学環教員や学生に対する啓発活動を継続することが必要である。それと同時に、過剰な制約を課すことによって、研究そのものへのモチベーションを低下させることは本末転倒であり、慎重かつ柔軟な対応が必要とされる。

#### 1.5.16 企画広報委員会

企画広報委員会は、情報学環・学際情報学府の活動や行事（大学院入試説明会、オープンキャンパス、ホームカミングデイ、教員研修会など）を企画・運営すること、および両組織の情報を、ニューズレター、ホームページ、メール等で、学内外に案内するなどの広報活動を行うために設置されている。その他、学環・学府関連のメーリングリストへの配信管理や、工学部 2 号館 9 階などの施設の利用管理なども行なった。

例年通り、ファカルティデベロップメントの一環として、学府委員会と教授会の間に教員が研究内容を紹介する「学環トーク」を企画した。10 分間という限られた時間ではあったが、毎回興味深い話題が提供され、学環教員の研究内容の多彩さ、学際性の高さを再認識できる機会となった。以下が、今年度の学環トーク講演者一覧である。

##### 学環トーク担当教員一覧（平成 27 年度）

第 33 回	平成 27 年 5 月 22 日	上條 俊介	准教授（生産技術研究所）
第 34 回	平成 27 年 6 月 26 日	金井 崇	准教授（総合文化研究科）
第 35 回	平成 27 年 7 月 24 日	板倉 聖哲	教授（東洋文化研究所）
第 36 回	平成 27 年 9 月 18 日	堀 里子	准教授（薬学系研究科）
第 37 回	平成 27 年 10 月 16 日	金子 知適	准教授（総合文化研究科）

- 第 38 回 平成 27 年 11 月 27 日 三宅 弘恵 准教授（地震研究所）  
 第 39 回 平成 27 年 12 月 18 日 山中 俊治 教授（生産技術研究所）  
 第 40 回 平成 28 年 1 月 15 日 北田 暁大 教授  
 第 41 回 平成 28 年 2 月 12 日 倉田 博史 教授（総合文化研究科）

### 1.5.17 図書・出版委員会

2007 年度から図書委員会と出版編集委員会が統合されて、図書・出版委員会となった。

#### 1. 図書室関係

情報学環図書室は、新聞研究所、社会情報研究所以来のマス・メディア、ジャーナリズム研究の資料に加えて、2004 年度の情報学環との統合以降は、文系・理系を問わず、情報の学際的な研究に関する資料を幅広く収集し、利用に供している。

2015 年度も「図書購入方針」（2007 年 6 月図書出版委員会承認）にもとづいて、①見計らいによる推薦、②基幹教員による推薦、③授業用図書の推薦、の 3 方式で図書を購入した。見計らい図書選定については、選定リストの改善によって選定参加教員が文系・理系双方で大幅に増えて、各分野の基本図書が選定されるなど機能し始めている。

2011 年度から教務委員会の要請に基づき、図書・出版委員会で審議し、図書室内に「授業参考図書（Reserved Books for Courses）」コーナーを新設した。同コーナーには、学際情報学府の授業を担当する教員の授業に必須の図書を配架し、学生の利用に供している。

表 1-5-17-1 2015 年度図書受入冊数

	購入	寄贈	計
和書	79	146	225
洋書	80	33	113
計	159	179	338

表 1-5-17-2 貸出冊数の年度推移

年度	2013	2014	2015
図書	4,920	4,742	4,707
雑誌	640	782	692
計	5,560	5,524	5,399

#### 2. 出版関係

（4.6 出版活動を参照されたい）

### 1.5.18 国際活動委員会

国際活動委員会は、情報学環への外国人研究員等の受け入れを審議し許可してきた。最近の受け入れ総数を見ると、平成 18 年度 15 名、平成 19 年度 15 名、平成 20 年度 14 名、平成 21 年度 27 名、平成 22 年度 36 名、平成 23 年度 25 名、平成 24 年度 25 名、平成 25 年度 23 名、平成 26 年度 22 名、平成 27 年度 33 名である。今後も、情報学環の多様な研究背景を生かし、引き続き多くの外国人研究員を受け入れていく予定である。平成 27 年度に締結（更新）した協定はなく、5 件終了した（終結：国立台湾大学社会科学院、清華大学新聞伝播学院、上海交通大学媒体与设计学院、復旦大学、香港城市大学媒体与传播系、韓国科学技術情報研究院）。

また、2015年度には、次の2つの事業を継続して運用した。

1) 東京大学大学院情報学環 国際活動補助奨励費

2015年度は、昨年度加盟した国際連合の下部組織である国際電気通信連合の電気通信標準化部門 (ITU-T、本部:スイス ジュネーブ)のメンバーシップ費と、ソウル大シンポジウムの運営費に充当した

2) Writing Support Desk (WSD)

WSDは、週一回、英語を母語とする博士課程学生が、学環の学生が英語論文執筆の際のさまざまな疑問に答え、英語表現を洗練させる支援をし、さらに長期的には学生の全体的な英語力、writing スキルを伸ばすことをめざしている。近年、学生の間でも国際学会での発表や英語査読論文投稿が増えてきており、そうしたニーズに応えるべく、教育事業の一環として創設した。創設当初から、学生に広く利用され好評を博している。

### 1.5.19 産学連携委員会

産学連携委員会は、情報学環・学際情報学府における研究・教育活動を、産業界との連携を通して社会還元をすることを目的として設置されている。2015年度の産学連携委員会の活動は、職務発明特許やそれに類する著作権等の知財に関する規定の改正に関して、全学委員会である、東京大学産学連携専門委員会を通して参加をしている。また、東京大学産学連携協議会に参加し産業界との交流も行っている。学環・学府において、寄付講座・社会連携講座・受託研究などを通じて産業界と連携するケースが増加している。連携する上で生じた様々な課題に対応する。

### 1.5.20 知的財産室

知的財産室では、情報学環・学際情報学府の教職員が発明を行ったり、著作物を作成した際の届け出を受け付ける。ここで、それらの発明や著作物が、職務上のものであるか、そうでないかを、届け出の内容から判断する。

### 1.5.21 利益相反アドバイザー

現在、東京大学の教職員は、東京大学が定める規定の範囲内で、様々な立場を学外において持つことが可能である。例えば、学会の役員や政府委員、他大学の非常勤講師、産学連携のための民間企業の兼職などがある。こうした立場に立って、様々な活動を行うと、東京大学の構成員としての利害と、学外の立場における利害がぶつかる場合がある。そのようなケースを利益相反と呼ぶが、利益相反アドバイザーは、情報学環内において、利益相反が心配されるときに相談を受け、本部事務とも連絡を取りながら、利益相反に関する対応をアドバイスする役割を担っている。今後、産学連携が進む上で、起こることが予想される利益相反の問題に対して適切に対応していきたい。

### 1.5.22 ハラスメント予防担当者

ハラスメント予防担当者は、アカデミック・ハラスメントあるいはセクシャル・ハラスメントなどの問題に対応するために設置され、引き続き活動を行っている。全学で担当者を対象に行われる講習会に参加し、最新の情報を得るとともに、部局内でハラスメントに関するパンフレット等を配布し、ハラス

メント予防について教員および学生への周知を行っている。また、ハラスメントに関する相談に対して、ハラスメント相談所や男女共同参画室と連携を取り合いながら、具体的な相談を受けた場合に対応し、相談体制を整えている。

### 1.5.23 研究倫理担当者

研究倫理担当者は、東京大学の「研究倫理アクションプラン」（平成 26 年 3 月策定）の下で、責任ある研究体制を整備するために、平成 26 年度に、本部に研究倫理推進室が新設されたことに伴い、部局において研究倫理教育・研修や体制整備の推進等を行うための担当者として設置された。平成 27 年度においても、学環・学府長をはじめとする関係者からの協力を得て、学環・学府における従来からの研究倫理教育・不正防止に関する取組みを継続・拡充したことに加えて、本年度の新たな取組みの例として、とりわけ、1) 学府の修士課程および博士課程の大学院生のための「研究倫理」という名称の必修授業を平成 27 年度から新設して実施したこと、2) 平成 27 年度から適用された文部科学省「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」への対応のために必要な一連の措置を講じたこと、3) 外部講師を招いて教職員向けの研究倫理・不正防止のための研修会・講演を実施したこと、などが挙げられる。

### 1.5.24 バリアフリー検討委員会

バリアフリー検討委員会は、情報学環におけるバリアフリーに関する問題に対応するために 2014 年度に設置され、必要に応じてバリアフリーに関する検討を行っている。2015 年度は、バリアフリーに関して本委員会で審議する検討事項はなかった。

### 1.5.25 社会情報研究資料センター

社会情報研究資料センターは、新聞資料を中心に、各種メディア情報資料を研究のために収集、整理し、それらの資料を学内外の研究者に提供することを目的としている。現在、本センターの所蔵資料は製本済原紙約 6,000 冊、縮刷版約 8,000 冊、マイクロフィルム約 45,000 リールに達している。

本センターの沿革は、1964 年に当時の新聞研究所に開室された「プレスセンター」が 1967 年、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992 年 4 月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称された。その後、2004 年 4 月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合にともなって、「社会情報研究資料センター」と改称した。センター運営委員会は、この社会情報研究資料センターの運営にあたっており、2007 年度から 2011 年度にかけては新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」を推進した。

表 1-5-25-1 社会情報研究資料センター月別利用者数（2015 年度）

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
開室日数	0	0	0	22	17	19	22	19	18	15	18	22	172

学内	0	0	0	18	31	15	27	21	26	17	9	17	181
学外	0	0	0	24	44	27	13	15	31	13	31	33	231
合計	0	0	0	42	75	42	40	36	57	30	40	50	412

すべて延べ人数。閉室期間は7月1日から3月31日まで。

### 1.5.25.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月、情報学環におけるメディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のために設置されたネットワーク型の機構である。組織としては、情報学環附属研究施設の社会情報研究資料センターの下に置かれている。

情報学環は、「コンテンツ創造科学産学連携教育プログラム」(2004年度～2008年度)や「コンテンツ創造教育研究コア」(2005年度～2009年度)をはじめとして、メディア・コンテンツ分野での研究教育に取り組んできた。本機構は、それらのメディア・コンテンツ研究をアカデミックに発展・深化させ、教育を根付かせ、国際的な研究協働と人材育成を支援するための体制の確立を目指している。産・官・学を結ぶ「知のトライアングル」の構造化、研究・教育・国際連携のための戦略的組織である。

本機構は、研究教育の軸として、デジタル・テクノロジーを共通の基盤に、1) クリエーション、2) プロデュース、3) アーカイブ、4) アナリシス、5) リテラシーの5つの柱を立て、それを円環のプロセスで連結し組織化することをめざしている。

2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に加え、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」が情報学環を世話部局として開始され、修了生も輩出してきた。

### 1.5.26 総合防災情報研究センター運営委員会

総合防災情報研究センターは、情報学環附属のセンターであるが、地震研究所、生産技術研究所と連携して運営されており、その具体的仕組みとして、平成19年10月12日付け大学院情報学環教授会決定の「情報学環総合防災情報研究センター運営委員会規則」に基づき情報学環総合防災情報研究センター運営委員会がその任に当たる。本センター運営委員会は3部局長および各部局から選出された委員各1名の合計6名から構成されている。運営委員会委員のうち、部局選出委員は、平成27年度4月1日現在で以下に示した3名である。

大学院情報学環	橋元良明教授
地震研究所	瀨瀬一起教授
生産技術研究所	大口 敬教授

平成 27 年度は、運営委員会委員の異動があったこともあり、委員長の選出と CIDIR の活動報告および今後の活動について運営委員会を開の通りに開催した。

#### 【総合防災情報研究センター運営委員会の記録】

第 1 回 総合防災情報研究センター運営委員会

日 時 平成 27 年 6 月 16 日 13:00～14:00

場 所 情報学環本館 6 階会議室

1. 運営委員会メンバーの紹介
2. 運営委員会委員長の選出 佐倉学環長を委員長に選出
3. 総合防災情報研究センターの活動報告と今後の活動について（田中センター長）
  - ・概算要求は平成 29 年度向けに出す予定であることを確認した。
  - ・学内の留学生向けの防災教育や学内研究者との共同研究の仕組みなどに関して意見交換がなされた。

なお、概算要求に関しては、「研究科横断型総合防災情報教育プログラム」として要求することを部局長に対して説明し、提出時にメールにて採取的な了承を得た。

### 1.5.27 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21 世紀 COE プログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」（2004～2008 年度）の研究成果を引き継ぎ、総合分析情報学コースの教育と連携して、ユビキタスコンピューティング、ユビキタスネットワークングに関する世界最高の教育・研究拠点の中核を担うことを目的として、2009 年 4 月 1 日に設立された。現在 7 名の東京大学情報学環の教員がユビキタス情報社会基盤研究センターの教員を兼務している。2014 年には、ダイワユビキタス学術研究館が完成し、活動拠点を獲得ことができ、またユビキタス・空間物アーカイブの施設の運営、様々な学術集会や社会貢献活動、教育活動を活性化させている。

### 1.5.28 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、グローバル化する東アジア地域のなかでダイナミックに変化している朝鮮半島及び現代韓国の諸相を学際的に研究し、その成果を世界に向けて発信する国際的拠点を目指して 2010 年設立された。本センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、情報学環内で現代韓国の政治や情報、文化を中心とする学術交流と共同研究のプログラムを策定・実施するとともに、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化し、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指している。2014 年 3 月で韓国国際交流財団の支援が終わるが、その後も情報学環の特色を生かした活動の継続を模索している。

すなわち 2015 年度以降、情報学環の特徴である「幅広い学際性」と「IT 技術」を生かし、日韓の幅

広い分野の学術的共有知を育んでいく未来のアジアのための事業の共通基盤としてこのセンターを発展させていこうという方向である。21世紀の日韓両国は、多くの課題や可能性、基盤を共有している。それらの課題や可能性は、単に日韓にとどまらず、東アジア共通の課題でもある。現代韓国研究センターの活動は、日韓の相互理解を学術的、市民的に広げつつ、未来のアジア共通の課題解決を機軸に「Future Asia Projects（アジアの未来プロジェクト）」を展開し、幅広い分野での開かれた拠点として維持可能な形を実現しようと模索している。

具体的には、「Asian Media（グローバル・メディアとアジアのジャーナリズム）」「Asian Citizenship（グローバル市民権とアジア）」「Asian Memory（アジア共通の記憶）」「Asian Health（アジアの高齢化と健康）」「Asian Culture（アジアの現代文化）」「Asian Economy（アジアの経済と産業技術）」「Asian Sustainability（アジアの持続可能性と防災）」の7つの中核テーマについて、研究事業を展開する計画である。

### 1.5.29 駒場カリキュラム連携運営委員会

駒場カリキュラム連携運営委員会は、総合文化研究科・教養学部における、大学学部前期課程、学部後期課程の教育と情報学環・学際情報学府の教育に関する連携を協議し、連携に関わる授業科目を円滑に運営する目的で平成20年度から設置された。設置以来、教養学部前期課程で情報学環教員が担当する科目に関する調整と、同後期課程学際科学科総合情報学コースへの協力体制構築を主な案件として活動してきた。平成26年度は、教務委員会委員長、各コース長の出席のもとで一度だけ委員会を開催し、各コースからどの科目に何人の担当者を選出してもらうかのみを決定した。その後、各コースで具体的な人選を行ってもらった。平成27年度は、前期課程「情報」の科目について担当者の交代があり、その人選のために駒場の教務関係の資料を揃えた。

### 1.5.30 学生 学生・留学生委員会

学生・留学生委員会では、カリキュラムや単位に関する事項を扱う教務委員会とは別に、学際情報学府の大学院生らに対して、(1) 大学院生・研究生・教職員の円滑なコミュニケーションの維持、(2) 大学院生・研究生のためのスペースおよび備品のケア、(3) 大学院生奨学金および研究支援経費等の審査などの対応を行っている。

2015年度は、10月に浜離宮・浅草ツアーを開催し、大学院生、外国人研究生、教職員25名が参加し親睦を深めた。また、奨学金・支援経費については、大学院生・研究生向けの各種奨学金に関する告知・募集を随時行い、学際情報学府による「奨学金に関する選考基準」に基づき、審査を行っている。

### 1.5.31 教育部委員会

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。修業年限2年。大学2年生以上であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験することができる。1949年（昭和24年）に新聞研究所教育部として設置され、2004年度（平成16年度）には社会情報研究所（元新聞研究所）との組織

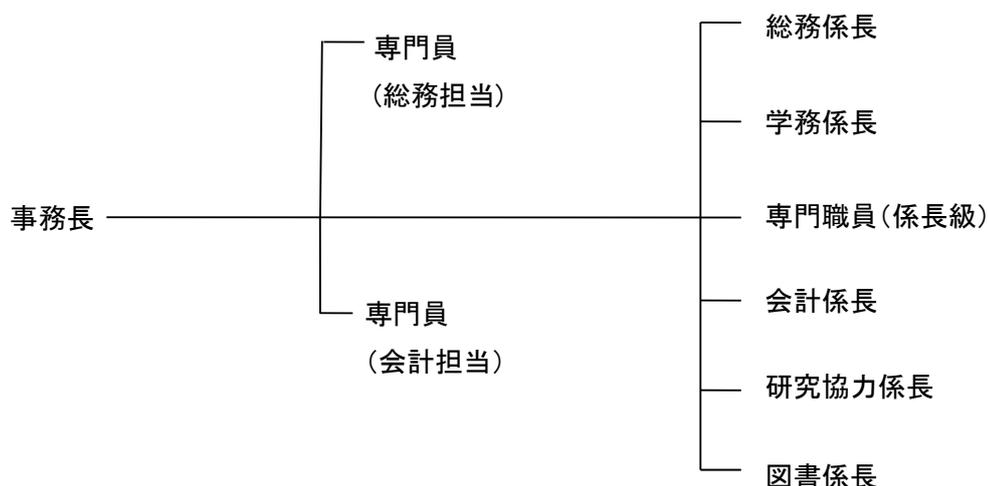
統合によって情報学環に引き継がれ、60年を越える歴史を有している。

教育部委員会では、2011年度に大幅な入試改革、カリキュラム改革を行った。すなわち、入試問題や資格要件を再検討し、定員を一学年50名程度から30名程度としぼった。同時に授業内容を講義からゼミや制作、実験など実践的な活動をおこなうものまで多様化させ、より手厚い教育ができる体制を敷いた。2012年度以降、この新しい制度のもとで入試および授業を実施している。

研究生たちは「ジャーナリズム、マスメディアをめぐる実践知」「情報コミュニケーション（ICT）技術、産業をめぐる実践知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる文系知」「情報、メディア、コミュニケーションをめぐる理系知」をめぐる、きわめてユニークな教育を受けつつ、大変活発に、自主的な学習活動を展開している。

## 1.6 事務組織

図 1-6-1 事務部組織図(平成 27(2015)年 4 月 1 日現在)



事務長	専門員	専門職員	係長	主任	係員	計
1	2	1	5	3	1	13

## 2 教育活動

### 2.1 概況

学際情報学府の教育は、情報学についての文理相互浸透の学際的カリキュラムとネットワーク型の教員編成による教育指導体制に最大の特色がある。学際情報学という分野が、すでに体系化された学問の修得と継承というよりも、従来の学問体系の組み換えと新しい学問の創生を目標に据え、そのような教育を実施しようと考えているからである。

学際性の学問論とネットワーク型の組織を引き継ぎつつ、2004年4月の組織統合にあたって、3コース制が導入された。これは、(1) 修士課程学生定員70名という規模に適合するため、(2) ディシプリンの基礎をもった学際性への教育効果のためといった、2つの理由から導入された構成であった。その後、2006年4月に総合分析情報学コース、2008年4月（学生受入れは同年10月）にアジア情報社会コースが設立されに至り、現在では5コース（修士課程学生定員100名）となっている。

このコース制は設立当初からの学際性の目標と矛盾するものではない。むしろ高水準の学際性を備えた人材を育成するために必要な措置であった。入り口で基礎学力のある優秀な学生を採用するためにコースごとの入試を行い、出口で学業に関する達成度を確認するためにコースごとの修了試験を行う。しかし、入試における面接でも、修了試験の口述試験でも、学際的な教員構成での審査体勢がとられており、また入学後の学生は基本的な選択必修科目のほかは、全コースに開かれている多数の自由選択科目群から自分の研究計画と関心に合った科目を選んで、自分の学習メニューを組むことが可能となっている。

コースはあくまで学際情報学府の学生が所属するより小さな枠組みであり、研究科の専攻のようにそこに教員が所属しているわけではない。教員はあくまで研究組織である大学院情報学環に所属しているのであって、コースとの関わりは、どのコースの学生を主として指導するかによる。

コース制は、学生が自らの学問的なアイデンティティを基軸にしつつ、学際性へと越境していくために設計されているのである。

### 2.2 教育カリキュラム

学際情報学府の授業科目群は、(1) コース共通必修科目、(2) コース別選択必修科目、(3) コース共通選択科目、(4) コース横断科目の3つの科目群から構成されている。

第1のコース共通必修科目は、それぞれの学生の指導教員による個別研究指導のほか、学際情報学府の大学院生が、専門分野の視点や立場の違いを越えて、今日の情報学のさまざまなアプローチについての基礎知識を身につけてもらう「学際情報学概論」が主軸である。この科目には、研究組織である大学院情報学環の多くの教員が関与し、学生はe-learningシステムでの受講も可能な仕組みになっている。同時に、学際情報学府院生には、修士1年では研究構想発表会における修士1年間の研究の成果発表が、修士2年では修士論文中間発表会での発表が、また博士課程では毎年の博士課程コロキウムでの発表が、大学院での必修カリキュラムの一部として課せられている。

第2のコース別選択必修科目は、修士課程の大学院カリキュラムとして設けられている科目群で、そ

それぞれのコースにおいて専門的な研究能力のトレーニングをしていくためのものである。この科目群は、「基礎」の4単位と「研究法」の2単位の6単位から成り、「基礎」は主として、各専門分野における基礎的方法論のトレーニング、「研究法」は、そのようにして習得した専門的方法論を生かした実習（調査、制作、実験、政策立案など）が分野に応じたやり方で実施されている。それぞれのコースの院生にとって、一般的に最もエネルギーを割かなくてはならない科目群であり、コースごとの特徴が最も明瞭に示される科目になっている。

第3の共通選択科目群と第4のコース横断科目は、学際情報学府を担当しているそれぞれの教員が開講する大学院授業科目であり、形式としては一般的な大学院の授業科目と変わらない。但し、学際情報学府の共通選択科目の大きな特徴は、いずれも「情報」や「メディア」を中心的な対象としながらも、情報科学からジャーナリズム論までの幅広い専門家が集まっていることによる横断性にある。すなわち、ここでの共通選択科目には、自己組織情報、アジア情報政策、異文化コミュニケーション、学習環境デザイン、情報行動、映像文化、メディア表現、情報記号、情報倫理、自然言語処理、情報法、ジャーナリズム、ヒューマンインタフェース、ユビキタスコンピューティング、知覚情報、情報経済、歴史情報、シミュレーションシステム、情報芸術、視覚情報処理、医療福祉情報、身体情報認知、情報データベースなど、きわめて多様な分野が含まれている。これらの科目は、学際情報学府のカリキュラム編成においては、①情報・言語・行動系科目、②社会・制度系科目、③メディア・文化系科目、④表現・リテラシー系科目、⑤数理・システム系科目の5つの領域に分けられている。コース横断科目は、コースの専門性を越境して、より広く学際性を身に付けるための科目としての性格を持つ。

## 2.3 カリキュラム支援体制

学際情報学府では、上記のカリキュラムを大学院教育の基軸に据えながら、以下のような教育上の支援体制を組織し、運営している。

### 2.3.1 主指導教員・副指導教員の配置

学際情報学府では、指導教員の個別研究指導に加え、副指導教員による側面からの研究指導という複眼的な指導体制を整えている。情報に関する研究は、専門的であると同時に学際的な性格をもつため、既存の単一の学問分野の知識だけでは適切に対応できないことが多い。学際情報学府では、既存分野の専門的な知識や方法を十分に身につけつつ、それらを複眼的に結びつけて新しい情報研究に挑む若手研究者を効果的に育てるために、従来の指導教員による指導だけでなく、副指導教員を加えた指導体制を採用している。この体制は、学生の視野を広げ、より柔軟な学問的展開を可能にするといった効果をもっている。

### 2.3.2 修士・博士 研究計画書の作成

学際情報学府の大学院生は、修士1年及び博士2年の段階で、研究計画書を作成する。このうち修士1年の段階での研究計画書は、修士論文に向けての対象設定、およその研究内容を示す概要的なもので

あり、提出された計画書は、修士1年生全員が互いの研究テーマについての認識を共有すべく、1冊の冊子にまとめられる。博士2年での研究計画書は、その学生が博士論文を執筆していくための第一歩となる。

### 2.3.3 修士課程研究構想発表会

研究構想発表は、学際情報学府修士2年生が新年度の最初におこなう教育行事である。発表者は、修士1年生の間に進めてきた学習や研究の成果をまとめ、約1年後に提出する修士論文の構想や進捗状況について発表する。この発表は、教員と学生の双方に対して行われるもので、各自が研究の内容・計画をポスター発表（バザール）形式で行う。

1日を数セッションに分けて実施され、教員や在学生の他、発表者も自分の発表のないセッションでは聞き役に回り、コメントシートを提出する。

発表者は、このような中間総括と相互評価のプロセスを経ることで、修士論文に向けた残り1年間の研究をより一層充実させるための手がかりを得ることとなる。また、学際情報学府の新入生もオンライン発表を閲覧し、オフライン発表会の聞き役となることで、学府における研究の内容や修士論文に向けたプロセスの、具体的なイメージをつかむことができる。

### 2.3.4 修士論文中間発表会

学際情報学府では、多くの修士2年の学生が修士論文執筆に本格的に取り組む7月上旬に修士論文中間発表会を開催している。この発表会では、その年度に修士論文を提出する、すべての学生が自分の研究の進捗状況を発表しなければならないことになっており、指導教員や福指導教員だけでなく、関連分野の教員や他の学府の大学院生が発表会に参加する。各コースの教務委員及び教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、80名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、中間発表会全体を組織する。この発表会には、学府の院生は誰でも参加することができることになっており、修士1年の学生にとって、先輩がどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

### 2.3.5 博士課程コロキウム

学際情報学府では、博士課程に在籍している学生を対象に、毎年11月上旬に博士課程コロキウムを開催している。このコロキウムでは、博士課程3年までに在籍しているすべての学生が、博士論文執筆に向けての進捗状況を発表しなければならない。各コースの教務委員及び教務委員会は、それぞれの教員のスケジュールを調整して、60名超に及ぶ発表者の全体の進行表を作成し、博士課程コロキウム全体を組織している。このコロキウムには、学府の院生は誰でも参加することができるので、博士課程の学生たちにとっては、他の学生たちがどのような研究を進めているのかについて広く知る貴重な機会となっている。

### 2.3.6 E-learning 授業 (iii online)

#### 2.3.6.1 iii online の目標

iii online は2002年4月に始まった学際情報学府のeラーニングサイトである。iii online は、学部・

研究科レベルでは東京大学初の e ラーニングサービスである。

e ラーニングを開始した最大の理由が、社会人大学院生の学習機会の確保である。

学際情報学府は独立大学院であるために、多種多様な学生が集まっている。2003 年度までは、実践情報学コースという社会人学生をターゲットとしたコースが設けられており（現在は、社会人特別選抜枠に変更）、マスコミ関係者やシステムエンジニアなど、学生の 2 割程度が社会人という状況であった。学際情報学府に入学する社会人は、銀行や製造業につとめている一般的な社会人に比べ、比較的時間に自由がきく代わりに、忙しくなる時期とそうでない時期が交互にやってくる。たとえば、広告代理店に勤めている場合、コマースの撮影などで 1 ヶ月間は仕事が超過密スケジュールで入るが、企画段階ではそれほど時間に制約がないという状態である。

このような状況では、講義に毎回出席することは難しくなる。iii online が始まる前は、出席しなければ自動的に欠席になり、全く講義の情報が手に入らない状態であった。2 回、3 回と欠席が続けば、当然講義の理解に影響が現れてくるので、教育水準の確保上、大きな問題となっていた。

通常社会人向けの大学院では授業を夜間に開講することによって、この問題を解決している。しかし、フルタイムの学生は昼間に授業が開講されることを望んでおり、学際情報学府で授業を夜間に持つことは、非現実的であった。

### 2.3.6.2 iii online の概要

iii online はこのような問題を解決するために、ビデオのストリーミングと掲示板を組み合わせたサービスを提供している。ビデオのアイコンを押すと、およそ 15 分×6 つにカットされた授業の映像を見ることができる。ストリーミングは FlashVideo 形式 500kbps エンコーディングで行っている。FlashVideo 形式を選んだのは、利用者として Windows ユーザー、Mac ユーザー、Linux ユーザーが混在しているからであり、エンコーディングレートは、ブロードバンドで十分スピードがでない場合でも対応できるという観点から設定してある。

15 分にカットしたのは、90 分の映像を一気に見るのは大変だからである。利用者アンケートからも、朝 30 分、会社の休憩時間に 30 分、夜帰ってから 30 分見ると行ったような分割視聴が日常的に行われていることが明らかになっている。

ビデオは、パワーポイント連動型ではなく、カメラで撮影したものをそのまま流している。理由はパワーポイントを使う授業スタイルを教員に押しつけるのは良くないと判断したからである。OHP を使う人もいれば、ホワイトボードの方がインタラクティブにできるという教員もいる。そういう多様な授業スタイルを認めなければ、e ラーニングを導入すると、かえって授業がやりにくくなるということになりかねない。日常的に e ラーニングを展開する場合には、「e ラーニングだから」といった制約条件を減らすことが重要である。

データのアイコンを押すと、授業の資料を見ることができる。資料はすべて PDF ファイル形式にしてある。これも前述の通りユーザー側が多様な環境にいるためである。

アンケート調査では、実際に利用するときには、この PDF ファイルを印刷し、それをノートとして使いながら授業を聞いている。



図 2-3-6-2-1 : iii online の画面

表 2-3-6-2-2 : iii online で閲覧可能な授業の一覧

配信年	講義名	授業者
2002	自然言語処理論	辻井潤一
	コミュニケーション・システム	原島博
	メディア表現論	水越伸
	情報政策論	浜田純一
2003	学際情報学概論	オムニバス
	情報リテラシー論	山内祐平
	情報記号論	石田英敬
	情報進化論	佐倉統
2004	シミュレーション・システム	荒川忠一
	学際情報学概論	オムニバス
	文化・人間情報学基礎	水越伸・山内祐平
	医療福祉情報学	山本隆一
2005	社会情報システム	松浦幹太
	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 II	田中秀幸
	学際理数情報学概論 VI	鈴木高宏

2006	学際情報学概論	オムニバス
	身体行動情報論	深代千之
	能動情報論	奈良高明
2007	学際情報学概論	オムニバス
	学習環境デザイン論	山内祐平
	歴史情報論	本郷和人
2008	学際情報学概論	オムニバス
	学際理数情報学特論 IX	大島まり
	文化・人間情報学特論 V	前田幸男
2009	学際情報学概論	オムニバス
	組織学習システム論 II	中原淳
	科学技術コミュニケーション論	鈴木高宏・大島まり 佐倉統 ・丹羽美之
2010	学際情報学概論	オムニバス
	総合分析情報学特論 XI	堀 里子
	ネットワーク経済論 (2010)	田中 秀幸
2011	学際情報学概論	オムニバス
	ネットワーク経済論 (2011)	田中 秀幸
	歴史情報論	本郷 和人
2012	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス
2013	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス
2014	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス
2015	学際情報学概論 I	オムニバス
	学際情報学概論 II	オムニバス

## 2.4 学際情報学府への進学

2000 年度に設立されて以来、2003 年度まで、学際情報学府は毎年、修士課程約 50 人、博士課程約 20 人の大学院生を受け入れてきた。2004 年度の社会情報研究所との合併により、それまで人文社会系研究科社会情報学専門分野の定員であった修士課程 14 人、博士課程 7 人が統合され、2006 年度からは総合分析情報学コース、2008 年度からはアジア情報社会コースが新設されたため定員はさらに拡大し、現在では修士課程定員が 100 人、博士課程定員が 44 人となっている（巻末資料参照）。

その結果、学際情報学府に在籍する大学院生数は、2000年度の修士52人（修士）から、2015年度が380人（修士200人、博士180人）へと、15年で7倍以上に増加した。これは学際情報学府の教育研究が順調に発展してきていることを意味するが、他方で、サポートスタッフの不足、教員と事務員の業務負担増加といった問題点も生じている。大学院生数は、教育学研究科や薬学系研究科などとはほぼ同じ規模となっていることを考えると、サポートスタッフの増加は急務である。

また、学際情報学府の大学院生の構成についてみると、(1) 東京大学以外の他大学出身者の割合が高い、(2) 実践的キャリアを持つ人々や第一線で活動している社会人の割合が高い、(3) 外国人学生の割合が相対的に高い、(4) 入学者の男女比も、全体の約40%程度が女性とほぼ均衡がとれている、といった特徴がみられる。これらの特徴は、本学府が学生の構成という面からみても、東京大学の中ではユニークな大学院組織であることを示している。

本学府への志願者についてみると、社会情報研究所との合併後の2006年度以降では、2006年度入学試験が志願者225人（受け入れ予定人員90人、2.5倍）、07年度が148人（同90人、1.64倍）、08年度が230人（同105人、2.19倍）、09年度が238人（同105人、2.27倍）、10年度が259人（入学定員100人、2.59倍）、11年度が264人（同100人、2.64倍）、12年度が255人（同100人、2.55倍）、13年度が246人（同100人、2.46倍）、14年度が257人（同100人、2.56倍）、15年度が203人（同100人、2.03倍）となっている。この十年で志願者は増えたものの、12年度をピークにこの3年ほど、志願者は微減傾向にある。

## 2.5 修士論文及び博士論文の執筆

学際情報学府の修了者数は、修士修了者では、2001年度が38人だったのが、40人（02年度）、51人（03年度）、57人（04年度）、62人（05年度）、59人（06年度）、61人（07年度）、71人（08年度）、82人（09年度）と徐々に増え、10年度以降も84人、83人（11年度）、87人（12年度）、82人（13年度）、85人（14年度）、78人（15年度）の修士修了者を輩出している。

また、博士課程の修了者については、最初の入学者が博士3年に達する2004年度に初めて4人の博士号取得者を輩出することになった。05年度は1名だったが、06年度は7人、07年度は3人（他に論文博士1人）、08年度は13人（他に論文博士1人）、09年度は8人、10年度は3人、11年度は11人、12年は12人、13年は14人、14年度は15人、15年度は11人の博士号取得者がおり、学府は合計で100名強に博士学位を授与してきたことになる。

学際情報学府の学生に対しては、修士課程に入学した段階から、入学ガイダンスでのインストラクション、修士2年生の先輩たちによる研究構想発表会への参加、主指導・副指導教員体制、修士課程研究計画書の提出、基礎演習および研究法授業の履修、研究構想発表会・修士論文中間発表会での発表というように、修士論文完成に至るまで継続的なサポートを受けることができる体制を用意している。また、博士課程進学後も、博士課程研究計画書や博士課程コロキウムの毎年の実施、主指導・副指導による指導というように博士論文の執筆をサポートする体制を整えている。

このような体制のなかで、これまで多様な分野の専門的な修士論文、博士論文が書かれてきており、

その一例は、別表のリストに示されている。

(別表)

2015年度修士論文タイトル

児童相談所の現状と改善策についての考察－制度と人の観点から－
累積的文化進化のミクロ的基礎付け
低年齢化する「女のこ」の化粧－女性らしさの画一化
70年代の漫画マニア文化の形成と変遷－雑誌「COM」からコミックマーケットに至るまで－
日韓オンライン市民ジャーナリズムの比較研究から考察する新興ジャーナリズムの可能性－オーマイニュースとオーマイニュースジャパン、JanJanを中心に－
Social media as a destination image tool and its marketing strategies in inbound Japanese tourism (訪日観光におけるソーシャルメディアを活用したデスティネーション・イメージとマーケティング戦略)
レジリエントな地域コミュニティのための災害リスクガバナンス－ICTによる協働に着目して－
マーケティング・コミュニケーションにおけるパブリシティ効果の検証
認知・受容からみる災害情報のあり方－台風警報を中心として－
中国現代アートの発展過程分析－「制度」と「実践」の相互作用に着目して－
東日本大震災被災地における地域再生のコミュニケーション －石巻市大川地区3集落の合意形成プロセスからの考察－
世界に「染み込む」日本の映像コンテンツ－タイにおける受容の実態からの考察－
インターネット連動による視聴者参加型報道番組と娯楽化－NHK「NEWS WEB」の内容分析を中心に－
「ロードサイド」の都市社会学－戦後日本における郊外型小売企業の発達過程分析－
大学生における防犯意図、犯罪不安、犯罪情勢認知とメディア利用との関連について
「クチコミ」の概念史－「語の使用」に着目して－
<メディア・イベント>としての現代アイドル－AKB48グループにおける生誕祭・総選挙・卒業を事例にして
時間通貨とネットワーク贈与経済の可能性に関する研究
スマートヘルスケアコミュニティモデルの構築に関する研究－エイジング・イン・プレスと介護幸福度を中心に－
映像表現教育における「講評会」の研究～表現と受容の循環的活動の可能性～
大学生の正課外活動への取り組みとキャリアレジリエンスの関係についての研究
テレビ制作資料のアーカイブ化と制作者研究への活用～TBS演出家・プロデューサー大山勝美を事例に～
「感覚主義」と自己制御－C・S・パースの後期知覚論について－

SNS経済圏を活用した文化・芸術の流通プラットフォームの運用に関する研究－文化経済学的視点から－
高齢者に使いやすい券売機のデザインの提案－駅の空間設計を考慮して－
日中異文化における翻訳語の変容と受容－梁啓超『新民叢法』を例として
ダナ・ハラウェイの「宣言」における混淆概念の研究：「サイborg」と「伴侶種」
共働き正社員の協同連携型育児がリーダーシップ行動の変化に与える影響の考察
デジタルゲームの多角的展開におけるゲームとナラティブの二要素の研究
高校生の協調学習に対する認識と行動の関係
近代日本における書く道具のメディア論的変容
オンラインシューティングゲームにおける攻撃性と向社会性の研究
音大生の演奏表現の自覚性に及ぼす要因に関する実証的研究 －表現の自覚性教示と即興の教育的介入の効果に着目して－
免疫としての能楽－多田富雄の能楽論－
新規事業創出経験を通じた中堅管理職の学習プロセスに関する実証的研究
ボランティアの〈動機〉の論理文法－〈動機〉帰属実践をめぐる社会学的概念分析－
新たな冷戦？ポスト冷戦からアラブの春まで、デモクラシーに基づくアメリカの言説戦略
消費社会のミュージアムにおける”真正性”の変容－ファッション展の分析からみる商業性との関係
ふたつのおもちゃ：1960年代における玩具の贈与コミュニケーション
ひかりのパターンづくりを通じた変数学習導入ツールの開発
出生コホート研究における親から子への「告知」－インフォームド・アセントを手がかりに－
深層Q学習における長期的な戦略を必要とするタスクの性能向上に関する研究
漫画における文字領域の検出と認識
歩行追体験システムにおける身体運動提示に関する研究
タッチスクリーン上のなぞり動作における疑似触力覚提示の研究
リズムアクションゲームによるフロー体験に関する研究
階層構造を導入した深層学習とメタデータを用いた食事画像認識
Enhancing Web Accessibility for Low Vision Users Using Eye Tracking 弱視者のための視線計測を用いたウェブアクセシビリティの向上
顔部位の形状・位置変形を利用した他人顔変換手法の研究
自然なしぐさを利用した視覚拡張システム
一人称鑑賞体験動画の自動要約－自身での振り返りと他者との共有－
Additive Manufacturingを利用したスポーツ用義足の開発
移動物体の位置に応じた制御のための空間分割型可視光通信の研究 －群ロボットと装着型触覚ディスプレイ－
3次元データと複数全方位画像入力による車両型複合現実感システムの頑健な位置合わせ

複数の時間軸を持つ時系列データの三次元可視化
細胞コラーゲンゲルを素材とした立体造形に関する実践と考察
主成分分析に基づく未校正照度差ステレオ
視線による描画動作を用いた個人認証に関する研究
シニア人材のジョブマッチングのためのインタラクティブ検索インタフェース
大規模データ・高次元トピックに対応したトピックモデルの推定
GNSS技術を用いた三次元地図の高精度化に関する研究
A BIO-INSPIRED MULTIHOP ROUTING ALGORITHM FOR LOW POWER AND LOSSY NETWORKS 低消費電力で損失の多いネットワークのための生物由来のマルチホップルーティングアルゴリズム
特微量自動抽出による移動手段ならびに位置推定
公共オープンデータの発信手法の研究
T-Visor :A Real-time Hypervisor for Embedded Systems with Hardware Virtualization Support (T-Visor : ハードウェアによる仮想化支援機構を用いた組込みシステム向けリアルタイムハイパーバイザ)
Research of Low Energy Smart Trash Can ローエネルギースマートゴミ箱の研究
オンラインアルゴリズムを用いたマーケットメイキング手法の有効性
An SNS-Driven Method for Server Auto-Scaling SNSによるアクセス集中予測を利用したサーバの自動スケール制御手法
Research on Using Speech Recognition for Language Learning Support 音声認識を用いた言語学習サポートに関する研究
Appliance-Level Energy Consumption Estimation Technique Using Open API in Smart Buildings スマートビルでのOpen APIを用いるデバイスごとのエネルギー消費量推定手法
超低遅延を要件とするアプリケーションのためのモバイルエッジコンピューティング
SDNにおけるデータプレーン要素の拡張によるアプリケーション特化型QoS制御の提案
ユーザの観光動機を考慮した意外性のある観光地推薦システムの開発
対面販売における言語及び非言語情報を用いた顧客の選好推定
User Preference-Based Smart Environment Control System for Multi-Occupants ユーザー選好度による複数在室者向けの自動室内環境制御システム
Effects of Exposure to Globalization on Chinese Consumer Attitudes towards Japanese Products
The Cities of Screens: Emergence of New Screen Architecture and the Transformation of Cityscapes in Tokyo and Beijing
Participating in Ethnic Media: Taiwanese Community and Ethnic Media in Japan

## 2.6 学際情報学府からの就職・進学動向

修士課程修了者のうち、博士課程進学者は全修了者の30%程度である。また、修士課程を修了した者の約50%程度が就職している。一般に、理系では修士修了後に就職をする者が多く、文系では博士課程に進学する者が多いが、文理相互浸透の大学院組織である学際情報学府は、ちょうどその中間的な割合を示しているといえる。修士修了者の就職先は別表の通りであり（修士修了者の進路状況（別表）参照）、シンクタンク、マスコミ、情報通信およびコンピュータ関連企業、出版社など知識集約型の企業への就職が多数を占めているところが特徴的である。

## 2.7 教育部

情報学環教育部は、情報、メディア、コミュニケーションについて学びたい人々のために、2年間にわたって情報学の体系的な教育を行うユニークな教育組織である。講義は、各自が所属する学部や大学院の授業などと両立できるように、おおむね夕刻（14:50分以降）から夜間にかけて開講されている。学部、研究科という「タテ糸」で成り立つ東京大学のなかに、情報というキーワードをめぐる教育研究を「ヨコ糸」で縫い合わせてできた情報学環。教育部は、その情報学環という斬新な組織の特性を活かした、魅力的な教育研究活動の場となっている。

情報学環教育部では、毎年、前年度後期に入学試験をおこない、一学年約30名の教育部研究生を選抜している。大学2年生以上（4月以降大学2年生になる見込みの人を含む。ただし、大学院に在学している人は含まない）であれば、東京大学の学生であるなしにかかわらず、社会人も含めて受験をすることができる。

情報学環教育部の歴史は古く、その起源は、1929年（昭和4年）の文学部新聞研究室にまでさかのぼる。小さな組織だった新聞研究室は、戦後まもない1949年（昭和24年）に、文系の学際的研究組織である新聞研究所へと発展した。新聞研究所は、その名のとおり、新聞をはじめとするマスメディアが巻き起こす社会情報現象やコミュニケーション変容を体系的に研究することを目的として設立されたが、同時に、マスメディアで働く記者などの実務家を育成することも目的としていた。

1992年（平成4年）、新聞研究所は社会情報研究所として改組され、マスメディアに限定しない、情報に関わるあらゆる社会現象の研究を総合的に進めていくことになった。2004年（平成16年）には、大学院情報学環と合併し、今日まで情報学の伝統を脈々と引き継ぎながら、文理融合の最先端の研究を推進し、また教育活動にも力を注いでいる。

参考として平成27年度開講科目を以下に示す。

（夏学期）

	4限 14:50~16:20	5限 16:40~18:10	6限 18:30~20:00
月			
火	特別演習 III（教育部概論） 上條俊介准教授 他		情報技術論講義 II （ICT サービスデザイン論） 新井田統講師、小林亜令講師

水	メディア・ジャーナリズム論 文献購読Ⅳ (科学をめぐる概念分析) 北田暁大教授		情報社会論講義Ⅰ (デジタルメディアと教育の 未来像) 箕輪貴講師
木		情報社会論研究指導Ⅳ (マスメディアと政治) 前田幸男准教授	情報産業論講義Ⅳ (広告コミュニケーションビ ジネス論) 勝野正博 講師、中杉啓秋 講師
金		メディア・ジャーナリズム論実験実習Ⅳ (社会をみつめるドキュメンタリーを制作する) 水島宏明講師	

(冬学期)

	4限 14:50~16:20	5限 16:40~18:10	6限 18:30~20:00
月	情報社会論実験実習Ⅲ (東京メディア・ビオトープ) 水越伸教授		メディア・ジャーナリズム論講 義Ⅶ (「共感のジャーナリズム・2」 (人を動かす発信の可能性を 探る)) 高橋美佐子講師
火		情報産業論文献講読Ⅲ (情報社会と法) 酒井麻千子助教	メディア・ジャーナリズム論講 義Ⅵ (テレビ・ドキュメンタリーの 現場から) 原一郎講師
水			情報産業論実験実習Ⅱ (言葉ベースの「伝える」仕事、 その原理と実際と応用) 石島裕之講師
木		情報技術論 研究指導Ⅱ (情報と交通 (演習)) 中野公彦 准教授	
金			メディア・ジャーナリズム論講義Ⅷ (体験的ジャーナリズム論) 水谷典雄 講師 他

なお、2009年から2015年までの教育部志願者数、受験者数、合格者数についてはⅡ. 資料を参照していただきたい。

## 2.8 学際情報学府以外の教育活動

研究組織である大学院情報学環では、教育組織である大学院学際情報学府と密接に連携しながら、教育部、学部横断型教育プログラム「メディア・コンテンツ」、大学院横断型教育プログラム「デジタル・

ヒューマニティーズ」、角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座、「総合癌研究国際戦略推進」寄付講座、「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座、反転学習社会連携講座などにおいても教育活動を行っている。

### 2.8.1 学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」

学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学学部横断型教育プログラムは、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく刺激を与え、柔軟な思考力を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。現在開講されている横断型教育プログラムのなかでも、本教育プログラム「メディアコンテンツ」は、メディア上に流通するコンテンツの創造に関わる基礎教育と人材養成を目的として、最新のインターネットビジネスの動向などを踏まえた教育を行っている。「技術・創造」「文化・社会」「人間・心理」「総合」の分野からメディアコンテンツに関連する科目を開講している。本教育プログラムは、東京大学の学部後期課程（3～4年生）を履修対象としているが、大学院生の履修も可能で必修科目や選択科目の区別はなく、各自の目的にあわせて履修できる。開講されている科目の中から、合計12単位以上を修得した学生に「プログラム修了証」が交付されてきた。

### 2.8.2 大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」

大学院横断型教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、東京大学横断型教育プログラムのひとつである。東京大学横断型教育プログラムは、狭い専門知識だけでなく、新たな学問的課題に果敢に挑戦し、幅広い分野を横断していく柔軟な思考力を備えた「知的にタフな東大生」を育成するために開設された学際的・分野融合的な教育プログラムである。学部や大学院の枠組みを超えて実施されている。デジタル技術とウェブシステムの革新は、人類の知的資源の保存、研究、発信の方法を大きく変革し、現代社会の新たな知識基盤を形成しつつある。近年、世界ではこの変化に対応し、デジタル媒体による資料アーカイブの構築・分析・公開の方法をめぐって、文理の壁を超えて研究方法を模索する「デジタル・ヒューマニティーズ」の確立が重要な課題となり始めた。

本教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」は、1) デジタル・テクノロジーを用いた人文学資料のアーカイブ構築、2) デジタル・コンテンツ資源と結びついた映像分析やテキスト分析、3) 研究成果のプレゼンテーションやエキシビションを有機的に循環させて、人文学および情報学の各領域の学際的な体系化を目指した科目を開講している。多面的な観点から学術研究を深化させ、人文学の新たな方法論を実践的に学んでいく教育プログラムである。デジタル・テクノロジーを批判的に使いこなす学際的な人文学者、デジタル・コンテンツの知識基盤を創造的に構築する情報学者をはじめ、アーキビストやキュレーター、ライブラリアンといった知識や文化の担い手、さらには多様化する情報社会の諸領域を横断して活躍の場を見出そうとする批判力をそなえた人材の育成を目的としている。

本教育プログラムは、東京大学の大学院生を履修対象としている。人文系のみならず、人文学とのコラボレーションに興味のある理工系の大学院生の受講も歓迎している。プログラムは、〈コア科目〉、〈基

礎科目)、〈関連科目〉によって構成されている。コア科目内の必修科目を修得し、合計 12 単位以上(うち必修科目 4 単位)を修得した学生に「プログラム修了証」を交付している(修了を目的とせず、個別の科目のみを履修することも可能である)。

### 2.8.3 大学院共通授業科目「エグゼクティブ・プログラム」

エグゼクティブ・プログラムは、社会人向けの東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム(EMP)と同様な趣旨の学生向けの教育プログラムとして 2009 年度より大学院共通授業科目として開講された。2009 年度から 2011 年度までは理学系研究科、2012 年度から 2013 年度は農学生命科学研究科において開講された。2014 年度は休講としたが、2015 年 12 月より学際情報学府を開設研究科として授業を開講している。

エグゼクティブ・プログラムは、文系理系を問わず、学内外の多様な専門を背景とした講師と大学院学生が自らの専門を越え、幅広い視野を培い、専門の違う仲間と交流しつつ学ぶことにより、課題設定能力や課題解決能力、さらには、未来の社会を担うための知的基盤を身につけるようプログラムを設定している。また、本講義は、大学院共通授業科目ではあるが、学部学生の聴講(単位取得は不可)も可能としている。

通常の年度は、学内外から著名な講師を招聘して、S セメスターと A セメスターにそれぞれ 1 科目 2 単位の独立した大学院共通授業科目として開講するが、2015 年度は 1 単位の集中講義として 2016 年 2 月 8 日、9 日に開講した。集中講義「エグゼクティブ・プログラム 11 (新たな価値創造と社会的貢献)」はテーマを「科学を科学する、研究を研究する～知とは何かを改めて考える～」とし、ダイワユビキタス学術研究館 3 階・石橋信夫記念ホールにて、各日 3 時限から 6 時限まで開講した。履修者は 22 名、学部学生などの聴講生も含め約 60 名の学生の参加があった。

2016 年度からは S1+S2 セメスター及び A1+A2 セメスターで、木曜日の 6 時限目に 2 単位の講義として開講予定である。

### 2.8.4 角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座

角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座は、国際的見地から、アミューズメント・メディアを学問的に研究することを目的とし、一般財団法人角川文化振興財団からの寄付により、2013 年 11 月、情報学環に開設された。

現在、マンガ、アニメ、ゲームをはじめとする日本の文化的コンテンツは、世界で大きな注目を浴びている。一方でこれらの分野について、大学ではかならずしも学問的に深い研究が十分になされてきたとは言えない。本寄付講座は、東京大学がこれまでに蓄積してきた文化研究の方法を学際的に組み合わせ、第一線のクリエイターやコンテンツ産業の現場の担い手とコラボレーションし、アミューズメント・メディアを学問的に研究するための、新しい学術領域の開拓をめざしてきた。

アジアや欧米で国際的に活躍する研究者・表現者のネットワークを構築し、日本のアミューズメント・メディア研究の基礎となる知のプラットフォームを立ち上げようとした。そして、その研究成果を、産業の現場や文化政策にフィードバックするとともに、学術シンポジウムの開催等を通じてひろく国際

社会に発信し、世界規模での日本およびアジアのポピュラー文化の発展に寄与することを目指した。また、海外の優秀な大学生・大学院生を広く受け入れるサマープログラムを実施し、東京大学の学生とともに、日本のアミューズメント・メディアをめぐる最前線の知を学ぶ機会を提供した。

### 2.8.5 「総合癌研究国際戦略推進」寄付講座

「総合がん研究国際戦略推進」寄付講座は、アジアの癌医療の向上に資する情報基盤形成に資することを目的に、武田薬品工業株式会社、日本化薬株式会社、株式会社ヤクルト、小野薬品工業株式会社、日本ビーシー製造株式会社からの寄付を受け、2015年4月、情報学環に開設された。

本講座においては、アジア各国の研究機関と連携して癌情報を収集し、データ解析を行う研究実施体制を構築している。これは、アジアと欧米の差を生かした泌尿器がん（前立腺癌・腎細胞癌／膀胱癌）予防介入試験の企画立案、前立腺癌の内分泌療法再燃癌に対する治療の在り方への提言などの薬剤開発を含めた、今後のアジアの癌治療指針の策定に資するための研究である。

こうした実践的な癌情報の収集と利活用を目指す情報学的研究基盤強化のためには、医療データのみならず、ダイナミックに激動するアジア社会が抱える諸課題を学際的な観点から掘り下げていく知が必要となる。そこで、本講座では、従来の学際情報学府が作り上げてきた教育をベースに、癌を学際的に捉える教育プログラム **Cross-boundary Cancer Studies** の開発と実践を行い、文理融合的な知を目指している。また、企業や国際機関のインターンシップなどと連携して、アジアの地域特性への理解をもちながら、世界的な視野でアジアの癌を巡る課題を学際的に考えることのできるグローバルリーダーの育成に寄与することも目指している。

主な研究内容は、以下の通り。

アジアにおける癌研究情報基盤形成

Universal Health Coverage (UHC) の日本とアジアのモデルケースの国際発信

薬剤開発のためのアジア研究ネットワークの構築と、製薬開発への提言

アジア域内大学連携による文理融合型の学際的な研究基盤を創設

国際機関や企業とのインターンシップと連携したグローバル人材育成

アジア開発課題としての癌対策の知見のアーカイブ化

### 2.8.6 「セキュア情報化社会研究」寄付講座

本講座は、セキュリティをはじめとするサイバー空間に関する課題について巨視的長期的視座から学際的研究・人材育成・政策提言を推進するものである。特に産官学の協力の下に広く人材を糾合し、実際に生じている社会的かつ国際的な課題に対し、工学的なアプローチのみならず社会科学的なアプローチも取り入れて調査研究を行い、その研究成果を踏まえながら高度情報セキュリティ人材を育成することを主眼としている。当該分野における学際的研究部門としては日本初の試みである。

期待する成果としては、工学的見地からは、ID 管理・本人認証技術などのサイバーセキュリティ分野における技術的研究成果。社会科学的見地からは、セキュリティ技術と現代社会の関係の多面的検討

による、真に公共的な視野の獲得。教育的見地からは、官民間問わず情報分野でのセキュリティ確保と危機管理に即応できる高度専門の人材の養成。以上3点に集約することができる。

これら具体的な研究・教育の結実によって、公正・公平かつセキュアな情報化社会の構築に貢献する事が、本寄附研究部門の成果として期待しているものである。

- ・設置期間：平成27年4月1日～平成32年3月31日（5年間）
- ・設置場所：東京大学大学院情報学環
- ・研究寄附講座の名称：セキュア情報化社会研究グループ
- ・寄附者：三吉野 健滋
- ・代表教員：須藤 修(東京大学大学院教授)
- ・連携組織：東京電機大学、名古屋工業大学、慶応大学、オランダ大使館
- ・website：<http://sisoc-tokyo.iii.u-tokyo.ac.jp/>

### 2.8.7 「DNP 学術電子コンテンツ研究」寄附講座

「DNP 学術電子コンテンツ研究」寄附講座は、これまで情報学環で進められてきたデジタル・アーカイブやe-learningに関する諸々の知見を踏まえ、学術的な電子コンテンツの教育活用についての実践的な研究を進めるものである。特に、大学における授業・学習教材のデジタル化とその基盤整備、一連の権利処理システムに関する技術、法、経営、教育をつなぐ実践的モデルを構築しようとしている。

本事業では、東京大学が所蔵する学術資料を電子化し、広く教育活用していく際の障害となっている諸課題、すなわち、①資料のデジタル化とメタデータ付与による構造化、②複数の機関でデジタル化されたコンテンツを教育利用していく権利処理システムの構築、③著作権者不明のオーファン著作物に関する処理手続き、④電子コンテンツの有効な利用実績の積み重ね、⑤新刊・既刊本、新聞資料等を含めたデジタル化された知的資源の教育利用に関するビジネスモデルの構築に関連諸機関と連携しつつ実践的に取り組む。

実際、情報学環では、デジタル・アーカイブ、e-learning、Digital Humanities等に関し多くの蓄積がなされてきた。また、社会情報研究資料センターは、世界的に見て貴重な地方紙や海外紙を収蔵し、学内図書館とも連携関係を有してきた。本事業を通じ、こうしたソフト、資料両面の蓄積を生かし、未来の大学を担う高度な学習環境の整備に発展させるモデルを構築することで、今後、大学の自律性を保ちながら産業界とも連携し、持続的に大学が保有する知的資源を広く学部・大学院の教育に役立てていく仕組みを形成する。

### 2.8.8 「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座は2009年4月1日に開設され、現在、首都高速道路株式会社、東京地下鉄株式会社、東日本旅客鉄道株式会社、株式会社日立製作所と東京大学大学院 学際情報学府総合分析情報学コースを中核として運営されている。また、日本電信電話株式会社、アビームコンサルティング株式会社及びユビキタス情報社会基盤研究センターも協力している。本講座は、情

報技術を活用した施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、新たな情報基盤を活用した新たなビジネスを創出し、インフライノベーションの実現を目指す。また、こうした目的を達成するため、シーズとニーズ、技術と運用、理論と実践といった様々な知識や経験を結合し、新しい価値を産み出す実践的な研究プラットフォームの確立を目指す。設立された 2009 年度より、毎年 4 月に研究成果を発表するシンポジウムの開催及び、定例的なインフライノベーション研究会を開催している。2013 年度に第一期が終了し 2014 年度より 5 年間の第二期の活動を開始した。

## 2.8.9 反転学習社会連携講座

FLIT（反転学習社会連携講座）は、東京大学と NTT ドコモが 2013 年 10 月に設置した社会連携講座である。対面授業とオンラインの動画授業を組み合わせ、授業と自宅学習の連続化による学習時間の確保と学習目標に合わせた時間の再配置を可能にする、ブレンド型学習環境の研究と実践を推進することを目的とし、2015 年度は主に以下の活動を行った。

### 1) gacco「日本中世の自由と平等」（再開講）と実施

MOOC プラットフォームである gacco 向けに、本学史料編纂所の本郷和人教授らと共同開発したオンライン講座「日本中世の自由と平等」の講座を 2015 年 9 月 8 日～11 月 17 日の期間で再開講し、4736 名の受講者の下、運営を行った。また、オンライン講座に対面授業を追加した「反転学習コース」も新しく開発し、約 30 名の受講者が福武ホールで対面授業（2 回）に参加、オンラインで学習した知識を活用してより応用的な学習活動に取り組んだ。また、対面学習のデータを取得し、学習効果についても分析を行った。

### 2) 多層型オンラインワークショップ「gaccatz」の開発と実施

多層型オンラインワークショップを実現する世界初のプラットフォーム「gaccatz」を開発した。また、東京大学・史料編纂所の杉山巖氏（学術支援専門職員）と「古文書を読み解く」という講座を共同開発し、2015 年 10 月 24 日に約 130 名の受講者の下、gaccatz を用いた実践の運営を行った。

### 3) 動物園と自宅で動物の生態について学べるモバイル教材の開発

独立行政法人国立青少年教育振興機構 子どもゆめ基金の助成を受け、動物園に来園した小学生と保護者を対象にスマートフォンから動物を観察しながら動物の生態について学べるモバイル教材「動物と自然とわたしをつなぐ どうぶつ大冒険」（[www.d-bouken.jp](http://www.d-bouken.jp)）を開発した。また、旭川市旭山動物園、よこはま動物園ズーラシア、千葉市動物公園からの協力を得て、それぞれの動物園に特化したシナリオも作成し、2016 年 3 月 18 日から運用を開始した。

### 4) 公開セミナーの開催

社会連携活動として、2015 年 7 月 25 日にスタンフォード大学のダニエル・シュワルツ教授と国立教育政策研究所の白水始氏を迎え、「学習テクノロジーの未来」というタイトルで福武ホールにて公開セミナーを開催した。

## 2.9 博士課程教育リーディングプログラム

大学院情報学環は、2011年に始まる「博士課程教育リーディングプログラム」事業に積極的に取り組んできた。同プログラムは、「優秀な学生を俯瞰力と独創力を備え広く産学官にわたりグローバルに活躍するリーダーへと導くため、国内外の第一級の教員・学生を結集し、産・学・官の参画を得つつ、専門分野の枠を超えて博士課程前期・後期一貫した世界に通用する質の保証された学位プログラムを構築・展開する大学院教育の抜本的改革を支援し、最高学府に相応しい大学院の形成を推進する」（日本学術振興会 HP）事業とされている。

情報学環が共同運営しているプログラムは、2012年採択の「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）」（責任部局：情報理工学系研究科）、及び2013年採択の「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム（GSDM）」（責任部局：公共政策学連携研究部・教育部）、「多文化共生・統合人間学プログラム（IHS）」（責任部局：総合文化研究科）の3つである。

### 2.9.1 ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）

ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）は、博士課程教育リーディングプログラムの1つとして2012年度複合領域型（情報）に採択。学際情報学専攻を含め、学内で17の専攻等が参加。

ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム（GCL）が考えるリーダーは、情報および制度・経済の横串とグローバルな視点で現代の社会・経済システムの動態を理解し、本質的な問題や可能性を発見する能力と技術を有する人材。

次のすべての能力を有する人材、イノベーション力を有する学生を育成するのが、GCLの目標。

- 先端科学技術のポテンシャルと人々にとっての価値・意味の両方を深く理解し、高い理想と倫理のもとに、新たな社会のビジョンと価値創造のシナリオを描く能力
- ビッグデータ、複雑システム、ヒューマンシステムの先端 ICT と工学、農学、医学、社会科学の高度専門力を基盤とし、新たな知識社会経済システムを創造的かつ具体的にデザインする能力
- 新しいデザインを具現化するプロジェクトを立案し、ステークホルダーのコンセンサスを得て、世界トップレベルの専門家集団を率い、戦略的プロジェクトマネジメントのもとに、オープンパイラル型の実践方法論で強靱に推進・達成する能力。また、その方法論自体を創造する能力

プログラムを修了すると、自専攻の博士号に「ソーシャル ICT グローバル・クリエイティブリーダー育成プログラム修了」を附記した学位記が授与。別途コース修了証も交付。

詳しくは、GCLのウェブサイト（<http://www.gcl.i.u-tokyo.ac.jp>）を参照。

## 2.9.2 社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム (GSDM)

「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム (GSDM)」は、グローバル社会を牽引するトップリーダーを養成する文理統合型の学位プログラムである。東京大学の9研究科・21専攻が参加し、オールラウンド型の人材育成を目指している。本プログラムでは、東京大学の行動シナリオ及び行動ビジョンに基づき、大学院教育改革の突破口となるべく充実した陣容およびプログラムを用意している。東京大学ではGSDMを含めて9つの博士課程教育リーディングプログラムが運営されており、GSDMはその中でも「オールラウンド型」として全学体制で臨む最重要プログラムと位置づけられている。

現在、社会課題解決に向けた新しい人材ニーズへの対応が求められている。

- 政策官庁：課題の複雑化、交渉相手となる海外官僚の高学歴化から、中枢を担う公務員には博士レベルの能力が必要
- 国際機関：国際機関の人事は、競争の激化と高学歴化が進んでおり、博士号の保有者でないと候補となることも困難
- 産業界：イノベーションを担うには、アジェンダセッティング能力、コンセプト構想能力、オープンイノベーションに対応できるリーダーシップ、課題解決実行をマネジメントできるPMO(Project Management Office)的能力、国際舞台で活躍できるグローバル性、訓練されたコミュニケーション能力が必要
- 医療健康課題等：国内的、技術的性格が強かった分野も、国際的貿易交渉の最前線となっており、文理横断的なトレーニングが必要

このように、現代社会においては、技術だけでも、政策や制度だけでも課題解決は困難である。従って、技術そして政策・制度とバランスの取れたグローバルな視野を持ち、専門的・俯瞰的な知識社会構想マネジメント人材の養成が必要である。グローバルな視野で専門的・俯瞰的な知識を用いて課題を発見し、革新的科学技術と公共政策の統合的解決策を提示（デザイン）し、多様な関係者と連携して実行する。

## 2.9.3 多文化共生・統合人間学プログラム (IHS)

IHSは、グローバル化した現代世界を理解し、地球市民として多文化共生社会実現のための豊かな専門性とグローバルな教養を身に着け、社会との連携を通して創造的・具体的に実践する次世代トップリーダーの養成を目的としたプログラムである。

同プログラムには5つの教育プロジェクトがあり、情報学環は、そのうち、本郷をベースにした社会科学系の教育プロジェクト4”Producing Multicultural Communities: Methods, Designs, and Praxes”を主宰し、本郷キャンパスの取りまとめをしている。本郷オフィスは東洋文化研究所に置かれ、学生の便宜に供している。

プログラムコーディネーターは、内野儀教授(総合文化研究科)。情報学環からは吉見俊哉、Jason Karlin、林香里、園田茂人、丹羽美之の5名がプログラム担当教員として関与している。またプログラムに参加

している学府学生の数は、2015年時点で11名。うち8名をアジア情報社会コースの学生が占めている。

2015年度のプロジェクト4による具体的な活動は、以下の通り。

### (1) 授業

多文化共生・統合人間学講義Ⅰ 「多文化共生・統合人間学概論」(オムニバス形式、担当教員：林香里・園田茂人) / S1S2 (日本語)、A1A2 (英語)

多文化共生・統合人間学演習Ⅲ 「北京大学との合同サマープログラム」(担当教員：園田茂人) / 集中

多文化共生・統合人間学演習Ⅳ 「Duisburg-Essen 大学との合同サマープログラム」(担当教員：林香里) / 集中

多文化共生・統合人間学演習Ⅳ 「メディアテキスト分析の方法論」(担当教員：林香里・石田英敬・丹羽美之) / A1A2

多文化共生・統合人間学実験実習Ⅳ 「アカデミック・マネジメント (Academic Management)」(担当教員：園田茂人) / 集中

### (2) 課外活動

Graduate Student Conference “Media Histories, Industries and Identities in East-Asia: Negotiating Local, Regional, Transnational” (2015年5月29日、於東洋文化研究所)

講演会：越境する情報とメディアー『T.K 生』の時代と『今』を語る (2015年7月10日、於東洋文化研究所)

Workshop for Methodology in Multicultural Settings: Interviews and Fieldwork (2015年7月28日、於情報学環本館)

講演会：Ethnic Diversity and Ethnic Movements in Taiwan: Profiles and Policy Impacts (2015年12月3日、於東洋文化研究所)

講演会：The News Gap: Media industry and democratic life in the 21st century (2016年1月21日～22日、於工学部2号館)

2<sup>nd</sup> East Asian Conference for Young Sociologists (2016年2月1日～2日、於東洋文化研究所)

Joint Seminar: The University of Tokyo - Freie Universität Berlin (2016年2月22日～3月1日於ベルリン自由大学)

## 3. 研究活動

### 3.1 概況

研究組織としての情報学環は、異領域の出会いの場である。それぞれの専門領域で活躍する教員たちが、学環で出会い、学生の教育や共同研究などを通じて交流し、知見と展望を広げていく。そのような学問的異種交配を促進するため、教育組織（学際情報学府）とは別個の、学内他部局からの流動教員制度を基盤とする研究組織として情報学環は成立している。一方で、情報学環の設立から15年が経過し、この間、情報技術そのものもその社会への浸透も大きな変化を遂げている。情報学環に必要とされる学際的研究のあり方もおのずから変化をしており、学術的にはより焦点をしばったものが、社会的にはより実装性に配慮したものが求められている。これらの学術的・社会的潮流への対応とともに、新しい学際的研究のあり方を、情報学環は模索し続けている。

#### 3.1.1 文理の相互作用と連携

情報学環の研究のキーワードは文理越境である。伝統的に日本の大学においては、学問研究は文系と理系に大きく分けられてきたが、情報学環が中心研究領域とする社会情報学と学際情報学では、情報技術と情報社会の両面についての知見が必要とされるため、その区分けを相互に越境し、交流していくことが求められている。情報学環はそのような文理連携の研究組織論に基づいて設立されており、しかも、その文理の比重が大きく偏ることなく、バランスを保っていることが大きな特色である。

現在、情報学環では文理連携型の大小さまざまな研究プロジェクトが実施されている。社会連携講座は「反転学習社会連携講座」（2013～2018年度）と「『情報技術によるインフラ高度化』社会連携講座」（2014～2019年度）、寄附講座は「角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄附講座」（2013～2017年度）、「総合癌研究国際戦略推進寄附講座」（2015～2020年度）、「セキュア情報化社会研究寄附講座」（2015～2020年度）、「DNP 学術電子コンテンツ研究寄附講座」（2015～2018年度）が、それぞれの領域についての活発な活動を展開している。

#### 3.1.2 流動教員制度

情報学環独特の仕組みとして、流動教員制度がある。これは設立当初、学内の情報関連教員を糾合し、ネットワーク組織型に新しい大学院を創設するため、学内関連部局の協力を得て作り出されたものである。これにより、情報学環に所属する教員には、基幹教員と流動教員の2種類が存在する。

基幹教員は、情報学環に固有のポストの中の基幹教員枠で採用されている教員である。その教員室のスペースも学環によって手当てされている。それに対して、流動教員は、流動元の部局から情報学環へ時限で振替られている流動教員枠及び情報学環に固有の流動教員枠を使って、流動元の部局より時限で配置換えになって情報学環に所属している教員である。情報学環は、その教員スペースを現状では手当てできず、流動元部局のスペースを使用している場合が多い。

この流動教員制度により、情報学環の研究組織は研究者の循環と入れ替わりの仕組みを内蔵しており、もって研究活動に常にイノベーションの条件を保障しようとしているのである。流動教員の立場からすれば、情報学環に流動教員として参加することによって、元部局とは異なった学際的な教育研究環境に

入ることが可能であり、また研究所が元部局の教員にとっては大学院教育に通常の義務と権利で加わる機会が得られることとなる。こうした条件が研究者同士に新たな刺激を生み出すとともに、従来の枠を脱する糧となると見込まれている。こうした組織論による利得は、現在、大小さまざまな研究プロジェクトの活動に見て取ることができる。

## 3.2 大型研究プロジェクト（1,000万円以上規模）

各教員が研究代表者となつて行う研究プロジェクトでも、以下（事業規模1千万円以上）に示すとおり、大型研究プロジェクトを積極的に展開している。（すべての外部資金による研究の状況は、IV. 外部資金獲得状況を参照のこと）

### <科学研究費補助金>

基盤研究(A)「視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究」  
（研究代表者 池内 克史）

基盤研究(A)「リスク認知とソーシャルメディア情報拡散過程の進化論的解明：基礎研究から社会実装へ」（研究代表者 佐倉 統）

基盤研究(A)「翻訳知のアーカイブ化を利用した協調・学習促進型翻訳支援プラットフォームの構築」(研究代表者 影浦 峯)

基盤研究(A)「歴史写真に基づく1860～1930年代の日独関係史の再構築」(研究代表者 馬場 章)

基盤研究(A)「時系列データの蓄積から社会変動モデルの構築へ：中国第三次四都市調査の挑戦」(研究代表者 園田 茂人)

基盤研究(A)「矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る1950年代の学生運動と若者意識の分析」(研究代表者 吉見 俊哉)

基盤研究(A)「アプリケーション・デバイス特化型次世代MVNOの研究」(研究代表者 中尾 彰宏)

基盤研究(B)「『薬と健康食品』適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製」  
（研究代表者 堀 里子）

基盤研究(B)「人間拡張型テレプレゼンスシステムに関する研究」(研究代表者 暦本 純一)

基盤研究(B) 「ドライバの状態監視を行うハプティック・ステアリング・ガイダンス制御」(研究代表者 中野 公彦)

基盤研究(B) 「テレビアーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容」(研究代表者 丹羽 美之)

基盤研究(B) 「寄生蜂の学習行動によるスイッチング捕食理論の新展開：個体群動態と神経行動学の統合」(研究代表者 嶋田 正和)

基盤研究(B) 「西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析と評価・再現」(研究代表者 伊東 乾)

基盤研究(B) 「マメゾウムシ類の適応的多様化：種子毒耐性と乾燥種子利用によるジェネラリストの進化」(研究代表者 嶋田 正和)

基盤研究(B) 「障害者スポーツのための義肢装具のデザイン及び設計製作手法の研究」(研究代表者 山中 俊治)

基盤研究(B) 「動力学的震源を活用した地震ハザードの新展開」(研究代表者 三宅 弘恵)

若手研究(A) 「風評被害の低減・抑止策の検討—福島第一原子力発電所事故の社会経済的被害の量的検討」(研究代表者 関谷 直也)

若手研究(A) 「胃癌領域における個人データに基づいたメタアナリシス」(研究代表者 大庭 幸治)

#### <その他外部資金関係>

(独) 科学技術振興機構 戦略的創造研究推進事業「多人数調和型情報提示技術の構築と実践」(研究代表者 苗村 健)

総務省 戦略的情報通信研究開発推進事業「IMC(IoT・MEC・Cloud)連携による公共安全を飛躍的に向上するレジリエントシティの実現の研究開発」(研究代表者 中尾 彰宏)

総務省 戦略的情報通信研究開発推進事業「ソーシャル情報に基づく仮想ネットワーク制御方式の開発」(研究代表者 山本 周)

国土交通省 G空間社会実証プロジェクト事業「G空間を活用したインバウンド安心安全・情報観光サービスによる地方創生プロジェクト」(研究代表者 中尾 彰宏)

(公財) 東京都道路整備保全公社「都民参加型道路管理支援システムの研究」(研究代表者 坂村 健)

(株) NTT ドコモ「反転学習社会連携講座」(研究代表者 山内 祐平)

(株) NTT ドコモ「反転学習プラットフォームに関する研究」(研究代表者 山内 祐平)

首都高速道路(株)、東京地下鉄(株)、東日本高速道路(株)、東京電力(株)、東日本旅客鉄道(株)、  
(株) 日立製作所、日本電信電話(株)「情報技術によるインフラ高度化」(研究代表者 坂村 健)

東日本高速道路(株)「高速道路のスマートメンテナンス」(研究代表者 坂村 健)

東日本高速道路(株)「行動観察手法を用いた維持管理業務におけるマネジメントスキルの検討」(研究代表者 坂村 健)

(株) 電通国際サービスオープンイノベーション研究所「未来の都市環境とスポーツの拡張に関する研究」(研究代表者 暦本 純一)

(株) パスコ「道路台帳整備事業をモデルとした品質向上、生産性向上及び技術者人材育成に関する研究」(研究代表者 石川 雄章)

(株) ドワンゴ「先端的表現技術とコンテンツ産業とを繋ぐプラットフォームの研究」(研究代表者 河口 洋一郎)

### 3.3 付属センターの役割

#### 3.3.1 社会情報研究資料センター

大学院情報学環附属社会情報研究資料センターは、1964年1月、当時の新聞研究所内に開室された「プレスセンター」が1967年6月、新聞研究所附属施設「新聞資料センター」として正式に発足し、1992年4月に新聞研究所が社会情報研究所に改組されるにあたって「情報メディア研究資料センター」と改称されたものである。2004年4月、大学院情報学環・学際情報学府と社会情報研究所の統合に伴い、「社会情報研究資料センター」と改称し、今日に至っている。

本センターは、新聞資料を中心とした各種メディア情報資料を収集・整理し、学内外の研究者の利用に供することで、社会情報学に関する研究の発展に寄与している。現在、本センターの収蔵資料は製本済原紙約6,000冊、縮刷版約8,000冊、マイクロフィルム約45,000リールに達している。

センターの閲覧室には、利用者のために各種データベース閲覧用PCとマイクロフィルムのデジタルデータ変換機能をもつマイクロリーダーを設置して利用者の便宜を図ると共に、従来のマイクロリーダ

ーも継続利用して需要に応じている。また、本センターの定期刊行物として「社会情報研究資料センターニュース」を刊行している。

また、2007年度から2011年度まで東京大学新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化計画」として、(1) 整理保存機能の高度化、(2) 利活用機能の高度化、(3) 教育研究機能の高度化、(4) 情報化アーカイブ機能全般の高度化に重点を置き、事業に着手した。その結果、デジタル化スタジオの整備、収蔵庫の整備、展示室を改築し閲覧室としての公開、『坪井家関連資料目録』・『小野秀雄関係資料目録』の2冊の目録発行、『文化資源のデジタル化に関するハンドブック』および『新規教育研究事業「社会情報研究資料センターの高度アーカイブ化事業」事業報告書』の発行を行った。

2015年度は耐震改修工事に伴って、2015年4月から6月までの2か月間閉室した。

### 3.3.1.1 情報学環メディア・コンテンツ研究機構

情報学環メディア・コンテンツ研究機構は、2009年9月の設置以来、メディア・コンテンツ分野の研究開発や教育推進、産・官・学の連携の発展、国際的な人材養成の展開のための活動を行ってきた。2011年度からは、特別経費「国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実」(2011年度～2015年度)の概算要求が認められ、「知識コンテンツ基盤拡充に向けた横断型教育モデルの国際展開」プログラムが開始された。これにもとづいて、2012年度からは、従来の学部横断型教育プログラム「メディアコンテンツ」に続いて、二つ目の部局横断型教育プログラムとして、大学院横断教育プログラム「デジタル・ヒューマニティーズ」を立ち上げた。

2013年11月には、高麗大学校応用文化科学センターとの共催で、ソウル市内高麗大学校安岩キャンパスにて、「第一回学生発表ワークショップ」を開催した。同ワークショップでは、「身体、イメージ、メディア」をテーマとし、東京大学および高麗大学校の教員・大学院生が集まり、基調講演に加えて、各大学の教員・大学院生による10の研究発表が行われた。続いて2014年1月にも、東京大学本郷キャンパスに場所を移し、高麗大学校応用文化科学センターとの共催で「第二回学生発表ワークショップ」を催し、両校の教員・大学院生の出席のもと、基調講演、アーティストを招いての「メディア・アート」をめぐる共同討議、9つの研究発表が行われ、デジタル技術がメディア環境および文化に与えた影響に関して活発な議論が行われた。加えて、2013年7月には仏国より研究者を招聘し、東京大学本郷キャンパスにて、「第一回コレージュ・ド・フランス講義」を開催し、二回にわたる連続講義を行った、

また、2013年7月には一般社団法人放送人の会との共催で、シンポジウム「未来へのアーカイブー原発事故・放射能汚染の過去/未来」を東京大学駒場キャンパスにて開催、2014年2月には同じく、一般社団法人放送人の会との共催で、研究会「テレビが社会を描き出そうとしていた時代」を東京大学本郷キャンパスにて開催した。その他、立命館大学衣笠・朱雀キャンパスで行われた日本デジタル・ヒューマニティーズ学会の年次大会への参加などを通じて、デジタル・ヒューマニティーズやメディア・コンテンツに関する共同研究の推進を果たした。

さらには、東京国立近代博物館フィルムセンターおよび東京藝術大学大学院映像研究科とのコラボレーションによる「記録映画アーカイブ・プロジェクト」の推進、東京大学附属図書館「新図書館計画」と連動した「ハイブリッド図書館研究プロジェクト」など、メディア・コンテンツを批判的に分析し研

究するための様々なプロジェクトを展開した。

### 3.3.2 総合防災情報研究センター

総合防災情報研究センターは、2008年4月1日に、東京大学の大学院情報学環、地震研究所、生産技術研究所の連携により、情報の概念を核とした文理融合型の総合的な防災研究機関として設立された。8年目を迎えた2015年には、研究面では、東日本大震災に関する継続的研究とともに、口永良部島・新岳噴火災害および関東・東北豪雨の実態調査を行った。ミッションのひとつである「首都直下地震災害の全体像の把握」を推進するため災害情報研究会やフォーラムを開催し、さらに南海トラフ沿岸地域と日本海沿岸地域とを対象にしたプロジェクトに参画した。教育面では、情報学府コース横断型科目である災害情報論を継続して開講した。

以下、平成27年度の主な活動をミッション毎に示す。

#### 3.3.2.1 災害情報の生産－伝達－受容過程の解明

第7回CIDIR定期調査を実施するとともに、南海トラフ沿岸住民調査や日本海沿岸住民の津波防災知識と避難について、聞き取り調査を行った。また、科学研究費補助金の助成を受け、口永良部島・新岳噴火災害および関東・東北豪雨に関して、情報収集と処理の実態について調査を行った。

#### 3.3.2.2 首都直下地震災害の全体像の把握

災害時における首都圏固有の課題を抽出するため、不特定多数が利用する施設管理について4月に災害情報研究会を、6月に電通パブリックリレーションズと共催で「企業危機管理力調査フォーラム」を開催した。

#### 3.3.2.3 大学SCMモデルの開発

概算要求「災害緊急情報を活用した大学防災情報システムの開発」で実施してきた緊急地震速報等の学内利用を継続して推し進めるとともに、全学の防災対策の構築を大学本部と共同して進めた。

#### 3.3.2.4 災害情報教育の実施とプログラム開発

学環コース横断科目として「災害情報論Ⅰ」および「災害情報論Ⅱ」を実施した。また、社会との連携を図る上で、ライフライン・マスコミ連携講座を各月に開催した。さらに、平成29年度概算要求に向けて部局横断型教育プログラムの開設にむけた学内調整を開始した。

### 3.3.3 ユビキタス情報社会基盤研究センター

ユビキタス情報社会基盤研究センターは、21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」(2004～2008年度)の研究成果を引き継ぎ、現在以下の研究を実施している。

#### (1) ユビキタス情報基盤技術の研究

これまでのCOEプログラムで確立した、ユビキタスコンピューティング分野の基盤技術である、ユビキタスID技術やT-Engine/T-Kernel、eTRONを用いた、インターネットの次の新世代の情報イン

フラを確立する。

#### (2) ユビキタス情報社会研究

ユビキタス情報インフラの普及とともに、社会がどのように変化するかということを、実証的に研究し、かつそのために必要な新しい社会システムや制度、法律、ビジネスモデルを考案し、積極的に提案していく。

本センターにおける研究を推進することによって、情報科学、情報社会学等の、学術的な分野の成果を輩出することはもちろん、更にそれを社会基盤として実社会に普及させ、顕在化している様々な社会問題を解決することが期待される。

### 3.3.4 現代韓国研究センター

現代韓国研究センターは、東アジア地域の国際的協力と地域主義的連携を展望しつつ、日本と韓半島の相互協働とパートナーシップの多面的な展開の可能性を探求する必要性から、2010年度の研究テーマ「東アジア共同体と日韓パートナーシップ」と2011年度「現代韓国文化のアジア的還流と地域アイデンティティの可能性」、2012年度「日韓における民主主義の変容と世論をめぐって」に引き続き、2013年度の研究テーマを「東アジア学術共同体の模索」と設定し、東京大学内の現代韓半島研究に携わる諸組織・機関をネットワーク化するとともに、研究者や大学院生の活発な相互連携を図り、韓国研究の水準の向上とその普及を目指した。

2015年度以降は、情報学環の特徴である「幅広い学際性」と「IT技術」を生かし、日韓の幅広い分野の学術的共有知を育てていく未来のアジアのための事業の共通基盤としてこのセンターを発展させていこうとしている。21世紀の日韓両国は、多くの課題や可能性、基盤を共有している。それらの課題や可能性は、単に日韓にとどまらず、東アジア共通の課題でもある。現代韓国研究センターの活動は、日韓の相互理解を学術的、市民的に広げつつ、未来のアジア共通の課題解決を機軸に「Future Asia Projects (アジアの未来プロジェクト)」を展開し、幅広い分野での開かれた拠点として維持可能な形を実現しようと模索している。具体的には、「Asian Media (グローバル・メディアとアジアのジャーナリズム)」「Asian Citizenship (グローバル市民権とアジア)」「Asian Memory (アジア共通の記憶)」「Asian Health (アジアの高齢化と健康)」「Asian Culture (アジアの現代文化)」「Asian Economy (アジアの経済と産業技術)」「Asian Sustainability (アジアの持続可能性と防災)」の7つの中核テーマについて、研究事業を展開しようとしている。

## 4 社会との交流

情報学環教員は、以下に述べるとおり、国際的委員会や政府委員会委員、産学協同等を通じて社会との交流を進めながら、社会への貢献を積極的に行っている。

### 4.1 国際的委員会

情報学環教員は、IEEE、ACM 等の国際学会が開催する会議の運営委員等を通じて、国際的な研究の推進に貢献をしている。

石川徹	International Conference on Spatial Informaition Theory (COSIT 2015)	Scientific Committee member
石川徹	The Journal of Environmental Psychology	Editorial Board member
石川徹	International Conference on Spatial Informaition Theory (COSIT 2015)	Scientific Committee member
石川徹	The Journal of Environmental Psychology	Editorial Board member
石崎雅人	InterSpeech 2015	Reviewer
伊東乾	7th International Symposium on Temporal Design	President
梅崎太造	社団法人電気学会 知覚情報技術委員会	1号委員
梅崎太造	社団法人電子情報通信学会「ソサイエティ論文誌編集委員会」	査読委員
金子知適	IEEE CIG	プログラム委員
金子知適	Advances in Computers and Games	プログラム委員
金子知適	ACM-ICPC つくば大会	実行委員
上條俊介	IEEE ITS Society	Vice Chairman of Tokyo Chapter
上條俊介	電子情報通信学会 IEICE Transaction A	Guest Editor in Chief of Special Issue on ITS
上條俊介	Journal on Multimedia Tools and Applications (Springer)	Editorial Board member
上條俊介	International Journal of ITS Research (Springer)	Editorial Board member
上條俊介	ITS World Congress	International Program Committee member
上條俊介	ACECC	Co-Chair of Technical Committee WG16
上條俊介	IEEE ITS Society	Board of Governors member
上條俊介	IEEE ITS Society, ICVES2015	General Co-Chair
倉田博史	Journal of Japan Statistical Society	Editor-in-Chief
倉田博史	Annals of the Institute of Statistical Mathemaitcs	Co-Editor
倉田博史	Mathematical Reviews	Reviewer
倉田博史	Journal of Japan Statistical Society	Editor-in-Chief
倉田博史	Annals of the Institute of Statistical Mathemaitcs	Co-Editor
倉田博史	Mathematical Reviews	Reviewer

越塚登	"25. 2015 IEEE 4th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2015)" Technical Program Committee
越塚登	TRON Symposium 2015 Symposium Registration Chair
佐倉統	East Asian Science, Technology and Society Advisory Board
中野公彦	Speed-up and sustainable technology for railway and maglev systems Vice Chair of program committee
橋元良明	社会言語科学会 会長
林香里	Social Media and Society Editorial Board
林香里	Journalism Studies Editorial Board
林香里	Asian Communication Research Editorial Board
前田幸男	iPRES 2015 (International Conference on Digital Preservation) Organizing Committee
前田幸男	IFDO (International Federation of Data Organizations) Board Member
三宅弘恵	米国地球物理学連合 AGU Geochemistry, Geophysics, Geosystem 誌 Associate Editor
三宅弘恵	Earth, Planets and Space 誌 Lead Guest Editor
三宅弘恵	米国地球物理学連合 AGU JGR-Solid Earth 誌 Editor-in-Chief Search Committee Member
暦本純一	ACM SIGCHI Technical Paper Co-Chair

## 4.2 政府・自治体委員会

情報学環教員は、政府・自治体委員会の委員等としても活躍し、情報通信などにかかわる政策立案等に参画することで、社会に貢献している。

### <政府>

石川徹	国土交通省 総合技術開発プロジェクト「3次元地理空間情報を活用した安全・安心・快適な社会実現のための技術開発」位置情報基盤WG委員
石川徹	文部科学省 科学技術・学術政策研究所科学技術動向研究センター専門調査員
石川徹	国土交通省 総合技術開発プロジェクト「3次元地理空間情報を活用した安全・安心・快適な社会実現のための技術開発」位置情報基盤WG委員
石川徹	文部科学省 科学技術・学術政策研究所科学技術動向研究センター専門調査員
石川雄章	環境省 中間貯蔵除去土壌等の減容・再生利用技術開発戦略検討会 委員
石崎雅人	厚生労働省 「ICTを活用した地域包括ケアシステム推進委員会」 委員
大島まり	文部科学省 科学技術・学術審議会 臨時委員
大島まり	文部科学省 中央教育審議会臨時委員

大島まり 文部科学省 数学イノベーション委員会 委員

大島まり 文部科学省 中央教育審議会大学分科会委員

大島まり 文部科学省 中央教育審議会初等中等教育分科会委員

大島まり 文部科学省 科学技術・学術審議会 核融合研究作業部会 委員

大島まり 文部科学省 研究開発評価部会 委員

大島まり 文部科学省 先端研究基盤部会 委員

大島まり 文部科学省 人材委員会 委員

大島まり 文部科学省 科研費審査部会委員

大島まり 文部科学省 研究環境基盤部会委員

大島まり 文部科学省 原子力科学技術委員会委員

大島まり 文部科学省 国立研究開発法人審議会 臨時委員

大島まり 文部科学省 「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の見直し・運用改善等に関する協力者会議委員

大島まり 経済産業省 産業構造審議会臨時委員

大島まり 経済産業省 国立研究開発法人審議会 委員

大島まり 経済産業省 産業構造審議会産業技術環境分科会研究開発・イノベーション小委員会 委員

大島まり 総務省 情報通信審議会専門委員

大島まり 人事院 第 28 回人事院総裁賞 選考委員会 委員

大島まり 日本学術会議 連携会員

大島まり 内閣府 知財教育タスクフォース委員

大島まり 独立行政法人 国立科学博物館 重要科学技術史資料登録委員会 委員

大島まり 独立行政法人国立高等専門学校機構 非常勤理事

大島まり 独立行政法人 日本学術振興会 科学研究費委員会専門委員

大島まり 独立行政法人 科学技術振興機構 イノベーションハブ構築支援事業評価委員会 委員

大島まり 独立行政法人 科学技術振興機構 「科学の甲子園推進事業委員会」委員

大島まり 独立行政法人 科学技術振興機構 東京都立日比谷高等学校 平成 27 年度 SSH 運営指導委員会 委員

河井大介 総務省 情報通信政策研究所 特別主任研究員

河井大介 総務省 情報通信政策研究所 「ICTインテリジェント化影響評価検討会議」委員

倉田博史 人事院 試験委員

倉田博史 人事院 試験委員

越塚登 内閣官房 電子行政オープンデータ実務者会合 委員

越塚登 公開支援ワーキング・グループ 委員（主査） 電子行政オープンデータ実務者会合

越塚登 総務省 地方発の放送コンテンツ発信力強化に向けた懇談会（ローカルコンテンツ懇談会）委員

越塚登 総務省 地方のポテンシャルを引き出すテレワークや Wi-Fi 等の活用に関する研究会

#### Wi-Fi 整備推進ワーキング・グループ 委員

- 越塚登 国土交通省 ICT を活用した歩行者移動支援の普及促進検討委員会 委員
- 越塚登 国土地理院 地理空間情報の共通・相互利用促進に関する専門部会 委員
- 越塚登 国土交通省 社会資本整備審議会 委員
- 越塚登 国土交通省 交通政策審議会技術部会 委員
- 中野公彦 国土交通省 「技術基準検討会」及び「規格競争有識者委員会」 委員
- 中野公彦 国土交通省 新幹線貨物専用列車技術評価検討委員
- 中野公彦 特許庁 工業所有権審議会試験委員
- 中野公彦 警察庁 「信号機設置の指針」に関する検討委員会委員
- 丹羽美之 文化庁 芸術選奨（放送部門）推薦委員
- 三宅弘恵 文部科学省 地震調査研究推進本部 地震調査委員会強震動評価部会強震動予測手法検討分科会 委員
- 三宅弘恵 文部科学省 地震調査研究推進本部 地震調査委員会強震動評価部会地下構造モデル検討分科会 委員
- 三宅弘恵 文部科学省 科学技術・学術審議会 測地学分科会地震火山部会 専門委員
- 三宅弘恵 内閣府 日本海溝・千島海溝沿いの巨大地震モデル検討会 委員
- 三宅弘恵 文部科学省 科学技術・学術審議会 測地学分科会地震火山部会地震火山観測研究レビュー委員会 専門委員
- 三宅弘恵 内閣府 相模トラフ沿いの巨大地震等による長周期地震動検討会 委員
- 山口いつ子 総務省情報通信政策研究所 情報通信法学会構成員
- 山口いつ子 内閣官房 知的財産戦略本部長決定に基づく「検証・評価・企画委員会」構成員（次世代知財システム検討委員会）
- 山口いつ子 総務省 インターネット上に公開された過去の個人情報等の取扱いに関する意見交換会委員
- 山口いつ子 内閣官房健康・医療戦略室 次世代医療 ICT 基盤協議会・医療情報取扱制度調整ワーキンググループ構成員

#### <自治体>

- 大島まり 岩手県教育委員会 平成 27 年度岩手県立釜石高等学校スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会委員
- 大島まり 群馬県教育委員会 平成 27 年度スーパーサイエンスハイスクール（群馬県立前橋女子高等学校）運営指導委員

### 4.3 学協会活動

情報学環教員は、国内外の関係学会の活動に積極的に参加しており、会長や副会長など、学会の要職等を通じて学協会活動に貢献している。

岩澤駿 あにめたまご 2016（文化庁 委託事業 平成 27 年度 若手アニメーター等人材育成事業）

#### 学の委員

梅崎太造	電気学会被整備環境現場に駆動されたパターン認識技術協同研究委員会 次世代産業システム技術委員
梅崎太造	DIA2016 実行委員
大島まり	社団法人 発明協会 審査委員
上條俊介	SIP (戦略的イノベーション創造プログラム) 委員 (歩車間通信技術の開発)
上條俊介	新エネルギー・産業技術総合開発機構 NEDO ピアレビュー
上條俊介	公益社団法人 自動車技術会 ITS 部門員会 委員
越塚登	榊横須賀テレコムリサーチパーク YRP ユビキタス・ネットワークング研究所 副所長
越塚登	TRON フォーラム 学術教育 WG 主査
越塚登	TRON フォーラム IoT WG 副主査
越塚登	一般社団法人 オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構 (VLED) 理事
越塚登	一般社団法人 オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構 (VLED) 技術委員会 委員 (主査)
越塚登	一般社団法人 オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構 (VLED) オープンデータシティ推進委員会 委員 (共同主査)
越塚登	公益財団法人佐藤陽国際奨学財団 選考委員
田中秀幸	独立行政法人情報処理推進機構 専門委員
丹羽美之	公益財団法人民間放送教育協会 評議員
丹羽美之	公益財団法人放送文化基金 放送文化基金賞 (テレビエンターテインメント番組) 専門委員
丹羽美之	特殊法人日本放送協会 NHK 放送文化研究所レビュー委員
丹羽美之	特殊法人日本放送協会 NHK 番組アーカイブス・学術トライアル審査委員
丹羽美之	社団法人日本民間放送連盟 日本放送文化大賞中央審査委員
丹羽美之	特定非営利活動法人放送批評懇談会 常務理事 (選奨事業委員会・テレビ部門委員長)
三宅弘恵	防災科学技術研究所 強震観測事業推進連絡会議 幹事

## 4.4 他組織役職

情報学環教員は、公益団体や他大学の役員・委員などとして、積極的に社会貢献を行っている。

梅崎太造	独立行政法人日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員
梅崎太造	製造・物流等分野ロボット導入実証 WG 座長
大島まり	電気通信大学 女性研究者支援室外部評価委員会委員
大島まり	ハートフロー・ジャパン合同会社 技術アドバイザー
大島まり	芝浦工業大学 SIT 総合研究所 点検・評価委員
倉田博史	慶応義塾大学理工学部数学科 非常勤講師
倉田博史	慶応義塾大学理工学部数学科 非常勤講師
倉田博史	学習院大学国際社会科学部 非常勤講師

倉田博史 学習院大学国際社会科学部 非常勤講師  
 越塚登 東京大学大学院情報学環 ユビキタス情報社会基盤研究センター 担当（兼任）  
 越塚登 東京大学大学院情報学環「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座 担当（兼任）  
 越塚登 東京大学教養学部学際科学科総合情報学コース 非常勤講師  
 越塚登 中央大学 非常勤講師  
 佐倉統 玉川大学脳科学研究科脳科学専攻 非常勤講師  
 佐倉統 独立行政法人理化学研究所理化学研究所脳科学総合研究センター 客員主管研究員  
 佐倉統 大学共同利用機関法人自然科学研究機構生理学研究所多次元共同脳科学推進センター 客員教授  
 佐倉統 中山人間科学振興財団 常任選考委員  
 佐倉統 財団法人国際花と緑の博覧会記念協会 助成事業審査委員会委員  
 佐倉統 独立行政法人科学技術振興機構 「戦略的創造研究推進事業」領域アドバイザー  
 佐倉統 独立行政法人科学技術振興機構 革新的研究開発プログラム「核変換による高レベル放射性廃棄物の大幅な低減・資源化」プログラムアドバイザー  
 佐倉統 朝日新聞社文化くらし報道部 書評委員  
 佐倉統 『生物の科学 遺伝』誌 編集委員  
 佐倉統 日本学術会議 連携会員  
 佐倉統 株式会社大塚製薬工場 食品を用いた研究倫理審査委員会委員  
 佐倉統 『5: Designing Media Ecology』誌 編集委員  
 園田茂人 人事院 法務省専門職員採用試験試験専門委員  
 園田茂人 人事院 国家公務員採用総合職試験（人間科学）試験専門委員  
 園田茂人 警察大学校 講師  
 鷹野澄 IT 強震計コンソーシアム 代表  
 鷹野澄 IT 強震計研究会 代表  
 田中秀幸 会津大学 復興支援センターアドバイザーボード委員会委員  
 丹羽美之 株式会社テレビ朝日 テレビ朝日 番組審議会委員  
 丹羽美之 株式会社シーエス・ワンテン/株式会社テレビ朝日 CS テレ朝チャンネル 番組審議会委員  
 丹羽美之 株式会社 mmbi 株式会社 mmbi 番組審議会副委員長  
 林香里 ヤフー株式会社 ヤフー株式会社有識者会議委員  
 林香里 フジテレビ フジテレビ CS 番組審議会委員  
 三宅弘恵 建築研究所 JICA 国際地震工学研修 非常勤講師  
 山口いつ子 一般社団法人 モバイルコンテンツ審査・運用監視機構（EMA） 審査・運用監視委員会委員  
 山口いつ子 公益財団法人 放送文化基金 人文社会・文化審査委員会委員

## 4.5 セミナー・研究会・公開講座

情報学環・学際情報学府の研究・教育活動の成果を公表するために、別表に示すようなさまざまな公開のイベントを実施した。

入試説明会は、学環・学府の全体像を受験生によく理解してもらうことに留意し、学環長に学環全体を、そして各コース長にコースでの教育研究について語ってもらう時間を設けた。また、各研究室や研究プロジェクトを教員や学生が紹介するためのブース展示を併設し、受験生と直接交流する機会を設けた。

また高校生のための東京大学オープンキャンパス（8月5日開催）では、各研究室の研究内容を紹介

したパネル展示、学際情報学府の魅力を現役院生が語るビデオ上映に加え、制作展 EXTRA2015「グッバイ・マイ・ボディ」（7月10日～13日）の作品から一部を展示した。

今年度の10月17日に開催された東京大学ホームカミングデーでは、坂村健教授による「IoTのいま」、澤本嘉光氏（dentsu 電通、教育部同窓生）による「ところで広告はどうなっているのか？」と題する講演会を実施した。講演会前には教育部・学際情報学府 OB・OG 交流会、講演会後には懇親会が行われ、学環関係者の交流が深められた。

学環の特徴でもあるさまざまなプロジェクトは、公開研究会、シンポジウムなどを通して学際情報学・社会情報学の研究情報を発信している。下記がその一覧である。いずれも学際的なチャレンジをしている営みだといえる（学環ホームページ上に公開されたプロジェクトのみで、全てを網羅していないことを申し添えておく）。

### 【シンポジウム】

NO	実施日 場所	タイトル 主要登壇者
1	2015.5.14 東京大学 ダイワユビキタス学 術研究館	IoT 時代のカメラの未来 大谷 渉(リコー コーポレート統括本部新規事業・プラットフォーム開発センター所長) 坂村 健(東京大学教授)
2	2015.5.25 Fukutake Hall Theatre, Fukutake Hall, University of Tokyo	International Public Forum “The University, Global Education, and the Future of Public Media” Patrick Loughery, Warden of Goldsmiths, University of London Yoshimi Shunya, Professor, Interfaculty Initiative in Information Studies, University of Tokyo Robert W. Aspinall, Faculty of Economics, Shiga University Nicola Liscutin, The Center for the Development of Global Leadership Education, University of Tokyo
3	2015.7.4 東京大学山上会館 2階大会議 室	公開シンポジウム「社会情報学の〈これから〉～若手研究者からの発言」 主催：社会情報学会 (SSI) 共催：東京大学大学院情報学環
4	2015.7.12 東京大学本郷キャンパス 福 武ラーニングシアター	連続シンポジウム「放送人のメディア生態学」 第1回 <初期>テレビ・ドキュメンタリーと「放送人の証言」 今野勉(放送人の会会長) 石田英敬(東京大学) 宮田章(NHK 放送文化研究所) 桜井均(立正大学) ※放送人の会「ドキュメンタリー・ワールド」 を兼ねて映像報告 西兼志(成蹊大学) 主催：情報学環メディアコンテンツ研究機構 / 一般社団法人放送人の会
5	2015.7.12 東京大学駒場 I キャンパス(教	開所記念国際シンポジウム「日韓国交正常化 50 周年と日本の韓国研究」

	養学部・大学院総合文化研究科)18号館ホール	【主催】東京大学大学院総合文化研究科・グローバル地域研究機構韓国学部門 【後援】韓国学中央研究院 【協力】東京大学大学院総合文化研究科地域文化研究専攻
6	2015.9.12 東京大学大学院情報学環福武ホール	日本広報学会 20周年記念大会公開シンポジウム「災害復興と情報発信」 主催：日本広報学会 共催：日本災害情報学会、日本災害復興学会、地域安全学会、東京大学大学院情報学環総合防災情報研究センター 後援：日本地震工学会
7	2015.10.10 東京大学本郷キャンパス 情報学環福武ホール 福武ラーニングシアター(B2F)	NNNドキュメント共同研究プロジェクト発足記念シンポジウム、「時代の目撃者—NNNドキュメントの45年」 主催：東京大学大学院情報学環
8	2015.10.17 東京大学本郷キャンパス 情報学環ダイワユビキタス学術研究館	総合分析情報学シンポジウム「総合分析情報学のいま～IoT、Human-Computer Interaction、ネットワーク仮想化、人工知能、空間情報学、地震防災情報学、生命情報学」 登壇者：暦本純一 教授、石川徹 准教授、金子知適 准教授、中村周吾 准教授、三宅弘恵 准教授 進行：越塚登 教授(総合分析情報学コース長)
9	2015.10.22-25 中国北京(万里の長城)	2015年度 東京大学大学院情報学環・学際情報学府・清華大学新聞与伝播学院共同シンポジウム企画「壁を越えるⅢ：スマート・アジア(次世代からの東アジア未来構想)」 主催：東京大学情報学環・学際情報学府、清華大学新聞与伝播学院
10	2015.11.13-14 東京大学山中寮内藤セミナーハウス	2015年東京大学-ソウル大学日韓共同シンポジウム「デジタル・ヒューマニティーズ」 主催：東京大学情報学環・学際情報学府、ソウル国立大学社会科学大学言論情報学科
11	2016.2.9 東京大学(本郷キャンパス) 福武ホール	東京大学大学院情報学環 DNP 学術電子コンテンツ研究寄附講座 開設記念シンポジウム「これからの学術デジタル・アーカイブ」
12	2016.3.6 東京大学福武ホール	公開シンポジウム「未来をつくるアーカイブ：大規模災害情報の利活用に向けて」 主催：防災未来アーカイブ研究会(代表：御厨貴東京大学名誉教授) 共催：東京大学関係各機関(地震研究所、情報学環、生産技術研究所、先端科学技術研究センター、総合防災情報研究センター(CIDIR))、東北大学災害科学国際研究所 後援：国土交通省 協力：グーグル(株)、ヤフー(株)
13	2016.3.12-13 東京大学本郷キャンパス 福武ホール B2(福武ラーニン	東京大学大学院情報学環 メディア・コンテンツ研究機構 知識コンテンツプログラム 国際シンポジウム 情報学環『デジタル・スタディーズ討議 2016』

グシアター)	Dream and Power in the Digital Age デジタル時代の〈夢〉と〈権力〉 主催：東京大学大学院情報学環メディアコンテンツ研究機構 共催：東京大学大学院情報学環駒場
--------	---

### 【研究会・講演会・その他】

1	2015.4.24 東京大学大学院情報学環・福武ホール地下2階ラーニングスタジオ1	ラーニングフルエイジング研究会第8回「高齢者の学習環境としてのMOOC」 ゲスト：山内祐平（東京大学大学院情報学環 教授）
2	2015.4.27 Ishibashi Hall, 3F, Daiwa Ubiquitous Computing Research Building (building #125)	CHI researcher Talk Alex Olwal (Ph.D, Google, USA) Pedro Lopes (Ph.D Candidate, Computer Interaction Lab, Hasso Platner Institute, Germany)
3	2015.5.25 東京大学本郷キャンパス 工学部2号館9階92B	インターネットの利活用におけるユーザー保護、プライバシーおよび自由な情報流通の確保に向けて—イノベーションによる課題解決とは？ 佐倉統（大学院情報学環長・学際情報学府長） 山口いつ子（大学院情報学環） 中尾彰宏（大学院情報学環） Dr. Frederik G. PFERDT (Head of Innovation & Creativity Programs at Google)
4	2015.5.29 Main Conference Room, 3rd Floor, IASA, University of Tokyo (Hongo Campus)	第3回東京大学大学院学際情報学府・院生国際学会（3rd Annual University of Tokyo-GSII Graduate Student Conference） 主催：ITASIA 学生会 協賛：東京大学 多文化共生・統合人間学プログラム
5	2015.6.4 東京大学本郷キャンパス 工学部2号館92B教室	東日本大震災復興支援哲学会議 第八回哲学熟議「声のメディアオロジー」 湯浅譲二＋一ノ瀬正樹＋河端伸幸＋小ノ澤幸穂
6	2015.6.4-14 東京大学生産技術研究所 S棟1階ギャラリー	“Designing Body 美しい義足をつくる” 主催：東京大学山中研究室、SIP MIAMI プロジェクト 協力：（公財）鉄道弘済会義肢装具サポートセンター、（株）RDS、慶應義塾大学仰木研究室
7	2015.7.2 東京大学本郷キャンパス 工学部2号館9階93B教室	ネパール支援の映画「オロ」のチャリティ上映会 ゲスト：宗田勝也さん（難民ナウ！代表、同志社大学大学院総合政策科学研究科博士後期課程修了） 主宰：学際情報学府の学生有志（P782 プロジェクト（協力：UNHCR））
8	2015.7.10 東洋文化研究所3階大会議室	池明観先生講演会「越境する情報とメディア—『T.K 生』の時代と『今』を語る」 主催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム」（IHS）「情報・メディア」ユニット、「移動・境界」ユニット 共催：東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多

		文化共生・統合人間学プログラム」(IHS)「格差・人権」ユニット、「東アジア」ユニット
9	2015.7.10-13 東京大学本郷キャンパス工学部2号館 2階展示室・2階フォーラム	東京大学制作展 EXTRA 2015「グッバイ・マイ・ボディ」
10	2015.7.13 本郷・福武ホール B2階・福武ラーニングシアター	江崎玲於奈先生特別講義「半世紀にわたる未知への探求」鼎談「アジアの中の日本、日本の科学はどこへ向かうのか」 江崎玲於奈先生 佐倉統(東京大学大学院情報学環・学際情報学府学環長) 赤座英之(東京大学大学院情報学環・学際情報学府特任教授)
11	2015.7.28 東京大学本郷キャンパス情報学環本館 6階実験室	Workshop for Methodology in Multicultural Setting: Interviews and Fieldwork 主催: 東京大学大学院博士課程教育リーディングプログラム「多文化共生・統合人間学プログラム(IHS)」教育プロジェクト4「多文化共生社会をプロデュースする」
12	2015.10.31 東京大学 工学部 2号館 9階 92B	情報行動論ワークショップ「フォーラム・シアター」の試み—演劇による対話は可能か 講師: 花崎 攝 先生(演劇デザインギルド) 主催: 東京大学大学院情報学環 石崎研究室
13	2015.10.31-11.1 東京大学大学院情報学環 ダイワユビキタス学術研究館	「歩行者移動支援アイデアソン・ハッカソン@本郷」 主催: 国土交通省 政策統括官付 共催: 東京大学 大学院情報学環 ユビキタス情報社会基盤研究センター 後援: 東京都、一般社団法人オープン&ビッグデータ活用・地方創生推進機構、トロンフォーラム、トロンイネーブルウェア研究会 協力: 東京大学博士課程教育リーディングプログラム「社会構想マネジメントを先導するグローバルリーダー養成プログラム」(GSDM)
14	2015.11.12-16 東京大学本郷キャンパス工学部2号館 2階展示室・2階フォーラム・9階 92B	第17回 東京大学 制作展「わたしエクステンション」
15	2015.11.15 東京大学本郷キャンパス情報学環福武ホール 福武ラーニングシアター(B2F)	『建築の際』刊行記念トークイベント
16	2015.11.24-25 福武ホール/ダイワユビキタス石橋ホール	国際時空間設計学会第七回世界大会
17	2015.12.2 東京大学 情報学環・福武ホールスタジオ1	Educe Cafe 仕掛学: 遊び心を問題解決につなげよう 主催: NPO 法人 Educe Technologies 企画: 帝京大学高等教育開発センター講師 森玲奈 東京大学大学院情報学環特任助教 安斎勇樹
18	2015.12.10	ENGAGING EXPERTISE IN DISASTER GOVERNANCE Part 1 -

	#92B, 9F, Faculty of Engineering Bldg 2, Hongo campus, University of Tokyo	A dialogue with ARI NUS and iii UTokyo – Organizer: Asia Research Institute, National University of Singapore Interfaculty Initiative in Information Studies, University of Tokyo
19	2015.12.16 工学部2号館3F 電気系会議室3 および1ABC	Global Design Leading Researcher Cafe (GCL 定例ポスターセッ ション)
20	2016.1.13 東京大学大学院情報学環・福武 ホール地下2階 スタジオ1	Edu-Lab Meeting「大学生は正課外活動で何を学ぶのか」 企画: 森玲奈(帝京大学)+成瀬尚志(京都光華女子短期大学 部) 主催: NPO 法人 Educe Technologies
21	2016.2.8-9 ダイワユビキタス学術研究館3階 「石橋信夫記念ホール」	大学院全学共通講義「エグゼクティブ・プログラム 11」
22	2016.2.10 東京大学大学院 情報学環・福武 ホール 地下2階スタジオ1	Edu-Lab Meeting ワークショップとはなにか? 報告者: 森玲奈(帝京大学)、長谷川一(明治学院大学) 討論者: 安斎勇樹(東京大学大学院)、土屋祐子(広島経済大 学) 司会: 村田麻里子(関西大学)
23	2016.2.17-23 東京大学生産技術研究所 S 棟 1 階ギャラリー	Research Portrait02 「ELEGANT CELL 細胞とバイオマテリア ルの小さな実験室」 主催: 東京大学山中研究室、ERATO 竹内バイオ融合プロジェク ト 協力: パナソニック ヘルスケア株式会社、カールツァイスマイク ロスコピー株式会社、公益財団法人 日本ユニフォームセンター
24	2016.3.1 東京大学本郷キャンパス工学部2 号館 4階 241号講義室及び9階 92B,93B	苗村研究室オープンハウス 2016
25	2016.3.5 スポーツ&ライフテクノロジーラボ 本郷スタジオ 東京大学情報学環ダイワユビキ タス学術研究棟	暦本研究室オープンハウス 2016
26	2016.3.5 東京大学工学部2号館 92B 教 室	哲学熟議 10+ 哲楽遊戯 4 東日本大震災 5 年メモリアル「共生 の防災を考える」 主催: 東京大学文学部東日本大震災復興支援哲学会議 映像協力: 株式会社スタジオジブリ 共催: 日本時空間設計学会 東京大学大学院情報学環作曲指 揮研究室
27	2016.3.11 東京大学 情報学環・福武ホール スタジオ1	Educe Cafe「学習者の共同体による学習環境の運営」 主催: NPO 法人 Educe Technologies 企画: 帝京大学高等教育開発センター講師 森玲奈

## 【プロジェクト関連】

記録映画 アーカイブ プロジェクト	2015.6.19	第4回ミニワークショップ「記録映画の新しい活用例(2)―映画フィルムの4K化」
	2015.11.27	第5回ミニワークショップ「1964年東京オリンピックと建築」
TVアーカイブ・ プロジェクト	2015.5.15	第17回「みんなでTVを見る会」
	2016.3.10	第18回「みんなでTVを見る会」
メディア研究の つどい	2015.7.7 東京大学本郷キャンパス工 学部 2号館 9F92B 教室	2015年内川芳美記念マス・コミュニケーション学会賞 受賞: 畑仲哲雄著『地域ジャーナリズム: コミュニティと メディアを結びなおす』合評会
	2016.1.21	Pablo Boczkowski 先生講演会「The News Gap」
角川文化振興 財団メディア・コ ンテンツ研究寄 付講座	2015.7.23, 31, 8/3	東京大学大学院情報学環角川文化振興財団メディア・ コンテンツ研究寄付講座「メディア化された世界」サマ ープログラム
ISASIA	2015.5.19 549 Conference Room, 5th Floor, Akamon General Research Building	ITASIA Colloquium: Article 9 in a Tough Neighborhood: Evidence from Poll and Event Data Speaker: Dr. Volker Krause (Associate Professor, Department of Political Science, Eastern Michigan University)

## 4.6 出版活動

2004年の社会情報研究所との統合後は、社会情報研究所で出されていた定期刊行物と情報学環・学際情報学府の定期刊行物を統合し、新たな出版体制を整備しつつある。その中心となるのは、以下の5つの刊行物である。

- (1) 研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』（年2回刊）
- (2) 調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』（年1回刊）
- (3) 英文紀要（オンライン論文サイト"iii Online Research Journal"への移行を検討中）
- (4) 年報『東京大学大学院情報学環年報』（年1回刊）
- (5) ニュースレター『学環学府』

これらはいずれも、情報学環にとって基幹的な出版活動であり、相互に役割を分担しながら有機的に結びついている。

なお、研究紀要『東京大学大学院情報学環紀要情報学研究』は85号、調査実験紀要『同情報学研究・調査研究編』は30号から冊子体の刊行を中止し、電子版のみの刊行に移行した。

表 4-6-1 情報学研究/同調査研究編の発行状況

東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究	
82号	2012年3月
83号	2012年10月
84号	2013年3月
85号	2013年10月
86号	2014年3月
87号	2014年10月
88号	2015年3月
89号	2015年10月
90号	2016年3月
情報学研究・調査研究編	
29号	2013年3月
30号	2014年3月
31号	2015年3月
32号	2016年3月

#### 4.6.1 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』

『情報学環紀要 情報学研究』は、2004年の情報学環と社会情報研究所との統合により、旧社会情報研究所の『社会情報研究所紀要』を改称したものである。

同紀要は、1952年に『新聞研究所紀要』として創刊されて以来、新聞学、世論研究、マス・コミュニケーション論、ジャーナリズム、メディア史、マス・メディアの制度と受容、社会的コミュニケーションの諸過程、災害や地域情報化などの政策課題、高度情報化や新しいメディア接触と情報行動などを理論的、実証的に扱う多くの論考を掲載し、半世紀以上にわたって国内外の専門研究者や学生に多くの影響を及ぼしてきた。

社会情報研究所と情報学環との統合に際し、このような歴史と定評のある研究誌としての紀要の学問的な伝統と蓄積を、情報学環での教育研究基盤のうえでさらに発展させたいと考えた。このような視点から、『情報学環紀要 情報学研究』を、これまでの伝統を維持しつつも、理工学系において発展してきた情報学の基礎理論や応用分野の研究と融合した新しい研究成果が共に公刊されていく場として位置づけた。

そのために、本紀要は、巻頭エッセイの「思考の環」、巻末の「フィールド・レビュー」をはじめ、情報学環教員の研究論文や学際情報学府博士課程院生の査読論文（博士課程在籍者の投稿論文は、外部査読者を含む複数の審査員による審査の上、掲載を許可している）などさまざまなセクションから複層的に構成されている。大学院情報学環において育まれる研究の創造的成果の主要な発表媒体として、また新たな学問的視座や調査研究の発表の場として、本紀要は内外から高い評価を得ている。

2016年3月に刊行されたNo.90には、思考の環「カントロビッチ不等式と統計学」、教員研究論文「ナ

ラティヴ・ジェロントロジーの理論と研究動向— Kenyon, G.らの枠組みを中心に—」、「ラジオの奥底にあるもの—古いメディアについての新しい覚書—」、査読研究論文「復興期のコミュニティ組織における調整機能の維持戦略」、「Research on Chinese Social Media Censorship as Contemporary Archaeology: Notes on Time-Sensitivity」、「ルポルタージュ絵画が描いた基地闘争— 2つの暴力の前景化—」、「Peter Mark Roget の医学/博物学言説の受容—Thesaurus の分類学的思考の起源—」、「内部告発による公益実現のための法制度のあり方— 公益通報者保護法における外部通報要件改正に向けて—」、フィールド・レビュー「東日本大震災が問いかけたもの」が掲載された。

#### 4.6.2 『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究・調査研究編』

『情報学環紀要情報学研究・調査研究編』は、1992年から刊行されてきた『社会情報研究所調査研究紀要』を継承するものである。

『社会情報研究所調査研究紀要』は、同研究所におけるさまざまな社会調査、情報行動や災害情報、インターネットなどに関わる多くの調査の成果が発表されていく主要な媒体であった。これらの社会調査は、関係する研究者や学会、自治体などで高く評価されているものが多く、そのデータの価値が高く評価されていた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環と社会情報研究所との統合後は、これまで主要な柱をなしてきた情報行動や災害行動の調査の成果に加え、情報工学や情報科学との融合分野での実験の成果、文理相互浸透分野でのフィールドワーク、情報教育分野での実験、デジタル・アーカイブに関する諸実践、デザイン表現論などの調査や実験、実践の成果が多分野にわたって発表される媒体となっている。

2016年3月に刊行されたNo.32には、「日本における「インプロ」の導入と展開—1990年代を中心として—」、「東京電力福島第一原子力発電所事故における緊急避難の課題：内閣官房東日本大震災総括対応室調査より」、「日本海沿岸自治体の津波防災と日本海津波想定」、「ネット利用に関する安心と不安」、「札幌市民における2011年9月11日豪雨時の情報行動-避難所避難者と一般市民を対象とした質問紙調査から—」、「社会調査にみる東日本大震災が与えた災害関心の影響」の6本の論文が掲載された。

#### 4.6.3 『英文紀要』

『情報学環英文紀要』は、前記の『社会情報研究所紀要』が発展していく中で研究の国際化、グローバル化に対応して独立したものであった。『英文紀要』は、基本的には研究者の個人研究論文とともに、社会情報研究所で開催された国際的なシンポジウムなどの記録を収録していた。

このような社会情報研究所時代の伝統を生かしつつ、情報学環・社会情報研究所の統合後は、情報、メディア、コミュニケーションをめぐるより広い学問分野の知見が掲載できるように、和文紀要の一部に英語論文を掲載することにした。

## 4.7 定期刊行物・ホームページ

### 4.7.1 定期刊行物

情報学環・学際情報学府では、日々の活動を学内外の方々に広く知ってもらうため、ニューズレター『学環学府』を発行している。『学環学府』は、情報学環教職員や学生だけでなく、学内他部局や本部役員をはじめ、学環にゆかりのある学外教員、そのほか広報用として入試説明会、ホームカミングデー、学環来訪者などに随時配布している。内容は、教員へのインタビュー、研究室の活動報告、イベント予定、研究成果、受賞報告、展示会、各教員の書籍刊行情報など。2002年冬号から始まり、2015年度末までに通算46回発行した。デザイン性を高めた紙面は、情報学環・学際情報学府の特徴をよく表現しており、各方面から好評を得ている。

### 4.7.2 ホームページ

情報学環・学際情報学府は、これまでも教育・研究活動を広く国内外に周知すべく、ホームページを開設し情報発信を行っている。これによって、「学環」「学府」という有機的で複雑な組織の活動の全貌や相互の関係が、学環・学府の活動に関心をもつ一般の人や将来の学府受験生など、学環・学府の外部の人にも明快に把握できるようにしている。また、ホームページはHTML5およびレスポンシブデザインにもとづいて構築されており、コンピュータのみならずスマートフォンやタブレットからでも閲覧可能である。

サイト全体は、教員情報を軸にして構築されており、教員のプロフィールページから、担当する授業、参加しているプロジェクト、登壇したイベント、講演の動画など、関係するすべてのページに相互リンクされている。こうしたカテゴリー横断的な情報の関連付けによって、閲覧者がみずからの関心に応じて、回遊的にページを読み進めていけることを大きな特徴としている。また、グローバルナビゲーションは、研究組織としての学環と、教育組織としての学府を明確に区別しながら、修士課程・博士課程や教育部研究生制度の入試に関する「受験情報」や、『紀要』や『ニューズレター』、『年報』など学環が発行する「紀要・出版物」といった基本情報をはじめとした各情報に、容易にアクセスできるようになっている。「イベント」ページでは、イベントの概要やプログラムといった基本的な情報はもちろんのこと、関連するイベントや教員も表示されるようになっており、サイト内での回遊を促すようデザインされている。また、「コース」ページでは、各コースの基本的な理念を掲げると同時に、受講できる授業や担当教員、関連する施設・研究センターやイベントも表示されるようになっている。

## 4.8 国際交流

2015年度の情報学環の国際交流事業は以下のように推進された。以下、その経緯を時系列で記載する。

日韓シンポジウムは毎年10月または11月頃、東京大学情報学環とソウル大学言論情報学科とで会場を交代しながら、国際活動委員会の主催で全学環共通の行事として行われているものである。2015年は11月13日と14日に東京大学山中寮内藤セミナーハウスを会場として合宿スタイルで行われた。ソ

ウル大学側は、Kyusup Hahn 准教授、Chuljoo Lee 副教授の教員 2 名のほか、大学院生 9 名が参加した。東大側は、国際活動委員の日韓シンポジウム担当である水越伸教授の他、佐倉統教授、林香里教授、ハ・キョンジン助教の教員 4 名、国際研修員（デンマーク）1 名、大学院生 5 名が参加した。今年の参加院生は、8 人の応募者の中から、運営委員会で合議の結果、5 人を選出した。今回のテーマは「Digital Humanities」。一日目は午前中に本郷キャンパスからバスで出発。山中寮到着後に昼食を取り、午後から教員 5 名（ソウル大学 2 名、東京大学 3 名）がそれぞれ 20～25 分の研究報告をした。その後、学生 13 名が 10～15 分ずつの研究報告をし、質疑応答をおこなった。学生の発表に関しては、2セッションに分割し、それぞれでソウル大と東大の教員 2 名ずつが司会を担当した。二日目は、2016 年に 20 周年を迎えるこのイベントの今後を考えるため、新たな試みとしてワークショップをおこなった。「How to organize future collaboration?」と題し、5 つのグループに分かれて、このイベントの課題や可能性を踏まえ、よりよいあり方についてグループワークによって構想を練り、発表をし合った。例年どおり、これらの研究報告と討論はすべて英語で行われた。

## II. 資料

### 1 沿革

(旧社会情報研究所)

- 1929年 東京帝国大学文学部新聞研究室  
1949年 東京大学新聞研究所  
1992年 東京大学社会情報研究所に改組  
東京大学大学院情報学環・学際情報学府と組織統合

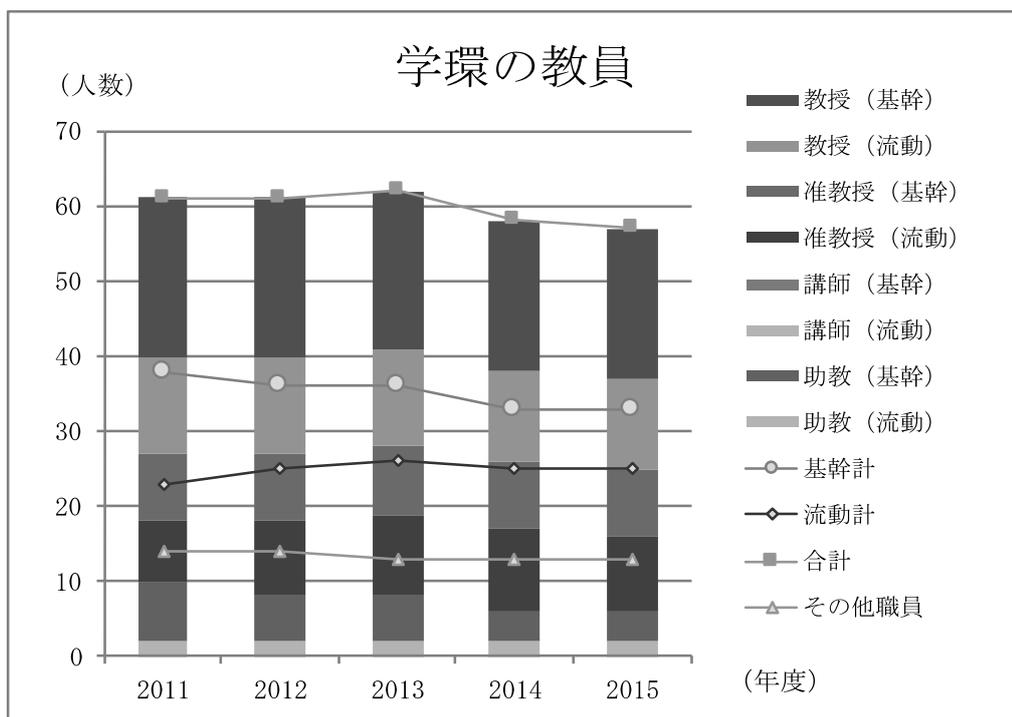
(大学院情報学環)

- 2000年 東京大学大学院情報学環・学際情報学府  
2004年 東京大学社会情報研究所と組織統合  
文化・人間情報学コース、社会情報学コース、学際理数情報学コース設置  
社会情報研究資料センター設置  
2006年 総合分析情報学コース設置  
2008年 アジア情報社会コース設置  
総合防災情報研究センター設置  
2009年 学際理数情報学コースが先端表現情報学コースへ変更  
ユビキタス情報社会基盤研究センター設置  
2010年 現代韓国研究センター設置

### 2 学環の教員（定員）

・情報学環(平成16年4月 社会情報研究所と合併)

年度	教授		准教授 (助教授)		講師		助教 (助手)		計		その他 の職員	
	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動	基幹	流動		
2011	21	13	9	8	0	0	8	2	38	23	61	14
2012	21	13	9	10	0	0	6	2	36	25	61	14
2013	21	13	9	11	0	0	6	2	36	26	62	13
2014	20	12	9	11	0	0	4	2	33	25	58	13
2015	20	12	9	10	0	0	4	2	33	25	57	13



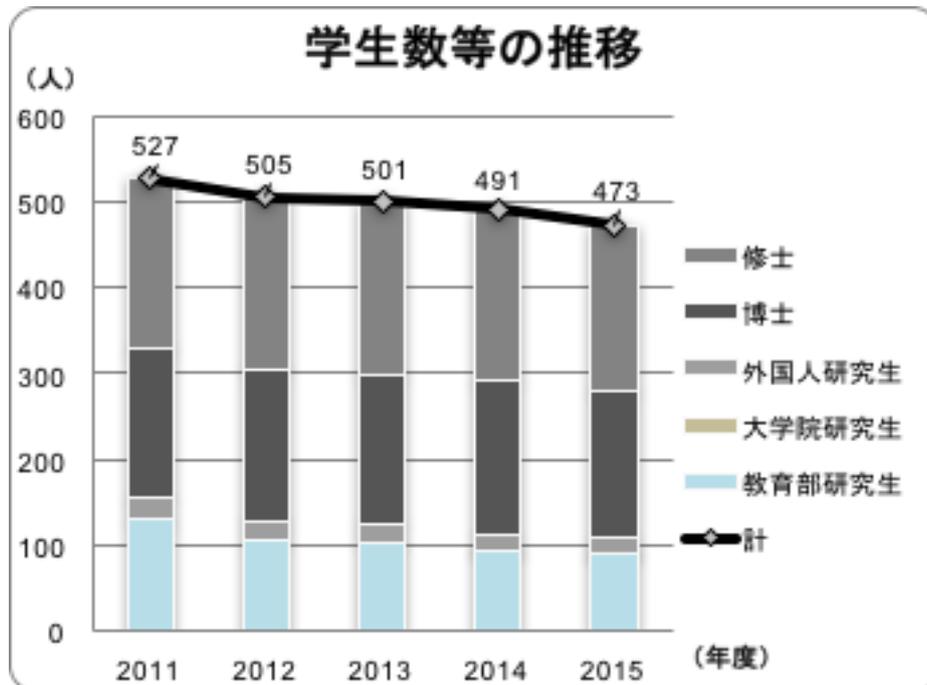
### 客員教員の状況

年度	職	氏名	担当授業	本務先
平成 18	客員教授	佐藤 哲	文化・人間情報学特論Ⅷ	長野大学産業社会学部
	客員助教授	魏 晶玄	文化・人間情報学特論Ⅸ	ソウル(社)コンテンツ経営研究所
平成 19	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	奈良 高明		電気通信大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	大場 光太郎		産業技術総合研究所
	客員准教授	下畑 光夫	総合分析情報学特論Ⅸ	沖電気
	客員准教授	荒牧 浩二		(株)日立製作所中央研究所
平成 20	客員教授	飯吉 透		カーネギー財団知識メディア研究所
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 21	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
平成 22	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法Ⅰ	東海大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論Ⅳ	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
平成 23	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学

	客員教授	Roberson James	Information,Technology, and Society in Asia801	東京女学館大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	Information,Technology, and Society in Asia801	国際基督教大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法 I	東海大学
	客員教授	遠藤 知巳	メディア社会学	日本女子大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
平成 24	客員教授	片田 敏孝	災害情報論	群馬大学
	客員教授	水島 久光	社会情報学研究法 I	東海大学
	客員教授	Paterson Robert Dunsmore	Information,Technology, and Society in Asia801	国際基督教大学
	客員准教授	飯野 浩一	文化・人間情報学特論IV	凸版印刷総合研究所
	客員准教授	田中 圭介	総合分析情報学基礎IV	東京工業大学
	客員准教授	宇陀 則彦	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	筑波大学
	客員准教授	大向 一輝	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	国立情報学研究所
平成 25	客員教授	片田 敏孝	災害情報論 II	群馬大学
平成 26	客員教授	片田 敏孝	災害情報論 II	群馬大学
	客員准教授	大向 一輝	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	国立情報学研究所
	客員准教授	宇田 則彦	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	筑波大学
	客員准教授	田中 圭介	総合分析情報学基礎IV	東京工業大学
平成 27	客員教授	片田 敏孝	災害情報論 II	群馬大学
	客員教授	谷脇 康彦	セキュア情報化社会研究寄付講座	内閣府
	客員教授	関口 和一	セキュア情報化社会研究寄付講座	日本経済新聞社
	客員教授	松田 学	セキュア情報化社会研究寄付講座	大樹総研
	客員教授	森 まゆみ	調査・研究	明治学院大学
	客員教授	宮廻 正明	調査・研究	東京藝術大学
	客員准教授	大向 一輝	デジタル・ヒューマニティーズ 基礎論	国立情報学研究所
	客員准教授	田中 圭介	総合分析情報学基礎IV	東京工業大学
	客員准教授	高木 聡一郎	調査・研究	国際大学

### 3 学府の学生数

	2011	2012	2013	2014	2015
修士	198	202	204	200	195
博士	173	176	172	180	168
外国人研究生	27	21	23	17	20
大学院研究生	0	0	0	1	1
教育部研究生	129	106	102	93	89
計	527	505	501	491	473



## 4 教育部

教育部入学試験

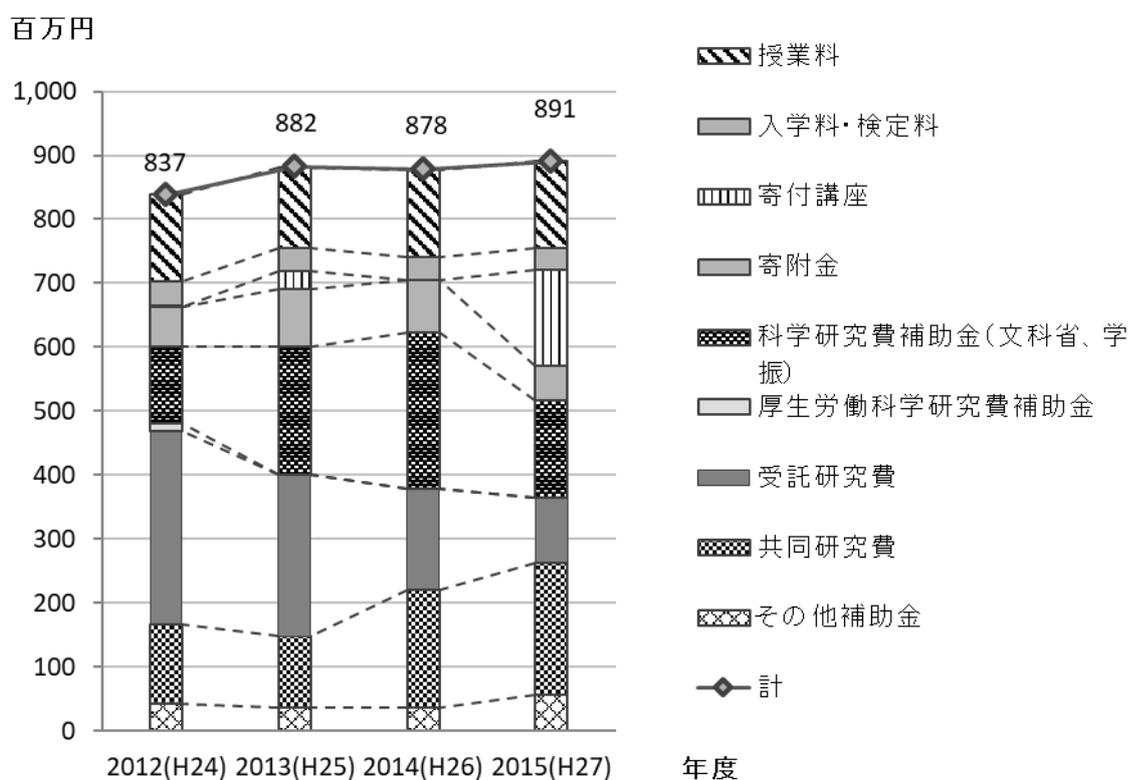
平成 23(2011)年度から平成 27(2015)年度入学志願者数・受験者数・合格者数・入学者

年度	受入予定人員	日本人 ／外国人	志願者			受験者			合格者			入学者		
			本学	他大学	計	本学	他大学	計	本学	他大学	計	本学	他大学	計
平成 23(2011) 年度	約 50	日本人	121	53	174	112	51	163	32	10	42	32	10	42
		外国人	5	2	7	5	2	7	0	0	0	0	0	0
		計	126	55	181	117	53	170	32	10	42	32	10	42
平成 24(2012) 年度	約 30	日本人	76	51	127	72	51	123	22	11	33	22	10	32
		外国人	0	3	3	0	3	3	0	0	0	0	0	0
		計	76	54	130	72	54	126	22	11	33	22	10	32
平成 25(2013) 年度	約 30	日本人	46	38	84	41	37	78	19	10	29	19	10	29
		外国人	1	1	2	0	1	1	0	0	0	0	0	0
		計	47	39	86	41	38	79	19	10	29	19	10	29
平成 26(2014) 年度	約 30	日本人	56	38	94	53	32	85	24	8	32	24	8	32
		外国人	1	0	1	1	0	1	1	0	1	1	0	1
		計	57	38	95	54	32	86	25	8	33	25	8	33
平成 27(2015) 年度	約 30	日本人	41	29	70	41	29	70	23	10	33	23	9	32
		外国人	1	1	2	1	1	2	0	0	0	0	0	0
		計	42	30	72	42	30	72	23	10	33	23	9	32

## 5 予算

	2012(H24)		2013(H25)		2014(H26)		2015(H27)	
	件数	金額	件数	金額	件数	金額	件数	金額
授業料		136,486,210		128,086,749		137,542,543		135,954,670
入学金・検定料		38,418,200		36,312,800		36,359,200		34,334,600
寄付講座	0	0	1	27,000,000	0	0	4	151,000,000
寄附金	27	62,948,565	27	89,559,278	19	80,528,660	40	53,462,331
科学研究費補助金 (文部科学省、学振)	71	119,643,805	88	199,675,050	118	244,885,000	105	152,139,000
厚生労働科学研究費 補助金	3	12,200,000	0	0	0	0	0	0
受託研究費	22	301,320,888	13	252,627,886	18	156,979,162	12	101,837,597
共同研究費	35	123,808,179	28	112,081,694	44	185,180,941	49	206,912,796
その他補助金	2	43,330,000	1	35,850,000	1	35,937,000	3	56,408,000
授業料		136,486,210		128,086,749		137,542,543		135,954,670
入学金・検定料		38,418,200		36,312,800		36,359,200		34,334,600

### 予算規模(収入・事項別)の推移



## 6 土地・建物面積

・建物（平成 28 年 3 月 31 日現在；借用部分を含む）

建物名	建築年度	面積（延面積・㎡）
情報学環本館	S27	472
	S29	26
	S33	360
	S58	4,171
	計	5,029
工学部 2 号館	*H18	*500
第 2 本部棟	*H18	*42
福武ホール	H19	**3,241
駒場Ⅱ 5 6 号館	*H23	*473
ダイワユビキタス学術研究館	H26	**2,559

\*使用開始年度・使用㎡数（借用部分であるため）

\*\*福武ホール及びダイワユビキタス学術研究館の面積については全学共用スペース分を除く

## 7 入試定数と受入数

	修士		博士	
	入学定員	受入予定人員	入学定員	受入予定人員
平成 23 (2011)	100	100	44	44
平成 24 (2012)	100	100	44	44
平成 25 (2013)	100	100	44	44
平成 26 (2014)	100	100	44	44
平成 27 (2015)	100	100	44	44

## 8 年度別入試データ詳細

修士

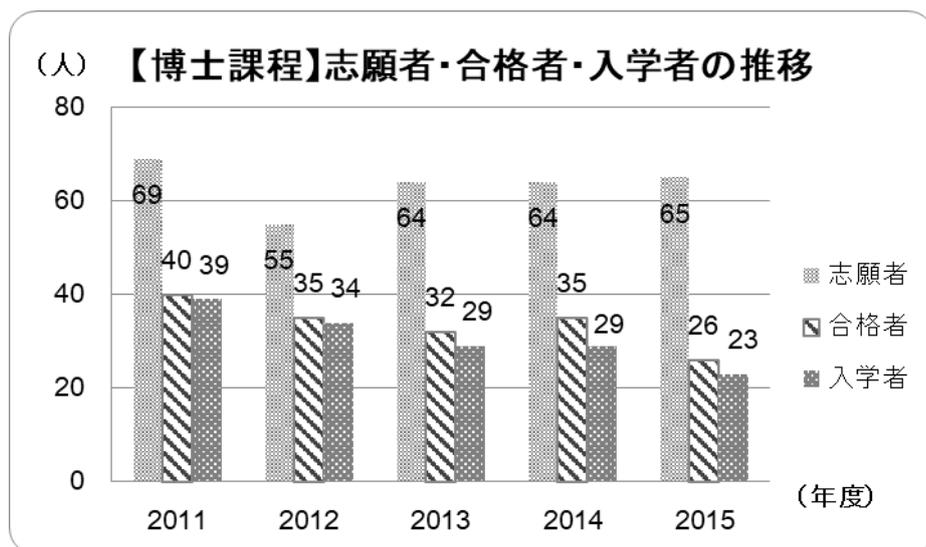
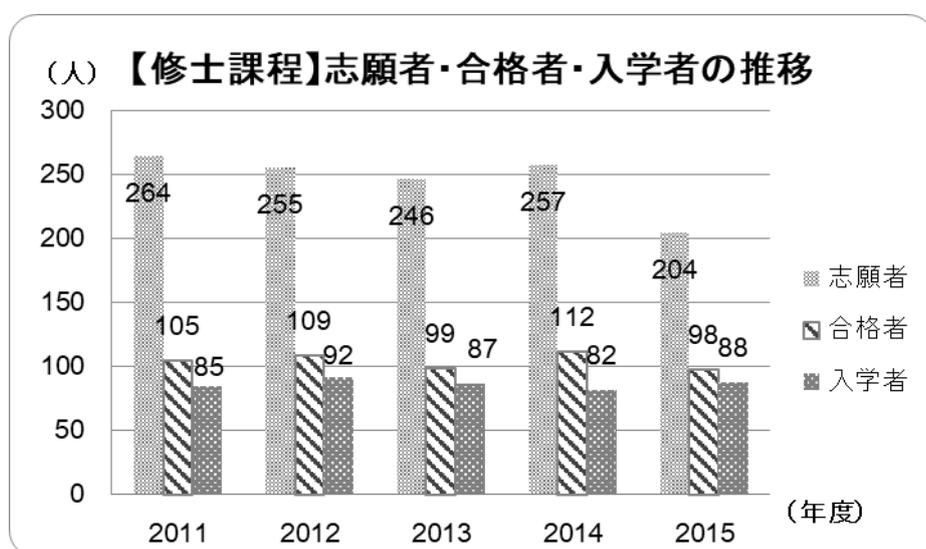
	2011	2012	2013	2014	2015
志願者	264	255	246	257	204
合格者	105	109	99	112	98
入学者	85	92	87	82	88

博士

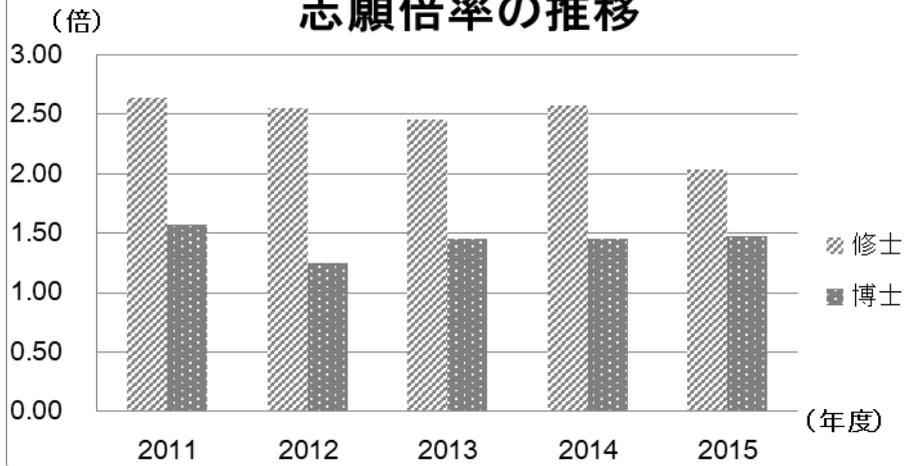
	2011	2012	2013	2014	2015
志願者	69	55	64	64	65
合格者	40	35	32	35	26
入学者	39	34	29	29	23

志願倍率（志願者／入学定員）

	2011	2012	2013	2014	2015
修士	2.64	2.55	2.46	2.57	2.04
博士	1.57	1.25	1.45	1.45	1.48



## 志願倍率の推移



### 2015 年度修士入学試験詳細

#### 志願者

本学	72
他大学	132
204	

#### 合格者

本学	44
他大学	54
98	

#### 入学者

本学	22
他大学	66
88	

#### 志願者

日本人	145
外国人	59
204	

#### 合格者

日本人	68
外国人	30
98	

#### 入学者

日本人	64
外国人	24
88	

#### 志願者

男	150
女	54
204	

#### 合格者

男	71
女	27
98	

#### 入学者

男	62
女	26
88	

#### 志願者

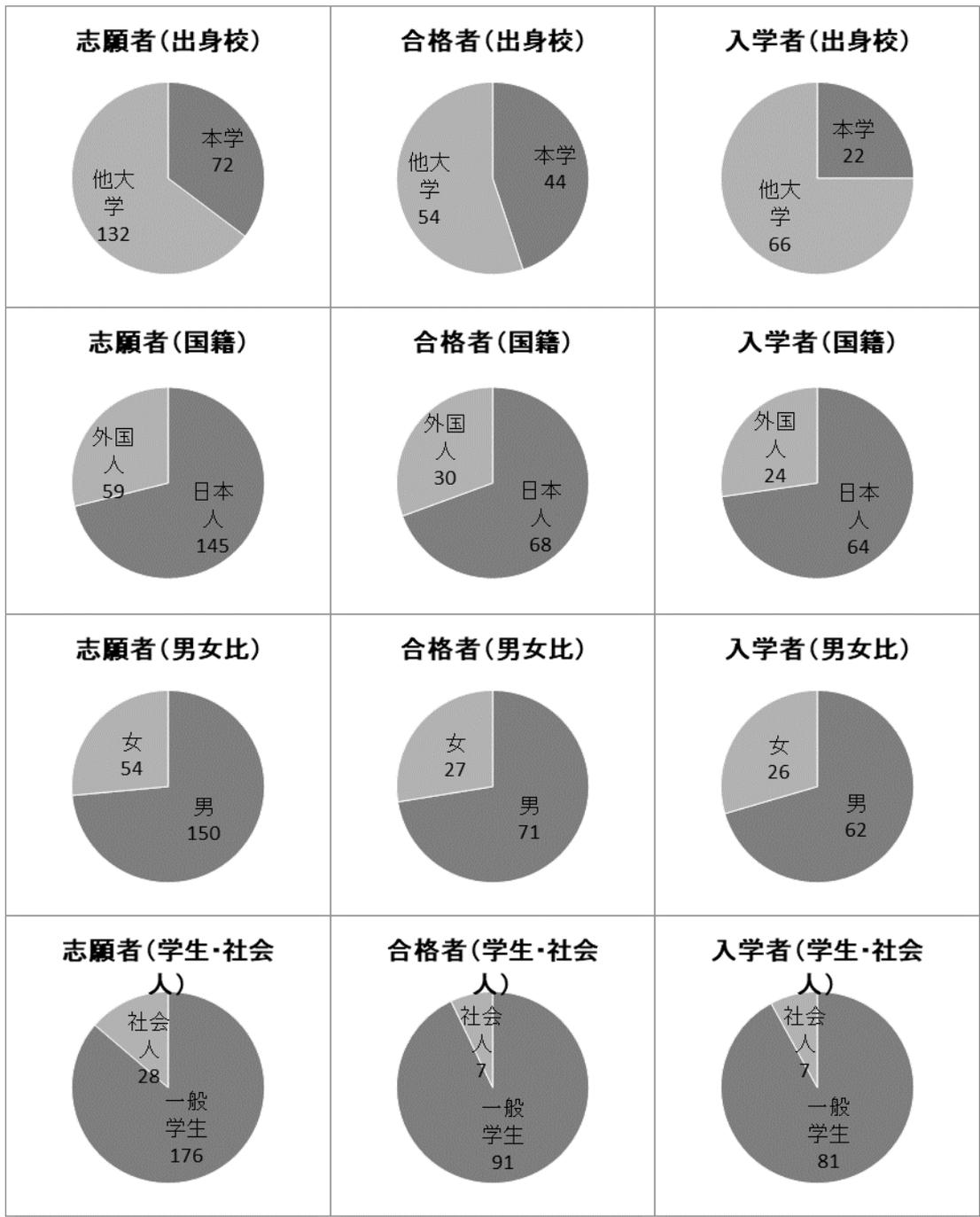
一般学生	176
社会人	28
204	

#### 合格者

一般学生	91
社会人	7
98	

#### 入学者

一般学生	81
社会人	7
88	



**2015 年度博士入学試験詳細**

志願者		合格者		入学者	
本学府	25	本学府	9	本学府	9
他大学院	40	他大学院	17	他大学院	14
	65		26		23

**志願者**

日本人	38
外国人	27
65	

**合格者**

日本人	17
外国人	9
26	

**入学者**

日本人	16
外国人	7
23	

**志願者**

男	39
女	26
65	

**合格者**

男	25
女	1
26	

**入学者**

男	22
女	1
23	

**志願者**

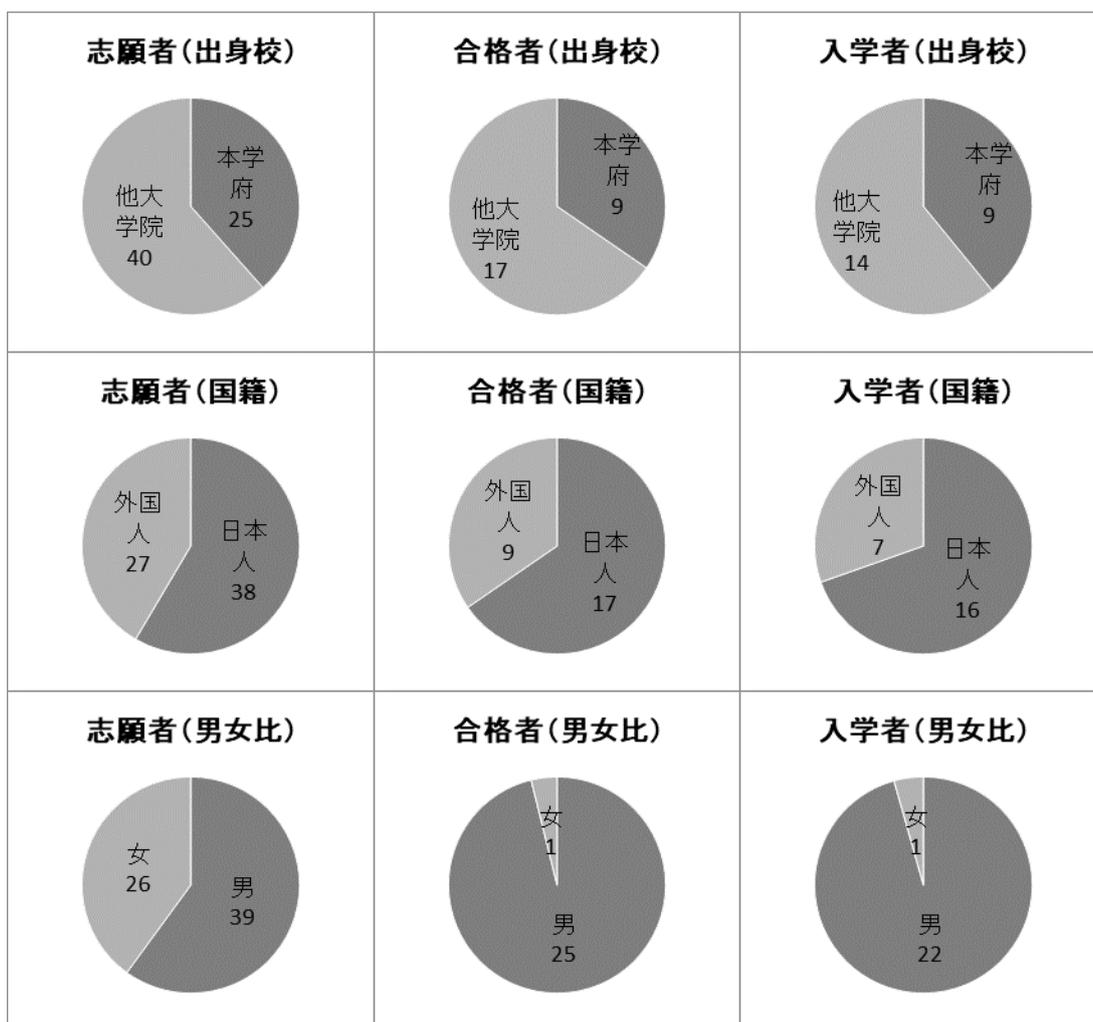
一般学生	61
社会人	4
65	

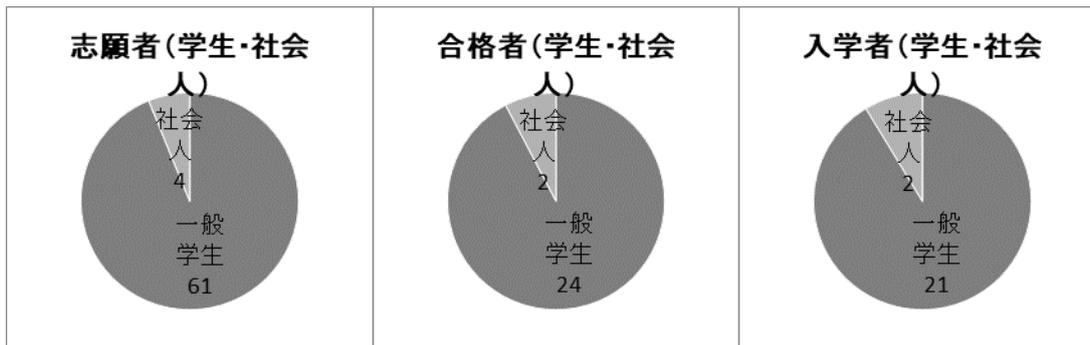
**合格者**

一般学生	24
社会人	2
26	

**入学者**

一般学生	21
社会人	2
23	



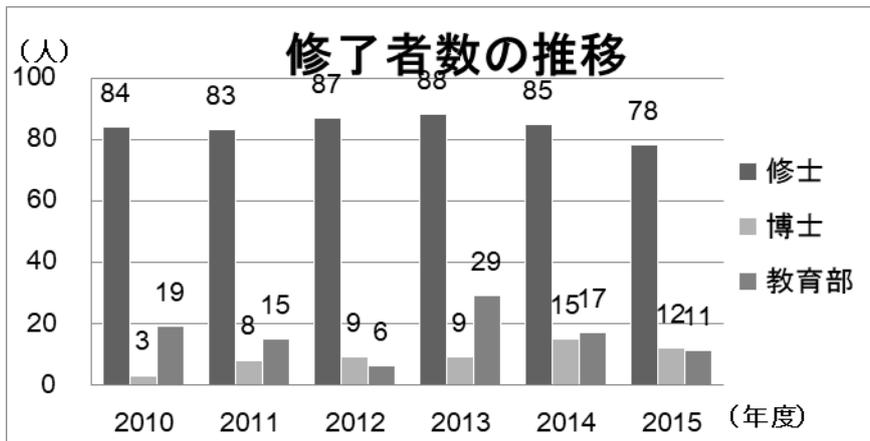


## 9 修了者数の推移

平成 22(2010)年度から平成 27(2015)年度修了者数(教育部研究生)

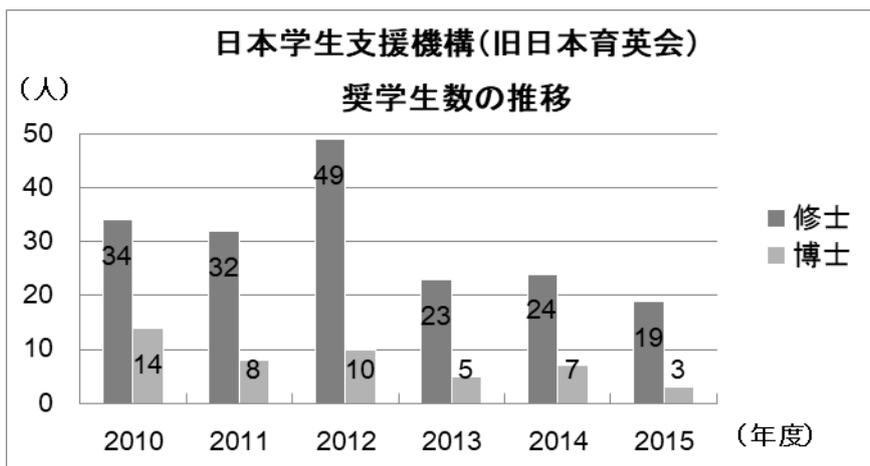
年度		修了者		
		本学	他大学	計
平成 22(2010)年度	日本人	11	8	19
	外国人	0	0	0
	計	11	8	19
平成 23(2011)年度	日本人	7	7	14
	外国人	1	0	1
	計	8	7	15
平成 24(2012)年度	日本人	4	2	6
	外国人	0	0	0
	計	4	2	6
平成 25(2013)年度	日本人	13	16	29
	外国人	0	0	0
	計	13	16	29
平成 26(2014)年度	日本人	10	7	17
	外国人	0	0	0
	計	10	7	17
平成 27(2015)年度	日本人	6	5	11
	外国人	0	0	0
	計	6	5	11

	2010	2011	2012	2013	2014	2015
修士	84	83	87	88	85	78
博士	3	8	9	9	15	12
教育部	19	15	6	29	17	11



## 10 学生支援機構（旧育英会）奨学生数

	第一種		第二種		合計	
	修士	博士	修士	博士	修士	博士
2010	24	11	10	3	34	14
2011	25	7	7	1	32	8
2012	37	9	12	1	49	10
2013	19	5	4	0	23	5
2014	20	5	4	2	24	7
2015	16	3	3	0	19	3

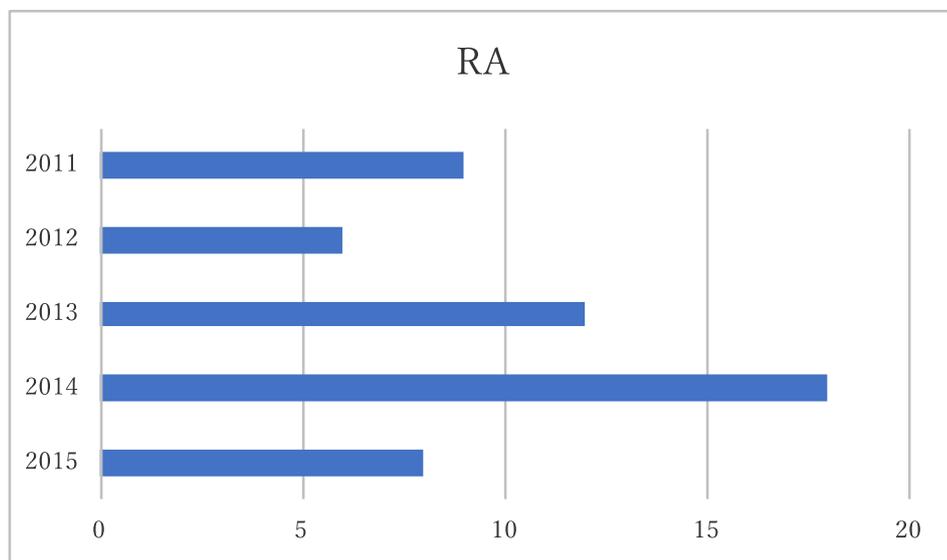


## 11 日本学術振興会特別研究員数

	DC 1	DC 2	合計
2010	6	9	15
2011	4	4	8
2012	2	9	11
2013	2	2	4
2014	2	5	7
2015	2	5	7

## 12 リサーチアシスタント数

年度	RA
2015	8
2014	18
2013	12
2012	6
2011	9

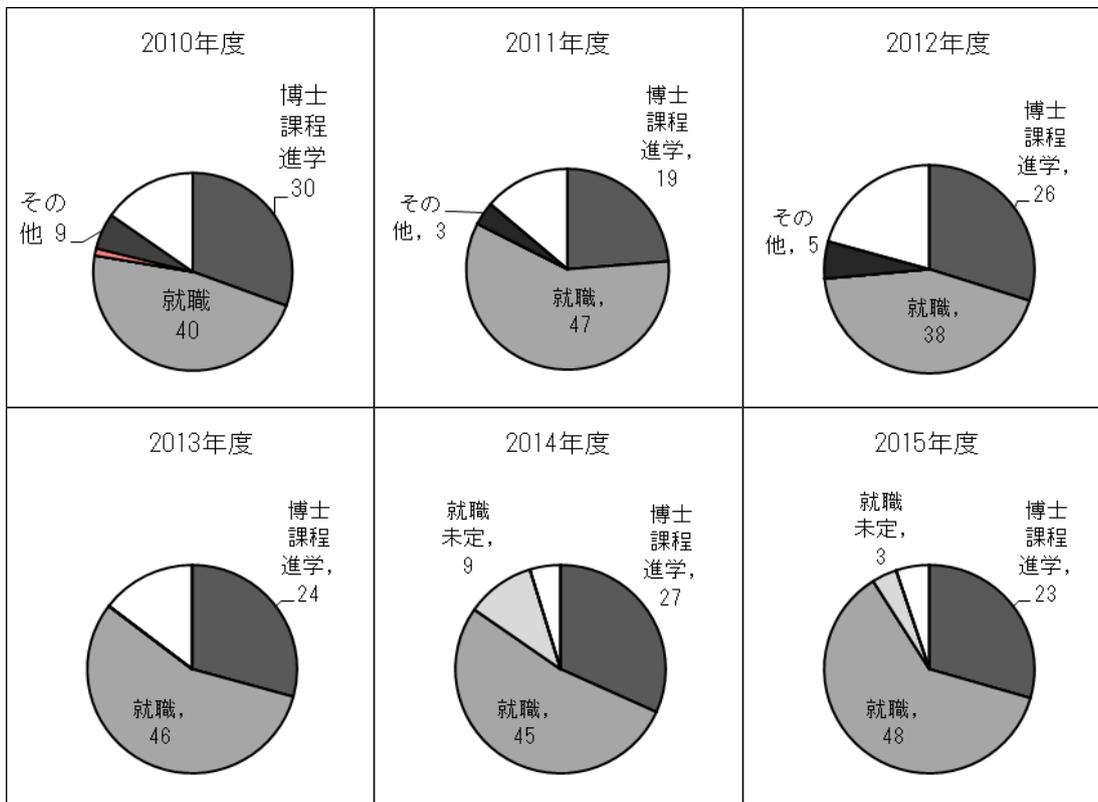


### 13 就職状況

#### 学際情報学府修士課程修了者 進路状況資料 (2010年度～2015年度)

区分		2010年度	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
博士課程進学	学際情報学府	24	19	19	22	24	23
	学内他研究科	1	2	4	2	3	
	学外	1	1	3			
海外留学							
就職		40	47	38	46	45	48
大学院研究生	学際情報学府						
	学内他研究科						
帰国(外国人留学生)							
就職未定		1					3
その他		5	3	5		9	
不明		13	11	18	12	4	4
合計		85	※ 83	87	82	85	78

※ 2010年度 「博士課程進学」と同時に「就職」した者1名を、それぞれの項目に計上(重複計上)している。



注) 白抜き部分は「不明」を示す

<就職先一覧>

2010 年度	2011 年度	2012 年度	2013 年度	2014 年度	2015 年度
(株)電通 3	エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社 3	ソニー(株) 2	(株)NTT データ 2	日本放送協会(NHK) 3	日立製作所 3
(株)楽天 3	ソニー(株) 3	(株)電通 2	ソニー(株) 2	(株)NTT データ 2	KDDI(株) 2
(株)ゴールドマン・サックス証券 2	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ 2	(株)博報堂 2	(株)日立製作所 2	ソニー(株) 2	株式会社日本総合研究所 2
(株)凸版印刷 2	アクセンチュア株式会社 2	ゆうちょ銀行 2	株式会社ディー・エヌ・エー 2	(株)日立製作所 2	キャノン株式会社 2
Cisco Systems G.K. 1	(株)電通 2	LIDEA & CO.,LTD 1	東京都庁 1	(株)東京通信社 1	プライスウォーターハウスクーパース株式会社 2
Deloitte Touche Tohmatsu CPA Ltd. Dalian Branch 1	(株)日本アイ・ピーエム 2	NPO 法人 Collable 代表理事 1	特別区 1	(株)電通 1	ヤフー株式会社 2
(株)朝日新聞社 1	グリー株式会社 2	NTT研究所 1	中国語学校 1	損害保険ジャパン日本興亜(株) 1	(株)NTT データ 1
(株)セガ 1	(株)テレビ朝日 1	NTTコミュニケーションズ 1	早稲田大学 1	(株)博報堂 1	(株)電通 1
(株)ソニー・コンピュータエンタテインメント 1	有限会社リブレスク 1	(株)NSN 1	京都芸術大学 1	シャチハタ(株) 1	JP モルガン証券株式会社 1
(株)テムジン 1	(株)生活の友社 1	(株)グリー 1	秋田公立美術大学 1	(株)ベネッセコーポレーション 1	LINE(株) 1
(株)メディア・ゲートジャパン 1	JFE スチール株式会社 1	(株)スクエア・エニックス 1	株式会社バッファロー 1	(株)リコー 1	アクサ生命保険(株) 1
(株)ソネットエンタテインメント 1	(株)博報堂 1	(株)テレコムスタッフ 1	イオン(株) 1	(株)マーベラス 1	株式会社 DMM.com 1
(株)東京センチュリーリース 1	(株)ニトリ 1	(株)テレビ朝日 1	(株)内田洋行 1	foo.log(株) 1	株式会社 KADOKAWA 1
東京大学 1	朝日新聞社 1	(株)ビービット 1	グリー(株) 1	新日鉄住金ソリューションズ(株) 1	株式会社応用社会心理学研究所 1
新潟県警察(行政) 1	面白法人カヤック 1	(株)ビデオリサーチコムハウス 1	日本オラクル(株) 1	三菱電機(株) 1	株式会社キーコーヒー 1
(株)日刊工業新聞社 1	三三株式会社 1	(株)マクロミル 1	近畿日本鉄道(株) 1	(株)コーエーテクモゲームス 1	株式会社コーエーテクモゲームス 1
(株)日興コーディアル証券 1	Havok 株式会社 1	(株)ミクシィ 1	マネックスグループ(株) 1	(株)リクルートホールディングス 1	株式会社メディアドゥ 1
(株)日産自動車 1	任天堂株式会社 1	(株)ラーンウェル 1	(株)コナミデジタルエンタテインメント 1	(株)Cygames 1	株式会社リクルートホールディングス 1
(株)日本IBMソリューションサービス 1	(株)ポストンコンサルティンググループ 1	キャノン(株) 1	本田技研工業(株) 1	(株)みずほフィナンシャルグループ 1	株式会社 恵和株式会社 1
(株)日本無線 1	スカパーJSAT株式会社 1	グーグルジャパン 1	共同通信社 1	東日本電信電話(株) 1	ゴールドマン・サックス・ジャ 1

(株)日本ロレアル	1	コーエーテックモホールディングス株式会社	1	財団法人地方自治情報センター	1	日本電信電話(株)	1	(株)スパイスボックス	1	パン・ホールディングス有限会社	1	札幌大谷大学	1
(株)パナソニック	1	東芝ソリューション株式会社	1	東映アニメーション(株)	1	(株)日立コンサルティング	1	(株)リクルートジョブズ	1	サントリーホールディングス株式会社	1		1
(株)パナソニックシステムソリューションズジャパン	1	(株)三井住友銀行	1	日本オラクル(株)	1	(株)東芝	1	凸版印刷(株)	1	シャープ株式会社	1		1
(株)パナソニックシステムネットワークス	1	日本放送協会	1	野村総合研究所	1	(株)富士通	1	(株)LIXIL	1	ソニー株式会社	1		1
(株)日立製作所	1	特許庁	1	富士ゼロックス(株)	1	(株)日産自動車	1	(株)東京放送ホールディングス(TBS)	1	東京都	1		1
(株)富士通	1	毎日新聞社	1	八千代エンジニアリング(株)	1	(株)猿人	1	独立行政法人科学技術振興機構	1	トヨタ自動車株式会社	1		1
(株)丸善	1	PR会社	1	ヤフー(株)	1	(株)NTTドコモ	1	富士通(株)	1	日本学術振興会	1		1
(株)三井住友銀行	1	JSR株式会社	1	楽天(株)	1	キヤノン(株)	1	(株)日本総合研究所	1	日本テレビ放送網株式会社	1		1
(株)メリルリンチ日本証券	1	google	1	ラティス・テクノロジー(株)	1	(株)電通国際情報サービス	1	ベース(株)	1	日本マイクロソフト株式会社	1		1
(株)郵便局	1	シリコンスタジオ	1			(株)講談社	1	コグラフィ(株)	1	任天堂	1		1
(株)郵便事業	1	(株)キーエンス	1			(株)学研ホールディングス	1	マイクロソフトディプロップメント(株)	1	阪神電気鉄道株式会社	1		1
早稲田大学	1	(株)野村総合研究所	1			(株)バンダイナムコスタジオ	1	グーグル(株)	1	富士通	1		1
警察官(台湾)	1	マッキンゼー・アンド・カンパニー	1			(株)リクルートホールディングス	1	Berlotz Japan, Inc	1	ベネッセコーポレーション	1		1
企業名不明(海外企業)	1	トヨタ自動車株式会社	1			トヨタ自動車(株)	1	北京大学教員	1	本田技研工業(株)	1		1
		ニールセンカンパニー(上海)	1			(株)電通	1	上海奇邑传播有限公司	1	三井住友海上	1		1
		(株)ティーネット	1			(株)チームラボ	1			リクルートホールディングス	1		1
		有限会社パークス	1			富士通(株)	1						
		プルデンシャル生命株式会社	1			(株)サイバーエージェント	1						
						(株)MEDICA	1						
						三菱総合研究所	1						
						昭和電工(株)	1						

## 14 研究員（客員）等

情報学環

事項／年度	23	24	25	26	27
受託研究員	0	1	0	0	0
中国政府派遣研究員	1	0	0	0	0
客員研究員	28	20	27	34	24
外国人特別研究員	7	9	6	6	3
内地研究員	0	0	0	0	0
国際研究員等	3	10	10	9	24
交流研究員	11	7	16	22	31
私学研修員	0	0	0	0	0

## 15 学会賞など受賞者リスト

- ・ 坂村健 国際電気通信連合 (ITU) 150 周年賞 150 周年賞 国際電気通信連合 (ITU)
- ・ 石川 徹 (共同受賞) 郊外都市における高齢者の定住意向と居住満足度についての分析 都市住宅学会 2015 年学会賞・論文賞 都市住宅学会
- ・ 石川 徹 The Journal of Environmental Psychology Outstanding Contribution in Reviewing Elsevier and the Division of Environmental Psychology of the International Association of Applied Psychology
- ・ 東京大学大学院情報学環、ミサワホーム株式会社他 ホイクリ～保育環境創造カード 第9回キッズデザイン賞
- ・ 大島まり distinguished achievements in the field of computational mechanics 日本機械学会計算力学部門賞 業績賞 日本機械学会
- ・ 酒井 麻千子 18 世紀後半～19 世紀前半における絵画の複製と著作権—ドイツ(プロイセン)での議論を中心として— 第10回著作権・著作隣接権論文募集 第2位 公益社団法人著作権情報センター
- ・ 竹木章人 深層特徴検出器と意味領域分割の組み合わせによる解像度に適応的な物体検出 東京大学工学部長賞 東京大学工学部

## 16 論文数

年度	件数	文理融合	学環・学府内協力
1999 年度以前	323	1	0
2000 年度	645	48	14
2001 年度	654	49	18
2002 年度	916	98	53
2003 年度	949	107	54

2004年度	904	122	83
2005年度	846	232	91
2006年度	982	149	24
2007年度	947	45	17
2008年度	1100	47	6
2009年度	1002	125	22
2010年度	1070	86	24
2011年度	1208	88	12
2012年度	1067	96	24
2013年度	814	51	3
2014年度	700	124	7
2015年度	547	39	37

注：業績 DB 入力データに基づく各年度の論文数(著書，分担著書，雑誌論文，国際会議論文，その他の論文，講演発表)

## 17 特許出願・公開数

年度	出願件数	公開
2001年度	8	2
2002年度	5	5
2003年度	5	4
2004年度	1	2
2005年度	1	3
2006年度	2	1
2007年度	3	1
2008年度	4	2
2009年度	10	5
2010年度	17	6
2011年度	6	8
2012年度	5	16
2013年度	6	6
2014年度	0	0
2015年度	2	3
合計	75	64

## 18 国際団体役員・委員数

	学術的な団体の役員・委員*1	その他の団体役員・委員等*2
2011年度	13	1
2012年度	13	0
2013年度	8	0
2014年度	8	0
2015年度	12	0

\*1 「学会・会議等役職」のうち「国際性有」かつ「学会役員委員」であるもの

\*2 「団体役員・委員」のうち国際的なもの

## 19 政府関係委員会委員数

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
内閣官房	2	4	7	7	3
内閣府	4	2	2	1	3
総務省	25	26	27	12	7
経済産業省	5	2	2	2	3
文部科学省	8	2	13	12	19
厚生労働省	3	0	1	1	1
国土交通省	8	7	14	12	7
農林水産省	0	0	0	0	0
環境省	1	1	0	0	1
宮内庁	0	0	0	0	0
文化庁	0	0	0	0	1
特許庁	0	0	0	0	1
人事院	1	0	1	1	2
日本学術会議	0	0	1	1	1
その他	5	0	8	8	10
政府全体	62	44	76	57	59

## 20 地方公共団体関係委員会委員数

	2011年度	2012年度	2013年度	2014年度	2015年度
都道府県	4	6	10	7	3
市区町村	4	6	2	4	4
地方公共団体関係全体	8	12	12	11	7

## 21 ジャーナル編集・会議運営

	学会誌等編集査読*1	学術大会等運営*2
件数	18	7
うち国際的なもの	16	7

注：国内外の学会活動(学術誌編集委員，会議運営委員など) 注：2015年度のみ

\*1 「学会・会議等役職」のうち「ジャーナル編集査読」であるもの

\*2 「学会・会議等役職」のうち「大会組織運営」であるもの

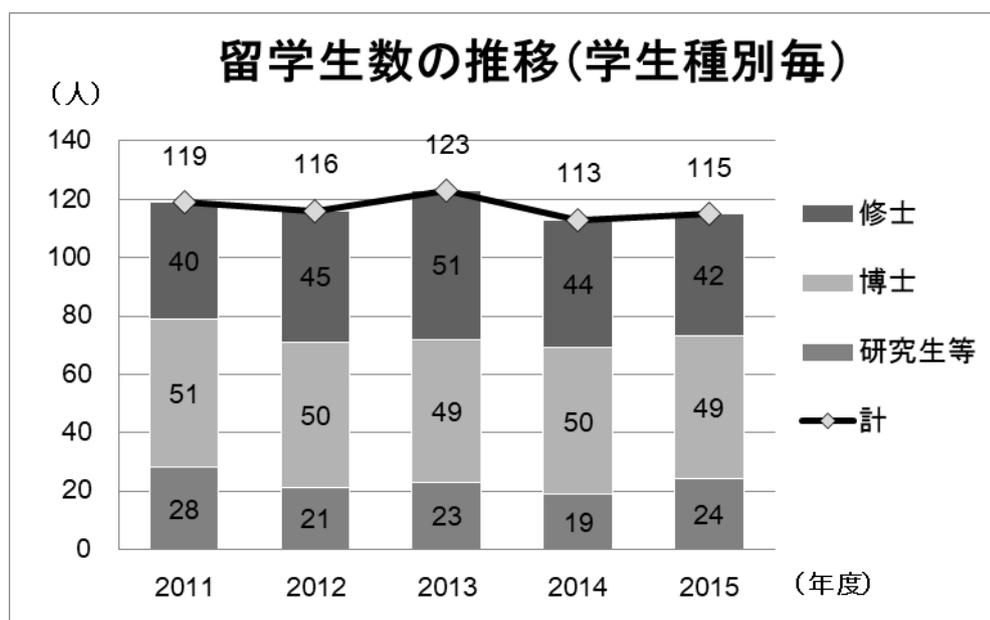
## 22 定期刊行物一覧

- ・『情報学研究 調査研究編』No.32 (2016年3月)
- ・『東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究』 No.89 (2015年10月)，No.90 (2016年3月)
- ・ニューズレター『学環学府』No.45 (2015年5月)、No.46 (2015年11月)

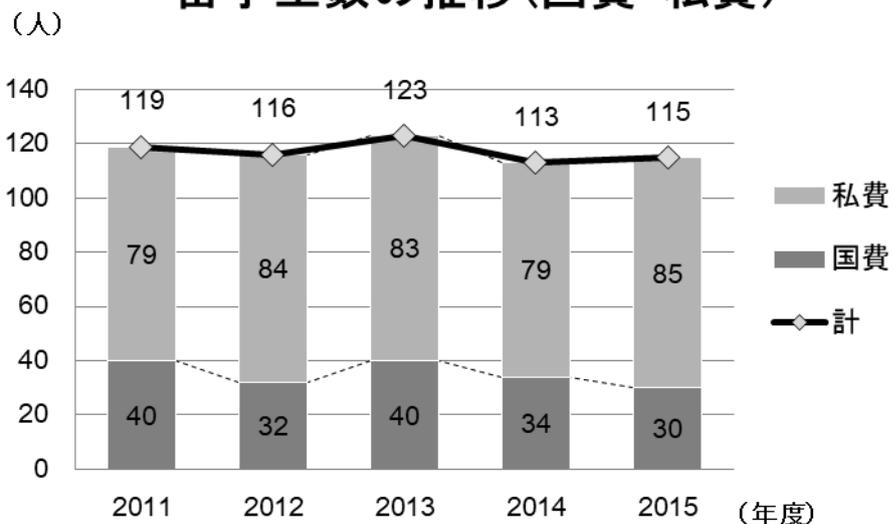
## 23 留学生数の推移

各年度5月1日現在

年度	修士		博士		外国人 研究生等		教育部 研究生	合計		総計
	国費	私費	国費	私費	国費	私費	私費	国費	私費	
2011	10	30	22	29	8	19	1	40	79	119
2012	12	33	16	34	4	17	0	32	84	116
2013	15	36	14	35	11	12	0	40	83	123
2014	14	30	10	40	10	8	1	34	79	113
2015	9	33	14	35	7	17	1	30	86	116



## 留学生数の推移(国費・私費)



## 24 留学生国籍別一覧 (2015年5月1日現在)

国又は地域	国費	私費	計
<b>アジア</b>			
ネパール		1	1
タイ	1	3	4
マレーシア	1		1
シンガポール	1	1	2
インドネシア	1	2	3
フィリピン	2	1	3
韓国	8	10	18
中国	4	43	47
台湾		14	14
小計	18	75	93
<b>中近東</b>			
イスラエル	3	1	4
小計	3	1	4
<b>アフリカ</b>			
アルジェリア	1		1
カメルーン		1	1
小計	1	1	2
<b>北米</b>			
カナダ	1	1	2
アメリカ合衆国	1	6	7
小計	2	7	9
<b>中南米</b>			
チリ	1		1
小計	1	0	1

ヨーロッパ			
ドイツ	3		3
フランス		1	1
スペイン		1	1
ロシア	1		1
エストニア	1		1
小計	5	2	7
合計	30	86	116

### Ⅲ. 個人業績編

---

平成 28（2016）年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人の研究テーマおよび 2015 年度の研究業績を、各自が入力したデータベースの内容に基づき、収録しています。教員の配列は、当時の肩書きに基づいた以下のカテゴリーの順、また同一カテゴリー内では氏名の 50 音順となっています。

1. 教授
2. 准教授
3. 講師
4. 助教
5. 特任教授
6. 特任准教授
7. 特任講師
8. 特任助教
9. 特任研究員

## 1. 教授

---

### 上田 博人・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

##### 言語情報分析

言語科学と情報科学の融合する。文系研究者にとってわかりやすい独自の方法と技術を開発し、分析プログラムをHPで紹介、配布する。

##### 中世・近代スペイン語古文献の年代差・地方差研究

13世紀から18世紀までのスペイン語の変化を、デジタル化した資料で分析し、言語史を構築する。言語統計分析法を開発する。

##### 広域スペイン語の語彙バリエーション

スペイン、アフリカ、ラテンアメリカ、フィリピンのスペイン語における語彙バリエーション資料を収集し、多変量解析法を応用して、全体的な把握を目指す。同時に独自の手法も開発する。

#### 研究業績(2015年度)

##### 分担著書

上田博人: 「『スペイン語学概論』、pp. 249-263.」, 高垣敏博 編, くろしお出版, 2015年.

##### 雑誌論文

Hiroto Ueda / Moreno-Sandoval, Antonio: "LETRAS and NUMEROS: Two Integrated Web-based Tools for Research in Linguistics and Humanities", Social and Behavioral Sciences, Vol.198, pp.487-495, 2015年. 【査読有】

Hiroto Ueda: "¥"Frecuencia contrastiva, frecuencia ponderada y método de concentración. Aplicación al estudio de las dos formas prepositivas del español medieval «pora» y «para»¥"", Actas del IX Congreso Internacional de Historia de la Lengua Española (Cádiz, 2012), pp.1139-1155, 2015 年. 【査読有】

Hiroto Ueda: ""La vocal débil en la apócope extrema medieval: Observaciones sobre el «Corpus de Documentos Españoles Anteriores a 1700»"", Temas, problemas y métodos para la edición y el estudio de documentos hispánicos antiguos., pp.585-607, 2015 年. 【査読有】

Hiroto Ueda: "¥"Las grafías de ene doble y ene implosiva en el español medieval. Observaciones de los documentos notariales y el origen de la letra eñe¥"", Actas del VIII Congreso Internacional de la Asociación Asiática de Hispanistas, Shanghai Foreign Language Education Press,, pp.964-976, 2015 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

Hiroto Ueda, Antonio Moreno Sandoval: ""LETRAS and NÚMEROS: two integrated web-based tools for research in Linguistics and Humanities"", , 7th International Conference on Corpus Linguistics: Current Work in Corpus Linguistics: Working with Traditionally-conceived Corpora and Beyond (CILC 2015),, 2015.

Hiroto Ueda: ""Análisis lingüísticos de textos literarios por programas en web, LETRAS y NUMEROS."" , Cursos de Formación de Profesores. Lectura y escritura de textos literarios en la clase de ELE, Instituto Cervantes, Universidad Europea de Madrid,, 2015.

Hiroto Ueda: 「¥"Razones de la grafía doble en el castellano medieval. Analogías lingüística y paleográfica con ¥"」 , XV Coloquio Internacional de Lingüística Iberorrománica CILIR2015, Rouen, 2015.

---

## 池上 高志・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 人工生命

人工システム（センサーネットワークや、コンピュータプログラム、ロボット）を用いて、自律的な振る舞いや複雑なダイナミクスを研究する。

## 研究業績(2015 年度)

---

## 石川 徹・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 空間－情報－人間の関わり

空間情報学においては数多くの興味深い話題がありますが、なかでも、空間における人間の認知・心理・行動を大きな研究テーマとしています。具体的には、「空間を認識する、感じる、行動する？」と「空間の情報を表現する、伝える、理解する？」という2つを主要なテーマとしています。とくに、私たちが空間の知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識（「頭の中の地図」）の構造について、理論的・応用的側面から研究をおこなっています。また、私たちはどのような居住空間を好ましいと思うのかといった、空間における人間の心理的・感情的側面（環境心理）も重要な研究課題のひとつです。

#### ユビキタスコンピューティングと都市

ユビキタスコンピューティングと空間情報の関わりについても重点を置いて研究をおこなっています。最近では、実空間と仮想空間の結びつきが強まり、場所をキーとして、「いつでも、どこでも、だれでも」が情報を得ることのできる社会の構築が着実に進んでいます。各種ビジュアライゼーションの技法や新しい情報技術の都市空間への応用と、それらを利用する人間の認知・行動の問題に焦点を当て、「いつ」、「どこで」、「どのような人に」、「どのような目的で」、「どのような方法で」情報を提示すれば、居住者にやさしいユビキタス状況認識社会を実現できるかについて考察しています。

#### 都市居住論

都市計画の立場から、都市居住に関わる諸問題について、とくに居住者の意識や心理的側面に焦点を当てて研究をおこなっています。急速に進む少子高齢化により、今後の都市計画は従来の方法からの発想の転換が求められています。都市の縮小にともなうコンパクト化や空地の有効利用、規制型から誘導型の計画への転換などはその代表的な例です。では、都市のコンパクト化を進めるに当たって、さまざまな用途の混在を「適度」に誘導するためのよい方法とはどのようなもののでしょうか？ 居住者による居住満足度の評価や、生活利便性と居住環境保護の心理的トレードオフなどを考慮しながら、多様な居住者にやさしい都市計画を考えることに取り組んでいます。

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

河内萌未, 石川 徹: 「健常高齢者の外出意欲と外出行動の関係に関する研究」, 計画行政, Vol.38, No.3, pp.49-54, 2015 年. 【査読有】

楊 輝彦, 石川 徹: 「住戸配置の規則性がパーソナルスペースの認識と居住空間の親しみに与える影響についての分析」, 都市計画論文集, Vol.50, No.3, pp.303-308, 2015 年. 【査読有】

He, G., Ishikawa, T., & Takemiya, M.: "Collaborative navigation in an unfamiliar environment with people having different spatial aptitudes", Spatial Cognition and Computation, Vol.15, pp.285-307, 2015 年. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Spatial thinking in geographic information science", Annals of the American Association of Geographers, Vol.106, pp.76-95, 2015 年. 【査読有】

### 国際会議等

Takemiya, M., Ishikawa, T., & He, G.: "Guide me through somewhere important: Decision-point salience and collaborative navigation", 23rd ACM SIGSPATIAL International Conference on Advances in Geographic Information Systems (ACM SIGSPATIAL 2015), pp.Article No. 71, 2015. 【査読有】

### その他論文

長竹祐美子, 石川徹: 「ユーザの観光動機を考慮した意外性のある観光地推薦システムの構築」, 東京大学空間情報科学研究センター全国共同利用研究発表大会研究アブストラクト集, p. 25, 2015 年.

## 講演・口頭発表

石川 徹: 「3次元地理空間と空間情報科学」, 国土交通省総合技術開発プロジェクト「3次元地理空間情報を活用した安全・安心・快適な社会実現のための技術開発」平成27年度第2回位置情報基盤ワーキンググループ, 2015. 【一般向け】

石川 徹: 「情報と空間と空間情報科学」, 総合分析情報学シンポジウム2015「総合分析情報学のいま」, 2015. 【一般向け】

Takemiya, M., Ishikawa, T., & He, G.: "Guide me through somewhere important: Decision-point salience and collaborative navigation", 23rd ACM International Conference on Advances in Geographic Information Systems (ACM SIGSPATIAL 2015), 2015.

楊 輝彦, 石川 徹: 「住戸配置の規則性がパーソナルスペースの認識と居住空間の親しみに与える影響についての分析」, 日本都市計画学会第50回学術研究論文発表会, 2015.

長竹祐美子, 石川 徹: 「ユーザの観光動機を考慮した意外性のある観光地推薦システムの構築」, 東京大学空間情報科学研究センター第18回年次シンポジウム・全国共同利用研究発表大会 (CSIS DAYS 2015), 2015.

## 受賞

石川 徹 (共同受賞): 都市住宅学会2015年学会賞・論文賞「郊外都市における高齢者の定住意向と居住満足度についての分析」, 都市住宅学会, 2015年.

Toru Ishikawa: Outstanding Contribution in Reviewing 「The Journal of Environmental Psychology」, Elsevier and the Division of Environmental Psychology of the International Association of Applied Psychology, 2015年.

---

## 石川 徹・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 空間－情報－人間の関わり

空間情報学においては数多くの興味深い話題がありますが、なかでも、空間における人間の認知・心理・行動を大きな研究テーマとしています。具体的には、「空間を認識する、感じる、行動する？」と「空間の情報を表現する、伝える、理解する？」という2つを主要なテーマとしています。とくに、私たちが空間の知識を獲得し、頭の中に記憶し、その知識を利用する一連のプロセスと、得られた知識（「頭の中の地図」）の構造について、理論的・応用的側面から研究をおこなっています。また、私たちはどのような居住空間を好ましいと思うのかといった、空間における人間の心理的・感情的側面（環境心理）も重要な研究課題のひとつです。

## ユビキタスコンピューティングと都市

ユビキタスコンピューティングと空間情報の関わりについても重点を置いて研究をおこなっています。最近では、実空間と仮想空間の結びつきが強まり、場所をキーとして、「いつでも、どこでも、だれでも」が情報を得ることのできる社会の構築が着実に進んでいます。各種ビジュアライゼーションの技法や新しい情報技術の都市空間への応用と、それらを利用する人間の認知・行動の問題に焦点を当て、「いつ」、「どこで」、「どのような人に」、「どのような目的で」、「どのような方法で」情報を提示すれば、居住者にやさしいユビキタス状況認識社会を実現できるかについて考察しています。

## 都市居住論

都市計画の立場から、都市居住に関わる諸問題について、とくに居住者の意識や心理的側面に焦点を当てて研究をおこなっています。急速に進む少子高齢化により、今後の都市計画は従来の方法からの発想の転換が求められています。都市の縮小にともなうコンパクト化や空地の有効利用、規制型から誘導型の計画への転換などはその代表的な例です。では、都市のコンパクト化を進めるに当たって、さまざまな用途の混在を「適度」に誘導するためのよい方法とはどのようなもののでしょうか？ 居住者による居住満足度の評価や、生活利便性と居住環境保護の心理的トレードオフなどを考慮しながら、多様な居住者にやさしい都市計画を考えることに取り組んでいます。

## 研究業績(2015年度)

## 雑誌論文

河内萌未, 石川 徹: 「健常高齢者の外出意欲と外出行動の関係に関する研究」, 計画行政, Vol.38, No.3, pp.49-54, 2015 年. 【査読有】

楊 輝彦, 石川 徹: 「住戸配置の規則性がパーソナルスペースの認識と居住空間の親しみに与える影響についての分析」, 都市計画論文集, Vol.50, No.3, pp.303-308, 2015 年. 【査読有】

He, G., Ishikawa, T., & Takemiya, M.: "Collaborative navigation in an unfamiliar environment with people having different spatial aptitudes", Spatial Cognition and Computation, Vol.15, pp.285-307, 2015 年. 【査読有】

Ishikawa, T.: "Spatial thinking in geographic information science", Annals of the American Association of Geographers, Vol.106, pp.76-95, 2015 年. 【査読有】

## 国際会議等

Takemiya, M., Ishikawa, T., & He, G.: "Guide me through somewhere important: Decision-point salience and collaborative navigation", 23rd ACM SIGSPATIAL International Conference on Advances in Geographic Information Systems (ACM SIGSPATIAL 2015), pp.Article No. 71, 2015. 【査読有】

## その他論文

長竹祐美子, 石川徹: 「ユーザの観光動機を考慮した意外性のある観光地推薦システムの構築」, 東京大学空間情報科学研究センター全国共同利用研究発表大会研究アブストラクト集, p. 25, 2015 年.

## 講演・口頭発表

石川 徹: 「3次元地理空間と空間情報科学」, 国土交通省総合技術開発プロジェクト「3次元地理空間情報を活用した安全・安心・快適な社会実現のための技術開発」平成 27 年度第 2 回位置情報基盤ワーキンググループ, 2015. 【一般向け】

石川 徹: 「情報と空間と空間情報科学」, 総合分析情報学シンポジウム 2015「総合分析情報学のいま」, 2015. 【一般向け】

Takemiya, M., Ishikawa, T., & He, G.: "Guide me through somewhere important: Decision-point salience and collaborative navigation", 23rd ACM International Conference on Advances in Geographic Information Systems (ACM SIGSPATIAL 2015), 2015.

楊 輝彦, 石川 徹: 「住戸配置の規則性がパーソナルスペースの認識と居住空間の親しみに与える影響についての分析」, 日本都市計画学会第 50 回学術研究論文発表会, 2015.

長竹祐美子, 石川 徹: 「ユーザの観光動機を考慮した意外性のある観光地推薦システムの構築」, 東京大学空間情報科学研究センター第 18 回年次シンポジウム・全国共同利用研究発表大会 (CSIS DAYS 2015), 2015.

## 受賞

石川 徹 (共同受賞): 都市住宅学会 2015 年学会賞・論文賞「郊外都市における高齢者の定住意向と居住満足度についての分析」, 都市住宅学会, 2015 年.

Toru Ishikawa: Outstanding Contribution in Reviewing 「The Journal of Environmental Psychology」, Elsevier and the Division of Environmental Psychology of the International Association of Applied Psychology, 2015 年.

---

## 石崎 雅人・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 専門家社会におけるコミュニケーション・デザイン

専門家社会において、より良い意思決定を行うためのコミュニケーションのあり方について研究をすすめている。専門家と非専門家を対立させる見方で常に問題となってきたのが paternalism (温情的庇護主義) であった。この問題に対して、理論的には、専門家、非専門家それぞれが参加して意思決定をすることが望ましいが、現実に paternalism の問題を解消するものとして提案とされるのは、consumerism (消費者/非専門家至上主義) であった。consumerism が paternalism の問題点を解消できる面があることは否定できないが、それは、専門家に対して専門の能力を超えた要求に結びつくことがあり、専門家の能力を十全に活

用できない問題があった。本研究では、医療、介護、司法など分野における専門家と非専門家の共同意思決定のあり方について、コミュニケーション・デザインの問題としてアプローチする。

## 医療コミュニケーションにおける共同意思決定

ケア学において、ケアする側とケアされる側がどのような関係にあるべきかという問題は、より良いケアを考える上で中心的課題である。本研究は、理想的な関係とされる共同意思決定に焦点をあて、ケアコミュニケーションの中の医師と患者のコミュニケーションを対象として、その実態の解明を行う。具体的には、共同意思決定の概念、共同意思決定への医師・患者の意識、共同意思決定コミュニケーション過程の具体的なあり方、情報環境等の要因の共同意思決定過程への影響を明らかにすることにより、ケア学、医療コミュニケーション研究へ実証的な観点からの貢献を行うことを目的とする。

## 介護コミュニケーションにおける多主体協働

介護とは、高齢者が「生きる」ことを支援する活動であり、家族とともに、多くの専門家がかかわる。介護職員（訪問介護員（ホームヘルパー）を含む）、介護支援専門員（ケアマネジャー）、生活相談員・支援相談員、理学療法士（PT）、作業療法士（OT）、言語聴覚士（ST）、看護職員、医師、弁護士や司法書士まで関係し得る。このような専門分化は、介護の問題を整理して検討することを可能にする利点がある反面、関係者が多すぎることは単に1対1のコミュニケーションだけを考えればよいのではなく、問題に関係する当事者への配慮や調整を必要とするという意味でコミュニケーションを難しくする。たとえば、高齢者本人と家族の希望が異なる場合、介護支援専門員は、両者の希望を調整しなければいけない。また、高齢者本人と良い関係をつくっている介護職員は、本人の希望が医療の観点からは望ましいものでない場合、本人と医療者の間で悩むことになる。本研究では、介護コミュニケーション研修に紛争解決の手法として発展してきたメディエーションの考え方にもとに、介護に関する多主体間のより良いコミュニケーションのあり方について検討する。

## 研究業績(2015年度)

### 雑誌論文

野山広・杉澤経子・吉富志津代・石崎雅人・花崎攝：「ウェルフェア・リングイスティクスと調査研究—現場性・実践性という観点から—」, 社会言語科学, Vol.18, No.2, pp.82-87, 2015年.

石崎雅人：「プロとしての実力と矜持を持って互いの信頼を得る」, DRUG MAGAZINE, Vol.59, No.1, pp.25-28, 2015 年. 【一般向け】

## **講演・口頭発表**

石崎雅人：「専門家社会におけるコミュニケーションの位相」, 第 11 回仲裁 ADR 法学会, 2015. 【招待講演】

伊藤萌子・石崎雅人：「クラシックバレエ鑑賞における経験者と未経験者の違いの分析—視覚パターンと言語的印象の観点から—」, 第 67 回舞踊学会大会, 2015.

大坪陽子・石崎雅人・浦松雅史・和田淳・三木保：「現場の医療職がインシデントレポートを書くということ」, 第 10 回医療の質と安全学会学術集会, 2015.

辛昭静・石崎雅人：「診療場面における医師の丁寧表現不使用に対する日本人患者と韓国人患者の意識比較」, 社会言語科学会第 36 回大会, 2015.

石崎雅人：「介護トラブルとメディエーション（ディスカッサント）」, 介護トラブルの協調的解決方法-メディエーション-, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

---

## **板倉 聖哲・教授**

**研究テーマ(主たるもの)**

**研究業績(2015 年度)**

---

## **大島 まり・教授**

**研究テーマ(主たるもの)**

## 医用画像に基づく血管循環系のマルチスケール・マルチフィジックス解析

本研究は血管病変の発症, 進行に関わる流体力学的な要因を数値解析により解明することを目的としている. 実際の生体内を再現したモデルや境界条件を採用するために, ここでは CT や MRI などの医用画像から抽出した血管形状モデルを用い, 末梢血管網など循環系全体の影響を考慮した境界条件を導出・適用した大規模血流解析システムを構築している. さらに血流および血管壁内での物質輸送・透過モデルを取り入れ, 悪玉コレステロールなどの病変に関わる物質の血管壁内への蓄積についても予測を行っている.

## 血流と血管壁の相互作用を考慮した連成解析と in vitro モデルを用いた可視化計測

本研究では脳動脈瘤の発生・成長のメカニズムの解明を目的とし, 血流によって変形する血管壁の力学応答メカニズムを考慮した数値解析を行うとともに, in vitro モデル実験による結果と比較することで評価を行っている. 医用画像から再構築した脳動脈瘤モデルを対象として, 数値解析では血管壁を超弾性体とした流体構造連成解析を行い, 実験では速度 3 成分のデータをえられるステレオ PIV という計測手法を用い, 内部の流動構造と血管壁の挙動, およびそれらの相互作用を評価している.

## 共焦点 Micro PIV による微小流路内混相流の可視化計測

微小血管を流れる赤血球やマイクロ分析チップのような微小流体デバイスの内部の混相流を可視化計測するツールとして, 共焦点マイクロ PIV システムを開発している. 本手法は, 流れの中にトレーサ粒子と呼ばれる微小な蛍光ビーズを混濁させ, 共焦点スキャナ・特殊な蛍光顕微鏡・高感度高速度カメラを用いて流れを撮影し, 得られた画像を PIV 解析処理を用いて速度分布を求める. 共焦点マイクロ PIV を用いることで, マイクロサイズの微小領域における 3 次元的な流れの様子を定量的に知ることができる. ¥¥n

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

大島まり, 川越至桜, 石井和之: 「大学と企業の共働によるアウトリーチ活動を基盤とした STEM 教育」, 科学研究, Vol.vol.39, No.No.2, pp.pp.59-66, 2015 年. 【査読有】

T.Akai,K.Hoshina,S.Yamamoto,H.Takeuchi,Y.Nemoto,M.Oshima,K.Shigematsu,T.Miyata,H.Yamauchi,M.Ono,T.Watanabe: 「Biomechanical Analysis of an Aortic Aneurysm Model and Its Clinical

Application to Thoracic Aortic Aneurysms for Defining “Saccular” Aneurysms」, Journal of the American Heart, Vol.doi: 10.1161, 2015 年. 【査読有】

K.Yokoyama,M.Oishi,M.Oshima : 「Development of a compact label-free small molecule measurement system using a periodically nanostructured sensor substrate」, RSC Advances , Vol.DOI: 10.1039, pp.8014-8021, 2015 年. 【査読有】

K.Yokoyama,M.Oishi,M.Oshima: 「Development of an enhanced surface plasmon resonance sensor substrate by investigating a periodic nanohole array configuration」, Journal of Applied Physics, Vol.118, pp.023101, 2015 年. 【査読有】

F.Liang,M.Oshima,H.Huang,H.Liu,S.Takagi: 「Numerical Study of Cerebroarterial Hemodynamic Changes Following Carotid Artery Operation: A Comparison Between Multiscale Modeling and Stand-Alone Three-Dimensional Modeling」, Journal of Biomechanical Engineering, Vol.vol.137, issue.10, 2015 年. 【査読有】

H.Zhang,N.Fujiwara,M.Kobayashi,S.Yamada,F.Liang,S.Takagi,M.Oshima: 「Development of a numerical method for patient-specific cerebral circulation using 1D-0D simulation of the entire cardiovascular system with SPECT data」, Annals of biomedical engineering, Vol.doi:10.1007, pp.s10439-015-1544-8, 2015 年. 【査読有】

X-B.Li,M.Oishi,M.Oshima,F-C.Li,S-J.Li: 「Measuring Elasticity-induced Unstable Flow Structures in a Curved Microchannel Using Confocal Micro Particle Image Velocimetry」, Experimental Thermal and Fluid Science, Vol.75, pp.118-128, 2015 年. 【査読有】

Y.Ohhara,M.Oshima,T.Iwai,H.Kitajima,Y.Yajima,K.Mitsudo,A.Krady,I.Tohnai: 「Investigation of blood flow in the external carotid artery and its branches with a new 0D peripheral model」, BioMedical Engineering Online, Vol.doi: 10.1186, pp.s12938-016-0133-x, 2015 年. 【査読有】

大島まり: 「血液循環系の流体力学」, パリテイ, Vol.31, No.1, pp.33-35, 2015 年. 【査読有】

Masaharu Kobayashi, Katsuyuki Hoshina, Sota Yamamoto, Youkou Nemoto, Takafumi Akai, Kunihiro Shigematsu, Toshiaki Watanabe, Marie Ohshima: "Development of an Image-Based Modeling System to Investigate Evolutional Geometric Changes of a Stent Graft in an Abdominal Aortic Aneurysm", Circulation Journal, Vol.79, No.7, pp.1534-1541, 2015 年. 【査読有】

## 国際会議等

S.Yauchi,K.Niki,M.Sugawara,L.Fuyou,M.Oshima: "Comparison of Blood flows determined by a Computational Model and measured by Ultrasonography", 15th International Congress of Biorheology, 2015. 【査読有】

Hao Zhang, Masaharu Kobayashi, Shigeki Yamada, Fuyou Liang, Shu Takagi, Marie Oshima: "Patient-specific modeling blood flow in the Circle of Willis to compare the 1D simulation with 3D simulation", CMBE2015, pp.118-121, 2015. 【査読有】

Xiao-Bin Li, Masamichi Oishi, Marie Oshima, Feng-Chen Li, Song-Jing Li: "On the 3D structure of elasticity-induced unstable flow in the curved microchannel by using confocal micro-PIV and polarized camera", ICNMM2015, 2015. 【査読有】

Xiao-Bin Li, Masamichi Oishi, Tsukasa Matsuo, Feng-Chen Li, Marie Oshima: "Measurement of 3D flow structure of viscoelastic fluid using digital holographic microscope", ASME-JSME-KSME Joint Fluids Engineering Conference, 2015. 【査読有】

M. Oshima, M. Kobayashi, H. Zhang and S. Yamada: "Multi-domain blood flow simulation using multimodal image data", THMT¥, Vol.8, 2015. 【査読有】

S. K. Kawagoe, A. Yamabe, M. Oshima, K. Ishii: "STEM Education Based on Outreach Programs by Cooperating with Industry", 10th seatuc symposium, 2015. 【査読有】

Masaharu Kobayashi, Atushi Harada, Hao Zhang, Shigeki Yamada, Masamichi Oishi, Marie Oshima: "Development of an integrated 1D-0D simulation system for patient specific cerebral circulation", Interdisciplinary Cerebrovascular Symposium Intracranial Stent Meeting, 2015. 【査読有】

Masamichi Oishi, Haruyuki Kinoshita, Teruo Fujii and Marie Oshima: "Investigation of micro droplet formation mechanism using confocal micro-PIV measurement", 11th International Symposium on Particle Image Velocimetr, 2016. 【査読有】

## その他論文

大島まり: 「病気の治療をコンピュータが助ける」, わくわくサイエンスナビシリーズ 3 「私たちの未来はロボットとともにある!」, 2015 年. 【一般向け】

大島まり: 「拡がるエンジニアリングの裾野とシミュレーション技術の進化」, シミュレーション, 2015 年.

大島まり: 「理科教育を通じた次世代グローバル人材の育成」, 教室の窓 vol.46, 2015 年.

## 講演・口頭発表

Yuya Sato, Sota Yamamoto, Marie Oshima, Katsuyuki Hoshina: "BENDING STIFFNESS OF STENT GRAFT BY 4-POINT BENDING TEST", 10th seatuc symposium, 2015.

山田 茂樹、大島 まり、小林 匡治、張 浩、原田 篤、渡邊 芳彦、三宅 英則、山本 一夫: 「無症候性頸動脈狭窄に対する血行力学的脳梗塞リスク予測」, 第 24 回日本脳ドック学会総会, 2015.

木下晴之, 榊原隆, 大島まり, 藤井輝夫: 「マイクロハイドロリックソフトアクチュエータの基盤技術の構築」, 第 16 回公益社団法人計測自動制御学会システムインテグレーション部門講演会, 2015.

川越至桜、大島まり、石井一之: 「最先端研究を取り入れた産学連携における科学技術教育と教材開発」, CG・可視化研究会, 2015.

川越至桜、大島まり、石井一之: 「最先端研究を取り入れた産学連携における科学技術コミュニケーション」, 第 12 回科学コミュニケーション研究会, 2015.

張浩, 藤原直哉, 小林匡治, 山田茂樹, 梁夫友, 高木周, 大島まり: 「SPECT データを用いた 1D-0D シミュレーションによる脳循環に関する検討」, 日本流体力学会年会, 2015.

森田佳士之, 大石正道, 松尾司, 大島まり, 藤井輝夫: 「Digital Holographic Microscopy による位相情報を用いた粒子位置の三次元計測」, 可視化情報全国講演会 (京都 2015) , 2015.

大石 正道, 木下 晴之, 藤井 輝夫, 大島 まり: 「共焦点マイクロ PIV 計測によるマイクロ液滴生成機構の力学的考察」, 日本流体力学会年会 2015, 2015.

Hao Zhang, Naoya Fujiwara, Masaharu Kobayashi, Shigeki Yamada, Fuyou Liang, Shu Takagi, Marie Oshima: "Investigation of Cerebral Circulation Using a 1D-0D Simulation with the SPECT data", 日本流体力学会年会 2015, 2015.

Shiori Yauchi, Kiyomi Niki, Marie Ohshima, Motoaki Sugawara: 「全身循環シミュレーションを用いた四肢動脈の血流解析」, 第 54 回日本生体工学会, 2015.

大島まり: 「これからの時代を生きる力の育成」, 平成 27 年度教育施策連絡協議会, 2015. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「拡がるエンジニアリングのすそ野と女性エンジニア」, 2015 年第 4 回 JWSE 分科会, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「拡がる工学のすそ野 -工学でバイオする」, 奈良県立北高等学校理数科サイエンスミーティング, 2015. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「SSH 自主探究入門『研究の進め方・まとめ方』講座」, 日比谷高校講演会, 2015. 【招待講演】

Marie Oshima: "Mechanobiology and modeling of atheroma plaque formation and development", CMBE2015, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「バイオを工学する」, サタデーサイエンス (横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校), 2015. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「血液の流れと病気について」, 「創造性の育成塾」講義, 2015. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「思考力を培うための教育とは -連携による新たな取組-」, 大学入試改革対応先取りセミナー, 2015. 【招待講演】【一般向け】

大島まり: 「予測医療とデジタルホログラフィックを用いた血球挙動のマイクロ 3 次元計測」, 三菱財団研究成果報告会, 2015. 【招待講演】

Marie Oshima: "A computational study of the effects of carotid artery surgery on cerebral circulation", ICCB2015, 2015. 【招待講演】

Marie Oshima: "Multi-domain blood flow simulation using multimodal image data", THMT¥, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「予測医療のためのシミュレーションと医用画像の統合システムの開発」, ユーザーカンファレンス 2015, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「女子高校生のための進路選択支援フォーラム ～なりたい自分って何?～」, 女子高校生のための進路選択支援フォーラム, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

大島まり: 「予測医療を目指した循環器系統合シミュレーション」, 東大精研会 ビジネス研究会, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「女性研究者のしごと」, 兵庫県立大学女性研究者支援室 総括シンポジウム, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

Marie Oshima: "A new challenge: Applications of simulation to clinical study", CODE2015, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「STEM 教育を通じたイノベーションを創造する人材育成」, 日本生物教育学会 第 100 回 全国大会, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「予測医療に向けた循環器系シミュレーションと次世代人材育成の為の STEM 教育」, 日本 MIT 会 2016 年度年次総会, 2015. 【招待講演】

大島まり: 「理科から科学技術へ -夢を形にする工学-」, H27 年度滋賀県立膳所高校 生徒課題研究発表会・SSH 事業報告会, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

## 新聞・報道

大島まり: 「先端科学、出前授業で学ぶ」, 朝日新聞（朝刊、奈良版）, 2015.

大島まり: 「9月10日（木）研究成果報告会開催」, 三菱財団ニュースレター, 2015.

大島まり: 「インタープリターズ・バイブル第 104 回「科学技術も見た目が決まる」」, 東京大学学内広報, 2015.

## 受賞

大島まり: 日本機械学会計算力学部門賞 業績賞「distinguished achievements in the field of computational mechanics」, 日本機械学会, 2015 年.

## 影浦 峡・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

翻訳教育プラットフォームの開発と翻訳知の明確化

記号の物質的拘束性と学習

ターミノロジー

### 研究業績(2015 年度)

#### 分担著書

影浦峡: 「翻訳の社会的意味 (『意味の社会性』)」, 澤田治美 編, ひつじ書房, 2015 年.

Ray Miyata, Anthony Hartley, Kyo Kageura and Cécile Paris: "¥", Nepal, S. et al. 編, Springer, 2015 年.

#### 国際会議等

Shuntaro Yada and Kyo Kageura: "Identification of tweets that mention books: An experimental comparison of machine learning methods", ICADL, 2015. 【査読有】

---

## 金森 修・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

フランスの現代哲学

フランスの20世紀哲学の研究。具体的にはベルクソン、バシュラール、カンギレム、フーコー、ドゥルーズなど。

## 生政治・生権力論

現代の生命科学とフランスの現代哲学との交叉地点で生じる問題群を扱う。主にフーコー、アガンベンらの研究を参考にしながら、現代の生政治・生権力のありようをみる

## 美的思考の思想史

科学思想史の知識基盤を背景に、美学・芸術学の伝統に接近し、科学文化論的な観点から人間の美的表象、美的表現についての考察をする

## 研究業績(2015年度)

---

## 河口 洋一郎・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### CGによるメカニク造形研究

・生き物のように反応するメカニクな立体造形の研究¥r¥n・進化生物の挙動（遊泳、歩行、飛翔）のメカニク・シミュレーション研究¥r¥n・3Dプリンター等を応用したデジタルものづくりによる伝統的匠の未来化の研究（ガラス造形、焼き物、着物、木彫、他）¥r¥n

#### 情感的なジェモーション (Gemotion) によるインタラクション研究

・ロボティクに反応する凹凸ジェモーションディスプレイ研究¥r¥n・伝統芸能との融合による反応する舞台のジェモーション・パフォーミングアーツ研究

## 自己増殖する複雑系のグロースモデル（Growth Model）による超高精細 CG 映像研究

・ 8 K ウルトラ H D T V による超高精細 C G 映像表現の研究  
・ 自己増殖する複雑系グロースモデルの造形研究  
・ 流体・粒子によるシミュレーション研究

### 研究業績(2015 年度)

---

## 北田 暁大・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本メディア史の実証的研究

広告、映画、新聞など近代のコミュニケーション文化において重要な役割を果たしてきたメディアを、歴史社会学的な手法で分析している。その成果を公刊したものとして、『広告の誕生』（2000 年、岩波書店）、『＜意味＞への抗い』（2004 年、せりか書房）などがある。

#### 若者のコミュニケーション研究

現代若者たちのコミュニケーションの変容を、「保守化」傾向や「バックラッシュ」などの現象とあわせ、メディアの果たす役割に着目しつつ分析している。その成果を公刊したものとして、『広告都市・東京』（2002 年、廣済堂出版）、『嗟う日本の「ナショナリズム」』（2005 年、NHK 出版）などがある。

#### 理論社会学、コミュニケーション理論についての基礎的研究

「行為の同定問題」、「行為（者）責任の生成メカニズム」など社会学基礎論にかかわるテーマについて、政治哲学、倫理的行為論なども射程に入れつつ、考察を加えている。その成果を公刊したものとして『責任と正義』（2003 年勁草書房）がある。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 倉田 博史・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

##### Euclid 距離行列の順序構造

$p$ 次元空間に  $n$  個の点が与えられたとき、各点間の距離を  $n \times n$  非負対称行列の形で表現出来ることは明らかである。この逆が成立するとき、すなわち、 $n \times n$  非負対称行列が与えられたときに、それを相互距離として持つ  $n$  個の点が適当な次元の Euclid 空間に存在するとき、その非負対称行列を Euclid 距離行列呼ぶ。統計学では、多次元尺度構成法などで用いられる概念である。本研究では、Euclid 距離行列の順序構造を調べている。

##### 多変量確率分布の Principal Points

平均は、確率分布を1つの点で要約する量として最も自然なものであろう。平均は最小2乗値でもある。より一般に、確率分布を複数個 ( $k$  個) の点で要約しようとするならば、どのような点の集合が選ばれるべきか。この問いに対する一つの答として、principal points (主点)があり、これは最小2乗原理を応用することによって得られる。本研究では、複数個の確率分布の混合として得られる多変量確率分布の principal points の性質を調べている。

##### 群不変性統計理論

群論特に変換群や不変積分の概念を統計学に応用することにより、不変検定、共変推定、確率不等式などの分野を中心に数多くの有用な事実が導かれてきた。これらは群不変性統計理論と呼ばれる。本研究では、「群によって誘導される順序(group induced ordering)」の概念を用いて、ある種の相関行列の性質を議論している

## 研究業績(2015 年度)

---

## 雑誌論文

Hiroshi Kurata and Ravindra B. Bapat: "Moore-Penrose inverse of a Euclidean distance matrix", Linear Algebra and its Applications, Vol.472, pp.106-117, 2015 年. 【査読有】

Hiroshi Kurata and Pablo Tarazaga : "The cell matrix closest to a given Euclidean distance matrix", Linear Algebra and its Applications, Vol.485, pp.194-207, 2015 年. 【査読有】

Shun Matsuura, Hiroshi Kurata and Thaddeus Tarpey: "Optimal estimators of principal points for minimizing expected mean squared distance", Journal of Statistical Planning and Inference, Vol.167, pp.102-122, 2015 年. 【査読有】

---

## 倉田 博史・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### Euclid 距離行列の順序構造

$p$ 次元空間に  $n$  個の点が与えられたとき、各点間の距離を  $n \times n$  非負対称行列の形で表現出来ることは明らかである。この逆が成立するとき、すなわち、 $n \times n$  非負対称行列が与えられたときに、それを相互距離として持つ  $n$  個の点が適当な次元の Euclid 空間に存在するとき、その非負対称行列を Euclid 距離行列呼ぶ。統計学では、多次元尺度構成法などで用いられる概念である。本研究では、Euclid 距離行列の順序構造を調べている。

#### 多変量確率分布の Principal Points

平均は、確率分布を1つの点で要約する量として最も自然なものであろう。平均は最小2乗値でもある。より一般に、確率分布を複数個 ( $k$  個) の点で要約しようとするならば、どのような点の集合が選ばれるべきか。この問いに対する一つの答として、principal points (主点)があり、これは最小2乗原理を応用することによって得られる。本研究では、複数個の確率分布の混合として得られる多変量確率分布の principal points の性質を調べている。

## 群不変性統計理論

群論特に変換群や不変積分の概念を統計学に応用することにより、不変検定、共変推定、確率不等式などの分野を中心に数多くの有用な事実が導かれてきた。これらは群不変性統計理論と呼ばれる。本研究では、「群によって誘導される順序(group induced ordering)」の概念を用いて、ある種の相関行列の性質を議論している

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

Hiroshi Kurata and Ravindra B. Bapat: "Moore-Penrose inverse of a Euclidean distance matrix", Linear Algebra and its Applications, Vol.472, pp.106-117, 2015 年. 【査読有】

Hiroshi Kurata and Pablo Tarazaga : "The cell matrix closest to a given Euclidean distance matrix", Linear Algebra and its Applications, Vol.485, pp.194-207, 2015 年. 【査読有】

Shun Matsuura, Hiroshi Kurata and Thaddeus Tarpey: "Optimal estimators of principal points for minimizing expected mean squared distance", Journal of Statistical Planning and Inference, Vol.167, pp.102-122, 2015 年. 【査読有】

---

## 越塚 登・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### Ubiquitous Computing, IoT (Internet of Things)

Ubiquitous Computing、IoT (Internet of Things) は、生活空間の様々なところに埋め込まれたコンピュータが、現実世界の状況を認識し、認識した情報に基づき協調動作等を行いながら、人間生活をサポートする情報技術である。21 世紀になり、Post-Internet、Post-Personal Computing の、Leading Concept として世界的に注目を集めている。Ubiquitous Computing は、様々な研究領域の成果を総合的に組み合わせて

初めて構築することができる高度な情報技術である。これらの要素技術には、RFID (Radio Frequency Identification)、Sensor Network、Smart Card、Secure Computing、Embedded Realtime System、Context-aware Computing、Augmented Reality/Mixed Reality、Wireless Communication 等があるが、これらのテーマに関して研究を進めている。

## Embedded Realtime Systems

Embedded Realtime System は、様々な「モノ」や「場所」に組み込むコンピュータのための基盤技術である。技術的には、実世界の動きに追従するリアルタイム性や、コンパクトな実装、高い信頼性などが求められる。また、現在では、我が国を代表する様々な電子機器製品を支える技術にもなっており、当研究室で坂村教授とともに生み出した TRON や、その最新版である T-Kernel は、両方を合わせると、我が国の組み込みリアルタイム OS のシェアの約半数程度を占めると考えられている。当研究室では主に、Kernel や OS を主とした、基盤ソフトウェアの研究を行っている。これらの研究成果や、標準カーネルである T-Kernel、より小型のワンチップマイコン向けの  $\mu$ T-Kernel、ファイルシステムなどの高水準ミドルウェアを備えた T-Kernel Standard Extension、マルチコア向けの MP T-Kernel などの研究開発を行い、これらの成果は、T-Engine フォーラムから、オープンソースとして、世界中に配布され利用されている。

## Open Data

Open Data は、主に公益性の高いデータを、技術的にライセンス的にも、再利用しやすい形で、特に大きな利用制限などをつけずに公開することである。近年、世界的にもオープンデータの動きが進み、我が国でも一般的になってきており、政府を中心として多くの Open Data リリースされるようになってきた。Open Data を活用するためには、技術的に Linked Data や Semantic Web や、database に取り組み必要がある。また、社会的には、自由に利用できるためのライセンスが重要である。また、このオープンデータの仕組みを活用して、本来は政府自治体が提供するような、公共性の高い情報サービスの開発をクラウドソーシングすることによって、行政コストの軽減や効率化を実現する、新しいオープンガバメントの在り方も重要である。

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

坂村健、暦本純一、越塚登、中尾彰宏：「コンピューターがネットと出会ったら：モノとモノがつながりあう世界へ」，坂村健 編，角川書店，2015 年。

越塚登、他：「よくわかる社会情報学（やわらかアカデミズム・わかるシリーズ）」，西垣通、伊藤守 編，ミネルバ書房，2015 年.

## 国際会議等

X. H. Peng, M. Bessho, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "DCRDL: An Energy Management Rule Definition Language for Context-based Device Control in Smart Buildings", 41st Annual Conference of the IEEE Industry Electronics Society (IECON 2015), pp.279~285, 2015. 【査読有】

X. H. Peng, M. Bessho, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "EPDL: Supporting Context-based Energy Control Policy Design in IoT-enabled Smart Buildings", 2015 IEEE International Conference on Data Science and Data Intensive Systems (DSDIS), pp.297~303, 2015. 【査読有】

X. H. Peng, M. Bessho, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "The Design and Implementation of a Context-based Energy Management Policy Description Language", TRON Symposium 2015, pp.9~12, 2015. 【査読有】

Syafril Bandara, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Predicting Collective User Preference for Optimal Comfort Level in Smart Buildings", IEEE Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2015), pp.7~11, 2015. 【査読有】

Chaochaisit, W., Kim, J.E., Bessho, M., Koshizuka, N., and Sakamura, K: "Evaluating Spatial Influence of Physical Visualizations in Public Settings", Workshop "SenCity2: Visualizing the Hidden Pulse of a City" at UbiComp 2015, 2015. 【査読有】

Kim, J. E., Bessho, M., Koshizuka, N., and Sakamura, K.: "Navigating Visually Impaired Travelers in a Large Train Station Using Smartphone and Bluetooth Low Energy", 2016 ACM Symposium on Applied Computing, 2015. 【査読有】

Hangli Ge, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Model Design of Generating Path with Accessibility Semantics for Assisting Indoor Mobility", 8th IEEE International Conference on Cyber, Physical and Social Computing (CPSCoM 2015), 2015. 【査読有】

Wirawit Chaochaisit, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Human Localization Sensor Ontology: Enabling OWL 2 DL-Based Search for User¥", 2016 IEEE Tenth International Conference on Semantic Computing (ICSC), pp.107-111, 2016. 【査読有】

T. Shimada, T. Yashiro, N. Koshizuka, and K. Sakamura: "A Real-Time Hypervisor for Embedded Systems with Hardware Virtualization Support", in Proc. TRON Symposium 2015, Tokyo, December pp. 9-12, 2015. 【査読有】

## その他論文

越塚登：「東京大学展から学ぶ」, 淡青評論, 2015. 【一般向け】

越塚登：「論説：高速道路とIoT」, 高速道路と自動車, 第59巻, 第3号, 2016年3月. 【一般向け】

越塚登：「ICTを活用した歩行者移動支援」, 人と国土 21, 2016年3月. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

越塚登：「オープンデータとGov. 2.0」, 豊島区研修, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

越塚登：「新しい情報通信基盤としてのIoT (Internet of Things) とその産業利用」, 日本機械学会生産システム部門：インターネットを活用した「つながる工場」における生産技術と生産管理イノベーション研究分科会、第4回分科会講演「新しい情報通信基盤としてのIoT (Internet of Things) とその産業利用」, 2015. 【招待講演】

越塚登：「情報通信技術と放送コンテンツ」, 総務省「地方発の放送コンテンツ発信力強化に向けたシンポジウム」パネリスト, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

越塚登：「オープンデータと場所情報地域プラットフォーム「ココシル」による地域課題への取組」, 日本マイクロソフト社 ¥"CityNext ソリューションフォーラム 2015, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

越塚登：「組込みリアルタイムシステム入門：リアルタイムシステムとリアルタイムOSの概要」, T-Kernel / ITRON 入門, T-Engine フォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登：「ucode、IoT、Open and Big Data」, 日本土木学会 土木情報学委員会 センサ利用技術小委員会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「リアルタイム OS 概要とμT-Kernel の基本機能解説」, μT-Kernel 入門, T-Engine フォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

坂村健, 越塚登, 中尾彰宏: 「あらゆるモノがネットにつながる IoT 時代の常識とは～住居・交通・医療が変わる～」, 第 8 回 角川インターネット講座「THE SALON」, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

越塚登: 「IoT (Internet of Things) の現状と課題」, ソフトピアジャパン IT 研修「モノのインターネット『IoT』」セミナー～IoT から生まれる新しいビジネスチャンス～, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, μT-Kernel 入門・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, μT-Kernel 入門・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「オープンデータの最新動向」, オープンデータ利活用セミナー・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, 組込みリアルタイムシステム入門 (T-Kernel 2.0 入門) ・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, ITRON 初級編・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「すぐに始められる ucode を用いた食品トレーサビリティシステム」, 食品トレーサビリティ講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, T-Kernel/ITRON 入門・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「RTOS を使ったリアルタイムシステム開発手法入門」, ITRON 中級編・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, μT-Kernel 入門・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」, 組込みリアルタイム OS 入門( $\mu$ T-Kernel 入門)・トロンフォーラム講習会, 2015. 【招待講演】

越塚登: 「組込みリアルタイムシステム入門」,  $\mu$ T-Kernel 入門・トロンフォーラム講習会, 2016. 【招待講演】

越塚登: 「楽しい電子工作とプログラミング」, 春休み子供向け電子工作セミナー in 東大・トロンフォーラム講習会, 2016. 【招待講演】

## 新聞・報道

越塚登: 「データを解き放て 組織や人を結びつけるオープンデータの活用で社会がもっと豊かに」, 日本マイクロソフト The Lounge, <http://www.microsoft.com/enterprise/ja-jp/the-lounge/articles/opendata.aspx#fbid=L1bA2sW5KxW>, 2015.

越塚登: 「誰でも使えるオープンデータは宝の山: アイデア次第でビジネスが大きく広がる」, 日経新聞 Topline, <http://ps.nikkei.co.jp/mstopline4/opendata/>, 2015.

越塚登: 「2014 TRON Symposium —TRONSHOW— 講演・セッション Report: 公共交通オープンデータ」, 特集1 オープンデータの最新事情」, TRONWARE Vol. 153, 2015.

越塚登: 「2014 TRON Symposium —TRONSHOW— 講演・セッション Report: 日経 BP 特別セッション: IoT、ビッグデータで拓く産業の未来」, 特集1 オープンデータの最新事情」, TRONWARE Vol. 153, 2015.

---

## 坂村 健・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### TRON (The Real-time Operating system Nucleus)

リアルタイムオペレーティングシステム(RTOS)はコンピュータ組込システム構築の際に最も中核となる基本ソフトウェアである。本研究では、RTOSの基礎研究であるリアルタイムスケジューラのアルゴリズムやアーキテクチャ設計など、基礎分野の研究から、RTOSの開発環境、応用システムまで幅広く研究をすすめている。1980年から20年以上にわたり進めているライフワーク的な研究となっており、TRONは現在、携帯電話や車のエンジン制御、デジタルカメラ、電子辞書、レーザープリンタなど多くの機器で使われている。基本哲学はオープンアーキテクチャで、誰でもフリーでソースコードまで含み利用できる。2010年6月に7年かけて地球に帰還した宇宙航空研究開発機構(JAXA)の小惑星探査機「はやぶさ」の制御にもTRONが使われている。

## Ubiquitous Computing

コンピュータを身の回りのあらゆるものに埋め込み、それらをネットワークで結び、互いに協調動作させることで、人間生活をあらゆる面から支援するコンピュータシステム、ユビキタスコンピューティングの考え方や手法を1980年初頭に提唱し、研究を進めてきた。これは、現在ではユビキタスコンピューティングやIoT(Internet of Things)と呼ばれている分野である。研究室では、Context-aware Computingや超小型チップのアーキテクチャ、ネットワークプロトコル、セキュリティシステム等の基礎的研究から応用システムまで幅広い研究を行っている。最近では、uIDアーキテクチャの研究に力を入れており、すでに火災報知器等長期にわたりメンテナンスを要する製品のトレーサビリティシステムなどに、数百万のuコードが使われている。

## Open Data Platform

情報通信技術の発展とともに、様々な情報が世界のどこかでは電子データとして存在するようになった。行政、民間企業、個人といった社会を構成する様々な人々が自分のもつ情報を再利用可能な形で公開することにより、Government 2.0と呼ばれるような市民参加型の新しい行政の実現や、高度で革新的な情報サービスの相乗効果的な実現が期待されている。本研究では、このようなオープン・データを実現するためのプラットフォーム構築を目指した研究を推進している。具体的には、公開に適したデータ・フォーマットやデータ交換のプロトコルといった基盤技術の研究や、オープン・データを活用したビッグデータ解析技術の研究、さらに様々な組織との連携によるオープン・データが可能にする新たな応用サービスの構築と検証などを行っている。

## 研究業績(2015年度)

### 分担著書

坂村 健, 越塚 登, 暦本 純一, 中尾 彰宏: 「コンピューターがネットと出会ったら モノとモノがつながり  
あう世界へ」, 坂村 健 編, KADOKAWA/角川学芸出版, 2015 年.

## 国際会議等

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Fine-Grained Access Control to Medical Records in Digital Healthcare Enterprises", International Symposium on Networks, Computers and Communications, 2015. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Fine-Grained Access Control to Medical Records in Digital Healthcare Enterprises", IEEE International Symposium on Networks, Computers and Communications, pp.1-6, 2015. 【査読有】

Wirawit Chaochaisit, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Evaluating Spatial Influence of Physical Visualizations in Public Settings", Workshop "SenCity2: Visualizing the Hidden Pulse of a City" at UbiComp 2015, 2015.

Syafril Bandara, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Predicting Collective User Preference for Optimal Comfort Level in Smart Buildings", IEEE Global Conference on Consumer Electronics, pp.7-11, 2015. 【査読有】

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "DCRDL: An energy management rule definition language for context-based device control in smart buildings", IECON 2015-41st Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society, pp.279-285, 2015. 【査読有】

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "EPDL: Supporting Context-Based Energy Control Policy Design in IoT-Enabled Smart Buildings: Programing the Physical World with EPDL", 2015 IEEE International Conference on Data Science and Data Intensive Systems, pp.297-303, 2015. 【査読有】

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "The Design and Implementation of a Context-based Energy Management Policy Description Language for IoT-enabled Smart Building", 2015 TRON Symposium, 2015. 【査読有】

Hangli Ge, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Model Design of Generating Path with Accessibility Semantics for Assisting Indoor Mobility", 2015 IEEE International Conference on Data Science and Data Intensive Systems, pp.139-146, 2015. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Tamper-Resistant Security for Cyber-Physical Systems with eTRON Architecture", IEEE International Conference on Cyber, Physical and Social Computing, pp.196-203, 2015. 【査読有】

Wirawit Chaochaisit, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Human Localization Sensor Ontology: Enabling OWL 2 DL-Based Search for User's Location-Aware Sensors in the IoT", 2016 IEEE Tenth International Conference on Semantic Computing, pp.107-111, 2016. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "A Secure and Flexible e-Health Access Control System with Provisions for Emergency Access Overrides and Delegation of Access Privileges", IEEE International Conference on Advanced Communications Technology , pp.541-546, 2016. 【査読有】

## その他論文

坂村 健: 「ムーアの法則」, 毎日新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「ドローンと規制」, 日刊工業新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「通信で世界は変えられる」, 毎日新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「ITU150 アワード受賞 情報通信で「途上国創生」」, 日刊工業新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「標的型攻撃への心構え 2015 年 06 月 18 日 東京朝刊」, 毎日新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「税金で賞金 日本も「Xプライズ式」を」, 日刊工業新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「IoT 可能性と課題 (上) 日本、開放性で後れ取るな」, 日本経済新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「オープンにできるか?」, 毎日新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「サイバー攻撃に災害対策意識を」, 産経新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「ネット&ニット」, 毎日新聞, 2015 年. 【一般向け】

坂村 健: 「素朴な『夢』と『未来』の終焉 コンピュータは人類を超えるか」, 中央公論 8月号 通巻 1581号, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「サイバー「災害」対策急げ インシデントとアクシデント」, 日刊工業新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「「公共」と「私権」のバランス」, 毎日新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「人工知能は人類の脅威か?」, 日刊工業新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「社会を変える勇気」, 毎日新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「行政のオープンデータ化」, 毎日新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「ベビースキャン」, 毎日新聞, 2015年. 【一般向け】

坂村 健: 「プログラミング教育急げ 毎日新聞 2016年1月21日 東京朝刊」, 毎日新聞, 2016年. 【一般向け】

坂村 健: 「自動運転と法律」, 毎日新聞, 2016年. 【一般向け】

坂村 健: 「進化するIoT」, 日刊工業新聞, 2016年. 【一般向け】

坂村 健: 「日本は「変わる国」になれるか」, 産経新聞, 2016年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

坂村 健: 「基調講演 「これからの日本を支えるオープンな技術と制度」」, 第87回サイテックサロン SCI-TECH SALON, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「基調講演 「IoT時代のカメラの未来」」, 株式会社リコー 東京大学大学院情報学環ユビキタス情報社会基盤研究開発センター (協賛: YRP ユビキタス・ネットワーキング研究所), 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「特別講演(2)「オープンデータからオープンAPIへ」」, 組込みシステム開発技術展 (ESEC), 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: "ITU's 150th Anniversary Celebrations", ITU's 150th Anniversary Celebrations, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: "基調講演", 『2020年に向けたICT分野のビジョンを共有するためのシンポジウム』, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「ET WEST 2015 基調講演 [K-1] IoTにおける組込みのオープン化」, 組込み総合技術展 東西 Embedded Technology 2015 (6/10-11) , 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「一般財団法人インターネット協会 IoT 推進委員会設立記念セッション ～ いよいよ本格化するIoT時代～」, INTEROP TOKYO 10-12 June 2015, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「新たな社会の到来 ～ IoT がもたらす世界」, PFU IT Fair 2015, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「あらゆるモノがネットにつながるIoT時代の常識とは ～ 住居・交通・医療が変わる」, 第8回 角川インターネット講座 「THE SALON」, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「シンポジウム「ダイバーシティカンファレンス」 基調講演「IT 技術生かそう」」, シンポジウム「ダイバーシティカンファレンス」 未来貢献プロジェクト, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「新たな社会の到来 ～ IoT がもたらす世界」, PFU IT Fair 2015, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「さまざまな情報媒体とユビキタス」, 平成 27 年度(第 79 回)食品トレーサビリティ講習会, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: "Keynote 2: The Emerging World of the IoT - What it is, and what it means for Testing", Softec Asia 2015 (9/8-10 開催) , 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「「ユビキタスコンピューティング技術と食品トレーサビリティ」」, 食品トレーサビリティ公開講座 (2015 年度東京会場) , 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「Felica Connect 2015 基調講演 「2020年ICT化社会がもたらす変革」」, Felica Connect 2015 (主催: ソニー株式会社 / フェリカネットワークス株式会社) , 2015. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健:「特別講演「オープン IoT で後れをとるな」 ◎日英同時通訳付」, CEATEC JAPAN 2015, 2015.  
【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「神奈川経済同友会 講演」, 一般社団法人 神奈川経済同友会, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「オープンデータによる歩行者移動支援」, 福祉工学カフェ ～ 第 16 回 視覚障害者歩行支援システム ～オリエンテーション支援を中心に～, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「IoT (Internet of Things) の可能性と課題」, 一般社団法人不動産協会 第 448 回月例会, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「基調講演「IoT (Internet of Things) の可能性と課題」」, 富士通総研フォーラム 2015  
「Redefine: 顧客価値の再定義」, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「Microsoft Industry 0940-Solution university」, Microsoft Industry 0940-Solution university, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「特別講演「IoT で日本の組み込みシステムが変わる」」, Embedded Technology (ET 2015) , 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健: "ITU 150th Anniversary Soiree - Memorial Speech", WTIS-15, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「IoT (Internet of Things) の可能性と課題」, 東京大学医療社会システム工学寄付講座・ベリサーブ共同シンポジウム, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「IoT 時代のカメラの未来 ～ モノがネットワークにつながっていく オープン IoT 時代が可能にするカメラの多様性」, Vision Engineering Workshop 2015 ビジョン技術の実利用ワークショップ ～ 現場に根付く画像応用技術, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「[S2-1] 基調講演 IoT と日本の産業戦略」, 2015 年映像情報メディア学会冬季大会, 2015. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健:「IoT (Internet of Things) の可能性と課題」, 経済産業省 産学連携型サービス経営人材育成事業 中小製造業サービス化コンソーシアムセミナー, 2016. 【招待講演】【一般向け】

坂村 健: 「『新たな社会到来のために～IoT (モノのインターネット) 時代の課題～』」, ニューメディア開発協会, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「JASA 福岡セミナー」, JASA 福岡セミナー, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「「IoT 時代へ対応した組み込みソフトウェア開発」」, 第 11 期ソフトウェアマネジメント交流会 議 第 1 回会合, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「「2030 年に向けた教育のあり方と課題について」」, 自由民主党 国家戦略本部, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「「オープン IoT の時代」」, 第 5 回 情報通信部会, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

坂村 健: 「「IoT で拓く日本の未来」」, 一般社団法人日本経済団体連合会主催 未来産業・技術委員会 産業競争力強化委員会 情報通信委員会 合同委員会, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

## 新聞・報道

坂村 健: 「「何で電話会社の仕事を大学でやるんだよ」村井純氏と坂村健氏が語る、インターネットが異端だった時代」, logmi, 2015.

坂村 健: 「日本は大企業が人材をロックしている-東大・坂村健氏が指摘するベンチャー育成の障壁」, logmi, 2015.

坂村 健: 「国際電気通信連合賞に坂村氏」, 毎日新聞, 2015.

坂村 健: 「ITU150 周年記念賞 坂村東大教授が受賞」, 日刊工業新聞, 2015.

坂村 健: 「実物大「ガンダム」を東京五輪の聖火ランナーにチャレンジしていない日本の現状には危機感も～ 3 者対談: 平将明 (内閣府副大臣) 小泉進次郎 (内閣府大臣政務官) 坂村健 (東京大学教授)」, NIKKEI Robotics 8 創刊号, 2015.

坂村 健: 「2020 年の東京もっと多様に 坂村健～IT 技術生かそう 越塚登～個人に合わせ万能リモコン」, 読売新聞, 2015.

坂村 健: 「 「税金で賞金を!」坂村健氏が唱える"第 2 のシャフト"を出さない方法 ～ D A R P A ロボティクスチャレンジ惨敗。賞金数億円クラスの日本版「Xプライズ」を」, 日刊工業新聞, 2015.

坂村 健: 「TRON 坂村健さんが考えるカメラの未来 Part 1 キーワードは「3つのリアル」と「計算写真学」」, Foyer, 2015.

坂村 健: 「THETA デベロッパーズコンテストの入選作品が発表された。国内外から多くのアプリが登場 ～ キーワードは『オープン』 リコー気質と TRON の父 = 坂村健」, FOYER, 2015.

坂村 健: 「CEATEC JAPAN 2015 TRON の坂村健教授が IoT に望むオープン化やネット接続権の確立」, 産経アプリスタ, 2015.

坂村 健: 「隠れた世界最強シェア 家電 OS 「トロン」 考案者 坂村健氏にニッポンの未来を訊く!」, 家電批評 2015年12月号 通巻73号, 2015.

坂村 健: 「日の丸 IT、復権できるか OS 「トロン」 開発の坂村教授に聞く」, 日本経済新聞 電子版, 2015.

坂村 健: 「トヨタは 70 年代から IoT を実践している? —坂村教授が日本の課題と技術トレンドを語る」, business network.jp, 2015.

坂村 健: 「「17年までに IoT ハウスを」 —LIXIL、坂村教授と共同研究スタート」, IITmedia ビジネスオンライン, 2015.

坂村 健: 「“すまいの IoT”で LIXIL と坂村健教授がタッグ、2017 年にコンセプトハウスを建設」, Internet Watch, 2015.

坂村 健: 「LIXIL、IoT 権威の東大坂村教授と共同研究で「住まいの IoT」実現を目指す」, マイナビ, 2015.

坂村 健: 「“すまいの IoT”で LIXIL と坂村健教授がタッグ、2017 年にコンセプトハウスを建設」, Impress Watch, 2015.

坂村 健: 「LIXIL、東大の坂村健氏と共同で IoT 住宅プロジェクト 実証実験を進め 2017 年にコンセプトハウスを竣工」, 日経 BP Tech-On, 2015.

坂村 健: 「「IoT を適切に使うのは難しい」 —東大 坂村健教授」, MONOist, 2015.

坂村 健: 「隠し球「IoT-Engine」も登場、「2015 TRON Symposium」開催概要発表」, MONOist, 2015.

坂村 健: 「 「IoT に取り組むなら社会活動を変える勇気が必要」TRON の父、東大・坂村教授 」, IT Leaders, 2015.

坂村 健: 「住宅に「IoT」 東大教授と研究 LIXIL、坂村氏と」, 日本経済新聞, 2015.

坂村 健: 「LIXIL、東大 坂村健教授と共同で「LIXIL IoT House」プロジェクト開始」, ビジネス+IT, 2015.

坂村 健: 「L I X I L、東大教授と共同で I o T 活用研究 住宅向けに」, 日本経済新聞 電子版, 2015.

坂村 健: 「坂村健×佐々木康晴「IoT が創造する NEW WORLD と、変わる広告会社の役割」【前編】 2016 年 01 月 08 日 掲載電通デザイントーク」, アドタイ, 2016.

坂村 健: 「坂村健×佐々木康晴「IoT が創造する NEW WORLD と、変わる広告会社の役割」【後編】 2016 年 01 月 09 日 掲載電通デザイントーク」, アドタイ, 2016.

坂村 健: 「2015 年 日経優秀製品・サービス賞 最優秀の 18 点紹介 ～ 審査委員・・・坂村健・東京大学教授・・・」, 日本経済新聞, 2016.

坂村 健: 「ICT に軸を置く社会が、2020 年の東京に現れる 前編： スポーツは ICT で変わるか？ 電脳建築家 坂村健 x 元陸上選手 為末大」, テレスコープマガジン, 2016.

坂村 健: 「TRON の坂村教授 スピード感ある教育を」, 教育新聞, 2016.

坂村 健: 「TRON の坂村教授 スピード感ある教育を ～ 世界は素速く進化している」, 教育新聞 , 2016.

## 受賞

坂村健: 150 周年賞「国際電気通信連合 (ITU) 150 周年賞」, 国際電気通信連合 (ITU) , 2015 年.

---

## 佐倉 統・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 科学技術コミュニケーション

科学技術の専門家と非専門家間のコミュニケーションを、円滑化、活性化するための方法論や制度策定および科学史的・文明論的な理論枠組みの構築。

## 脳神経倫理（ニューロエシックス）

脳神経科学の倫理的、社会的、哲学的諸問題を考察し、教育現場や社会とのコミュニケーションなどにおける実際の問題の解決をめざす。

## 進化生物学史、動物行動学史

とくに日本における進化生物学、動物行動学の歴史を、諸外国の事例と比較しつつ、特徴を抽出する。

## 研究業績(2015年度)

### 分担著書

佐倉統他: "5: Designing Media Ecology 第3号 特集「3・11後の科学と生活」3rd issue: The Special Feature "Everyday Life and Science after the 3/11 Disaster."", 佐倉統 編, 5: Designing Media Ecology, 2015年.

### 雑誌論文

Otaki, Y., Sakura, O. & Otaki, M.: "Advocating Water Literacy", Mahasarakham International Journal of Engineering Technology, Vol.1, No.1, pp.36-40, 2015年. 【査読有】

Sakumi, A., Miyagawa, R., Tamari, Y., Nawa, K., Sakura, O. and Nakagawa, K.: "External effective radiation dose to workers in the restricted area of the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant during the third year after the Great East Japan Earthquake.", Journal of Radiation Research, Vol.57, No.2, pp.178-181, 2015年. 【査読有】

Sakura, O.: "Launching a Two-front War against Anti-intellectualism and Expert Paternalism: Lessons from the Fukushima Nuclear Disaster. (反知性主義と専門家主義への二正面作戦を開始する——福島第一原発事故から学んだこと)", 5: Designing Media Ecology, Vol.3, pp.24-43, 2015年. 【査読有】

佐倉統: 「人の行動を科学的に解明すること」, 生活協同組合研究, Vol.480, pp.5-10, 2016 年.

Tamari, Y., Kuroda, Y., Miyagawa, R., Nawa, K., Sakumi, A., Sakata, N., Mizushima, N., Sakura, O., Iwamitsu, Y., Takemura, K. and Nakagawa, K.: "A report that Fukushima residents are concerned about radiation from Land, Food and Radon.", Journal of Radiation Research, Vol.57, No.4, pp.418-421, 2016 年. 【査読有】

## その他論文

佐倉統: 「インタープリターズ・バイブル第 93 回「機械と人間は共存するのか?」」, 東京大学学内広報, 1467:41, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「最前線からの刺激的な応答（「ニック・レーン『ミトコンドリアが進化を決めた』」の書評）、夢研究の最前線を総覧（「アンドレア・ロック『猫は眠らない』」の書評）」, 共同通信文化部編『書評大全』, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「脳神経倫理——現状と展望」, 『神経科学の最前線とリハビリテーション ——脳の可塑性と運動』医歯薬出版株式会社, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「互いに刺激し合う未来へ——科学と芸術の関係を探る——」, 東京大学新聞, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「新研究科長に聞く 5:情報学環・学際情報学府」, 東京大学新聞, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「「知の集積」が生み出す未来の可能性」, 森へゆく径, 01:009-011, 2015 年. 【一般向け】

伊東豊雄・福岡伸一・佐倉統: 「生命の際」, 吉見俊哉監修, 南後由和編『建築の際——東京大学情報学環連続シンポジウムの記録』平凡社, 196-218, 2015 年.

佐倉統: 「既に逆転は起きている」, NIRA『わたしの構想』14, 2015 年. 【一般向け】

Sakura, O.: "AI is already overtaking us", NIRA My Vision. 14, 2015 年. 【一般向け】

佐倉統: 「発達保育実践政策学への期待——学問と学問のつながり, 学問と社会のつながり——」, 秋田喜代美監修, 山邊昭則編, 多賀巖太郎編『あらゆる学問は保育につながる——発達保育実践政策学の挑戦——』東京大学出版会, 359-386, 2016 年.

秋田喜代美・遠藤利彦・大桃敏行・佐倉統・多賀巖太郎・村上祐介・山邊昭則・渡辺はま：「座談会発達保育実践政策学の構築に向けて」, 秋田喜代美監修, 山邊昭則編, 多賀巖太郎編『あらゆる学問は保育につながる——発達保育実践政策学の挑戦——』東京大学出版会, 275-334, 2016年.

佐倉統：「大学の勉強ってこんなにおもしろい!」, ドリーム・ナビ, 6(12):106-107, 2016年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

佐倉統：「科学的知識を使いこなすには?」, 甲南女子大学国際子ども学研究センター第99回「子ども学」講演会, 2015. 【招待講演】

佐倉統：「イントロダクション——総論（生命倫理の観点から）」, Collaborative workshop with Google 「インターネットの利活用におけるユーザー保護、プライバシーおよび自由な情報流通の確保に向けて——イノベーションによる課題解決とは?」“Achieving User-protection, Privacy, and Free Flow of Information on the Internet: What is your Innovation to solve it?”, 2015.

佐倉統：「好きこそものの上手なれ」, 長野県立上田高等学校模擬授業, 2015. 【一般向け】

筒井雄二（企画代表者, 司会者）木下富雄、佐倉統、氏家達夫、高谷理恵子（話題提供者）：「原子力災害が心理的影響を引き起こすメカニズムを考える」, 日本心理学会第79回大会公募シンポジウム, 2015.

佐倉統：「脳科学の倫理」, エヌ・ティ・ティ・データ経営研究所主催応用脳科学アカデミーベーシックコース「応用脳科学の基礎」第3回, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

佐倉統：「グローバルな現象——東京のミニメディアで福島を取り上げる」, 国際放射線防護委員会(ICRP)第12回福島原発事故による長期影響地域の生活回復のためのダイアログセミナー「Experience we have gained together（これまでの歩み、そしてこれから）」, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

佐倉統：「好きこそものの上手なれ」, 東京都立日比谷高等学校, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

菅原裕輝（オーガナイザ）丸山善宏、宮野公樹、戸田山和久（提題者）佐倉統（指定討論者）：「異分野融合の科学哲学」, 日本科学哲学会第48回大会シンポジウム, 2015.

佐倉統：「生命倫理と情報倫理が交わる場所」, 公募シンポジウム「先端生命科学の動向と研究開発の未来——脳科学研究倫理の再考とデュアルユース問題——」, 第27回生命倫理学会年次大会, 2015.

佐倉統: 「講演・全体討議」, 『建築の際』刊行記念トークイベント, 2015.

佐倉統: 「知は力なり? —— 科学技術を使いこなすには? ——」, 日立製作所中央研究所, 2015. 【招待講演】

佐倉統 (登壇者、司会), 平石界・半杭真一・池田功毅・小森政嗣・松村真宏・佐々木光洋・三浦麻子・武田徹・大森真 (登壇者), 宮崎真 (指定討論者): 「「放射能」はなぜ嫌われるのか? —— 心理学者と地域の対話 ——」, JSPS 科研費基盤研究(A)「リスク認知とソーシャルメディア情報拡散課程の進化論的解明: 基礎研究から社会実装へ」主催シンポジウム, 2015.

Sakura, O.: "A Two-Front War Against Anti-Intellectualism and Expert Paternalism.", Engaging Expertise in Disaster Governance Part 1: A Dialogue with ARI NUS and iii UTokyo, 2015.

松田卓也・佐倉統・西川徹 (パネリスト)、松尾豊 (モデレーター): 「AI ロボットフォーラム」, 2015 国際ロボット展, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

佐倉統 (座長): 「平成 27 年度研究成果報告会」, JST さきがけ「脳情報の解読と制御」研究領域, 2016.

佐倉統: 「異文化コミュニケーションとしての科学 —— あるいは、大学院の専攻選びに失敗したらどうするか ——」, 京都大学大学院理学研究科生物科学専攻「生物多様性コロキウム」, 2016. 【招待講演】

佐倉統: 「人間とロボット」, 東京都立日比谷高等学校星陵セミナー, 2016. 【一般向け】

Sakura, O.: "Governance of Neuroscience in Japan", Workshop "Ethical and Social Aspects of Collaborative Science", 2016.

## 新聞・報道

佐倉統: 「書評: 鈴木裕之『恋する文化人類学者 —— 結婚を通して異文化を理解する ——』」, 朝日新聞, 2015.

佐倉統: 「書評: 平野亮『骨相学 —— 能力人間学のアルケオロジー』」, 朝日新聞, 2015.

佐倉統: 「書評: 松尾豊『人工知能は人間を超えるか』、アンドルー・ホッジス『エニグマ アラン・チューリング伝 (上)』」, 朝日新聞, 2015.

佐倉統: 「書評: 金関猛『ウィーン大学生フロイト —— 精神分析の始点』」, 朝日新聞, 2015.

- 佐倉統: 「書評: 開沼博『はじめての福島学』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: 寺田匡宏『人は火山に何を見るのか』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: ローレンス・ヴァン・デル・ポスト『ある国にて——南アフリカ物語』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: スタニスワフ・レム『スタニスワフ・レム コレクション短編ベスト10』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: ジェームズ・D・ワトソン『二重螺旋 完全版』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: マルチェット・マッスィミーニ、ジュリオ・トノーニ『意識はいつ生まれるのか——脳の謎に挑む統合情報理論』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: ランドール・マンロー『ホワット・イフ?——野球のボールを光速で投げたらどうなるか』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: ダグラス・J・エムレン『動物たちの武器——闘いは進化する』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: 杉山滋郎『中谷宇吉郎——人の役に立つ研究をせよ』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: サリー・サテル、スコット・O・リリエンフェルド『その〈脳科学〉にご用心——脳画像で心はわかるのか』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: デイヴィッド・J・ハンド『「偶然」の統計学』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: 村上春樹『職業としての小説家』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: 田中聡『電気は誰のものか』、中尾麻伊香『核の誘惑』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評委員 この1年」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「書評: 野町和嘉『地平線の彼方から一人と大地のドキュメント』 佐藤恵子『ヘッケルと進化の夢』 帚木蓬生『悲素』」, 朝日新聞, 2015.
- 佐倉統: 「AI ロボットフォーラム」, 日刊工業新聞, 2016.
- 佐倉統: 「書評: 森達也『私たちはどこから来て、どこへ行くのか』」, 朝日新聞, 2016.

佐倉統: 「書評: 金森修『科学思想史の哲学』」, 朝日新聞, 2016.

佐倉統: 「ジャムザワールド「放射能はなぜ嫌われるのか? あらゆる情報が信頼されないのはなぜか?」」, ラジオ J-WAVE, 2016.

佐倉統: 「書評: 石黒浩『アンドロイドは人間になれるか』」, 朝日新聞, 2016.

佐倉統: 「書評: アドリアナ・ペトリーナ『曝された生——チェルノブイリ後の生物学的市民』」, 朝日新聞, 2016.

佐倉統: 「書評: マーク・ヴァンホーナッカー『グッド・フライト、グッド・ナイト』」, 朝日新聞, 2016.

---

## 嶋田 正和・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015 年度)

---

## 須藤 修・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ICTの発展とそれに伴う経済システムの変容に関する研究

北アメリカ、EU、アジア諸国、日本という 21 世グローバルシステムに大きな影響力を行使する地域経済システム (Regional Economic System) の動向を比較検討しながら、ICTの発展とそれぞれの経済構造との相互作用的な関係について、また ICTの発展と経済活動のグローバル化との相互作用的な関係に関して研究を行い、ネットワークを基盤にした知識創造型社会経済システムを構想する。

## センサーネットワークを用いた予防医療システムに関する研究

産・官・学の連携を促しながら、センサーネットワーク、高度データ分析、グリッド・コンピューティングを組み合わせた ICT 基盤を用いて、糖尿病を中心とした生活習慣病の予防に関する実証実験を推進し、その実験と連動させて、産・官・学・民の共創を活性化するセンサーネットワーク基盤地域コミュニティの形成とそのガバナンスに関する制度構想の研究を進めたいと考えている。そして、電子行政および医療情報基盤について、社会基盤としての ICT プラットフォームに関する政策科学的研究を推進する。

## 活力ある超高齢社会に関する研究

在宅医療・介護体制の構築、独居高齢者の増大への対応、予防医療の在り方などに関する抜本的な検討と新たな社会制度設計が必要となる。このことは、地域コミュニティの在り方、地方行政の在り方などさまざまな観点から社会システムを抜本的に考え直さなければならない。活力ある超高齢社会デザインについて研究を推進する。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 園田 茂人・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 変動するアジアの比較社会学

アジア、とりわけ中国系社会を対象に、アジア・バロメーターや中国四都市調査のデータを用い、その変化の諸層をひかくの視野から実証的に研究している。最近は、特に新中間層の台頭を視野に、その社会・文化的特徴や政治的な特徴から、どのようにアジアの変化をもたらすかについて考察を深めている。

#### 日系企業のアジア進出への社会学的アプローチ

1991 年から、日系企業のアジア進出をテーマに、社会学的調査を積み重ねている。2006 年から 07 年にかけて、15 年前に調査した日系企業（台湾、中国、タイ、マレーシア、インドネシア）を訪問し、その時系列

的变化を追いかけたり、2005年にはインドの日系企業調査を実施し、現地従業員の日系企業評価の比較を試みている。2009年からは、2001年に調査した中国の日系、韓国系、台湾系企業を対象に時系列調査を実施する計画をたてている。

## 研究業績(2015年度)

### 著書

園田茂人・蕭新煌編：「チャイナ・リスクといかに向きあうか：日韓台の企業の挑戦」, 東京大学出版会, 2016年.

### 雑誌論文

園田茂人：「社会安定与“有中国特色”格差社会的誕生」, 当代日本中国研究 第四輯 歴史・社会, pp.241-257, 2015年. 【査読有】

園田茂人：「第三次四都市調査の困難」, 東亜, No.5月, pp.2-3, 2015年. 【一般向け】

園田茂人：「『政府高信頼説』の謎を解く」, 東亜, No.8月, pp.2-3, 2015年. 【一般向け】

園田茂人：「軍事パレードと合同サマープログラム」, 東亜, No.11月, pp.2-3, 2015年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

園田茂人：「中国脆弱論：その検証と対策」, GLOCOM 中国戦略研究会, 2015. 【一般向け】

Shigeto Sonoda: "Why Chinese Citizens are so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Four-city Survey, 1998-2014", Workshop on "Socio-psychological Approaches to China Studies: Challenges and Prospects, 2015.

Shigeto Sonoda: "Explanation of the Project", アジア政経学会 2014年度全国大会国際セッション Beyond China Threat Theory: Perception toward the Rise of China in Different Geopolitical/Socio-psychological Settings, 2015.

Shigeto Sonoda: "East Asian Views on China and Japan: Some Research Findings of AsiaBarometer 2003 - 2008", AAS-inAsia Conference, 2015.

Shigeto Sonoda: "Asian Student Survey Project: Its Aims, Accomplishments, and Challenges", Toward the Construction of East Asian Sociology: Challenges of Asian Student Survey and Beyond, 2015.

Shigeto Sonoda: "How do people in Asia perceive cancer-related issues?", The 74th Annual Meeting of the Japanese Cancer Association, 2015. 【招待講演】

園田茂人: 「中国市民はなぜ政府を肯定的に評価しているのか：中国四都市調査（1998-2014）による時系列分析の知見」, 財務総合政策研究所・平成 27 年度中国研究会, 2016. 【招待講演】 【一般向け】

Shigeto Sonoda: "Why Chinese Citizens are so Positive toward Party and Government?: Chronological Analysis of Chinese Four-city Survey, 1998-2014", Asian Center Public Lecture Series, 2016.

園田茂人: "因應中國風險：日韓台企業的挑戰", 中央研究院社會學研究所・新書發表會, 2016. 【招待講演】

---

## 鷹野 澄・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### IT を活用し情報で人の命と暮らしを守るという研究

地震災害など大規模災害に対して、情報通信技術（IT）を活用して情報を適切に提供して、人々の命と暮らしを守るについて研究します。

#### 建物や大型構造物の構造物ヘルスマニタリングの研究

建物や大型構造物の劣化などの健康診断（ヘルスマニタリング）のために、IT 強震計などのセンサーを活用して技術開発や応用の研究を進めています。

## 緊急地震速報などの即時的地震情報システムに関する研究

気象庁の緊急地震速報を活用するためには、利用者側でどのような対策をしたらいいのか、そのハード面での対策の研究からソフト面での取り組みなどについて研究します。

### 研究業績(2015 年度)

#### 国際会議等

Lei Zhong, Kiyoshi Takano, Yusheng Ji, Shigeki Yamada: "Big Data based Service Availability Estimation of Mobile Communication Systems during Large-scale Disasters", the 8th International Workshop on Disaster and Emergency Information Network Systems (IWDENS'2016), 2016. 【査読有】

M. Krol, Y. Ji, S. Yamada, C. Borcea, L. Zhong, and K. Takano : "Extending network coverage by using static and mobile relays during natural disasters", the 8th International Workshop on Disaster and Emergency Information Network Systems (IWDENS'2016), 2016. 【査読有】

#### 講演・口頭発表

鷹野澄・上原美貴・瀬瀬一起, : 「首都圏強震動総合ネットワーク SK-net の現状」, 日本地震学会 2015 秋季大会, 2015.

鷹野澄: 「緊急地震速報によるエレベータ地震時管制運転の制御装置の開発とその普及に向けた課題」, 日本災害情報学会 2015 学会大会, 2015.

西口 綾佳・目黒 公郎・鷹野 澄: 「緊急地震速報の震度予測精度の検証」, 日本地震工学会大会 2015, 2015.

鷹野澄: 「広域 L2 網を活用した全国地震データ交換・流通システムの構築」, 第 21 回 テストベッドネットワーク推進ワーキンググループ会合, 2015.

Kiyoshi Takano, Taku Urabe, Hiroshi Tsuruoka, Shigeki Nakagawa: "Japan Data Exchange Network JDXnet and Cloud-type Data Relay Server for Earthquake Observation Data", AGU Fall Meeting 2015, 2015.

Lei Zhong, Kiyoshi Takano, Yusheng Ji, Shigeki Yamada: "Big Data Analytics for Disaster Preparedness and Response of Mobile Communication Infrastructure during Natural Hazards", AGU Fall Meeting 2015, 2015.

---

## 田中 淳・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 災害情報論

災害による被害を軽減するために求められる災害情報の要件を、住民や市町村等利用者側の意志決定過程に関する実証研究の知見に基づき、実証的・理論的に解明し、具体的な提言に結び付けている。災害期の警報や避難勧告等、復旧・復興期の生活再建情報、事前の防災意識向上や防災教育など、各段階での課題を対象とする。

#### 災害弱者対策

阪神・淡路大震災で高齢者や障害者に被害が大きかったことやハリケーン・カトリーナにおける人種や所得によって被害が異なったように、災害による影響は社会集団によって差違が生じる。この際は、地震や火山噴火、あるいは爆発と行った外力による被害の程度に留まらず、避難のしやすさや生活再建の円滑さなど長期的な側面を持つ。災害の過程で生じる社会格差の視座から、研究を進めている。

#### 集合行動論

20世紀初頭に誕生した集合行動論は、パニックや都市暴動、社会運動など多様な創発的社会行動を理論的に分析してきた。ある意味、災害の社会学的研究もまたその流れをくんでいる。日常の制度や組織、役割など社会秩序が、災害により修正を余儀なくされるためである。災害研究の理論的バックグラウンドとして、集合行動論ならびにその批判的研究として登場した集合行為論の研究を行っている。

### 研究業績(2015年度)

---

## 田中 秀幸・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 産業技術のイノベーション・システムに関する研究

技術的限界に直面した産業においては、それを乗り越えるために不確実性の高い技術の方向性を明らかにするような焦点化が求められる。市場メカニズムは、そのような焦点化の機能が全般的に弱いために、従来は、国家のイニシアティブによって、企業の境界を越えたイノベーションの取り組みが進められてきた。しかしながら、近年、最先端の技術限界を突破するためには、必ずしもドメスティックな企業間協力だけでは対応が困難になってきており、それに伴い、国家でもなければ企業でもない非営利の中間組織がグローバルに展開することで、新たなイノベーション・モデル形成する例が生まれつつある。以上のような問題意識の下、産業技術のイノベーションにおける、市場、国家、企業、そして中間組織の機能などについての研究を進めている。

#### 情報セキュリティの経済的相互依存関係に関する分析

情報システムのネットワーク化の進展によって、情報セキュリティは相互依存性が高まっている。相互依存的な環境下では、ある主体の情報セキュリティ水準は自らの管理努力だけではなく、ネットワークで接続された相手方のセキュリティ・マネジメントの影響も受けるようになる。こうした相互依存性は、外部効果を通じて市場の失敗をもたらすことになり、何らかの制度的な手当が必要となる。このような情報セキュリティを巡る組織の境界の変容に対して、いかなるインセンティブ設計があり得るのかなどについての研究を進めている。

#### 地域情報化に関する研究

現在進められている電子自治体の取り組みは、行政内部の業務プロセスを抜本的に変えるのみならず、従来、行政の外側にあった主体との関係にも大きな変化をもたらす。具体的には、地域住民、地域企業やNPOとの相互関係を深めることで、新たな地域づくりが実現しつつある。電子自治体を契機として展開する地域情報化の中で、行政の境界がどのように変容し、いかなる制度が求められるかなどについての研究を行っている。

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "INFORMATION TECHNOLOGY AND THE ORGANIZATIONAL STRUCTURE OF MODERN BUSINESS OUTSOURCING", the International Journal of Economic Policy Studies, Vol.8, No.1, pp.19033, 2015 年. 【査読有】

田中秀幸,竹村敏彦,飯高雄希,花村憲一,小松文子: 「情報セキュリティ・インシデントによる経済損失の推計に関する研究」, 経済政策ジャーナル, Vol.11, No.2, pp.59-62, 2015 年. 【査読有】

Takagi, Soichiro and Hideyuki Tanaka: "Macroeconomic Analysis of Cloud Computing", 経済政策ジャーナル, Vol.11, No.2, pp.55-58, 2015 年. 【査読有】

Chan, Yi-Chia and Hideyuki Tanaka: "A Review of Tourism Research Regarding the Internet: Focusing on Destination Image in the Internet Tourism Marketing", 2015 年社会情報学会(SSI)学会大会研究発表論文集, pp.70-73, 2015 年.

寺山ひかり・田中秀幸: 「ご当地キャラクター活用実態の変遷に関する考察」, 2015 年社会情報学会(SSI)学会大会研究発表論文集, pp.64-69, 2015 年.

田中秀幸・高木聡一郎: 「ICT 産業のイノベーション・ケイパビリティに関する研究」, 社会・経済システム学会大会第 34 回予稿集, pp.95-98, 2015 年.

山田知熙・田中秀幸: 「中低所得国での携帯電話利用型金融サービスの普及・利用に関する検証」, 社会・経済システム学会大会第 34 回予稿集, pp.91-94, 2015 年.

田中秀幸,高木聡一郎: 「インフラとしてのオープンデータ: 政府・自治体保有データのオープン化が日本経済に及ぼす影響」, フィナンシャルレビュー, No.124, pp.29-48, 2015 年.

高瀬武典, 田中秀幸, 出口弘, 徳安彰, 赤堀三郎, 小山友介: 「文明を『デザイン』する: 超多様性への道程」, 社会・経済システム, No.35, pp.29-46, 2015 年.

喜多一, 塩瀬隆之, 堀内智樹, 松井啓之, 田中秀幸: 「社会・経済システムとデザイン」, 社会・経済システム, No.35, pp.15-28, 2015 年.

田中秀幸:「自立的な地域社会存続の可能性:地域の就業構造と中間層の関係」, 社会・経済システム, No.35, pp.47-52, 2015年. 【査読有】

寺山ひかり・田中秀幸:「ご当地キャラクターのイベント参加に関する考察」, 日本計画行政学会・社会情報学会共催第10回若手研究交流会予稿集, pp.45-48, 2016年.

佐藤太一・田中秀幸:「住民投票とPR」, 日本計画行政学会・社会情報学会共催第10回若手研究交流会予稿集, pp.25-26, 2016年.

Tanaka, Hideyuki and Soichiro Takagi: "Open Data as an Infrastructure: Impact of Availability of Government Data as Open Data on the Japanese Economy", Public Policy Review, Vol.12, No.1, pp.23-46, 2016年.

## 国際会議等

Chan, Yi-Chia and Hideyuki Tanaka: "THE POSSIBILITIES OF DISASTER RECOVERY THROUGH INBOUND TOURISM TO JAPAN: FOCUSING ON SOCIAL MEDIA IN TAIWAN," NETs2015 (International Conference on Internet Studies), 2015. 【査読有】

---

## 苗村 健・教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015年度)

---

## 中尾 彰宏・教授

研究テーマ(主たるもの)

## ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワーク基盤構築技術の研究

オーバーレイネットワークの研究分野では、現在そして新しい将来のインターネットを支える様々なネットワークサービスやネットワークの仕組みを、インターネット内に埋め込まれた実験基盤(オーバーレイネットワークテストベッド)を用いることで実証実験し、性能評価や問題発見などを行うことを目的とする。本研究テーマでは、このような実証実験を広域で可能にする実験基盤の構築やノードの高度化技術の研究を目的とする。

## ネットワーク仮想化・オーバーレイネットワークを用いた経路制御技術の研究

オーバーレイルーティング (Overlay Routing) と呼ばれる、インターネットの可用性を向上したり様々なデータ通信の特性 (QoS)を最適化する技術の研究を進めている。

## サステナブル・ネットワーク・サービス基盤技術の研究

インターネット上に実装されたネットワークサービスへの DoS アタックや DDoS アタックなどの脅威に対し、サーバの仮想化とプロセスのマイグレーションを利用してサステナブルなサービスを実現するための基盤技術を研究開発し可用性を向上する研究を進めている。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 橋元 良明・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報行動に関する社会心理学的分析

メディア利用やコミュニケーション行動などが、社会変化に伴ってどのような変容を遂げているのか、そうした情報行動のパターンを規定する要因は何か、等について社会心理学的観点から実証的に分析している

#### メディアの効果、とくに青少年に及ぼす影響の研究

テレビやインターネットなどが社会生活や世論形成過程、青少年の精神的発達に及ぼす影響、携帯電話などの新しいコミュニケーション・ツールが対人関係、家族関係に及ぼす影響などを調査等の実証的手法で分析している。

## 言語的コミュニケーションの了解・伝達過程、変容に関する研究

言語的コミュニケーションに関し、おもに語用論的視点から了解・伝達構造を研究している。また、日本人の言語行動が、社会システムの変化とどのようにかかわっているか、あるいはマスメディアや新しいメディア・ツールの普及によってどのような影響をこうむっているのかに関する研究をおこなっている。

## 研究業績(2015年度)

### 分担著書

橋元良明:「ネットワーク社会、『メディア学の現在[新訂第2版]』所収」, 渡辺武達・田口哲哉・吉澤健吉 編 編, 世界思想社, 2015年.

橋元良明:「コミュニケーション空間—総論、ネット社会と情報行動の変容、『よくわかる社会情報学』所収」, 西垣通・伊藤守編 編, ミネルヴァ書房, 2015年.

### 雑誌論文

橋元良明:「情報行動の行方」, 『日経広告研究所報』, Vol.vol.280, pp.pp.44-50, 2015年.

橋元良明:「テレビ視聴と日本人—「2015年日本人の情報行動調査」から見えたこと」, 『調査情報』, Vol.2016 1—2, No.No.528, pp.pp.2-10, 2016年. 【査読有】

橋元良明・山本太郎・関谷直也・天野美穂子・堀川裕介:「ネット利用に関する安心と不安」, 『東京大学大学院情報学環 情報学研究 調査研究編』, No.No.32, pp.pp.133-208, 2016年.

### その他論文

橋元良明:「データで見るデジタルネイティブの情報行動」, 『宣伝会議』2015年12月号, 2015年. 【一般向け】

## 講演・口頭発表

橋元良明：「ネット依存」，堺市教育委員会講演, 2015. 【招待講演】

橋元良明(司会)：「衆参両院選挙時の調査から見たネット選挙解禁の影響」，情報通信学会情報行動研究会, 2015.

橋元良明：「ネット依存とは何か」，岐阜市教育委員会講演, 2015. 【招待講演】

橋元良明：「調査から見た日本人の情報遺漏、情報提供に関する意識と不安」，電子情報技術産業協会ビッグデータ工学専門委員会講演, 2015. 【招待講演】

橋元良明(コーディネーター)：「調査から見た日本人のテレビ視聴とネットワーク利用」，日本マス・コミュニケーション学会ワークショップ, 2015.

橋元良明：「日本人の情報行動、この20年の変化」，NHK編成センター 講演, 2015. 【招待講演】

## 新聞・報道

橋元良明：「視聴率デジタル時代」(研究室調査のデータ紹介、コメント)，『朝日新聞』(夕刊 第1面)，2015.

橋元良明：「TBSレビュー」 「最新調査報告 テレビ視聴の実態と信頼 2015」出演，TBS, 2015.

橋元良明：「放置アカウント 悪用恐れ」にコメント，『読売新聞』(夕刊 第13面)，2015.

橋元良明：「18歳をあるく(2)」で研究室の調査データ引用とコメント，『朝日新聞』(朝刊 第2面)，2016.

橋元良明：「スマホ世代のPC知らず スキル低下、職場で波紋」調査での引用とコメント，『日本経済新聞』(朝刊 第13面)，2016.

橋元良明：「若者のパソコン離れ、新たなデジタルデバイドに」インタビュー記事(写真付)，『日本経済新聞』(Web版)，2016.

## 林 香里・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ジャーナリズムの自由主義イデオロギーについて,フェミニズム倫理「ケアの倫理」からの批判的検討

ジャーナリズムは17世紀より自由主義イデオロギーとともに発展してきた。それはマスメディアというシステムとともに自由市場で拡大することによって、そのイデオロギーを一層先鋭化させてきた。しかし、今日の情報化とグローバル化状況において、自由主義思想も再検討を迫られており、ジャーナリズムにおいても自由主義的発想の対案を考えていかななくてはならない。こうした新しいジャーナリズムの倫理について、とくに自由主義の批判理論であるフェミニズム倫理である「ケアの倫理」を応用して研究を進めている。

#### 各国のジャーナリズム制度ならびに言説の国際的比較分析

欧米や東アジア諸国のジャーナリズム研究者と共同で、各国のジャーナリズムの制度および言説の比較研究を行っている。制度の違いがニュース報道の内容にどこまで影響するかについて、さまざまな事例をもとに行っている。日本証券奨学財団、二十一世紀文化学術財団学術奨励金、三菱財団から、寄附金を受け、多角的な報道比較研究を進めている。¥¥r¥¥n¥¥r¥¥n 1) 東アジアを中心としたテレビ・ニュース番組の比較。とりわけ制度的相違から演繹される内容の多様性の位相を研究している。¥¥r¥¥n 2) 福島第一原子力発電所事故に際して、日、独、米、中、韓国の5か国比較を行っている。¥¥r¥¥n 3) メディアシステム、政治文化と市民の情報力の連関について：8カ国国際比較研究(科学研究費補助金(B)2009-2012)の成果をもとに、さらに発展的にテレビ、およびウェブジャーナリズムの比較を行っている。¥¥r¥¥n 4) 以上の実証的研究とともに、「国際メディア比較論」の方法論の洗練をめざしている。

#### メディア産業構造変動から見る報道職とジャーナリズムの将来:東アジア国際比較研究

従来のマスメディア産業は、コンジット(conduit, 伝送経路)とコンテンツ(contents)の垂直統合を基本にして、コンテンツはプロフェッショナルが媒体ごと、会社内の枠組みごとに制作するという仕組みを踏襲してきた。しかし、近年、垂直統合は解体され、コンテンツの制作方法では多様化と分業が進んでいる。こうして、報道の世界でも、産業構造、ならびにジャーナリスト(報道職)という職業プロフィールは大きな

変動期にある。本プロジェクトは、科学研究費補助金（B）を受けて、産業構造分析の専門者とメディア研究の専門家との共同研究とし、メディア産業の構造変動を見極め、それに規定されるジャーナリスト（報道職）の職業プロフィールの変容過程を明らかにし、現代ジャーナリズムの総合的考察を試みる。調査では、韓国、台湾、中国（香港）、日本の東アジア4カ国を対象とし、グローバル化する情報産業において各国の状況を比較・相対化することによって新しい時代のジャーナリズムのモデルを模索する。

## 研究業績(2015年度)

### 雑誌論文

林香里：「•「報道検証」はジャーナリズムをよくするか—朝日新聞社第三者委員会委員の仕事を終えて」, 世界, pp.56-64, 2015年.

• Curran, J. , F.Esser, D. Hallin, K. Hayashi, C.C. Lee: ""International News and Global Integration. A five-nation reappraisal." ", Journalism Studies, Vol.  
<http://dx.doi.org/10.1080/1461670X.2015.1050056>, 2015年. 【査読有】

Mikko Villi and Kaori Hayashi: ""The Mission is to Keep this Industry Intact' Digital transition in the Japanese newspaper industry." ", Journalism Studies, No.DOI:10.1080/1461670X.2015.1110499, pp.1-18, 2015年. 【査読有】

### 国際会議等

Kaori Hayashi: "• "Reflecting on the Decline of Print Journalism in Japan (and in East Asia) from the Perspective of Structural Transformation of the Public Sphere." ", Studiengruppe Deutsch - Japanischer Dialog zu Tradition und Wandel im asiatischen Kontext. Auftaktsitzung, 2016.

### その他論文

林香里：「「不透明さとの戦い—新たな課題に直面する「メディアと女性」研究」, 月刊『We Learn（ウイラーン）』 2015年9月号（No.745）特集：女性とメディアのいま, 2015年. 【査読有】 【一般向け】

### 講演・口頭発表

林香里: 「「慰安婦」報道検証と第三者委員会 一問題点と課題」, 「慰安婦」問題と日本社会・メディア, 2015. 【招待講演】

林香里: 「「<オンナ・コドモ>のジャーナリズム」, 十勝毎日新聞社, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

林香里: 「「「ジャーナリズムの危機」とコミュニケーション」, 日本コミュニケーション学会 第45回年次大会基調講演, 2015. 【招待講演】

林香里: 「Never having to say I am sorry? Asahi's comfort women reporting scandal amid the Abe administration」, ソウル大学アジア研究所主催 重点セミナー講演会 慰安婦問題と戦後日本, 2015. 【招待講演】

Kaori Hayashi: " "Reflecting on the Decline of Print Journalism in Japan (and in East Asia) from the Perspective of Structural Transformation of the Public Sphere." ", Studiengruppe Deutsch - Japanischer Dialog zu Tradition und Wandel im asiatischen Kontext. Auftaktsitzung, 2016. 【招待講演】

## 新聞・報道

対談 林香里、斎藤貴男: 「「ネイティブアドとは何か」, 『週刊読書人』2015年7月10日 1,2,8面, 2015.

林香里: 「• 「考論 業界に風穴・文化に違いも 新聞社買収 進む欧米」 (日経、フィナンシャルタイムズ買収について)」, 朝日新聞9面, 2015.

Kaori Hayashi: 「Nikkei to Buy Financial Times」, NHK World News Line, 2015.

---

## 馬場 章・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本近世経済史

日本近世の度量衡をはじめとする計量制度、三貨を中心とする貨幣制度を文献資料と現物資料の連関に注目して実証的に解明する。

## **デジタルアーカイブズ科学**

文化資源のデジタル化の理論と方法について研究する。

## **コンテンツ創造科学**

デジタルコンテンツ、とりわけ電子的なゲームの面白さの解明とそれを構造化した制作理論の構築、およびシリアスゲームについて研究する。

## **研究業績(2015 年度)**

---

## **前田 幸男・教授**

### **研究テーマ(主たるもの)**

#### **内閣支持率の研究**

新聞社等が報道している世論調査の集計結果の検討を中心に、マクロ・レベルにおける内閣支持率の変動およびミクロ・レベルにおける個人の内閣支持について基礎的な研究を行っている。

#### **政党政治の研究**

日本の政党政治について研究している。民主党政権および民主党についての研究を 2014 年度に編著として刊行した。

#### **統計データ・社会科学データの保存と高度利用に関する研究**

諸外国の統計制度と統計データ・社会科学データの保存・公開について歴史的・政策的な研究をしている。

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

Yukio Maeda: "Japan Decides 2014: The Japanese General Election", Robert J. Pekkanen, Steven R. Reed and Ethan Scheiner 編, Palgrave Macmillan, 2015 年.

### 雑誌論文

前田幸男: 「異なる立場の対話促す紙面を : 数量分析から見る報道の課題 (安保法制をどう伝えるか)」, 新聞研究, No.769, pp.12-15, 2015 年. 【一般向け】

前田幸男・平野浩: 「有権者の心理過程における首相イメージ」, 選挙研究, Vol.31, No.2, pp.5-18, 2015 年.

### 講演・口頭発表

前田幸男・平野浩: 「有権者の心理過程における首相イメージ」, 日本選挙学会研究会, 2015.

前田幸男・平野浩: 「内閣支持の分析—業績評価・将来期待・首相イメージ—」, 政治コミュニケーション研究会, 2015. 【招待講演】

前田幸男・平野浩: 「内閣支持と投票選択—JES-IV(2007-2010)データの分析」, 日本政治学会研究大会, 2015.

---

## 真鍋 祐子・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 現代韓国におけるナショナリズムとツーリズム

## メディア研究の視座より韓国民主化運動を読み直す

## 在日コリアン知識人の「知」の系譜と社会参与

### 研究業績(2015 年度)

#### 著書

真鍋祐子（金景南訳）：“열사의 탄생 :한국민중운동에서의 한의 역학”, 民俗苑（ソウル）, 2015 年.

#### 分担著書

真鍋祐子：「戦争と宗教／聖地とツーリズム」, 山本敏夫記念文学部基金講座「現代社会と宗教」 編 編, 慶應義塾大学出版会, 2015 年.

#### 雑誌論文

真鍋祐子：「書評：伊藤正子『戦争記憶の政治学－韓国軍によるベトナム人戦時虐殺問題と和解への道』」, 現代韓国朝鮮研究, No.15, pp.120-123, 2015 年. 【査読有】

#### その他論文

真鍋祐子：「『在日音楽の 100 年』を再考する－それぞれの「解放」＝「パリ口」のために」, 韓国朝鮮文化研究会『韓国朝鮮の文化と社会』 第 14 号, エッセイ、239－245, 2015 年.

真鍋祐子：「書評：金鎮虎『市民 K、教会を出る』」, 『本のひろば』7 月号, 2015 年. 【一般向け】

#### 講演・口頭発表

真鍋祐子：「長白山・白頭山／中国・南北朝鮮」, 慶應義塾大学山本敏夫記念文学部基金講座「現代社会と宗教」『聖地とツーリズム』、慶應義塾大学、2015 年 6 月 10 日, 2015. 【招待講演】

真鍋祐子：「韓国民主化抗争（1980 年）と「五月の歌」－歌は、どこから来て、どこへ行くのか」, 西南学院大学全学共通教育『韓国学への招待』特別講義、西南学院大学、2015 年 6 月 27 日., 2015. 【招待講演】

真鍋祐子：「日韓相互認識の現在－未来志向のために」、日中韓三国協力事務局主催「日中韓記者と日本の大学生との対話」、東京大学、2015年4月17日、2015。【招待講演】

## 新聞・報道

真鍋祐子：「“東洋主義”在日本台頭」、環球時報、2015。

---

## 水越 伸・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ソシオ・メディア論

メディアを情報技術の側からだけでなく、人間や社会の営みの側からもとらえるメディア論の構築。そのための思想的 метод論として「批判的メディア実践」を構想、実践している。

#### メディア史

19世紀後半から20世紀半ばにかけての電氣的メディア、電子的メディアをめぐる技術と社会のダイナミズムについての歴史的研究。

#### メディア・リテラシー

メディア・リテラシーについての理論と実践に関する総合的な研究。

### 研究業績(2015年度)

---

## 目黒 公郎・教授

## 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2015 年度)

### 新聞・報道

一般: 「いのちを守る防災 避難所スマホで探す」, 毎日新聞, 2015.

一般: 「ネパール 長さ 150 キロ断層動く 軟弱な地盤 揺れ増幅」, 読売新聞, 2015.

一般: 「ネパール地震 専門家 3 氏が分析 レンガの建物 被害を拡大 数万年前は湖 地盤軟弱」, 毎日新聞, 2015.

一般: 「日本の防災 ネパールへ 耐震化 決意新た 神戸との交流生かす」, 朝日新聞, 2015.

一般: 「カトマンズ 震度は 4~5 強 日本の研究者調査 想定より小さく れんが造りの建物が倒壊」, 朝日新聞, 2015.

一般: 「ネパール地震 あす 1 カ月 粗悪れんが 被害集中 震度 5 程度一瞬で倒壊」, 産経新聞, 2015.

一般: 「赤外線構造物診断研究会 社団化を記念し 10 日に特別講演」, 建設通信新聞, 2015.

一般: 「総会 赤外線構造物診断研究会 技術研さんに励む」, 建設通信新聞, 2015.

一般: 「プラスソナエ 新しい防災、はじめます」, 電通報, 2015.

一般: 「災害大国 あすへの備え 耐震化で命を守る 100 万~150 万円が最多 費用補助の自治体も」, 朝日新聞, 2015.

一般: 「マンション「防才」でコンテスト きょうから対策アイデアを募集 東大の RC77・防災ビジネス研」, 建設通信新聞, 2015.

一般: 「防災の日企画 第 2 弾 特別対談 災害イマジネーションを高め自分と家族の命を守る 東京大学教授(工学博士) 日本地震工学会会長 目黒公郎」, ナイスビジネスレポート, 2015.

一般:「大規模災害 発生に備え 求むマンション「防才」 東大教授らコンテスト 来月 31 日まで募集」, 東京新聞, 2015.

一般:「東日本復興 特報版(365) 都市空間の災害抑止力と減災力を向上 東北大学災害科学国際研究所教授 村尾修氏」, 建設通信新聞, 2015.

一般:「RC-77 「マンション防才」 アイデアに 210 件」, 建設通信新聞, 2015.

一般:「RC77 マンション防災コンテスト 最優秀に家具転倒防止具 知恵出し被害最小限に」, 建設通信新聞, 2015.

---

## 山内 祐平・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報通信技術を利用した学習環境のデザイン

教育の情報化が急速な勢いで進んでいるが、学習は空間／活動／共同体／人工物の微妙なバランスの中で発生する複雑な事象である。インターネットなどの情報通信技術を学びの場に導入する際に、様々な要因をどうデザインすれば適切な学習環境を構成できるかを、実践研究の中で明らかにする。

### 研究業績(2015 年度)

#### 著書

山内祐平:「アクティブラーニングのデザイン」, 東京大学出版社, 2015 年.

#### 分担著書

山内祐平他:「インフォーマル学習」, 山内祐平 編, ミネルヴァ書房, 2015 年.

#### 雑誌論文

山内祐平：「研修とeラーニングの担当者は協働を ブレンド型教育体系構築のススメ」, 人材教育: HRDmagazine, Vol.27, No.11, pp.28-31, 2015年. 【査読有】

山内祐平：「MOOCと反転授業」, 神戸大学大学教育推進機構 大学教育研究, No.23, pp.103-122, 2015年. 【査読有】

藤本徹、荒優、一色裕里、山内祐平：「MOOC配信による高等教育のグローバル展開の動向」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.85-86, 2015年. 【査読有】

荒優、藤本徹、一色裕里、山内祐平：「教員のコース設計意図と受講者の学習目標を考慮したMOOC評価観点の提案」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.89-90, 2015年. 【査読有】

安斎勇樹、大浦弘樹、池尻良平、伏木田稚子、山内祐平：「MOOC講座における多層型オンラインワークショップの提案」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.95-96, 2015年. 【査読有】

池田めぐみ、伏木田稚子、山内祐平：「大学における正課外活動の在り方とキャリア観の関係」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.153-154, 2015年. 【査読有】

山内祐平、大浦弘樹、池尻良平、伏木田稚子、安斎勇樹：「MOOCと連動した反転学習における歴史的思考力の評価」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.323-324, 2015年. 【査読有】

伏木田稚子、大浦弘樹、山内祐平：「高次能力学習型の反転授業における知識活用に関する研究」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.325-326, 2015年. 【査読有】

森朋子、矢野浩二郎、本田周二、溝上慎一、山内祐平：「反転授業の学びの構造を考える」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.327-328, 2015年. 【査読有】

中村絵里、荒優、山内祐平：「就学前自宅学習に関わる親の支援研究」, 日本教育工学会第31回全国大会講演論文集, pp.441-442, 2015年. 【査読有】

## 国際会議等

Oura, H., Anzai, Y., Fushikida, W., Yamauchi, Y.: "What Would Experts Say About This?" An Analysis of Student Interactions outside MOOC Platform", World Conference on Computer Supported Collaborative Learning 2015, 2015. 【査読有】

Oura, H., Ikejiri, R., Fushikida, W., Anzai, Y., Yamauchi, Y.: "Blended Design in a Regional MOOC: The Impact of Face-to-Face Group Discussion on the Pass Rate in a History Course," AERA 2015 Annual Meeting, 2015. 【査読有】

## その他論文

堀田龍也、山内祐平：「れからの学習環境とメディアへの期待(特集 多様化する子どもの学習環境と教育メディア)--(子どもの学習環境と教育メディアのこれから)」, 放送メディア研究(12), pp281-301, 2015年.

## 講演・口頭発表

山内祐平：「高齢者の学習環境としての MOOC」, ラーニングフルエイジング研究会, 2015. 【招待講演】

山内祐平：「テクノロジーがもたらすリーダー育成の新たな地平～オンライン教育の効用を考える」, グロービス東京校, 2015. 【招待講演】

山内祐平：「生きる力を育む、21世紀型の幼児教育」, 幼稚園・保育園 ICT カンファレンス 2015, 2015. 【招待講演】

山内祐平：「眠くならない勉強の話」, 隠岐國学習センター, 2015. 【招待講演】

## 新聞・報道

山内祐平：「入試でパソコンを使う時」, 朝日新聞, 2015.

山内祐平：「教育ビッグデータの未来図」, 朝日新聞, 2015.

山内祐平：「パソコンスキル新時代 主体的な学びを育む「反転学習」」, Fuji Sankei Business, 2015.

山内祐平：「園児の教材 今やデジタル」, 朝日新聞, 2015.

山内祐平：「予習の習慣 大学生にも ネットで学び→教室では応用 思考力高める効果」, 日本経済新聞, 2015.

山内祐平：「「オンライン教育」の利便性や課題」, FUJI NEWS NETWORK, 2015.

山内祐平：「教育 ICT ケーススタディ」, 日経コンピュータ, 2015.

山内祐平：「人工知能に負けない子ども、どう教育するか」, 日経 BizGate, 2015.

## 受賞

東京大学大学院情報学環、ミサワホーム株式会社他：第9回キッズデザイン賞「ホイクリ〜保育環境創造カード」, 2015年.

---

## 山口 いつ子・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 情報環境のスマート化の下での情報法の理論体系と価値調整に関する日米欧比較制度研究

本研究は、長期的目標としている情報法の理論体系の構築に向けて、その中核となる短期・中期的プロジェクトとして位置づけられる。すなわち、本研究は、「ユビキタス化」の進化形とも言える最近の情報環境の「スマート化」に牽引される先端的な技術動向が、個人の自由・権利や社会制度等にもたらすインパクトを探るとともに、グローバル化の中で共通の課題に直面する米欧との比較制度分析の方法を用いて、これまでに積み重ねてきた、1) 情報法の基底にある諸価値をめぐる原理論的考察、2) 上記1) よりもプラクティカルなレベルでの、互いに対立する価値・利益間の調整をめぐる個別具体的な課題の検討、3) 上記1) と2) を総合して体系化するための理論枠組みに関する研究、という三つの軸での考察を、さらに拡充・深化させることを目的としている。

### 研究業績(2015 年度)

#### 著書

松井茂記・鈴木秀美・山口いつ子編：「『インターネット法』〔山口いつ子「インターネットにおける表現の自由」全 369 頁のうち 25-52 頁〕」, 有斐閣, 2015年.

## 分担著書

山口いつ子: 「法・政策と情報—総論 (『よくわかる社会情報学』全 217 頁のうち 154-157 頁)」, 西垣通・伊藤守 編, ミネルヴァ書房, 2015 年.

山口いつ子: 「グローバル情報環境における著作権と表現の自由とのバランス (『はばたき—21 世紀の知的財産法 [中山信弘先生古稀記念論文集]』全 1087 頁のうち 609-626 頁)」, 小泉直樹・田村善之 編, 弘文堂, 2015 年.

## 雑誌論文

宍戸常寿・門口正人・山口いつ子: 「HOT issue [鼎談] インターネットにおける表現の自由とプライバシー——検索エンジンを中心として」, ジュリスト, No.1484, pp. ii - v、68-80, 2015 年.

山口いつ子: 「EU 法における「忘れられる権利」と検索エンジン事業者の個人データ削除義務——グーグル・スペイン社事件 EU 司法裁判所 2014 年 5 月 13 日先決裁定を手掛かりにして」, 別冊 NBL [堀部政男編著『情報通信法制の論点分析』], No.153, pp.181-196, 2015 年.

## 講演・口頭発表

山口いつ子: 「次世代 AI 時代のプライバシーと「忘れられる権利」——対抗利益間の調整における公正なバランスに向けて」, 司法研修所・平成 27 年度ミニ研究会「インターネット上のプライバシー権侵害事案への対応」(東京高等・地方・簡易裁判所合同庁舎、東京都千代田区、2016 年 3 月 16 日), 2015. 【招待講演】

山口いつ子: "Why we need User-protection, Privacy, & Free Flow of Information on the Internet: A Mixed Blessing of the Smart Big Data Technology?", Collaborative Workshop with Google: Achieving User-protection, Privacy, and Free Flow of Information on the Internet (The University of Tokyo: May 25, 2015), 2015.

---

## 山中 俊治・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2015 年度)

---

### 吉見 俊哉・教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

##### 20世紀日本とアメリカニズム

1920年代から敗戦を経て現在に至る日本の文化的アメリカニゼーションを焦点に、占領期における大衆意識の屈折、米軍基地の文化的影響、アメリカからの視線を媒介にした戦後のアイデンティティの再構築、消費社会的なリアリティを演じる自己の他者化といった歴史的展開を構造的に把握してきている。これまで国際関係や政治経済的な面からの日米関係の分析は多数なされてきたのに比べ、大衆文化やメディア文化、都市文化の面から戦後日本におけるアメリカニズムを歴史的に掘り下げていく研究をリードしてきた。とりわけ本研究は、日本と韓国、台湾、フィリピン、東南アジア諸国との連続性に視点を広げ、これらの東アジア諸国に点在したアメリカ軍基地と同地域に大衆文化の関係に関心を向けている。帝国主義期から冷戦期への流れのなかで、ポスト植民地主義や文化研究、新しい文化史の視座を十分に消化しながらこのテーマに本格的に取り組むものである。

##### MALUI 連携とデジタル知識基盤

デジタル技術は活字と視聴覚を架橋し、これまで多様な方式で蓄積されてきた文化的記憶を統合的に扱う。こうした技術的可能性にいち早く着目し、新たな記憶のプラットフォームを構築してきたのは、グーグルをはじめとするグローバル企業である。しかし、20世紀の大衆消費社会における文化資源の生産・流通・消費のサイクルを支えたマスメディア産業に代わり、やがて地球規模で広がる新たな知識循環型社会における文化資源の保存と活用、価値の創造のサイクルを支えていくのは、これまで公共的な文化施設として整備されてきた図書館、博物館・美術館、文書館・資料館、フィルムセンター、番組アーカイブなどの機関と大学、この新たな体制に適応した文化産業の横断的な連携、すなわちMALUI連携である。この場合、MはMuseum、AはArchives、LはLibrary、UはUniversity、IはIndustryを示す。これらの公共的な文化・知識機関の連携により、いかにした新たなデジタル知識基盤を構築していくことができるかについて探究を進めている。

## 20世紀東アジア文化史を書く

東アジアの若手研究者が共同で、20世紀全体を通じた東アジア文化史を書くことを目指している。これまで、Inter-Asia Cultural Studies や、Cultural Typhoon のプロジェクトで展開してきたネットワークと蓄積を基礎に、20世紀の東アジアが経験した様々な歴史をそれぞれの国民国家の枠を越えた仕方で記述したい。特に、第一次世界大戦と西洋の後退の東アジアにおける文化的インパクト、1920～30年代の東アジアの諸都市におけるモダン文化の浮上、日本の軍事侵略と終戦、植民地独立戦争、冷戦と朝鮮戦争、ベトナム戦争、様々な「戦後」と「成長」の時代の到来、トランスナショナルなメディア文化と、東アジアが経験した20世紀を共通の歴史として、最初から国民国家を越えた視座と枠組みのなかで集团的に記述していく。

### 研究業績(2015年度)

---

## 暦本 純一・教授

### 研究テーマ(主たるもの)

Human Computer Interaction

Human Augmentation

Ubiquitous Computing

### 研究業績(2015年度)

#### 雑誌論文

Kana Misawa and Jun Rekimoto: 「ChameleonMask: A Human-Surrogate System With A Telepresence Face」, SIGGRAPH ASIA 2015 Emerging Technologies, 2015年. 【査読有】

#### 国際会議等

Fujii, K., Russo, S., Maes, P., and Rekimoto, J: "MoveMe: 3D Haptic Support for a Musical Instrument", ACE 2015, 2015. 【査読有】

Nitta, K., Higuchi, K., Tadokoro, Y., and Rekimoto, J: "Shepherd Pass: Ability Tuning for Augmented Sports using Ball-Shaped Quadcopter", ACE 2015, 2015. 【査読有】

Shunichi Kasahara and Jun Rekimoto: "JackIn Head: An Immersive Human-Human Telepresence System", SIGGRAPH ASIA 2015 Emerging Technologies, 2015. 【査読有】

Shunichi Kasahara and Jun Rekimoto: "JackIn Head: Immersive Visual Telepresence System with Omnidirectional Wearable Camera for Remote Collaboration", VRST2015, 2015. 【査読有】

Kana Misawa and Jun Rekimoto: "Wearing Another's Personality: A Human-surrogate System with a Telepresence Face", ISWC 2015, 2015. 【査読有】

Shunichi Kasahara, Shohei Nagai and Jun Rekimoto: "First Person Omnidirectional Video: System Design and Implications for Immersive Experience", TVX 2015, 2015. 【査読有】

Kana Misawa and Jun Rekimoto: "ChameleonMask: Embodied Physical and Social Telepresence using human surrogates", ACM CHI 2015, 2015. 【査読有】

Ayaka Sato, Jun Rekimoto: "Designable Sports Field: Sport Design by a Human in Accordance with the Physical Status of the Player", Augmented Human 2015, 2015. 【査読有】

Shohei Nagai, Kasahara Shunichi, Jun Rekimoto: "Directional Communication using Spatial Sound in Human-Telepresence", Augmented Human 2015, 2015. 【査読有】

Shohei Nagai, Shunichi Kasahara, Jun Rekimoto: "LiveSphere: Sharing the Surrounding Visual Environment for Immersive Experience in Remote Collaboration", TEI 2015, 2015. 【査読有】

## その他論文

三澤 加奈, 暦本 純一: 「ChameleonMask: 人の存在感を提示する仮面型テレプレゼンスシステム」, 日本ソフトウェア科学会インタラクティブシステムとソフトウェアに関する研究会, 2015年. 【査読有】

新田慧, 樋口啓太, 田所祐一, 暦本純一; 「HoverBall: 三次元空間移動が可能なボールを用いたオーグメンテッドスポーツ」, インタラクション 2015, 2015 年. 【査読有】

永井翔平, 笠原俊一, 暦本純一: 「全周囲映像を用いたヒューマンテレプレゼンスのための体験共有システム」, インタラクション 2015, 2015 年. 【査読有】

---

## 2. 准教授

---

### 金井 崇・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

### 大庭幸治・准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

### 伊東 乾・准教授

研究テーマ(主たるもの)

---

## 作曲・指揮

伊東は第二次世界大戦後の音楽思潮を前提に、セリエリズムなどアナログ技術を背景に進展した作曲技法をデジタルベースの音楽思考に拡大し、作曲と演奏の新たな可能性を開拓している。また特に指揮技法については筋の運動と音楽的な呼吸に基づき関節の回転角速度 Angular velocity に一元化した Boulez-Etoevos-Ito の動生理的なメソッドを確立した。

## 動学的音楽基礎論

伊東はヒト聴覚のモード分節をもとに周期関数のスペクトルに基づくフーリエ解析の静的な枠組みを超えるべく複素周波数を導入、ラプラス解析に基づく動学的枠組みを定式化した。これにより時間に依存する音楽の3次元ダイナミクスを準線形モデル、非線形相関モデルなどを用いた一元的な解析が可能となる。従来経験的な暗黙知に留まった創作と上演の叡智を健在化し、音楽の可能性をシステムティックに拡大している。

## コンテンツ情報社会システム論

19世紀、録音技術の発明、20世紀ラジオ放送の創始以降、音楽・芸術表現と情報メディアとは切り離すことが不可能になった。1930年代には人類初のファシズム状況を創発させてもいる。一メディア・コンテンツの脳認知評価等、具体的な実測データを採取しつつ、厚生経済や確率微分方程式など数理のモデル枠組みを併用しつつ、音声動画コンテンツの観点から情報社会システムを検討し、またその倫理の評価を行う。

## 研究業績(2015年度)

### 作品

伊東 乾: 「美しい虚構」, わだつみ会, 2015.

### 新聞・報道

伊東 乾: 「世界の中の日本」, 日本ビジネスプレス, 2015.

## 大原 美保・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 緊急地震速報の効果的な利用法に関する研究

緊急地震速報を効果的に活用するために、地域における海溝型地震・活断層型地震の発生リスクを考慮した速報効果の検証、技術的戦略の提案を行うとともに、実際の速報発表時の住民の対応行動の調査や対応行動力向上のための環境整備を行っている。

#### 人口減少を考慮した減災に向けた土地利用および防災施設配置に関する研究

わが国は長期の人口減少過程にある。将来の災害による被害を軽減するためには、災害リスクの少ない土地にあらかじめ人口・産業を誘導し、被害発生を未然に防ぐことが効果的である。本研究では、人口減少を考慮した上で、将来的に減災効果を生み出す土地利用方策や避難場所・避難所等の防災施設の配置方針について検討している。

#### 組織の危機管理対応力の向上に関する研究

首都直下地震などの大規模災害時に、組織の事業・サービスを途絶することなく継続させるためには、組織の危機管理対応力を日頃から向上させておく必要がある。大原研究室では、大学・病院などの各種組織を対象とした、危機管理マニュアルのあり方や危機管理対応力を向上させるための方法論を研究している。

### 研究業績(2015 年度)

---

## 金子 知適・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### ゲーム情報学

ゲームを題材に人工知能の研究を行う

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

金子知適: 「将棋の棋譜の指し手から意図を読みとる」, 情報学環紀要, Vol.89, pp.119--122, 0000 年.

### 国際会議等

T. Imagawa and T. Kaneko: "Enhancements in Monte Carlo Tree Search Algorithms for Biased Game Trees", IEEE Conference on Computational Intelligence and Games, pp.43-50, 0000. 【査読有】

S. Takeuchi and T. Kaneko: "Estimating Ratings of Computer Players by the Evaluation Scores and Principal Variations in Shogi", ACIT 2015 Track 2 Game Informatics, pp.85-90, 0000. 【査読有】

S. Yokoyama and T. Kaneko and T. Tetsuro: "Parameter-Free Tree Style Pipeline in Asynchronous Parallel Game-Tree Search", The 14th International Conference on Advances in Computer and Games, Vol.LNCS 9625, pp.210-222, 0000. 【査読有】

Y. Mandai and T. Kaneko: "LinUCB Applied to Monte Carlo Tree Search", The 14th International Conference on Advances in Computer and Games, Vol.LNCS 9625, pp.41-52, 0000. 【査読有】

### その他論文

渡辺順哉 美添一樹 金子知適: 「モンテカルロ木探索を統合したプレイアウト方策の最適化」, 第 20 回ゲームプログラミングワークショップ, pp. 5-11, 0000 年. 【査読有】

万代悠作 金子知適: 「囲碁における LinUCT の性能評価」, 第 20 回ゲームプログラミングワークショップ, pp. 107-112, 0000 年. 【査読有】

大森翔太郎 金子知適: 「将棋における棋風を学習するための棋譜分析の取り組み」, 第 20 回ゲームプログラミングワークショップ, pp. 32-39, 0000 年. 【査読有】

島野拓也 金子知適: 「証明数と経験的知識を用いた探索の効率化」, 第 20 回ゲームプログラミングワークショップ, pp. 107-112, 0000 年. 【査読有】

大森翔太郎 金子知適: 「機械学習を用いた将棋における棋風の学習の研究」, 情報処理学会研究報告, 2015-GI-34(6) pp. 1-7, 0000 年.

## 講演・口頭発表

金子知適: 「コンピュータ将棋はなぜ強いのか -その技術と進歩-」, 慶應義塾大学自然科学研究教育センター・シンポジウム, 0000. 【招待講演】 【一般向け】

T. Kaneko: "Machine Learning of Evaluation Functions and Playing Styles in Shogi", JAIST Symposium on Game & Entertainment Technology & Its Application, 0000. 【招待講演】

---

## 上條 俊介・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 車載画像センサーの開発

交差点等の一般道において、歩行者や自転車を車の事故から守るための安全運転支援システムの開発が世界的に行われている。当研究室では、独自の画像処理技術を活かし、歩行者や自転車を車載カメラを用いて認識する技術を開発している。

#### 路車協調型安全運転支援技術

路側センサーから交通状況を的確に把握し、危険状況をドライバーに知らせることで事故を回避するシステムの開発を行っている。本研究では、情報提供を受けたドライバーの受容性を考慮したセンサ開発を行うことが重要である。

#### 時空間 Markov Random Field Model による時空間画像の領域分割

コンピュータ・ビジョンでは画像上で移動物体同士が重なった場合（オクルージョン）において、個々の物体を分離して追跡することが困難であった。そこで、本研究では、この問題を時空間画像の領域分割と等価であることを明確にし、時空間 Markov Random Field Model を定義した。

これにより、オクルージョンが生じている場合でも正確に移動物体を画像上で分離することが可能となった。さらに、本手法は、低画角画像のようにオクルージョンが激しい場合でも効果的であることが証明された。

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "3D Building Model based Pedestrian Positioning Method using GPS/GLONASS/QZSS and Its Reliability Calculation", GPS Solutions, Vol.DOI: 10.1007/s10291-015-0451-7, pp.pp1-16, 2015 年. 【査読有】

Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Yuyang Huang, Shunsuke Kamijo: "Urban Pedestrian Navigation using Smartphone-based Dead Reckoning and 3D Maps Aided GNSS", IEEE Sensors Journal, Vol.DOI: 10.1109/JSEN.2015.2496621, 2015 年. 【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "GNSS/On-Board Inertial Sensor Integration with the Aid of 3D Building Map for Lane-Level Vehicle Self-Localization in Urban Canyon", IEEE Transactions on Vehicular Technology, Vol.DOI 10.1109/TVT.2015.2497001, 2015 年. 【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "Passive Sensor Integration for Vehicle Self-Localization in Urban Traffic Environment", Sensors, Vol.Vol.15, No.No.12, pp.pp.30199-30220, 2015 年. 【査読有】

Yutaro Wada, Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Optimization of 3D Building Models by GPS Measurements", GPS Solutions, Vol.DOI 10.1007/s10291-015-0504-y, 2015 年. 【査読有】

Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Bicyclist Recognition and Orientation Estimation from On-board Vision System", International Journal of Automotive Engineering, Vol.Vol.6, No.No.2, pp.pp.67-73, 2015 年. 【査読有】

Shunsuke Miura, Li-Ta Hsu, Feiyu Chen, Shunsuke Kamijo: "GPS Error Correction with Pseudorange Evaluation Using 3-dimensional Maps", IEEE TRANSACTIONS on Intelligent Transportation Systems, Vol.Vol. 16, No.No. 6, pp.pp.3104 - 3115, 2015 年. 【査読有】

Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "NLOS Correction/Exclusion for GNSS Measurement Using RAIM and City Building Models", Sensors, Vol.Vol.15, No. No.7, pp.pp.17329-17349, 2015 年。【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Lijia Xie, Shunsuke Kamijo: "Accurate Estimation of Pedestrian Orientation from On-board Camera and Inertial Sensors", IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol.Vol.E99-A, No.No.1, pp.pp.271-281, 2016 年。【査読有】

## 国際会議等

Li-Ta Hsu, Yutaro Wada, Yanlei Gu Shunsuke Kamijo: "A Study of City Building Model Based Positioning Method using Multi-GNSS in Deep Urban Canyon", European Navigation Conference 2015, 2015。【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Yutaro Wada, Shunsuke Kamijo: "Integration of 3D Map based GPS Positioning and On-Board Sensors for Vehicle Self-Localization in Urban Canyon", ION 2015 Pacific PNT Meeting, 2015。【査読有】

Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Pedestrian Localization Service using 3D Map and RAIM GNSS Satellite Selection Technique", IEEE ITSC2015, 2015。【査読有】

Yoriyoshi Hashimoto, Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "A Probabilistic Model for the Estimation of Pedestrian Crossing Behavior at Signalized Intersections", IEEE ITSC2015, 2015。【査読有】

Shunsuke Kamijo, Yanlei Gu, Li-Ta Hsu: "GNSS/INS/On-Board Camera Integration for Vehicle Self-Localization in Urban Canyon", IEEE ITSC2015, 2015。【査読有】

Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "NLOS Exclusion using Consistency Check and City Building Model in Deep Urban Canyons", ION GNSS+ 2015, 2015。【査読有】

Li-Ta Hsu, Hiroko Tokura, Nobuaki Kubo, Shunsuke Kamijo: "Evaluation of Multiple Fault Exclusion Based on L1 Norm Minimization with multi-GNSS measurements in Urban Environments", ION GNSS+ 2015, 2015。【査読有】

Li-Ta Hsu, Yutaro Wada, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Rectification of 3D Building Models Based on GPS Signal Collected by Vehicle", IEEE ICVES2015, 2015. 【査読有】

Yoriyoshi Hashimoto, Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "Probability Estimation for Pedestrian Crossing Intention at Signalized Crosswalks", IEEE ICVES2015, 2015. 【査読有】

Mahdi Javanmardi, Yanlei Gu, Ehsan Javanmardi, Li-Ta Hsu Shunsuke Kamijo: "3D Building Map Reconstruction in Dense Urban Areas by Integrating Airborne Laser Point Cloud with 2D Boundary map", IEEE ICVES2015, 2015. 【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "Correction of Vehicle Positioning Error Using 3D-Map-GNSS and Vision-based Road Marking Detection", IEEE ICVES2015, 2015. 【査読有】

Li-Ta Hsu, Hiroko Tokura, Nobuaki Kubo, Shunsuke Kamijo: "GNSS positioning using WLS, DGNSS and RAIM in Tokyo City", IS-GNSS, 2015. 【査読有】

Yutaro Wada, Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Correction of Building Footprint for 3D City Models using GPS NLOS Measurement", IS-GNSS, 2015. 【査読有】

Yuyang Huang, Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Haitao Wang, Shunsuke Kamijo: "Assessment of Outdoor Wi-Fi Fingerprint Calibration using Different GNSS Approaches", IS-GNSS, 2015. 【査読有】

Jingwen Liu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Customer Behavior Recognition in Retail Store from Surveillance Camera", IEEE International Symposium on Multimedia 2015, 2015. 【査読有】

## その他論文

Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "A Study of City Building Model Based Positioning Method using Multi-GNSS", 測位航法学会 全国大会 講演集, 2015 年.

Jingwen Liu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "Recognition of Customer Behavior on the Front of Shelf from Surveillance Camera", 電子情報通信学会 パターン認識・メディア理解研究会 (PRMU) 技報, PRMU2015-82, 2015 年.

Yanlei Gu, Yutaro Wada, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "Correction of GNSS/INS Integration Error using Vision-Based Lane Recognition and Tracking for Precise Vehicle Self-Localization in Urban Environment", 自動車技術会 春季大会 2015, 2015 年. 【査読有】

Yanlei Gu, Li-Ta Hsu, Shunsuke Kamijo: "GNSS/INS/On-Board Camera Integration for Autonomous Vehicle Self-Localization", IEICE Technical Report, "電子情報通信学会 ITS研究会 技報, Vol.115No. 73, pp23-28, 2015 年.

Li-Ta Hsu, Shunsuke Miura, Shunsuke Kamijo: "Street Smart: 3-D City Mapping and Modeling for Positioning with Multi-GNSS", GPS World, Vol. 26, Issue 7, pp. 36-43, 2015 年. 【査読有】

1. Jingwen Liu, Yanlei Gu, and Shunsuke Kamijo: "Recognition of Customer Behavior on the Front of Shelf from Surveillance Camera", Proceedings of Computer Vision and Image Media (CVIM), 2015 年.

Shunsuke Kamijo, Yanlei Gu, Li-Ta Hsu: "Autonomous Vehicle Technologies: Localization and Mapping", IEICE Fundamentals Review, Vol.9, No.2, pp.131-141, 2015 年. 【査読有】

Yuyang Huang, Li-Ta Hsu, Yanlei Gu, Shunsuke Kamijo: "GNSS Positioning Correction Method Using Altitude Map", 第 13 回 ITS シンポジウム, 2015 年. 【査読有】

## 講演・口頭発表

上條俊介: 「自動運転に関する総合的研究のご紹介」, 埼玉工業大学 特別講演, 2015. 【招待講演】

---

## JASON G. KARLIN・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### Idols of the Marketplace: Celebrity and Advertising in Japanese Media Culture

## The World Hobbit Project

### 研究業績(2015 年度)

---

## 菊地 大樹・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本仏教史

中世仏教については、8世紀から10世紀ごろまでの古代の状況を踏まえ、さらに11世紀から14世紀ぐら  
いまでの中世社会前期において、それが歴史・思想的にどのように継承され、展開していったのかという切  
り口から、「思想的系譜論」を重視して研究してきました。6世紀ごろに仏教が渡来すると、列島側は単に  
そのインパクトに圧倒されていたわけではなく、それを柔軟に受け止めて列島的な要素を加え、徐々に自分  
のものとしていきます。中世の列島には、法然・親鸞・道元・日蓮ら、中世日本文化に大きな足跡を残し、  
現代にいたるまで強い文化的影響を与えた仏教史上の人物を多く輩出しています。私は、このような僧たち  
が出現する思想的背景に興味を引かれ、民衆仏教に関心を持っています。そこで、そのような民衆仏教を担  
ったヒジリの一群である持経者という宗教者に注目しています。今後は、さらにこのような中世の聖につい  
て研究するとともに、民衆の側からのみではなく、制度や権力の側からの中世仏教論の研究も進めていき  
たいと考えています。

#### 金石文・石造物論

金石文とは、広く金属や石など紙以外の媒体に記された文字のことを指します。主に、対象物に紙を水張り  
し、上から油性の墨を置いて文字や図像を浮かび上がらせる拓本という伝統的な技法によって史料化を進め  
ています。金石文研究は私の場合、宗教史研究から発展して興味を持つにいたった分野です。なぜならば日  
本の場合、中国やヨーロッパなどと異なり、特に中世の金石文・石造物はほとんどが宗教的な契機によっ  
て作成されています。それは何故か？この問いは単純なようですが、日本の金石文全体の特徴を考えてゆくら  
うで根本的な問題提起を含んでいます。私自身、日々そのことを念頭に置きながら研究を進めることにより、

単に金石に書かれたテキストだけではなく、それが記された環境や受容者、歴史的文脈における意味づけについて考えを深めています。

## 古記録論

古記録とは、主に日記史料を指します。私の場合、史料編纂所では古記録研究のセクションに所属し、鎌倉時代の三条実朝という貴族の日記を中心に研究を進めています。前近代、特に中世貴族にとって、日記は家の継続のために日々の政務や儀式の内容を記録し、子孫に伝えるという機能を持ちました。しかしそのような機能的な日記の中にも、様々な当時の風俗が記され、時として個人の内面を吐露するような記述がなされることもあります。この意味で、日記史料は中世社会全般の実態を明らかにするうえで無限の可能性を秘めた史料群であるといえます。史料編纂所では、日記史料についても、単に書かれたテキストだけではなく、原本を詳細に観察して、そこから得られる様々な情報や日記の裏側に描かれた文書の研究をも進めています。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 中野 公彦・准教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

##### 生体信号計測を利用したモビリティ工学

運転している人の筋電位、発汗、脳波などの生体信号を計測し、緊張度、乗り心地、眠気などの運転者の状態を推定しています。これにより、車両特性および道路・インフラなどの評価を行っています。 ¥r¥n

##### 視線計測によるカーナビゲーションディスプレイの安全性評価

カメラを使ってドライバーの視線を計測することによって、様々なディスプレイサイズや位置に置かれたカーナビゲーション使用時の安全性などを評価しています。 ¥r¥n

##### 力覚支援操舵

理想とする軌道からの偏差に応じた操舵反力をハンドルに与えることによって、なめらかな操舵を実現させることを目的とした運転支援です。運転者とシステムの意図が反するとより危険を増加させる可能性もあるため、人間の特性を考慮した制御方法の検討を行っています。

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

中野公彦: 「車載ディスプレイの HMI と視認性,安全性向上」, (株) 技術情報協会 編, (株) 技術情報協会, 2015 年.

中野公彦: 「Iot/CPS/M2M 応用市場とデバイス・材料技術」, S&T 出版 編, S&T 出版, 2015 年.

### 雑誌論文

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Hiromitsu Ishiko, Kenji Hagita, Makoto Kihira, Toshiya Yokozeki: "Eye-Gaze Tracking Analysis of Driver Behavior While Interacting With Navigation Systems in an Urban Area", IEEE Transaction on Human-Machine Systems, Vol.15, pp.5136-5150, 2015 年. 【査読有】

Y.Zhang, R. Zheng, T. Kaiuka, D.Su, K. Nakano, M.P. Cartmell: "Broadband vibration energy harvesting by application of stochastic resonance from rotational environments", The European Physical Journal Special Topics, pp.2687-2701, 2015 年. 【査読有】

Dongxu Su, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Matthew P Cartmell: "Stabilisation of the high-energy orbit for a non-linear energy harvester with variable damping", Institution of Mechanical Engineers Part C: Journal of Mechanical Engineering Science, 2015 年. 【査読有】

Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano, Rui Ohashi, Yoji Okabe, Mamoru Shimazaki,, Hiroki Nakamura, Qi Wu: "PARAFAC Decomposition for Ultrasonic Wave Sensing of Fiber Bragg Grating Sensors: Procedure and Evaluation", Sensors, Vol.15, pp. 16388-16411, 2015 年. 【査読有】

Tsuji, H., Nakano, K.: " Transfer Path Analysis with the Coherent Operational Forces Estimated from the Responses", SAE Int. J. Passeng. Cars - Mech. Syst, Vol.8, No.3, 2015 年. 【査読有】

Oka N, Yoshino K, Yamamoto K, Takahashi H, Li S, Sugimachi T, Nakano K, Suda Y, Kato T: "Greater Activity in the Frontal Cortex on Left Curves: A Vector-Based fNIRS Study of Left and Right Curve Driving", PLOS ONE, 2015 年。【査読有】

## 国際会議等

Bo Yang, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano: "Application of In-vehicle Traffic Lights for Improvement of Driving Safety at Unsignalized Intersections", IEEE Intelligent Vehicles Symposium, 2015。【査読有】

M.Kawano, Y.Zhang, K.Nakano, B.Kim: " Design and manufacture of perpendicular bi-stable cantilever for vibrational energy harvesting on the basis of stochastic resonance", PowerMEMS2015, 2015。【査読有】

Y. Zhang, R. Zheng, T. Kaizuka, D. Su, K. Nakano: "Study on Tire-attached Energy Harvester for Low-speed Actual Vehicle Driving", PowerMEMS2015, 2015。【査読有】

Antonin Joly, Zheng Rencheng, Kimihiko Nakano: "Effect of drowsiness on mechanical arm admittance and consequences on driving performances", 22nd ITS World Congress, 2015。【査読有】

Kimihiko Nakano, Rencheng Zheng, Yuandong Yin, Shigeyuki Yamabe: " Evaluation of safety to display information of traffic signals in vehicles", 22nd ITS World Congress, 2015。【査読有】

Tsutomu Kaizuka, Kimihiko Nakano, Kaechang Park Manabu Ohta, Reika Abe, Toshihiko Oda: "Effect of workload on driving performance of elderly drivers with leukoaraiosis", 22nd ITS World Congress, 2015。【査読有】

Masataka Fukumoto, Kenji Ejiri, Keisuke Shimono, Kimihiko Nakano: "FEASIBILITY OF AUTOMATIC PLATOONING OF TRAM CARS AT LOW SPEED", STECH 2015, 2015。【査読有】

Joly Antonin, Zheng Rencheng, Nakano Kimihiko: "A Scaling Method for Real-Time Monitoring of Mechanical Arm Admittance", IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics, 2015。【査読有】

S.Lee, K.Nakano, M.Ohori, R.Zheng: "Identification of tire cornering stiffness in lane changes using Dual Kalman filter", IAVDS, 2015。【査読有】

Y. Zhang, R. Zheng, K. Nakano, M.P. Cartmell: "Application of In-vehicle Traffic Lights for Improvement of Driving Safety at Unsignalized Intersections", IEEE Intelligent Vehicles Symposium, 2015. 【査読有】

Mendga Liu, Rencheng Zheng, Kimihiko Nakano: "Frequency Up-convert Energy Harvester for Automobiles", The 4th Korea-Japan Joint Symposium on Dynamics and Control, pp.99-102, 2015. 【査読有】

Zheng Rencheng, Hong Sungjoon, Ono Shintaro, Hirasawa Takayuki, Nakano Kimihiko: "A Comparison Study of Right-turn Behaviors with Improvement of Signalize", 14th ITS Asia Pacific Forum, 2015. 【査読有】

Nakano Kimihiko, Zheng Rencheng, Takahashi Tatsuo, Isihiara Atsushi: "Recognition Testing for Lane Change Assist by Haptic Guidance", 14th ITS Asia Pacific Forum, 2015. 【査読有】

## その他論文

須田義大, 大口敬, 中野公彦, 大石岳史, 小野晋太郎, 吉田秀範, 杉町敏之: 「自動運転システムの社会実装に関する課題と展望」, 生産研究, 68-2, 2015年.

楊波, 鄭仁成, 貝塚勉, 中野公彦: 「待ち時間を配慮した車内信号による交差点通行支援の評価」, 生産研究, 68-2, 2015年.

増井太志, 霜野慧亮, 鄭仁成, 中野公彦: 「車内での標識提示がドライバの運転行動に与える影響」, 生産研究, 68-2, 2015年.

## 講演・口頭発表

中野公彦: 「制御モデリング講座」, CAEユニバーシティ, 2015. 【招待講演】

中野公彦: 「制御系設計のためのダイナミクス講座」, CAEユニバーシティ, 2015. 【招待講演】

中野公彦: 「視線計測によるヘッドアップディスプレイの安全性評価」, ヘッドアップディスプレイの視認性工場と安全性評価技術(技術情報協会), 2015. 【招待講演】

中野公彦: 「車内信号の提案とドライバの受容性評価」, UTMS セミナー2015, 2015. 【招待講演】

中野公彦: 「視線計測を用いたヒューマン・インターフェースの評価実例」, Keisoku TEC2016, 2015. 【招待講演】

中野公彦: "R&D activities at Nakano Lab", Department of Mechanical Engineering Center for Railway Technology Lecture Series on Rail way Technology, 2015. 【招待講演】

劉暢: 「筋電図信号を用いたわだち路面がドライバの運転行動に与える影響の評価」, 第 24 回交通・物流部門大会, 2015.

増井太志: 「車内での標識提示がドライバの運転行動に与える影響」, 第 13 回 ITS シンポジウム 2015, 2015.

楊波: 「待ち時間を配慮した車内信号による交差点通行支援の評価」, 第 13 回 ITS シンポジウム 2015, 2015.

霜野慧亮: 「独立成分分析による走行試験時の車載加速度計データを用いた路面形状推定」, 自動車技術会 2015 年秋季大会学術講演会, 2015.

霜野慧亮: 「デル特性を考慮した独立成分分析による車体振動からの路面形状推定」, Dynamics and Design Conference 2015, 2015.

関正寛: 「前方注視点位置をフィードバックする力覚支援操舵制御の目標軌道追従性能」, 第 14 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2015.

岩淵拓哉: 「操舵反力に含まれるノイズが運転者の挙動に与える影響」, 第 14 回「運動と振動の制御」シンポジウム, 2015.

李曙光: 「脳活動計測を用いたドライバの運転技能の評価」, 自動車技術会学術講演会, 2015.

楊波: 「車内での信号提示による運転支援法の評価」, 自動車技術会学術講演会, 2015.

---

## 中村 周吾・准教授

## 研究テーマ(主たるもの)

### コンピュータによる生体分子の立体構造および機能の解析・予測

コンピュータを用いて、タンパク質や核酸などの生体分子の立体構造あるいは生体機能を、アミノ酸・塩基配列データから予測する。また、それらの分子の立体構造データをもとに、タンパク質同士、タンパク質と核酸あるいはタンパク質と低分子リガンドの複合体の構造の予測と、分子シミュレーションによるダイナミクス解析を行う。これらにより、それらの分子の機能発現のメカニズムを解明する。

### コンピュータによるタンパク質溶解度解析と溶解度予測ツールの開発

タンパク質の溶解度は生化学実験の成否を左右する重要な要因であり、またタンパク質の構築原理の理解に大きな知見をもたらす。コンピュータを用いてタンパク質の溶解度に関する生化学実験データを解析し、アミノ酸配列および立体構造とタンパク質の溶解度との関わりを探り、その結果をもとに、タンパク質のアミノ酸配列・立体構造からそのタンパク質の溶解度を予測するツールを開発する。

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

S. Chen, Y. Itoh, T. Masuda, S. Shimizu, J. Zhao, J. Ma, S. Nakamura, K. Okuro, H. Noguchi, K. Uosaki, T. Aida: "Subnanoscale hydrophobic modulation of salt bridges in aqueous media", *Science*, Vol.348, No.6234, pp.555-559, 2015 年。【査読有】

M. Yarimizu, C. Wei, Y. Komiyama, K. Ueki, S. Nakamura, K. Sumikoshi, T. Terada, K. Shimizu: "Tyrosine Kinase Ligand-receptor pair prediction by using support vector machine", *Adv. Bioinform.*, Vol.2015, pp.Article ID 528097, 2015 年。【査読有】

J. Li, J. Inoue, J. M. Choi, S. Nakamura, Z. Yan, S. Fushinobu, H. Kamada, H. Kato, T. Hashidume, M. Shimizu, R. Sato: "Identification of the flavonoid luteolin as a repressor of the transcription factor hepatocyte nuclear factor 4 $\alpha$ ", *J. Biol. Chem.*, Vol.290, No.39, pp.24021-24035, 2015 年。【査読有】

T. Niwa, R. Sugimoto, L. Watanabe, S. Nakamura, T. Ueda, H. Taguchi: "Large-scale analysis of macromolecular crowding effects on protein aggregation using a reconstituted cell-free translation system", Front. Microbiol., Vol.6, pp.Article ID 1113, 2015 年. 【査読有】

T. Niwa, Y. Sasaki, E. Uemura, S. Nakamura, M. Akiyama, M. Ando, S. Sawada, S. A. Mukai, T. Ueda, H. Taguchi, K. Akiyoshi: "Comprehensive study of liposome-assisted synthesis of membrane proteins using a reconstituted cell-free translation system", Sci. Rep., Vol.5, pp.Article ID 18025, 2015 年. 【査読有】

Y. Okumura, T. S. Nakamura, T. Tanaka, I. Inoue, Y. Suda, T. Takahashi, H. Nakanishi, S. Nakamura, X.-D. Gao, H. Tachikawa: "The dysferlin domain-only protein, Spo73, is required for prospore membrane extension in *Saccharomyces cerevisiae*", mSphere, Vol.1, No.1, pp.Article ID e00038-15, 2015 年. 【査読有】

---

## 丹羽 美之・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### メディア研究

テレビやラジオ、映画や写真、新聞や出版、音楽やマンガ、広告やネットなど、様々なメディアについて、歴史的、社会的、実践的な観点から研究を行っている。

#### ジャーナリズム研究

現代のジャーナリズムが直面する課題や問題について、歴史的、実践的な観点から研究している。またドキュメンタリーの制作や批評を中心に、次世代のジャーナリストの教育と養成にも取り組んでいる。

#### ポピュラー文化研究

現代のポピュラー文化が作り出す様々な文化や社会意識について、社会学的な観点から研究している。テレビ番組や映画など、ポピュラー文化のアーカイブにも取り組んでいる。

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

丹羽美之: 「万博と沖縄返還」, 吉見俊哉 編, 岩波書店, 2015 年.

### その他論文

丹羽美之: 「自由な交流、対話のきっかけに」, 放送文化基金報 (第 82 号), 2015 年. 【一般向け】

丹羽美之: 「ブラタモリ」, GALAC (2015 年 7 月号), 放送批評, 2015 年. 【一般向け】

丹羽美之: 「選考を終えて 時代の曲がり角に立って」, GALAC (2015 年 7 月号), 放送批評, 2015 年. 【一般向け】

丹羽美之: 「"書きかえられた"沖縄戦」, GALAC (2015 年 11 月号), 放送批評, 2015 年. 【一般向け】

丹羽美之: 「夜の巷を徘徊する」, GALAC (2016 年 1 月号), 放送批評, 2015 年. 【一般向け】

丹羽美之: 「選考を終えて 現在が問われた戦後 70 年」, GALAC (2016 年 1 月号), 放送批評, 2015 年. 【一般向け】

### 講演・口頭発表

丹羽美之: 「NNN ドキュメント共同研究について」, NNN ドキュメント共同研究発足記念シンポジウム「時代の目撃者—NNN ドキュメントの 45 年」 (主催: 東京大学大学院情報学環), 2015.

丹羽美之: 「「放送 100 年史」を構想する」, NHK 文研フォーラム 2016 (主催: NHK 放送文化研究所), 2015.  
【招待講演】

### 新聞・報道

丹羽美之: 「ギャラクシー賞で考えるテレビの歴史」, テレビ朝日「はい! テレビ朝日です」2015 年 6 月 14 日放送 (コメント), 2015.

丹羽美之：「終戦 70 年 それぞれが見た戦争 7月テーマ：カメラ」，ヒストリーチャンネル、2015年7月4日放送（スタジオ出演），2015.

丹羽美之：「「NNN ドキュメント」学術利用への試み（文化往来）」，日本経済新聞、2015年10月22日朝刊文化面（コメント），2015.

丹羽美之：「解説スペシャル NHK「クローズアップ現代」問題について」，読売新聞、2015年11月13日朝刊解説面（コメント），2015.

丹羽美之：「歴史紡ぐドキュメンタリー」，朝日新聞、2016年1月1日朝刊テレビ・ラジオ17面（コメント），2015.

丹羽美之：「ドキュメンタリー番組を学術利用」，日本経済新聞、2016年1月16日朝刊文化面（コメント），2015.

---

## 原田 至郎・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### アジアにおける政治システムや価値観・政治意識に関する研究

とりわけカンボジアにおける選挙に関わる事項についての分析や提言

#### クメール文字やその他の文字のコンピュータ処理に関する技術的・制度的研究

クメール文字やその他の文字のコンピュータ上での利用に関する技術的研究開発、およびその標準化をめぐる制度的研究

#### 情報社会のガバナンスに関する研究

ICT に依存する情報社会のガバナンスについての、特に技術的側面とそれを支える制度および専門家に着目した研究

## 研究業績(2015 年度)

### 講演・口頭発表

原田至郎: 「講演」, ラ・サール高等学校東京大学見学会, 2015. 【一般向け】

原田至郎: 「講演」, ラ・サール高等学校福岡支部 PTA 総会, 2015. 【一般向け】

原田至郎: 「講演」, ラ・サール中学校修学旅行, 2015. 【一般向け】

HARADA Shiro: "Cambodian Election Reform as Explained and Explaining Variables", Understanding Globalizing Asia: Methods and Issues (Joint Workshop with NTU), 2015.

---

## 広田 光一・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015 年度)

---

## 堀 里子・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 医薬品・健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築

\* 臨床事例を活用した医療従事者間情報交換・研修システムの構築と展開

\* 健康食品の有用性・安全性情報ネットワークの構築と展開

## 新規医薬品情報を創製するための研究

- \* ヒト胎盤組織を用いた薬物の胎児移行性及び胎児毒性の定量的評価
- \* 薬物輸送担体や代謝酵素の阻害を介した消化管における薬物間相互作用の検討

## 薬物動態・薬力学理論に基づくテーラーメイド・処方設計システムの開発

### 研究業績(2015 年度)

#### 分担著書

1. 東京大学大学院薬学系研究科育薬学講座、DLM センター: 「新薬まるわかり 2015」, 日経ドラッグインフォメーション編 編, 日経 BP 社, 2015 年.

#### 雑誌論文

藤田優美子、堀 里子、佐藤宏樹、三木晶子、吉見隆宏、森 和明、澤田康文.: 「病院における看護師の抗がん剤注射剤の取扱いに関する実態調査」, 医療薬学, Vol.41, No.5, pp.328-341, 2015 年. 【査読有】

堀 里子: 「カラダのはなし お薬とどう付き合う? どう選ぶ? ?」, Co-CoLife, Vol.11, pp.6, 2015 年. 【一般向け】

---

## 三谷 武司・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 社会学理論

〈社会的〉と形容される対象の存在様式を、タルコット・パーソンズやニクラス・ルーマンらの社会的システム理論を中心に批判的に検討する。その関連で、哲学者のジョン・サールが近年提唱している「社会的存在論」も重要な検討対象となる。

## 社会的選択理論

ケネス・アローの不可能性定理およびそれを端緒として提出された様々な定理について、不可能性からの数理的な脱却が必ずしも選択の倫理性に重要な意義を有するものではないという観点から分析する。ジョン・ハーサーらの功利主義的社会的厚生関数の検討はその一例である。

## 翻訳論

一般書、小説、学術書などの各ジャンルにおいて翻訳はいかなるものであるべきかについて、実際に翻訳実務（とりわけ出版翻訳）に携わりながら考察する。

## 研究業績(2015 年度)

### 著書

ウンベルト・エーコ, 三谷武司 (訳) : 「『異世界の書——幻想領国地誌集成』」, 東洋書林, 2015 年.

### 分担著書

三谷武司: 「『東大教師が新入生にすすめる本 2009-2015』」, 東京大学出版会『UP』編集部 編, 東京大学出版会, 2015 年.

### その他論文

三谷武司: 「書評: ニクラス・ルーマン (小松丈晃訳) 『リスクの社会学』新泉社」, 図書新聞, 2015 年.

三谷武司: 「東大教師が新入生にすすめる本」, UP, 2015 年. 【一般向け】

---

## 三宅 弘恵・准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

## 地震の揺れを予測する

強震動予測の高精度化を目指し、震源モデル化手法の開発を行っている。また、強震動予測手法の国際展開に取り組んでいる。

## 被害地震に学ぶ 自然を計る

広帯域地震動を視野に入れた断層の破壊過程の探求を行っている。被害地震時には臨時強震観測を行うと共に、広帯域地震動シミュレーションにより地震時の波形再現に向けた研究を展開している。

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

日本建築学会：「地盤震動と強震動予測 –基本を学ぶための重要項目–」，日本建築学会 編，日本建築学会，2015 年。

### 雑誌論文

三宅弘恵・浅野公之・瀬瀬一起・岩田知孝：「2011 年東北地方太平洋沖地震の強震記録を用いた震源モデルの概要」，日本地震工学会論文集，Vol.16, No.4, pp.12-21, 2015 年。【査読有】

津野靖士・山中浩明・翠川三郎・地元孝輔・宮腰寛之・佐口浩一郎・酒井慎一・三宅弘恵・瀬瀬一起：「2011 年東北地方太平洋沖地震の東京湾西岸部に於ける周期 2~3 秒の強震動生成要因」，日本地震工学会論文集，Vol.16, No.4, pp.35-51, 2015 年。【査読有】

司宏俊・瀬瀬一起・三宅弘恵：「プレート境界巨大地震の地震動距離減衰特性 –伝播特性に着目した検討–」，日本地震工学会論文集，Vol.16, No.1, pp.96-105, 2015 年。【査読有】

Ibrahim, R., H. Si, K. Koketsu, and H. Miyake: "Long-period ground-motion prediction equations for moment magnitude estimation of large earthquakes in Japan ", Bull. Seismol. Soc. Am., Vol.106, No.1, pp.54-72, 2015 年。【査読有】

My Thanh, T., V. Vung, H. Miyake, and K. Irikura: "Simulated ground motion of the earthquake on October 22nd, 2012, M4.6 at Song Tranh 2 dam area ", Vietnam Journal of Earth Sciences, Vol.37, No.3, pp.241-251, 2015 年. 【査読有】

Viens, L., H. Miyake, and K. Koketsu: "Long-period ground motion simulation of a subduction earthquake using the offshore-onshore ambient seismic field", Geophys. Res. Lett., Vol.42, pp.5282-5289, 2015 年. 【査読有】

Yagoda-Biran G., J. G. Anderson, H. Miyake, and K. Koketsu: "Between-event variance for large repeating earthquakes", Bull. Seismol. Soc. Am., Vol.105, pp.2023-2040, 2015 年. 【査読有】

Ishise, M., H. Miyake, and K. Koketsu: "Dual subduction tectonics and plate dynamics of central Japan shown by three-dimensional P-wave anisotropic structure ", Phys. Earth Planet. Inter., Vol.244, pp.49-68, 2015 年. 【査読有】

## 国際会議等

Miyake, H., and K. Irikura: "Characterized source modeling of crustal earthquakes for broadband ground motion prediction", Workshop on Best Practices in Physics-Based Fault Rupture Models for Seismic Hazard Assessment of Nuclear Installations, pp.Paper No. P26, 2015.

Pitarka, A., R. Graves, K. Irikura, H. Miyake, A. Rodgers, and P. Somerville: "Performance of an asperity-based kinematic rupture model in ground motion simulations using a hybrid approach", Workshop on Best Practices in Physics-Based Fault Rupture Models for Seismic Hazard Assessment of Nuclear Installations, pp.Paper No. P29, 2015.

## その他論文

三宅弘恵: 「東日本大震災が問いかけたもの」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, 2015 年.

三宅弘恵・小林広明・瀬戸一樹・高井伸雄・重藤迪子・Subeg Bijukchhen: 「2015 年ネパール Gorkha 地震の震源破壊過程」, 日本建築学会第 43 回地盤震動シンポジウム, , 2015 年.

関口春子・三宅弘恵: 「震源過程解析と強震動予測震源モデルの進展」, 日本建築学会第 43 回地盤震動シンポジウム, 2015 年.

地元孝輔・津野靖士・山中浩明・三宅弘恵・瀧瀬一起: 「足柄平野西端部における微動と地震観測による地盤の局所的増幅の検討」, 日本地震工学会大会 – 2015 梗概集, 2015 年.

津野靖士・地元孝輔・佐口浩一郎・山中浩明・酒井慎一・三宅弘恵・瀧瀬一起: 「関東平野で観測された 2011 年東北地方太平洋沖地震 (Mw9.0) の地震動特性 その 7 東京湾沿岸部での微動アレー観測によるサイト増幅特性評価」, 日本建築学会大会学術講演梗概集, 2015 年.

## 講演・口頭発表

三宅弘恵: "Characterized source modeling of crustal earthquakes for broadband ground motion prediction", 国際原子力機関 IAEA Workshop on Best Practices in Physics-Based Fault Rupture Models for Seismic Hazard Assessment of Nuclear Installations, 2015. 【招待講演】

三宅弘恵: "Recipe for predicting strong ground motion from subduction earthquake scenarios", 米国地震学会 SSA 2015 Annual Meeting, 2015. 【招待講演】

三宅弘恵: 「2015 年ネパール・Gorkha 地震 テクトニクス・震源・地震動について」, 土木学会地震工学委員会 ネパール地震地震被害調査結果速報会, 2015. 【招待講演】

三宅弘恵: "Ground motion prediction equations empowered by stress drop measurement", 米国地球物理学連合 2015 AGU Fall Meeting, 2015.

三宅弘恵: 「2014 年長野県北部の地震の強震動生成メカニズム」, 日本地球惑星科学連合 2015 年大会, 2015.

三宅弘恵: 「地盤震動と強震動予測 – 基本を学ぶための重要項目」, 日本建築学会講習会, 2015. 【招待講演】

三宅弘恵: 「2015 年ネパール Gorkha 地震の震源破壊過程」, 日本建築学会第 43 回地盤震動シンポジウム, 2015. 【招待講演】

---

## 3. 講師

---

## 沼田宗純・講師

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 防災プロセス工学

ゼロベースで災害対応を改革する場合、災害対応の全体プロセスの可視化が必要です。本研究室では、事前から事後に至るまで防災をプロセス化し、これをシステム化することで、行政や企業の皆様に効果的な防災対策を実現して頂く環境を構築しています。

### 研究業績(2015年度)

---

#### 4. 助教

---

## 川上 玲・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 物理ベースコンピュータビジョン

コンピュータビジョンの中でも、光学的な反射現象などを正確にモデル化・計算し、撮影された画像から、対象物の形状や光学特性を推定する研究

#### 悪天候コンピュータビジョン

雨天時や霧の日などの画像から、晴天時の画像へと補正を行い、悪天候にも対応したロボットビジョンを実現する研究

### 研究業績(2015年度)

---

## 国際会議等

Ryota Yoshihashi, Rei Kawakami, Makoto Iida, and Takeshi Naemura: "Construction of a bird image dataset for ecological investigations", IEEE International Conference on Image Processing, 2015.

【査読有】

Ryota Yoshihashi, Rei Kawakami, Makoto Iida, and Takeshi Naemura: "Evaluation of bird detection using time-lapse images around a wind farm", European Wind Energy Association Conference, 2015.

【査読有】

## その他論文

竹木章人, チントウアントウ, 吉橋亮太, 川上玲, 飯田誠, 苗村健: 「生態調査に向けた領域分割と検出器の組み合わせによる鳥画像検出」, 映像情報メディア年次大会, 2015 年.

## 受賞

竹木章人: 東京大学工学部長賞「深層特徴検出器と意味領域分割の組み合わせによる解像度に適応的な物体検出」, 東京大学工学部, 2016 年.

---

## 朝倉 敬子・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 日本人の食塩摂取量の推定

#### 栄養に関する知識と栄養摂取の関連

### 研究業績(2015 年度)

## 雑誌論文

Asakura K, Haga M, Sasaki S: "Relative Validity and Reproducibility of a Brief-Type Self-Administered Diet History Questionnaire for Japanese Children Aged 3-6 Years: Application of a Questionnaire Established for Adults in Preschool Children.", *J Epidemiol*, Vol.25, No.5, pp.341-350, 2015 年. 【査読有】

Kobayashi S, Asakura K, Suga H, Sasaki S: "Cohabitational effect of grandparents on dietary intake among young Japanese women and their mothers living together. A multicenter cross-sectional study.", *Appetite*, Vol.91, pp.287-297, 2015 年. 【査読有】

Tani Y, Asakura K, Sasaki S, Hirota N, Notsu A, Todoriki H, Miura A, Fukui M, Date C: "Higher proportion of total and fat energy intake during the morning may reduce absolute intake of energy within the day. An observational study in free-living Japanese adults.", *Appetite*, Vol.92, pp.66-73, 2015 年. 【査読有】

Katagiri R, Asakura K, Sasaki S, Hirota N, Notsu A, Miura A, Todoriki H, Fukui M, Date C: "Estimation of habitual iodine intake in Japanese adults using 16 d diet records over four seasons with a newly developed food composition database for iodine", *Br J Nutr*, Vol.114, No.4, pp.624-634, 2015 年. 【査読有】

Balogun OO, Kobayashi S, Anigo KM, Ota E, Asakura K, Sasaki S: "Factors Influencing Exclusive Breastfeeding in Early Infancy: A Prospective Study in North Central Nigeria.", *Matern Child Health J*, 2015 年. 【査読有】

Asakura K, Uechi K, Masayasu S, Sasaki S: "Sodium sources in the Japanese diet: difference between generations and sexes.", *Public Health Nutr*, 2015 年. 【査読有】

Saido M, Asakura K, Masayasu S, Sasaki S: "Relationship Between Dietary Sugar Intake and Dental Caries Among Japanese Preschool Children with Relatively Low Sugar Intake (Japan Nursery School SHOKUIKU Study): A Nationwide Cross-Sectional Study.", *Matern Child Health J*, 2015 年. 【査読有】

Uechi K, Asakura K, Ri Y, Masayasu S, Sasaki S: "Advantage of multiple spot urine collections for estimating daily sodium excretion: comparison with two 24-h urine collections as reference.", *J Hypertens*, 2015 年. 【査読有】

Katagiri R, Asakura K, Uechi K, Masayasu S, Sasaki S: "Adequacy of iodine intake in three different Japanese adult dietary patterns: a nationwide study.", Nutr J, 2015 年。【査読有】

---

## 岩澤 駿・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 自然現象の数理モデルに基づくコンピュータグラフィックス表現

生物表面の複雑なマイクロ構造に起因する構造色のシミュレーション可視化、自然界の形状から着想された自己組織化モデルによるモデリング。さらに、それらの手法をインタラクティブアート、アニメーションなどの作品に実装して検証を行う。

#### 先端的表現技術とコンテンツ産業とを繋ぐプラットフォームの研究

オープンソースのアニメーション制作ソフトウェアの開発・展開を通じて、映像産業の制作現場と、先端的映像表現の研究開発を行う研究者とが活発に連携できるような環境を実現する手法を模索する。

### 研究業績(2015 年度)

#### 国際会議等

Shun IWASAWA, Yoichiro KAWAGUCHI: "The "Propagative" GROWTH Model with Life-like Behaviors", ASIAGRAPH 2015 International Conference in Tainan, pp.70-73, 2015. 【査読有】

#### 講演・口頭発表

岩澤駿: 「アニメーション制作の中のサイエンス」, 日本ハンズオンユニバース協会 (JAHOU) 集会 2015 (JAHOU 主催), 2015. 【招待講演】

岩澤駿:「数式で絵を作る—自然現象の数理モデルを用いた CG 表現—」, システム創成学講演会 2015 イノベーションとデザイン—コンピュータがデザインする映像の世界—(東京大学工学部システム創成学科主催), 2015. 【招待講演】 【一般向け】

清水俊博, 奥井敦, 岩澤駿:「アニメーション制作ツールのオープンソースプロジェクトについて」, AnimeJapan2016 クリエイションステージ, 2016. 【一般向け】

## 新聞・報道

岩澤駿:「手描きアニメーションの CG 制作に取り組むエンジニアの仕事」, CG World Entry Vol.14, 2015.

---

## 河井 大介・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

Yuichi Sasaki, Daisuke Kawai, Satoshi Kitamura: "The anatomy of tweet overload: How number of tweets received, number of friends, and egocentric network density affect perceived information overload", Telematics and Informatics, Vol.32, No.4, pp.853-861, 2015 年. 【査読有】

### その他論文

河井 大介、松本 涼子、橋元 良明:「ソーシャルメディアにおける情報行動と社会参加意向や利他意識との関係性についての因果関係に関する研究」, 電気通信普及財団 研究調査報告書, 電気通信普及財団報告書 (No.30) , 2015 年.

### 講演・口頭発表

河井 大介、長濱 憲:「衆参両院選挙時の調査から見たネット選挙解禁の影響」, 情報通信学会 情報行動研究会, 2015.

河井 大介:「ソーシャルメディアにおけるフィードバックとその効用」, weblabmeeting, 2015.

---

## 金 暲和・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### モバイル文化に関するエスノグラフィー

(1) パフォーマンス・エスノグラフィー (performance ethnography) と呼ばれる文化人類学の技法を使ったモバイル文化について考察を行う。身体や口述を使ったパフォーマンスを持って普通の人々のモバイル・メディアの使い方を明らかにする。その結果を分析し、モバイル・メディアを中心に再編される社会空間のあり方について考察を行う。

(2) 普段は気づきにくいモバイル・メディアの文化的なあり方についてエスノグラフィー記述を行う。創造的なメディア表現を通して、モバイル・メディアについての理解を増進するワークショップ技法を使った実践的なアプローチを積極的に活用している。

### 研究業績(2015 年度)

---

## 酒井 麻千子・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### 写真著作権の歴史

19世紀に登場した新たなメディアである写真が、視覚芸術である絵画や版画、さらに後に登場する映画等との関係で著作権法においてどのように位置づけられたのかを、「複製」概念と「創作性」概念に着目して検討を行う。

## 著作権法における「創作性」概念

従来著作権法は芸術作品を主な対象としてきたが、近年ではコンピュータプログラム・データベース等もその対象に加わり、著作物性の要件である「創作性」概念に変動が生じている。本研究では「創作性」概念について、多様なジャンルの著作物に関する判例学説等の検討を行う。

## 研究業績(2015年度)

### 雑誌論文

酒井 麻千子: 「18世紀後半～19世紀前半における絵画の複製と著作権—ドイツ(プロイセン)での議論を中心として—」, 第10回著作権・著作隣接権 論文集, pp.1-23, 2015年.

### 講演・口頭発表

酒井 麻千子: 「デジタル時代の著作権法と憲法をめぐる問題・序説: 著作権と表現の自由における議論を手がかりの一つとして」, 情報ネットワーク法学会 第15回研究大会, 2015.

### 受賞

酒井 麻千子: 第10回著作権・著作隣接権論文募集 第2位「18世紀後半～19世紀前半における絵画の複製と著作権—ドイツ(プロイセン)での議論を中心として—」, 公益社団法人著作権情報センター, 2015年.

---

## 成原 慧・助教

### 研究テーマ(主たるもの)

## 情報社会における規制理論

情報社会における規制のあり方について、個人の自由を物理的・技術的に規制する「アーキテクチャ」と呼ばれる規制手法と法的規制の関係に着目して検討を進めている。

## マスメディアおよびインターネットに関する表現の自由

マスメディアおよびインターネットに関する表現の自由のあり方について、表現規制の主体および作用の多元化・重層化という現象に着目して検討を行っている。

## ローレンス・レッシングの憲法理論についての研究

米国の憲法学者であり代表的なサイバー法の研究者として知られるローレンス・レッシングの初期の憲法理論の形成過程について研究を行うことにより、レッシングの憲法理論の基本構造を明らかにすることを試みている。

## 研究業績(2015年度)

---

### 西川 麻樹・助教

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015年度)

---

### HA KYUNG JIN ・助教

研究テーマ(主たるもの)

---

## 米・日・韓におけるパブリック・リレーションズ（Public Relations）の歴史的 形成に関する研究

パブリック・リレーションズを歴史的に構築された現象として捉え、その歴史的、社会的変容を追跡する。具体的には、20世紀アメリカ、戦後日本、解放後韓国における事例を扱い、パブリック・リレーションズという概念、現象の世界的膨張を問う。

## 「企業自我」（Corporate Identity/Self）概念を中心とするパブリック・リ レーションズの理論的考察

「経営」（management）という学知のなかで、企業と社会のかかわりを「企業自我」という概念を中心に捉える。そうすることによってパブリック・リレーションズをめぐる理論的研究の、アメリカ中心主義からの脱構築を試みる。

## 研究業績(2015年度)

### 雑誌論文

河 昞珍: 「PR学の方法論に関する考察—— 歴史的研究の問題を中心に」, 東京大学大学院情報学環紀要 情報学研究, No.90, pp.15-37, 2015年.

### 講演・口頭発表

河 昞珍: "Postwar Japan and PR Films: Scientific Technology and Economic Dream", Digital Humanities 2015 SNU-UT Symposium, 2015.

河 昞珍: 「戦後日本におけるパブリック・リレーションズの移植と変容」, 20世紀メディア研究所 第98回研究会, 2015.

河 昞珍: 「PR (Public Relations) とその技術——1900~1930年代のアメリカを中心に」, 日米社会学史茶話会 第5回研究会, 2015.

## 5. 特任教授

---

### 石川 雄章・特任教授

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### 新技術の社会への実装 (イノベーション・モデル)

ITをはじめとする新しい技術を社会に実装する際には、多くの場合、技術というよりはむしろ、多様なステークホルダーとの調整や既存の社会システムの見直し等が課題となる。こうした解題に対応しつつイノベーションを実現するためには、ステークホルダーの把握、共通目標の設定、コアメンバーの任命とチームの結成、権利と責任の適正な分担、検討プロセス及び場の設計、といった幅広い領域にわたる戦略的な取り組みが必要となる。

21世紀COEプログラム「次世代ユビキタス情報社会基盤の形成」では、ユビキタス技術の現場への適用をテーマに、政府、自治体などの取り組みを通じて、実証的にこのテーマにアプローチしている。

#### ITガバナンス (公的セクターにおける枠組みとCIOの役割)

ITガバナンスとは「企業が競争優位構築を目的に、IT戦略の策定・実行をコントロールし、あるべき方向へ導く組織能力」(「企業のITガバナンス向上に向けて」(通商産業省1999)とされているが、公的セクターにおいてもIT戦略の策定・実行をコントロールすることは重要な課題である。特に、公的セクターは民間セクターとは異なる評価基準、行動制約があり、また社会的な制度設計という特別な機能を有する。こうしたことを前提に、COBITなどの標準的なITガバナンスのフレームワークを参考に、自らの県でのCIOの経験などを踏まえて、公的なセクターにおけるITガバナンスの枠組みとCIOの役割について研究している。

#### 社会的合意形成

新しい技術・制度の社会への導入など、社会的に大きな影響をあたえる行為を行う際には、事前に関係者の合意を得たうえで進めることが望ましく、こうした活動を怠った場合には、最悪の場合、社会的な反発を招く恐れもある。その一方で、こうした活動を行う組織は社会的に確立しておらず、また方法論も制度として十分ではない。このため、社会的合意形成を支援するNPO法人PI-Forum(ピー・アイ・フォーラム)の活動を通じて、実証的に社会的合意形成の意義、方法、知恵、事例などを研究している。

## 研究業績(2015 年度)

### 雑誌論文

石川雄章: 「巻頭言」, 情報文化学会, 2015 年.

### 講演・口頭発表

石川雄章: 「インフラ維持管理の高度化について」, 島根県 講演 , 2015.

石川雄章: 「インフラ分野における情報技術を活用したイノベーションへの試み」, JR 講演, 2015.

石川雄章: 「ICT活用によるインフラ管理と  
産学連携による開発事例」, 東京都中小企業振興公社 インフラメンテナンス分野への参入セミナー , 2015.  
【招待講演】 【一般向け】

石川雄章: 「情報技術によるインフラ高度化  
に関する研究について」, 日本建設業連合会 電力工事委員会 , 2015.

石川雄章: 「産学官連携による実践的な研究開発」, NEXCO 西日本, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

石川雄章: 「ICT を用いたインフラの戦略的な維持管理」, 橋梁・トンネル技術展 , 2015.

石川雄章: 「産学官連携による実践的な研究開発」, 国土技術政策総合研究所, 2015. 【招待講演】

石川雄章: 「ICT 活用による地方自治体のインフラ維持管理の効率化等」, COCN インフラ長寿命化研究会 , 2015.

石川雄章: 「ICT を活用したインフラ維持管理の取り組み  
～産学官連携による実践的な研究開発～」, 河川構造物管理研究セミナー , 2015. 【招待講演】 【一般向け】

### 特許

東京地下鉄 メトロレール 株式会社ソーシャルキャピタルデザイン:「調査対象箇所抽出装置及び調査対象箇所抽出方法」, 特願, 2015年09月.

---

## **梅崎 太造・特任教授**

### **研究テーマ(主たるもの)**

**狭小領域型指紋センサー用高性能指紋認証アルゴリズムの開発**

**指紋流線上の汗口配置パターンに着目した新しい個人認証アルゴリズムの開発**

**フィルムレンズシートを用いた指紋・静脈センサーの開発**

### **研究業績(2015年度)**

#### **分担著書**

梅崎太造ほか全48名:「三次元元画像センシング技術と産業応用の新展開-リアルタイム・高精度に向けた要素技術から産業応用まで」, 岩堀祐之 編, NTS, 2015年.

#### **作品**

梅崎太造:「教育用人型組み立てロボット」, 27年度第5回ふれあい教育セミナー, 2015.

#### **講演・口頭発表**

梅崎太造:「人工神経回路網の設計と応用及び高精化へのポイント」, 株式会社東京ウエルズ, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

梅崎太造:「ロボット技術と製造・物流業界への活用」, 名古屋商工会議所, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

梅崎太造:「産学連携による商品開発までのストーリーとその事例」, 四日市大学 経済経営特殊講義 a, 2015.  
【招待講演】

梅崎太造:「公演」, 日立マクセル事業本部, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

梅崎太造:「音声・画像情報処理技術のセキュリティシステムへの展開」, DBSC 春のセミナー基調講演, 2015.  
【招待講演】

梅崎太造:「IoTの世界で広がる、モバイルとロボットの未来」, A3 IoT 2015 RE/Design 「名古屋 DevSession」, 2015. 【招待講演】 【一般向け】

梅崎太造:「音声情報処理技術の転用による生体認証」, JICSAP 講演, 2015. 【招待講演】

梅崎太造:「生体認証の現状とこれから」, SiSOC シンポジウム, 2015.

梅崎太造:「産学連携ベンチャービジネスの秘訣」, MOT セミナー講演, 2015. 【招待講演】

梅崎太造:「現実重視の研究開発 28 年間」, Dr-meeting 講演, 2015. 【招待講演】

梅崎太造:「音声情報処理技術の画像処理分野における転用と実用化」, 音声言語シンポジウム, 2015. 【招待講演】

梅崎太造:「生体情報のセンシングとその応用」, ViEW2015 特別講演, 2015. 【招待講演】

梅崎太造:「生体情報を聴く・観る・探る! ~実用化を重視して 28 年! ~」, 第 36 回 N-cube (最終回), 2015. 【招待講演】

## 新聞・報道

梅崎太造:「愛知にロボ産業集積 3 分野、産学官連携が本格化」, 日刊工業新聞, 2015.

梅崎太造:「ロボット技術と製造・物流業界への活用」, 名古屋港, 2015.

梅崎太造:「A3 2015 が名古屋で開催 ものづくり都市で生まれた斬新なアイデアとは?」, Itpro by 日経コンピュータ, 2015.

SiSOC:「東京大学、「SiSOC-TOKYO」を設置 セキュリティ研究・政策提言を実施」, ビジネス IT, 2015.

SiSOC: 「東京大学大学院情報学環, サイバーセキュリティ研究グループを創設, 対ハッキングの“演習場”設置目指す」, INTERNET Watch, 2015.

SiSOC: 「高度なサイバー攻撃に対処 東大大学院に新規寄附講座「セキュア情報化社会研究」グループ活動開始」, 科学新聞, 2015.

## 特許

株式会社ディー・ディー・エス: 「情報処理プログラム及び情報処理装置」, 特願特願 2015-127421, 2015年06月.

---

## 柳 与志夫・特任教授

研究テーマ(主たるもの)

学術系デジタルコンテンツ

デジタルアーカイブ

文化情報資源政策

研究業績(2015年度)

---

## 6. 特任准教授

---

## 関谷 直也・特任准教授

## 研究テーマ(主たるもの)

### 「災害情報と社会心理」に関する研究

災害時のよりよい避難行動・防災行動、よりよい復興対策のために、さまざまな主体がメディア・報道を通じてどのような情報を伝え、どのような活動をとるべきかを明らかにするために、各種の共同研究プロジェクトに参画し、災害時の住民の心理・情報行動、情報伝達における問題点を調査・検討している。

水害、火山、地震時における住民の心理・情報行動・避難行動、行政・報道機関の実態、富士山噴火など想定災害の経済的・社会心理的影響などに関して、多くのインタビュー調査・量的調査・悉皆調査によって共同で研究している。個人としては、特に、富士山噴火という想定災害について社会経済的影響、気象災害における避難行動の心理を明らかにすることを試みている。

現実の「課題」の探索とは別に、最近は今後の「開発」として、とくに安否情報システムに関して、RFIDチップ、モバイル携帯端末、画像通信、ワンセグ放送、FelicaなどITツールの災害時の利用可能性について実証的に検討を試みている。

### 「日本人の安全観」「風評被害」「センセーショナルリズム」に関する研究

日本人が安全・安心をどのように考えているのかについて、原子力事故、狂牛病・鳥インフルエンザ・SARSなどのバイオハザード、食品問題、環境問題、自然災害、また経済問題などを比較し、社会心理学的な共通点・相違点を流言の分析や質的・量的調査から研究している。また「原子力の安全神話」の形成過程の歴史的研究なども行ってきた。「感情的な安全認識」、「報道・社会現象に影響を受ける心理」「安全をめぐる心理の要素」「安全をめぐる根本的な観念」の存在と、それらと「具体的な対象に対する不安・安心の感情」との関係性について、徐々に実証的に明らかにしつつある。これは報道と感情の関係というマスコミュニケーション研究が見落としてきた課題でもある。

この延長線上には、情報過多社会の社会問題である「風評被害」がある。「風評被害」の社会心理的メカニズムおよび解決策についても研究を重ね、報告してきた。

これは、人々の安全に関わる様々な報道の「センセーショナルリズム」「報道における『科学』の扱い」、「報道や情報公開に伴う経済的影響」「公害報道、環境報道の抑止力としての風評被害」という現実的問題に社会心理学の観点から接近するものでもある。これら現実的課題に貢献できるよう取り組んでいる。

### 「環境問題におけるジャーナリズム／メディアと社会心理」についての研究

環境報道と環境広告に焦点をあて、社会心理史的・社会心理学的視点から研究を行っている。

報道については、戦後の公害・原子力事故に焦点をあて、ジャーナリズムの変質過程とそれを支えた予防原

則などの思想や世論潮流・社会心理との関係性について社会心理史的な接近を試みている。広告については、送り手と受け手についての量的調査、CF・新聞広告の内容分析、ヒアリング調査を行い、研究を深化、精緻化している。社会心理によって、企業の実際の環境対策や広報活動、広告の内容や表現手法が規定されていることを見出している。

これらの個々の研究を通じて「環境問題と社会心理」の関係性、そこにおけるメディア・情報の役割、メディア・情報様式の形成過程を総体的に浮かび上がらせようと試みている。そこから環境問題という具体的な事例を通して、社会問題をめぐる報道、ジャーナリズム、広告のあり方を考えている。

## 研究業績(2015年度)

### 著書

関谷直也・瀬川至朗編：「メディアは環境問題をどう伝えてきたのか」, ミネルヴァ書房, 2015年.

### 雑誌論文

関谷直也：「火山防災と情報——御嶽山噴火と今後の火山防災」, 災害情報(日本災害情報学会), Vol.No.13, pp.1, 2014年.

### その他論文

関谷直也：「風評被害の構造と5年目の対策」, 調査報告書「郡山市における地域課題調査研究～原子力災害による風評被害の現状と払拭の取組み～(平成26年度福島県委託事業)」超学際的研究機構, 7-41, 2015年.

---

## 野澤 俊介・特任准教授

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015年度)

---

## 満永 拓邦・特任准教授

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

### 7. 特任講師

---

## 阿部 卓也・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## KHAN,M.Fahim Ferdous・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

### Resource-Aware Security for IoT and Ubiquitous Computing

We aim at realizing a resource-aware approach to secure communication between IoT nodes by implementing lightweight cryptography utilizing the eTRON architecture, mobilizing a delegation

service for computation-intensive cryptographic tasks, and developing a coherent set of APIs for application development.

## **Context-Aware Security for Ubiquitous Computing**

In this research, with a view to exploring the relationship between access control and context-awareness in ubiquitous computing, we proposed a comprehensive context-aware access control model for ubiquitous healthcare services, building on discretionary access control (DAC) and role-based access control (RBAC) models. Taking a holistic view on access control, we effectively address its all four constituent steps of identification, authentication, authorization, and access decision. The eTRON architecture is used for authentication and implementing the DAC-based delegation of access-control rights, while for the authorization and access decision steps, we used the RBAC model and implemented context verification on top of it.

## **Electronic Commerce Security**

We developed a secure and flexible e-ticket system. At the core of our system lies the tamper-resistant eTRON chip which is equipped with functions for mutual authentication, encrypted communication and strong access control mechanism. The IC chip supports dual-interface in a single card that is compliant with ISO/IEC 7816 and ISO/IEC 14443 for contact and contactless interfaces respectively. The experimental evaluation and comparison with other existing systems showed promising results with respect to performance issues and security requirements.

## **研究業績(2015 年度)**

### **作品**

M. Fahim Ferdous Khan: 「Publicity Chair」, MIC-Networks 2015: International Conference on Communications and Computer Networks, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Technical Program Committee Member」, MIC-Networks 2015: International Conference on Communications and Computer Networks, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Technical Program Committee Member」, IEEE GCCE 2015: IEEE Global Conference on Consumer Electronics, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Technical Program Committee Member」, IBMSGs 2015: International Bio-Metrics and Smart Government Summit, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Technical Program Committee Member」, TRONSHOW 2015: The 30th TRON Project Symposium, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Session Chair」, ISNCC 2015: IEEE International Symposium on Networks, Computer and Communications (Session on Network Security and Privacy), 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Session Chair」, IEEE CPSCoM 2015: IEEE International Conference on Cyber, Physical and Social Computing, 2015.

M. Fahim Ferdous Khan: 「Session Chair」, TRONSHOW 2015: The 31st TRON Project Symposium (Full paper Session), 2015.

## 国際会議等

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Fine-Grained Access Control to Medical Records in Digital Healthcare Enterprises", International Symposium on Networks, Computers and Communications (ISNCC 2015), pp.1-6, 2015. 【査読有】

Syafril Bandara, Takeshi Yashiro, M. Fahim Ferdous Khan, Noboru Koshizuka, and Ken Sakamura: "Predicting Collective User Preference for Optimal Comfort Level in Smart Buildings", IEEE Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2015), pp.7-11, 2015. 【査読有】

M. Fahim Ferdous Khan, and Ken Sakamura: "Tamper-Resistant Security for Cyber-Physical Systems with eTRON Architecture", IEEE International Conference on Cyber, Physical and Social Computing (CPSCoM 2015), pp.196-203, 2015. 【査読有】

---

## 秋葉 雅章・特任講師

## 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2015 年度)

---

### 長内 圭太・特任講師

## 研究テーマ(主たるもの)

### 情報技術によるインフラ高度化

「情報技術によるインフラ高度化」社会連携講座にて、情報技術を活用して施設管理等に関するマネジメントを高度化するとともに、インフラに関する技術支援・技術伝承の仕組みを確立し、インフラ・イノベーションの実現を目指す。

### 高速道路のスマートメンテナンス

情報技術を活用して高速道路の構造物等に関するマネジメントを高度化するとともに、インフラに関する技術支援・技術伝承の仕組みを確立し、高速道路のスマートメンテナンスの実現を目指す。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 生貝 直人・特任講師

## 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2015 年度)

---

---

## 川原 範枝・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## 田中 克直・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## 杜 平・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## 別所 正博・特任講師

研究テーマ(主たるもの)

---

## ユビキタス・コンピューティング技術を活用した位置情報サービスに関する研究

ユビキタス・コンピューティング技術に基づく環境センシングインフラや測位インフラを活用し、都市環境の状況をきめ細かに反映することが可能な、位置情報サービス・フレームワークの構築を目指した研究を行っている。特に、多目的に拡張可能で、近年の多様なスマートフォン・プラットフォーム上でサービス提供が可能なソフトウェア・アーキテクチャの構築と、障害者等の交通弱者への移動支援という具体的な応用サービスの構築に関して、研究を進めている。

### 研究業績(2015 年度)

#### 国際会議等

Wirawit Chaochaisit, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Evaluating Spatial Influence of Physical Visualizations in Public Settings", Workshop "SenCity2: Visualizing the Hidden Pulse of a City" at UbiComp 2015, 2015.

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "DCRDL: An energy management rule definition language for context-based device control in smart buildings", Proceedings of IECON 2015-41st Annual Conference of the IEEE Industrial Electronics Society, pp.279-285, 2015. 【査読有】

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "EPDL: Supporting Context-Based Energy Control Policy Design in IoT-Enabled Smart Buildings: Programming the Physical World with EPDL", Proceedings of 2015 IEEE International Conference on Data Science and Data Intensive Systems, pp.297-303, 2015. 【査読有】

Xiaohui Peng, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "The Design and Implementation of a Context-based Energy Management Policy Description Language for IoT-enabled Smart Building", Proceedings of 2015 TRON Symposium, 2015. 【査読有】

Hangli Ge, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Model Design of Generating Path with Accessibility Semantics for Assisting Indoor Mobility", Proceedings of 2015 IEEE International Conference on Data Science and Data Intensive Systems, pp.139-146, 2015. 【査読有】

Wirawit Chaochaisit, Masahiro Bessho, Noboru Koshizuka, Ken Sakamura: "Human Localization Sensor Ontology: Enabling OWL 2 DL-Based Search for User's Location-Aware Sensors in the IoT", Proceedings of 2016 IEEE Tenth International Conference on Semantic Computing, pp.107-111, 2016. 【査読有】

---

## **味八木 崇・特任講師**

**研究テーマ(主たるもの)**

**ヒューマンコンピュータインタラクション**

**実世界センシング**

**ユビキタスコンピューティング**

**研究業績(2015 年度)**

---

## **門間 正拳・特任講師**

**研究テーマ(主たるもの)**

**研究業績(2015 年度)**

---

## **8. 特任助教**

---

## **一色 裕里・特任助教**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## **会田 大也・特任助教**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## **定池 祐季・特任助教**

研究テーマ(主たるもの)

**南海トラフ広域地震防災研究におけるリスクコミュニケーション研究**

南海トラフ広域地震防災研究プロジェクト

**厚真町における防災教育と地域づくりに関わる社会学的研究**

**災害伝承と災害文化**

研究業績(2015 年度)

---

## その他論文

定池祐季：「有珠山周辺地域における災害遺構の保存と活用」，『復興』13号 Vol.7 No.1, 2015年.

定池祐季：「津波「非常襲地」における災害文化の継承—沖縄県を事例として」，地域安全学会春季大会梗概集、2015：53-54, 2015年.

定池祐季，関谷直也，田中淳：「2014年9月11日札幌市豪雨における避難行動に関する研究-避難所避難者と一般市民を対象とした質問紙調査から」，第34回自然災害学会学術講演会要旨集，2015年.

定池祐季：「津波「非」常襲地における津波災害文化の変容—石垣市を事例として」，『日本災害情報学会2015山梨大会講演論文集』，2015年.

---

## 荒 優・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

#### MOOC 実証実験と評価

東京大学が Coursera, Edx において実施する MOOC の開発，実施，評価をおこなう。

#### 同期型遠隔教育環境における教員の学習者把握支援

TV 会議システムなどを用いた同期型遠隔教育環境において，教員と学習者がそれぞれ遠隔地から参加している場合に，教員が学習者の状態を常に把握し続けるのは容易ではない。同期型遠隔教育環境は，双方向の映像と音声を用いることができることから，距離の制約を超えた対面教育環境を代替できると捉えられがちであるが，参加者それぞれの視点が自由にならない，音源の定位ができない等の物理的制約があり，それに伴うコミュニケーション情報の劣化は避けられない。結果として，参加者間の物理的な距離よりも心理的な距離を増加させてしまう (Moore, 1997) という指摘がなされている。また，Bernerdら (2004) は，同期型遠隔教育環境は対面教育環境の複製になりえず，双方向の映像と音声を用いた疑似の対面インストラクションの効果は疑わしいと主張している。これらの研究が示唆していることは，標準的な同期型遠隔教育環境そのものは，対面教育環境と同等のインタラクションを保証するものではなく，円滑なコミュニケーション

を維持するためには、何らかの追加的な支援が必要であるということである。そこで、教員が容易に遠隔地の学習者の状態を把握できるよう、支援するシステムの開発研究をおこなっている。

## **教員のモニタリング能力向上を支援するセルフ・リフレクション・システムの開発**

「個」に応じた学習者中心の学習環境を提供するには、教員は学習者の状態を常に把握し、適切な学習リソースや介入方法を選択しながら、即応的に学習環境を構成しなければならない。そのため、教員は高い学習者モニタリング能力を身につけている必要があるが、今日においても、学習者モニタリングをうまく実行できない教員が存在することが報告されている。そこで本研究では、セルフ・リフレクションによる教員のモニタリング能力の熟達支援を目的とした、リフレクション支援システムを開発し、その効果を実践的に検証している。

### **研究業績(2015 年度)**

#### **講演・口頭発表**

荒 優, 藤本 徹, 一色 裕里, 山内 祐平: 「教員のコース設計意図と受講者の学習目標を考慮した MOOC 評価観点の提案」, 日本教育工学会第 31 回全国大会, 2015.

中村 絵里, 荒 優, 山内 祐平: 「就学前自宅学習に関わる親の支援研究—モンゴル国の遊牧民家庭を対象として」, 日本教育工学会第 31 回全国大会, 2015.

藤本 徹, 荒 優, 一色 裕里, 山内 祐平: 「MOOC 配信による高等教育のグローバル展開の動向」, 日本教育工学会第 31 回全国大会, 2015.

---

## **池尻 良平・特任助教**

### **研究テーマ(主たるもの)**

#### **歴史を現代に応用する学習方法の開発**

## 研究業績(2015 年度)

### 分担著書

池尻良平: 「歴史を射つ」, 岡本充弘, 長谷川貴彦, 渡辺賢一郎, 鹿島徹 編, 御茶の水書房, 2015 年.

### 雑誌論文

池尻良平, 小林秀行, 黄欣悦, 地引泰人, 大原美保, 田中淳, 吉川肇子, 藤本徹, 山内祐平池尻良平, 小林秀行, 黄欣悦, 地引泰人, 大原美保, 田中淳, 吉川肇子, 藤本徹, 山内祐平: 「Facebook を利用した防災学習手法の提案」, 地域安全学会論文集 (電子ジャーナル) , Vol.25, pp.http://isss.jp.net/isss-site/wp-content/uploads/2015/03/2014-073.pdf, 2015 年. 【査読有】

### 国際会議等

Hiroki OURA, Ryohei IKEJIRI, Wakako FUSHIKIDA, Yuki ANZAI, Yuhei YAMAUCHI: "Blended Design in a Regional MOOC: The Impact of Face-to-Face Group Discussion on the Pass Rate in a History Course", AERA 2015 Annual Meeting, 2015. 【査読有】

Yasunobu SUMIKIWA, Ryohei IKEJIRI: "Mining Historical Social Issues", Intelligent Decision Technologies Smart Innovation, Systems and Technologies, Vol.39, pp.587-597, 2015. 【査読有】

---

## 大浦弘樹・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015 年度)

---

## 山本 周・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### 研究業績(2015 年度)

---

## 湧田 雄基・特任助教

### 研究テーマ(主たるもの)

### Human Context Recognition using Ubiquitous Sensors

主に歩行者をターゲットとして、使用者に取り付けたセンサや都市空間に配置されたセンサ（ユビキタスセンサ）からの情報を利用し、利用者の位置、状態または行為を推定することを研究目標とする。こうした利用者の情報を活用し、よりリッチなサービスの提供を実現する。

### ロボットによるイベント認識のための概念構造の自立的構造化

本研究では、ロボットによる自由度が高くかつロバストな実環境における現象理解と解釈（イベント認識）を実現するためのロボット自身が保有する概念構造を自立的に獲得し構造化するためのアーキテクチャの構築を行う。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金による援助を受けて実施する。

### ネットワークロボットを用いた睡眠を中心とする生活パターン管理・調整支援

本研究では、人の日常生活を観測可能な画像センサを搭載したロボットおよびウェアラブル型の生体センサをワイヤレスネットワークでリンクすることにより、人の生活パターンを管理・調整することが可能なシステムを構築した。提案システムでは、脈波が取得可能な生体センサおよび画像認識による人状態推定手法を組み合わせることで、日常生活の中の人の行動を推定することが可能である。また、生体リズムの動的変動特性に注目し、人の活性度および活動パターンを調整する手法について提案した。なお、本研究は、文部科学省科学研究費補助金の援助により実施した。

## 研究業績(2015 年度)

---

### 和嶋 雄一郎・特任助教

#### 研究テーマ(主たるもの)

## 研究業績(2015 年度)

---

### 9. 特任研究員

---

### 安達 慎一・特任研究員

#### 研究テーマ(主たるもの)

#### ICT活用による施設マネジメントの高度化/情報活用による技術支援・技術伝承

1) 点検データ、諸元データ等の活用による点検マニュアル等の改善¥r¥n・点検データを効率的に記録し、有効に活用できるよう、点検項目、記録方法等を改善するとともに、点検データ等の分析により、点検着目点の抽出などを行い、点検業務等の効率化を実現する。¥r¥n 2) 点検データ、補修データ等の各種データ分析による技術者の判断支援¥r¥n・点検着目点、劣化の進行、影響要因など、構造物の状態及び傾向を統計的な視点から明らかにし、各企業の点検業務の支援、現行の技術資料(マニュアル等)の充実などに活用する。¥r¥n 3) 各種データを活用したインフラ管理指標による施設管理の高度化¥r¥n・点検データ、諸元データ、補修データ等の分析から得られるインフラの管理に関する指標を用いて、経営、マネジメント、現場の判断を支援することにより、施設管理を高度化する。

## 研究業績(2015 年度)

---

---

## **梅田 雅之・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## **小泉 直也・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## **Simanchal Padhy・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015 年度)

---

## **谷島 貫太・特任研究員**

研究テーマ(主たるもの)

---

## 研究業績(2015 年度)

---

### 二宮 利江・特任研究員

#### 研究テーマ(主たるもの)

##### 行動観察手法を用いた維持管理業務におけるマネジメントスキルの検討

行動観察手法等の質的研究法を用いて維持管理業務における技術マネジメントに必要なスキルを定義する。実態調査やインタビュー、観察の中から、組織に属する人々の意識や文化を抽出し、組織の中で暗黙的に継承されているスキルを明文化し、技術マネジメント力を強化する仕組みを検討する。

##### 質的研究による災害分析と災害防止プログラムの検討

業務における災害の発生原因を質的研究法を用いて明らかにし、災害防止プログラムを検討する。優れたリーダーや熟練技術者の災害回避行動を分析し、暗黙知を形式化する。その結果を用いて危険回避トレーニングプログラムを開発する。

##### 生産性向上のための個人と組織のマインドセットの検討

生産性や品質向上のための様々な体制や制度が捉えきれない心理的側面を検討する。組織に属する個人のマインドセットおよび集団のマインドセットを調査し、生産性や品質向上につながるマインドセットの育成方法を開発する。

## 研究業績(2015 年度)

#### 雑誌論文

T. Ninomiya and S. Teramoto: 「Instructional Design and Strategy for Legal Practice」, International Journal of Information and Education Technology, Vol.5, No.4, pp.242-245, 2015 年. 【査読有】

## 国際会議等

Toshie NINOMIYA, Yugo SUZUKI, Ichiro HOSHI & Keita OSANAI: "Management of Infrastructure Maintenance", 11th International Conference on Knowledge Management, pp.178-187, 2015. 【査読有】

## 講演・口頭発表

二宮利江、鈴木雄吾：「高速道路事業における技術者育成」, 教育システム情報学会全国大会, 2015. 【招待講演】

---

## Putra Pratama・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015年度)

---

## 松藤 洋照・特任研究員

研究テーマ(主たるもの)

研究業績(2015年度)

---

## 森 玲奈・客員研究員

**研究テーマ(主たるもの)**

**研究業績(2015 年度)**

---

## IV. 外部資金獲得状況

---

平成 28（2016）年 3 月 31 日時点で情報学環に在籍していた教員各人が関係する外部資金の状況を、情報学環研究協力系のデータをもとに、収録しています。

1. 科学研究費補助金交付一覧
2. 受託研究受入一覧
3. 奨学寄附金受入
4. 共同研究受入一覧
5. 寄付講座
6. 社会連携講座
7. その他外部資金

## 1. 科学研究費補助金交付一覧

研究種目	研究課題	研究代表者	直接経費	間接経費	計
基盤研究(A)	視聴覚を利用した見まね学習によるアクティブな動的動作生成に関する研究	池内 克史	6,600,000	1,980,000	8,580,000
基盤研究(A)	翻訳知のアーカイブ化を利用した協調・学習促進型翻訳支援プラットフォームの構築	影浦 峯	6,400,000	1,920,000	8,320,000
基盤研究(A)	歴史写真に基づく1860～1930年代の日独関係史の再構築	馬場 章	11,300,000	3,390,000	14,690,000
基盤研究(A)	時系列データの蓄積から社会変動モデルの構築へ：中国第三次四都市調査の挑戦	園田 茂人	1,600,000	480,000	2,080,000
基盤研究(A)	矢内原忠雄学生問題研究所未発掘資料から見る1950年代の学生運動と若者意識の分析	吉見 俊哉	4,000,000	1,200,000	5,200,000
基盤研究(A)	リスク認知とソーシャルメディア情報拡散過程の進化的解明：基礎研究から社会実装へ	佐倉 統	6,600,000	1,980,000	8,580,000
基盤研究(A)	アプリケーション・デバイス特化型次世代MVNOの研究	中尾 彰宏	12,600,000	3,780,000	16,380,000
基盤研究(B)	動力学的震源を活用した地震ハザード評価の新展開	三宅 弘恵	4,000,000	1,200,000	5,200,000
基盤研究(B)	縮小社会における都市計画：コンパクト化を目指した用途混在と性能規定の可能性	石川 徹	2,700,000	810,000	3,510,000
基盤研究(B)	「薬と健康食品」適正使用のためのリスクコミュニケーションの場とネットワーク創製	堀 里子	3,700,000	1,110,000	4,810,000
基盤研究(B)	人間拡張型テレプレゼンスシステムに関する研究	暦本 純一	1,200,000	360,000	1,560,000
基盤研究(B)	ドライバの状態監視を行うハプティック・ステアリング・ガイダンス制御	中野 公彦	2,600,000	780,000	3,380,000
基盤研究(B)	テレビアーカイブに見る戦後日本イメージの形成と変容	丹羽 美之	3,700,000	1,110,000	4,810,000
基盤研究(B)	寄生蜂の学習行動によるスイッチング捕食理論の新展開：個体群動態と神経行動学の統合	嶋田 正和	4,300,000	1,290,000	5,590,000
基盤研究(B)	西欧教会ならびにオペラ劇場の動学的音場解析と評価・再現	伊東 乾	3,300,000	990,000	4,290,000
基盤研究(B)	マメゾウムシ類の適応的多様化：種子毒耐性と乾燥種子利用によるジェネラリストの進化	嶋田 正和	4,200,000	1,260,000	5,460,000
基盤研究(B)	障害者スポーツのための義肢装具のデザイン及び設計製作手法の研究	山中 俊治	5,300,000	1,590,000	6,890,000
基盤研究(C)	情報環境のスマート化の下での情報法の理論体系と価値調整に関する日米欧比較制度研究	山口 いつ子	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究(C)	能動的な実環境相互作用循環に基づく人Contextの推定	湧田 雄基	1,300,000	390,000	1,690,000
基盤研究(C)	情報通信技術分野のナショナル・イノベーション・キャパシティに関する実証研究	田中 秀幸	900,000	270,000	1,170,000
基盤研究(C)	スペイン語彙彙パリエーションの総合的研究の完成	上田 博人	900,000	270,000	1,170,000
基盤研究(C)	異文化間コミュニケーションにおける言語行動と言語意識に関する社会言語学的研究	辛 昭静	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究(C)	ポストコロナ状況における「在日」の知の現在—その「独自の普遍」を問う	真鍋 祐子	900,000	270,000	1,170,000
基盤研究(C)	CGにおける流体シミュレーションの効率的なフロー制御手法の開発	金井 崇	1,400,000	420,000	1,820,000
基盤研究(C)	情報社会における規制の重層化に関する比較制度研究	成原 慧	1,000,000	300,000	1,300,000
基盤研究(C)	日本サブカルチャーのグローバル化と冷戦後ドイツの文化変容に関する社会学的研究	北田 暁大	400,000	120,000	520,000
基盤研究(C)	児童と保護者の栄養知識を問う質問票開発および栄養知識と栄養摂取の関連の定量的評価	朝倉 敬子	500,000	150,000	650,000
基盤研究(C)	計算機による状況判断や大局観の言語化	金子 知適	500,000	150,000	650,000
基盤研究(C)	多次元尺度構成法における効率的点配置構成法	倉田 博史	1,500,000	450,000	1,950,000
挑戦的萌芽研究	世界のトップに躍り出たカナダの脳神経倫理学を通して科学技術ガバナンスを考察する	佐倉 統	500,000	150,000	650,000
挑戦的萌芽研究	生き物のように反応する自律的健康増幅デザインシステムの創出	河口 洋一郎	300,000	90,000	390,000
挑戦的萌芽研究	デジタル地理空間情報時代の空間リテラシー	石川 徹	1,700,000	510,000	2,210,000
挑戦的萌芽研究	グローバル時代のメディア倫理：人道主義、コスモポリタニズム、ケアの倫理の視点から	林 香里	1,000,000	300,000	1,300,000
若手研究(A)	胃癌領域における個人データに基づいたメタアナリシス	大庭 幸治	4,300,000	1,290,000	5,590,000
若手研究(A)	風評被害の低減・抑止策の検討—福島第一原子力発電所事故の社会経済的被害の量的検討	関谷 直也	4,200,000	1,260,000	5,460,000
若手研究(B)	歴史を現代社会の問題解決方略に転移させる学習メディアの開発と評価	池尻 良平	800,000	240,000	1,040,000
若手研究(B)	統計的な表象理解を促す学習支援システムの開発	大浦 弘樹	700,000	210,000	910,000

若手研究(B)	近代日本音楽史のメディア論的変容に関する社会史的研究―「未熟さ」の視点から	周東 美材	700,000	210,000	910,000
若手研究(B)	中世文学における音楽研究試論―書物の枠組から見た雅楽史の究明―	猪瀬 千尋	900,000	270,000	1,170,000
研究活動スタート支援	「創作性」概念の歴史的形成―複製技術の発展と著作権	酒井 麻千子	400,000	120,000	520,000
研究活動スタート支援	ソーシャルメディア利用の社会関係資本・社会参加意識への影響についての実証研究	河井 大介	1,000,000	300,000	1,300,000
研究活動スタート支援	後期高齢者の包摂を目的とした高齢者インプロ実践プログラムの開発	園部 友里恵	1,100,000	330,000	1,430,000
データベース	文部省往復を基幹とした近代日本大学史データベース	吉見 俊哉	6,000,000	0	6,000,000
特別研究員奨励費	日本におけるネパール人移民労働者のケーススタディ―	ディベシユ カレル	1,100,000	0	1,100,000
特別研究員奨励費	帝国のアンザイエティー1923年関東大震災後の人々と情報の移動に注目して	盧 珠ウン	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	現代日本における「コミュニティ・アーカイブ」の実践と理論に関する往還的研究	松本 篤	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	「社会問題」の構築および合意形成過程の分析―創作物の性描写規制を事例として	佐藤 寿昭	800,000	0	800,000
特別研究員奨励費	「健康」と「精神的充足」を両立する支援手法および技術の提案	中村 裕美	1,100,000	330,000	1,430,000
特別研究員奨励費	動力の投影・付着による物質の移動・変形制御とインタラクション	河野 通就	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	「風土」及びmilieu概念による環境倫理学の基礎付け―和辻、ベルクを手掛かりに	犬塚 悠	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	記憶と忘却の映画的身体―占領期/ポスト占領期におけるスター俳優と観客の視覚文化史	北村 匡平	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	日米における都市住宅の動向と政策に関する比較社会学的研究	山本 理奈	1,200,000	360,000	1,560,000
特別研究員奨励費	戦前期日本におけるローカルな映画経験の諸問題―配給構造の歴史的変遷から	近藤 和都	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	日本テレビ系列『NNNドキュメント』にみる原発の表象	瀬尾 華子	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	「趣味」と「研究」の歴史社会学―1910年から50年代の会員制趣味雑誌を対象に―	大尾 侑子	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	戦後日本における「若者」をめぐる言説実践の歴史社会学	小川 豊武	1,000,000	0	1,000,000
特別研究員奨励費	家庭内ユビキタス教育の構築	門村 亜珠沙	1,100,000	330,000	1,430,000
特別研究員奨励費	中世文学における音楽・音声空間の研究	猪瀬 千尋	1,200,000	360,000	1,560,000
特別研究員奨励費	カプトムシにおける日齢に応じた卵サイズと性比調節の資源投資戦略と表現型可塑性	小島 渉	1,200,000	360,000	1,560,000
特別研究員奨励費	内部告発を端緒とする報道のあり方	松原 妙華	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	ARCSモデルに基づく個人適応型モバイル英語学習法の開発と評価	仲谷 佳恵	900,000	0	900,000
特別研究員奨励費	GNS測位の高度化と自動運転への応用	上條 俊介	1,200,000	0	1,200,000
特別研究員奨励費	中国におけるPM2.5に関する環境コミュニケーションについて	佐倉 統	800,000	0	800,000
合計		63件	139,600,000	35,760,000	175,360,000

## 2. 受託研究受入一覧

研究課題名	委託者名	研究代表者氏名	研究期間			27年度受入額		
						直接経費	間接経費	計
多人数調和型情報提示技術の構築と実践	(研) 科学技術振興機構	苗村 健	H24.4.1	～	H28.3.31	32,500,000	9,750,000	42,250,000
ビッグデータ統合利活用のための法制度のあり方に関する総合的日米欧比較研究による制度設計	(研) 科学技術振興機構	生貝 直人	H26.4.1	～	H28.3.31	700,000	210,000	910,000
ビッグデータ解析と強いネットワークによる災害への準備と対応	(研) 科学技術振興機構	鷹野 澄	H27.4.1	～	H29.3.31	2,500,000	750,000	3,250,000

#### IV. 外部資金獲得状況

ソーシャル情報に基づく仮想ネットワーク制御方式の開発	総務省	山本 周	H27. 8. 26	～	H28. 3. 31	15,000,000	4,500,000	19,500,000
IMC(IoT・MEC・Cloud)連携による公共安全を飛躍的に向上するレジリエントシティの実現の研究開発	総務省	中尾 彰宏	H27. 8. 26	～	H28. 3. 31	9,497,000	2,849,100	12,346,100
G空間を活用したインバウンド安心安全・情報観光サービスによる地方創生プロジェクト	国土交通省	中尾 彰宏	H27. 7. 22	～	H28. 3. 18	19,081,819	1,908,181	20,990,000
SDN制御のIoT・クラウドシステムにおけるセキュリティの改善を目的とするデバイス・アプリケーション同定手法の研究	(研) 科学技術振興機構	中尾 彰宏	H27. 1. 15	～	H29. 3. 31	4,500,000	450,000	4,950,000
空港管理車両を活用した簡易舗装路面点検システムの研究開発	(研) 新エネルギー・産業技術総合開発機構	石川 雄章	H26. 11. 28	～	H29. 3. 20	2,690,547	403,432	3,093,979
IoT向け広域処理システムの実践と評価の研究	株式会社富士通研究所ソフトウェア研究所	中尾 彰宏	H28. 2. 1	～	H28. 3. 31	769,231	230,769	1,000,000
合計			9 件			87,238,597	21,051,482	108,290,079

### 3. 奨学寄附金受入

51 件、合計 111,956,331 円の奨学寄附金を受け入れた。

### 4. 共同研究受入一覧

研究課題名	相手方	研究代表者	研究期間			27年度受入額		
						直接経費	研究支援経費	計
総合的な防災情報の活用に関する研究	日本放送協会	田中 淳	H25. 6. 15	～	H30. 3. 31	0	0	0
大規模メッシュの簡略化処理を限定的な計算資源で行う	シリコンスタジオ株式会社	金井 崇	H26. 4. 1	～	H28. 3. 31	0	0	0
行動観察手法を用いた維持管理業務におけるマネジメントスキルの検討	東日本高速道路株式会社	坂村 健 石川 雄章	H26. 4. 1	～	H29. 3. 31	5,454,667	545,333	6,000,000
高速道路のスマートメンテナンス	東日本高速道路株式会社	坂村 健 越塚 登 石川 雄章	H26. 4. 1	～	H31. 3. 31	27,272,800	2,727,200	30,000,000
情報技術によるインフラ高度化	日本電信電話株式会社	坂村 健 石川 雄章	H26. 4. 1	～	H31. 3. 31	4,546,000	454,000	5,000,000
都民参加型道路管理支援システム	公益財団法人東京都道路整備保全公社	坂村 健 石川 雄章	H25. 4. 1	～	H28. 3. 31	4,545,450	454,550	5,000,000
千葉市のビッグデータ分析と課題抑制型事業における共同研究	千葉市	須藤 修	H26. 7. 1	～	H29. 6. 30	0	0	0
反転学習社会連携講座	株式会社 NTT ドコモ	山内 祐平	H26. 10. 1	～	H27. 9. 30	7,693,000	2,307,000	10,000,000

インフラ維持管理における効率的な支援方策の研究（情報基盤および市町村支援）	島根県	石川 雄章	H26.11.4	～	H28.3.31	0	0	0
災害情報についての研究	株式会社読売新聞東京本社	田中 淳	H26.12.1	～	H27.11.30	0	0	0
医療コミュニケーションと健康教育に関する実践的研究	社団法人医風会	山内 祐平	H25.5.1	～	H28.3.31	0	0	0
インフラ管理の高度化に関する研究	株式会社復建技術コンサルタント	坂村 健 石川 雄章	H27.3.20	～	H29.3.31	0	0	0
FLAREに関する共同研究	ソフトバンクモバイル株式会社	中尾 彰宏	H26.11.1	～	H28.5.31	0	0	0
質的研究による墜落災害分析と墜落災害防止を目的とした危険回避トレーニングプログラムの検討	株式会社安藤・間	石川 雄章	H27.4.1	～	H28.9.30	6,825,000	675,000	7,500,000
ネットワーク仮想化技術の高度化と実用化	株式会社FLARENETWORK	中尾 彰宏	H27.4.1	～	H29.3.31	1,080,000	108,000	1,188,000
自治体保有医療・介護情報の二次利用に関する研究	日本電気株式会社	須藤 修	H27.4.1	～	H28.3.31	2,945,455	294,545	3,240,000
Software Defined ISP実証実験のための共同研究	フリービット株式会社	中尾 彰宏	H26.4.25	～	H27.4.30	0	0	0
FLAREスイッチの研究開発	NEC ネットズエスアイ株式会社	中尾 彰宏	H26.11.1	～	H27.4.30	0	0	0
IT強振計に関する研究	テクニカルリンク株式会社	鷹野 澄	H25.5.1	～	H28.3.31	182,000	18,000	200,000
データトラフィックの削減・低遅延な伝送を実現するためのネットワーク内情報処理技術における研究	株式会社豊田中央研究所	中尾 彰宏	H27.6.1	～	H28.3.31	450,000	50,000	500,000
無線通信の仮想化に関する事業化研究	株式会社日立システムズ	中尾 彰宏	H27.5.1	～	H27.9.30	500,000	50,000	550,000
第5世代モバイルインフラに向けたネットワークアーキテクチャに関する共同研究	株式会社KDDI研究所	中尾 彰宏	H27.4.20	～	H28.3.31	1,818,182	181,818	2,000,000
デジタル・キュレーションの研究	株式会社日立ソリューションズ	吉見 俊哉	H27.4.20	～	H28.3.31	6,873,000	687,000	7,560,000
車載カメラと歩車間通信による対歩行者衝突回避支援技術の研究	株式会社半導体理工学研究センター	上條 俊介	H27.4.1	～	H28.3.31	6,077,000	608,000	6,685,000
インフラ維持管理業務の効率化の実証	小田原市役所	石川 雄章	H27.4.1	～	H28.3.31	1,820,000	180,000	2,000,000
ソーシャル情報に基づく仮想ネットワーク制御方式の研究開発	国立大学法人お茶の水女子大学、他1社	中尾 彰宏	H27.6.1	～	H28.3.31	0	0	0
FLAREスイッチの実用化に向けた研究開発	NEC ネットズエスアイ株式会社	中尾 彰宏	H27.6.1	～	H28.3.31	4,442,335	457,265	4,899,600
共焦点マイクロPIVによる流体内部流動の可視化	富士ゼロックス株式会社	大島 まり	H27.6.29	～	H28.3.31	826,200	91,800	918,000

#### IV. 外部資金獲得状況

未来の都市環境とスポーツの拡張に関する研究	株式会社電通国際サービスオープンイノベーション研究所	暦本 純一	H27. 6. 1	～	H30. 3. 31	7, 500, 000	750, 000	8, 250, 000
エッジ・クラウド間連携によるコンテンツ別スライス収容機能の研究	日本電信電話株式会社未来ねっと研究所	中尾 彰宏	H27. 6. 18	～	H28. 2. 28	2, 700, 000	270, 000	2, 970, 000
こどもたちの共に創る力を育む CAMP ワークショップの評価研究	SCSK 株式会社	山内 祐平	H27. 4. 1	～	H30. 3. 31	2, 728, 000	272, 000	3, 000, 000
CAMP ナリグラムワークショップの改良と評価	SCSK 株式会社	山内 祐平	H27. 6. 20	～	H28. 3. 31	1, 364, 000	136, 000	1, 500, 000
Software Defined ISP 実証実験のための共同研究	フリービット株式会社	中尾 彰宏	H27. 5. 1	～	H28. 4. 30	1, 000, 000	100, 000	1, 100, 000
厚真町民の防災意識向上に資する防災教育の研究	厚真町役場	田中 淳	H27. 4. 1	～	H28. 3. 31	1, 809, 800	180, 980	1, 990, 780
学習とコミュニケーションを指向した環境デザインに関する研究	株式会社ミサワホーム総合研究所	山内 祐平	H27. 7. 1	～	H28. 3. 31	909, 000	90, 900	999, 900
文化資源情報と地理情報の統合と活用に関する研究	凸版印刷株式会社	吉見 俊哉	H27. 7. 1	～	H28. 3. 31	2, 710, 000	270, 000	2, 980, 000
ICT を活用した山江村地方創生情報化戦略策定	熊本県山江村	須藤 修	H27. 8. 3	～	H28. 3. 31	2, 700, 000	270, 000	2, 970, 000
道路台帳整備事業をモデルとした品質向上、生産性向上及び技術者人材育成に関する研究	株式会社パスコ	石川 雄章	H27. 7. 24	～	H29. 3. 31	4, 545, 455	454, 545	5, 000, 000
アジア癌バロメーター・癌治療の背後にあるアジアの社会文化的背景の分析	ノバルティスファーマ株式会社	赤座 英之	H27. 7. 1	～	H29. 3. 31	500, 000	50, 000	550, 000
ドライビングシュミレータを用いたアクティブセーフティ開発技術の研究	日野自動車株式会社	中野 公彦	H27. 8. 1	～	H28. 3. 31	1, 455, 000	145, 000	1, 600, 000
ブレットを用いた運転状態等の情報活用のための基礎研究	東日本旅客鉄道株式会社	中野 公彦	H27. 9. 24	～	H28. 2. 28	4, 603, 670	460, 367	5, 064, 037
ETC2.0 プローブデータの信頼性評価手法に関する検討業務	一般社団法人交通工学研究会	上條 俊介	H27. 10. 1	～	H28. 3. 24	1, 818, 327	181, 833	2, 000, 160
通信の超多数のスライス制御に関する研究	KDDI 株式会社	中尾 彰宏	H27. 10. 1	～	H29. 3. 31	2, 727, 273	272, 727	3, 000, 000
BeaconCast の地理情報システムへの応用	株式会社インフォマティクス	中尾 彰宏	H27. 11. 1	～	H29. 3. 31	90, 000	9, 000	99, 000
独立成分分析による路面不整の推定精度向上に関する研究	三菱自動車工業株式会社	中野 公彦	H27. 11. 6	～	H28. 3. 31	890, 000	90, 000	980, 000
東日本大震災時の避難行動等に関する調査研究	気仙沼市	田中 淳	H27. 11. 1	～	H29. 3. 31	0	0	0
緊急地震速報の利活用実態の調査と分析	気象庁	田中 淳	H27. 12. 1	～	H28. 11. 30	0	0	0

ソフトウェアスイッチのメニコアプロセッサアーキテクチャ上への適用技術の研究	日本電信電話株式会社未来ねっと研究所	中尾 彰宏	H27.12.21	～	H28.7.29	2,700,000	270,000	2,970,000
国際学生EV超小型モビリティデザインコンテスト	一般社団法人電気自動車普及協会	山内 祐平	H27.12.24	～	H28.3.31	196,364	19,636	216,000
先端的表現技術とコンテンツ産業とを繋ぐプラットフォームの研究	株式会社ドワンゴ	河口 洋一郎	H27.12.1	～	H28.11.30	18,181,818	1,818,182	20,000,000
前立腺がん患者の診断時背景因子と初期治療および治療経過に関する実態調査研究	特定非営利活動法人J-Cap研究会	赤座 英之	H28.2.15	～	H29.3.31	8,000,000	800,000	8,800,000
農村集落活性化支援事業 将来ビジョン策定業務	山江村役場	須藤 修	H28.2.15	～	H28.5.31	1,458,000	145,800	1,603,800
山江村活性化支援交付金事業 栗商品改良及び販売戦略策定業務	山江村役場	須藤 修	H28.2.15	～	H28.5.31	864,000	86,400	950,400
合計			53 件			154,801,796	17,032,881	171,834,677

## 5. 寄付講座

寄附講座名称	寄附者	担当教員等	金額 (円)	備 考
角川文化振興財団メディア・コンテンツ研究寄付講座	一般財団法人角川文化振興財団	吉見 俊哉	30,000,000	(設置期間 H25.11.1. ～H28.10.31)
総合癌研究国際戦略推進寄付講座	日本化薬株式会社 株式会社ヤクルト本社 小野薬品工業株式会社 日本ビーシージー製造株式会社 武田薬品工業株式会社	赤座 英之	40,000,000	(設置期間 H27.4.1. ～H30.3.31)
セキュア情報化社会研究寄付講座	三吉野 健滋	須藤 修	60,000,000	(設置期間 H27.4.1. ～H32.3.31)
DNP 学術電子コンテンツ研究寄付講座	大日本印刷株式会社	吉見 俊哉	27,000,000	(設置期間 H27.4.1. ～H30.10.31)
合計	4 件		157,000,000	

## 6. 社会連携講座

社会連携講座名称	企業名等	担当教員等	金額 (円)	備 考
反転学習社会連携講座	株式会社エヌ・ティ・ティ・ドコモ	山内 祐平	30,000,000	(設置期間 H25.10.1. ~H28.9.30)
情報技術によるインフラ高度化	首都高速道路株式会社 東京地下鉄株式会社 東京電力株式会社 東日本高速道路株式会社 東日本旅客鉄道株式会社 株式会社日立製作所	坂村 健 越塚 登 石川 雄章	30,000,000	(設置期間 H26.4.1. ~H31.3.31)
合計	2 件		60,000,000	

## 7. その他外部資金

プログラム名	課題名	金額 (円)
日本学術振興会 二国間交流事業フィンランドとの共同研究	空間情報を組み込んだデジタル・ストーリーテリングの共創的デザイン	3,069,000
合計	1件	3,069,000

東京大学 大学院情報学環・学際情報学府 年報

---

平成29年8月 発行  
編集兼発行者 東京大学大学院情報学環・学際情報学府  
〒113-0033  
東京都文京区本郷7丁目3番1号

---

表紙CG画像提供 角田哲也